方正友好交流の会　会報９号

星火方正

～燎原の火は方正から～

特集　ついに実った日本政府の公墓支援
映画『嗚呼　満蒙開拓団』感想と反響
「近現代史検証の旅」に寄せて

方正の「中日友好園林」に建立されている中国養父母公墓

この公墓は、「残留孤児」だった遠藤勇さんが１９９５年、自力で建立したものである。５歳の時「孤児」になった遠藤勇さんは１９７４年帰国後、実業の世界で活躍したが、育ててくれた養父母への恩を片時も忘れず、養父母たちへの恩と安住の場所をと、中国政府と交渉して公墓を建立した。公墓には「養育之恩、永世不忘」と対句で刻まれている。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第９号）　～燎原の火は方正から～

目　次

日本政府の公墓支援決まる そして、鳩山総理への提言	大類　善啓	1
≪関連記事≫　日本政府の公墓維持管理支援		5
近現代史を知るきっかけに―第５回方正友好交流の会・総会挨拶―	羽田　澄子	11
映画「鳴呼　満蒙開拓団」への道　（毎日新聞より転載）	〃	14
あの戦争、あの時代	谷野　作太郎	15
「国家が国民を捨てる」国家イメージを脱却したい ―『鳴呼　満蒙開拓団』を観て―	江田　五月	17
映画『鳴呼　満蒙開拓団』――そして、その先	千本　健一郎	18
『鳴呼　満蒙開拓団』に寄せて	滝永　登	22
日本にとっての「満州」とは	寺本　康俊	24
遥かなる中国の大地で起きたことを、今、自ら眺望する 創造力を求めて　―『鳴呼　満蒙開拓団』を観て―	佐藤　英之	25
他人の人生を感じ取るということ ―『鳴呼　満蒙開拓団』を観て―	吉家　京子	28
山形県の小さな町で『鳴呼　満蒙開拓団』を上映して	大場　武男	30
“満蒙開拓団”我が心の想い―『鳴呼　満蒙開拓団』を観て―	吉川　福太郎	32
歴史を知って、忘れないでほしい　―映画『満蒙開拓団』を観て―	畢　楊	33
代役が見た映画祭の熱気　第１２回ゆふいん映画祭に酔う	奥村　正雄	35
土橋に腰かけたトーク ―新潟でも超満員だった「鳴呼　満蒙開拓団」―	〃	37
語り部としての責務　（エキプ・ド・シネマ No.171 より転載）	藤原　作弥	39
中国で唯一存在する日本人公墓は何を語るのか　（同上より転載）	大類　善啓	40
≪関連記事・写真≫　映画『鳴呼　満蒙開拓団』批評記事など		41

歴史証言の鮮度と賞味期限―『嗚呼　満蒙開拓団』の場合―　奥村　正雄　55

中国東北地方について――旧「満州国」に暮らして　金倉　美佐恵　63

「満蒙開拓平和記念館」の建設実現を目指して　寺沢　秀文　66

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

感傷旅行の記　師岡　武男　75

物見遊山でない旅　矢島　敬二　78

満州開拓団と居留日本人の悲劇の跡を巡る旅　酒井　旭　81

私には亡き母とこの地で亡くなられた
満洲開拓団員への鎮魂の旅でした　宮下　春男　85

ハルビン郊外の深い爪痕　高村　壽一　92

旅後雑感　服部　健治　93

ソ連軍の満州侵攻は８月７日！？　高橋　健男　96

今、生かされている者の使命は？　打田　茉莉　100

水稲王の碑　　ハルビン郊外の深い爪痕　高村　壽一　102

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

中国と私――第５回方正友好交流の会・総会記念講演――　武吉　次朗　104

≪関連記事≫「残留孤児」の方々が中国首脳と会見　菅原幸助さんの記事など　115

中国養父母への感謝の義捐金募集　（財）兵庫県海外同友会　116

もうひとつの“炮台山”　高橋　健男　117

大阪にもある「満蒙開拓団」碑　中務　武志　121

方正県設立１００周年記念行事に参加して　大類　善啓　122

忘れ難き歳月　福地　正博　125

日本に残留し定住したある中国人
―在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」―　その三　大類　善啓　135

方正友好交流の会へのお誘い　編集部　142

書籍案内　報告　編集後記　編集部　143

日本政府の公墓支援決まる

方正友好交流の会
事務局長　大類　善啓

１９９３年、私たちは「方正地区支援交流の会」を立ち上げ、１０年余りに亘って、ささやかな経済援助活動を方正県に行ってきた。が、方正地区にいた「残留婦人」たちがほとんど日本に帰国した状況を受けて活動は収束していった。しかし、会を完全に解散するには忍び難い気持ちもあり、２００５年６月、新たに「方正友好交流の会」を発足させた。

その時私たちは、活動の目標を、知られざる日本人公墓を多くの日本人、そして中国の人々に知ってもらうことが第一だと考えていた。当時、いたずらに高揚した両国の排他的なナショナリズムを乗り越えるには、国交が回復する９年前の１９６３年に建立された方正日本人公墓の存在を、日中両国の人々が知ることに大きな鍵がある、と思ったからである。

侵略された国とその国の人々が、侵略側の人々のお墓を建立するという世界史上にも稀有な事実を知ることによって、偏狭な民族主義ではなく、すべての人々が国境を越えて同じ思いを共有する、国際主義的な友愛精神、世界市民的な精神を呼び起こし、狭隘な「愛国主義」や敵対的な感情を少しでも氷解できればと考えたのだ。

そのために会報「星火方正」を発行し、機会あるごとに方正日本人公墓の存在を知ってもらうべく活動していた。幸いにも記録映画作家の羽田澄子さんにその思いが伝わり、プロデューサー：工藤充、演出：羽田澄子による映画『嗚呼　満蒙開拓団』の製作、完成につながった。

初めての文書による方正県政府からの支援要請

そんな折り、方正県政府から公墓がある「中日友好園林」の修繕費用について、日本の有識者に援助を呼びかけてほしいという文書がきた（「星火方正」８号 44 頁参照）。私たちは会の発足当初から、公墓の維持管理を中国側に任せ、中国の好意に一方的に甘えているような日本の姿勢に疑問をもっていた。本来は日本政府が負担すべきだ、少なくとも日中の両国政府が共同で維持費用を負担すべきだと提言していた私たちは本腰を入れて、日本政府に支援要請をするべき時が来たと思った。そして改めて行動を開始し

たところ、急速に実りある成果を見た。ここに、会員及び支援していただいている皆さまに感謝の気持ちを込めて経緯をご報告したい。

本年６月９日、（社）日中友好協会会長で方正日本人公墓にも参拝されたことがある国会議員の加藤紘一氏に、当会参与の木村直美と共にお会いして私たちの趣意をお話した。加藤氏から、外務省の中国・モンゴル課長の垂（たるみ）秀夫氏を紹介され、７月２日、垂・課長、町田穂高・課長補佐に、当会参与の奥村正雄とお会いした。そこで方正日本人公墓建立の経緯や現在の公墓状況などを説明し、公墓維持管理に関して、日本政府が支援すべき旨要請した。垂課長は、「真剣に検討します。他省庁との関係もあり、少し時間がかかるかもしれませんが、必ずご返事します」と、よくある官僚的な言辞ではなく、実に誠実な言葉をいただいた。

その後、８月２８日から９月初旬にかけて中国東北部へ、「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」の主催者側として出発する１週間前に、方正県政府の王偉新主任から、方正県設立１００周年記念祝典の招聘状がきた。去年の夏、方正を訪れた時に、招聘状を送るのでぜひ出席してほしいと言われてはいたが、その後特に連絡はなかった。方正に行ってわかったことだが、ちょうど大類がこの時期に中国の東北に来ているので来ないかというのが実情のようであった。

「検証の旅」は、９月２日方正、３日ハルピン、そして帰国という日程だったが、ハルピンで団と別れ、９月５日の祝典に参加することにした。その帰途、松本盛雄瀋陽総領事、宮本雄二大使にお会いすべく連絡を取った。

「中国にいる日本人にぜひ羽田さんの映画を見せたい」

９月５日（土）の方正での祝典については別に、本誌の１２２頁に紹介したのでお読みいただきたい。さて、方正を離れて９月７日（月）瀋陽で松本盛雄総領事、加藤英次首席領事、佐伯岳彦副領事にお会いすることができた。日本政府の方正公墓支援について松本総領事は、「昨年＜草の根無償援助＞で方正県を支援したが、それと今回の公墓の維持・管理費用を出すこととはスキーム（枠組み）が違うので、現在どうするのか検討している」とのお話であった。

９月９日（水）には、北京で梅田邦夫首席公使にお会いすることができた。宮本雄二大使は、御手洗・経団連会長が北京で温家宝総理との会談に同席するということで残念ながらお会いできなかった。しかし、梅田邦夫首席公使からは、「方正友好交流

の会には、日本人公墓を多くの人たちに知らせていただき感謝している」と言われ感激した。また、「悲惨なめにあった開拓団の婦女子といえども中国から見れば侵略者だ。その人たちのお墓を造ってくれ、維持・管理をしてくれている方正県政府に、日本政府も国民を代表して感謝すべきだと思う」と語られた。

そして、「映画『嗚呼　満蒙開拓団』を中国にいる日本人、大使館職員、日本人学校、日本人会の人たちにもぜひ見せたい」と言われた。そこで帰国後、羽田澄子さんにお願いをして特別にＤＶＤ１枚作ってもらい大使館に送った。

１１月に入って梅田公使から「先週、宮本大使も含め約５０名の館員に映画を見てもらいました。子供を殺さざるをない状況に追い込まれた方の気持ち、その後の人生を考えると胸が締め付けられる思いです。平和な時代に生きていることに改めて感謝せざるを得ません。有難うございました」というメールをいただいた。また、現在大使館に勤務し、映画のロケでは通訳として協力された佐渡（さわたり）京子さんによれば、「日本に帰れない孤児の徐士蘭さん」が映画に出てきたが、「なんとか一時帰国させたい」という声や、１０人ほどの職員の方々が、公墓参拝をしようという声もあがったようである。ともあれ梅田公使との会談はとても有意義なものだった。梅田さんとの会談には、厚生労働省から出向されている佐久間勝彦さんも孤児担当として同席された。

やっと実った日本政府の支援

中国から帰国後の１０月１日、外務省の垂秀夫・課長、町田穂高・課長補佐に、奥村正雄とともにお会いした。垂課長は、「方正県政府と話し合い、毎年かかる日本人公墓の維持・管理費用、約５１万円（日本円）の半分を、今年と来年に県政府に出す。再来年（２０１１年）からは、全額を財務省に予算要求し、半永久的に援助していきたい」という回答をいただいた。

感謝の気持ちを述べたところ、垂課長は「本当はもっと前に、この公墓の存在に気づき、維持管理に協力すべきでした」と言われた。

以上がこれまでの経緯である。私たちの、公墓の存在を多くの人たちに知らせる、そして、日本政府が公墓維持管理費用を負担すべきだ、という大きな二つの活動目標が実現しつつある今日、次なる目標は、日本の総理の公墓参拝の実現である。次頁の「鳩山総理、ぜひ公墓参拝を！」という拙文はその活動の一環だ。なおこの拙文は凌星光（社）日中科学技術文化センター理事長を通して仙谷由人（行政刷新改革担当大臣）氏に手渡し、江田五月（参議院議長）氏には私からメールで送ったものである。

鳩山総理、ぜひ日本人公墓に参拝を！

―方正日本人公墓は、国際的な友愛精神の象徴である―

大類 善啓
（方正友好交流の会　事務局長）

民主党の圧勝、自民党惨敗をもたらした衆議院選挙の時、中国訪問中の私は、連日、中国・中央テレビ局の好意的な民主党政権登場のニュースに接しておりました。

日本の歴代総理が訪中する際、日中双方にとって縁のある場所を尋ねることが、いわば象徴的なこととして報道されてまいりました。鳩山総理が中国を訪問する際には、ぜひ、黒竜江省ハルピン市郊外の方正県に建立されている日本人公墓を参拝していただきたいと思います。この公墓には、戦前の誤れる国策によって翻弄され、無念の涙をのんで亡くなった「残留婦人」や孤児たちの遺骨、約４５００体が眠っております。

ある残留日本婦人の願いに応えて、日中国交回復が実現する９年前の１９６３年、「祖国を見ることなく亡くなった開拓民たちも日本の軍国主義の犠牲者である」と、当時の中国政府は、懐の深い国際主義的な友愛精神で、侵略者の公墓を建立してくれました。

ぜひ、公墓を建立してくれた中国政府、中国人民に、心を込めた感謝のメッセージを送っていただきたい。そうすることによって、日中間の民間レベル、民衆レベルの融和と和解がより一層深まることは間違いないと思うからであります。また、中国の人々、とりわけ若い人々も、１９５０年代から１９６０年代半ばの、周恩来総理など中国政府指導部の国際主義的な友愛精神に満ちたヒューマニズムに感動することでしょう。

中国には、侵略した日本の罪業をしるす記念館や記念碑があちこちにあります。そこを訪問することもそれなりの意義があります。しかし、日本人公墓は、国境を超えた友愛精神を表現しており、そこを参拝することは、日中双方の国民に過去を反省し未来志向で進む精神を訴えるものであり、新政権の性格にふさわしい行為だと思います。

私たちは２００５年から、「方正友好交流の会」を設立し、怨念を超えて建立された日本人公墓の存在を、多くの日本人、そして中国人に知ってもらい、反中や嫌中感情、また反日感情を醸成するような排他的で狭隘なナショナリズムではなく、国際主義的な友愛精神が広まるよう会報『星火方正』を発行して参りました。

その『星火方正』によって、公墓の存在を知った旧満州・大連生まれの羽田澄子さんが、記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』を昨秋完成させ、この６月１３日から７月末まで、岩波ホールで連日３回上映され、延べ２万人の入場がありました。そして今現在、日本全国で上映され続けております。

2008 年１月、北京に駐在する宮本雄二大使は公墓に参拝し、方正県政府に謝辞を述べられました。この宮本大使訪問まで、日本政府は４０余年にわたってこの公墓の存在を、無視し続けてまいりました。今回の中国訪問中、私は北京で梅田邦夫・首席公使（宮本雄二大使は、御手洗経団連会長の温家宝首相との会談に同席するため、お会いできませんでした）にお会いしましたが、その際、梅田公使は、「中国にいる日本人だからこそ、日本人公墓の存在を知ってほしい。ぜひ北京の日本人会、日本人学校の人たちに、『嗚呼　満蒙開拓団』を見せたい」と言われました。

鳩山総理が公墓に参拝し、中国政府に感謝の言葉を述べれば、庶民レベルの双方の友愛感情は深まり、日中関係の更なる発展の土台作りに貢献することでしょう。中国に唯一存在する日本人公墓の鳩山由紀夫総理の参拝を切に願うものであります。

（09 年 9 月 14 日）

東京新聞　2009年10月4日（日）付　朝刊

中国「旧満州開拓団」墓地

修繕機に日本の団体申し入れ

「友愛」に応え 首相訪問を

故周首相建立後押し 40年経過し老朽化

中国東北部・黒竜江省に、敗戦の混乱で命を落とした旧満州開拓団員を弔う墓地がある。日本人のために造られた中国唯一の公営墓地だ。傷みが激しいため、地元の自治体が補修工事を進め、日本でも募金活動が始まるなど関心が高まっている。ちょうどアジア重視を掲げる民主党政権が誕生。関係者は鳩山由紀夫首相の同墓地参拝実現に向けた運動も始めている。（外報部・五味洋治）

墓地は、省都ハルビンから車で三時間ほどの方正県にある。戦後、旧満州で飢えや病気により亡くなった約四千五百体の日本人の遺骨が発見された。故周恩来首相の後押しで、同県政府が一九六三年、三・三㍍の墓碑を建立。周辺を墓地として整備、管理してきた。

二〇〇五年、日本側で「方正友好交流の会」（東京都千代田区、大類善啓事務局長）が発足し、方正県と幅広い交流を行っている。墓は、今年公開された記録映画「嗚呼（ああ）満蒙（まんもう）開拓団」（羽田澄子監督）でも取り上げられ、広く存在が知られるようになった。

しかし四十年以上が経過して納骨部分に漏水が起き、周囲の植栽や垣根なども修繕が必要となった。経費は、日本円で約六十万円かかる見通しだ。

地元の人たちが管理している黒竜江省方正県の公営日本人墓地＝大類さん提供

方正県外事弁公室の王偉新さんは「われわれが日本人の墓を建て、守ってきたのは友愛の心からです」。募金は十分集まっていないが「不足分は県政府が負担する予定」と話す。方正友好の会も最近、十万円を贈った。

大類さんらは「修繕費用は本来、旧満州に開拓団を送った日本政府が負担すべきだ」として、外務省に支援を申し入れ、同省も前向きに対応している。

その一方で九月十四日、鳩山首相側に「中国を訪問する機会に公墓も参拝してほしい」との要請書を送った。「日本の首相が、方正県に来て感謝の言葉を述べれば、両国関係発展の土台になる」（大類さん）ためだ。

中国の女性と結婚し、方正県に住む吉岡宏幸さん（三七）＝広島県出身＝も「日本人の墓を守ってくれている親日的な中国人がいる。それを多くの日本人に知ってほしい」と、鳩山首相の参拝に期待を寄せた。

旧満州の邦人墓地支援へ

―日本政府が管理費一部負担

【北京時事10月13日発】

中国東北部（旧満州）に入植し、終戦の混乱で死亡した日本人を埋葬するため、中国側が黒竜江省方正県に建立した「日本人公簿墓」に対して、日本政府が維持管理費の一部を支援することが１３日、分かった。

方正県では終戦直後、日本に引き揚げる予定の入植者ら約５０００人が厳寒の中、飢えや病気などで死亡した。生き延びた日本人残留婦人らの要望と「日本人民も日本軍国主義の被害者だ」という当時の周恩来首相の指示を受けて、県政府は１９６３年、遺骨を埋葬して高さ約３メートルの墓石を建立。近くの麻山地区で集団自決した、約５００人の墓石も８４年に建てられた。

中国側が日本人のために建立した唯一の共同墓地で、これまでは方正県政府が年間約２０万元（約２６０万円）の管理費を全額負担してきたが、県政府の要請を受け、瀋陽の日本総領事館は海外にある日本人公墓の維持管理費として、今年度下半期に、１万７５００元（約２３万円）を支援することにした。来年度以降も継続する見通し。

方正県外事僑務弁公室の王偉新主任は、「日本政府の支援に感謝している。戦争の歴史を忘れないため、公墓を中心に日中友好園林を整備しており、日本からも多くの人に来てもらいたい」と話している。

＜注：外務省・中国・モンゴル課の担当者の言によれば、政府の公墓支援記事の中では、この時事通信の原稿が最も正確な記事だということである＞

読売新聞2009年10月10日付夕刊に掲載

中国建設の日本人慰霊墓

日本が管理費支援

中国東北部（旧満州）の黒竜江省・方正県で、敗戦時に死亡した日本人入植者の慰霊のために建てられた「日本人公墓」（共同墓地）に、日本政府が初めて維持管理費を支援することになった。中国側が日本人のために建てた唯一の墓として知られ、これまでは方正県政府が全額負担してきた。地元では「改めて中日友好の礎にしたい」と歓迎の声があがっている。（方正県で　牧野田亨、写真も）

敗戦の混乱のなか、方正県では厳寒と飢え、伝染病で入植者たちが次々に死亡。その数は約5000人に上る。生き延びた入植者の要望を受け、県政府は1963年、「日本人入植者も日本軍国主義の犠牲者だ」として遺骨を埋葬、高さ約3㍍の墓石を建てた。別の麻山地区で集団自決した約500人の墓石も隣に建てた。

日本に戻れなかった入植者たちは残留婦人や残留孤児となった。公墓近くには、国交回復後に帰国した残留孤児が、中国人養父母を追悼する墓石を建立。一帯は「中日友好園林」（約1万4000平方㍍）として整備され、日本から毎年、遺族ら約1000人が訪れる。方正県からも親族訪問などで年間約2000人が日本を訪問し、友好の歴史に根ざした交流が続いている。

県政府によると、常駐の管理人が清掃などを担当し、維持管理費は年間約20万元（約260万円）。2年前には約700万元（約9100万円）かけて園林に至る農道を舗装し、利便性を高めた。

ただ、農業中心の県の財政は厳しく、今年に入って日本政府に費用の一部負担を打診。日本政府は40年以上もきちんと管理されてきた経緯を踏まえ、9月末、日本人公墓の維持管理費として年間3万5000元（約50万円）を支援することにした。

県政府の王偉新・外事弁公室主任(38)は「日本の支援は大きな助けとなる。中日の懸け橋として、園林の役割は一層高まるだろう」と話している。

方正県政府が管理を続けてきた日本人公墓

東京新聞 2009 年 10 月 11 付朝刊に掲載

★日本人墓地に支援

日本外務省は十日、中国東北部の黒竜江省方正県にある旧満州開拓団員を弔う墓地への支援を決め、同県政府に通知した。日本人のために造られた中国唯一の公営墓地とされるこの墓は、一九六三年に同県政府が建立、維持管理を続けてきたが傷みが激しいため、日本政府などに援助を申し出ていた。

第二次大戦で亡くなった日本人を慰霊する墓地はシンガポールなどにあり外務省は維持費を援助しているが、日本政府や日本人が建てたものに限られていた。援助額は年間三万五千元（約五十万円）。外務省は、県政府から管理状況の報告を受けながら、来年以降、正式に予算化する。

（外報部・五味洋治）

社団法人日中友好協会・機関紙

「日本と中国」2009 年 10 月 25 日付掲載

方正県の日本人公墓維持に日本政府が支援

加藤会長が強く働きかける

中国・黒竜江省ハルビン市の方正県にある日本人入植者約５０００人が眠る日本人公墓に対し、日本政府は初めて維持管理費を支援することを決めた。加藤紘一協会会長は、外務省に政府の支援を強く働きかけたという背景がある。加藤会長のその思いを聞いた。

日本人公墓は、１９６３年に中国政府が建立。方正県政府は、年間約20万元（約２６０万円）をかけて、この共同墓地を管理してきた。日本からは毎年、１０００人以上の遺族が墓参に訪れ、いまや日中友好交流の重要な場所となっている。

日本政府は今回、年間3万５０００元（約50万円）を支援することを決定。来年度以降に正式に予算化する。

方正県への思いを語る加藤会長。10月19日

「胸のつかえがとれた」

加藤会長は外務省勤務の１９６０年代後半、駐香港総領事館で残留邦人の帰国に携わった。このことで方正県には強い関心をもっていたという。その後、２００３年に加藤会長は地元・山形の住民と初めて方正県を訪問。公墓や記念館を回った。中国政府の建立については、このとき初めて知った。

ことしになって、同県政府が公墓の管理費用の援助を日本に求めていることを、方正友好交流の会の大類善啓氏らを通じて知った。加藤会長は「いまこそやるべき」と思い、外務省へ強く働きかけたという。「胸のつかえが少しとれた」と、加藤会長は思いを語った。

東京新聞 2009 年 10 月 31 日付朝刊掲載

開拓団墓地 首相参拝を

司書　小松　陽子　49（神奈川県三浦市）

中国が黒竜江省に造った旧満州開拓団員墓地の補修を地元自治体が進め、日本政府も支援すると、4日付と11日付国際面にあった。

この夏、映画「嗚呼満蒙開拓団」を見た。生存者の証言は、衝撃的だった。国策による入植にもかかわらず、敗戦により日本政府に見捨てられ、亡くなられた開拓団の方々。

その方たちの公墓が、中国政府によって建立され、今も地域の人々に大事に守られていることを知り、深い感銘を受けた。首相には、日本政府の代表として、ぜひ、公墓の参拝をお願いしたい。

亡くなられた開拓団民は、今度こそ、日本政府に見捨てられないことを、祈っているに違いない。

１０月１２日付人民日報社発行『環球時報』（蒋豊氏執筆）の翻訳

「中国にある日本人公墓、日本政府が資金援助」

在华日本人公墓获日本政府资助

本报驻日本特约记者　蒋丰

在中国黑龙江省方正县内，有一座“日本人公墓”。它是1963年中国政府批准为日本残留孤儿和妇女修建的，是世界上绝无仅有的由受害国政府为战争发动国遇难侨民修建的公墓，被视为中国人民宽容的见证。40多年来，这个公墓一直处于被日本政府遗忘的角落。但据日本《读卖新闻》10日报道，最近，日本政府决定对这座公墓在维修管理费用上给予一定援助。

据该报报道，1945年日本战败时，许多日本女性、孤儿没有能够回到日本。在方正县因寒冷、饥饿、传染病等死亡的日本人多达5000多人。1963年，周恩来总理指出，“日本人民也是军国主义的受害者”。在他的批准下，方正县兴建了一座写有3米高标识的“方正地区日本人公墓”。在邻近的麻山地区，当地政府还为集体自杀的大约500名日本人建立了一块墓石。这是中国方面为日本人兴建的唯一一座公墓。

这篇由《读卖新闻》驻华记者采写的报道称，在公墓附近，还有在1972年中日恢复邦交以后回国的日本“战争孤儿”为中国养父母们兴建的墓石。公墓周围有大约1.4万平方米的“中日友好园林”。如今，日本每年大约有1000多名遗属到方正县扫墓，方正县每年也大约有2000多人到日本探亲访友。这里已成为中日友好交流的重要地区。

该报道援引方正县政府的介绍说，这个公墓一直都有人常驻，负责清扫等工作。每年维护管理费用大约需要20万元人民币。大约两年前，当地政府出资700万元人民币铺设了通往公墓的道路，更加方便了日本人的扫墓活动。

报道说，作为农业大县的方正县，近年来财政并不宽裕。今年曾经通过有关渠道向日本方面征询：日本政府能否支援一部分管理费用。日本政府有关部门研究后认为，中国方面40多年来为了维护这个公墓作出很大的努力，日本应该对此表示感谢。9月底，日本政府表示，今年支出50万日元(约合3.5万元人民币)，作为今年支援公墓维护管理费的一部分。

《环球时报》记者11日致电方正县外事侨务办公室了解到，方正县目前有3.5万人在日本，该县正利用这一特点，全力打造“东北旅日侨乡”。▲

中国黒龍江省方正県に「日本人公墓」がある。これは1963年、中国政府が許可し、日本の残留孤児と残留婦人のために建立されたものであり、世界で唯一の、戦争の被害を受けた国の政府が戦争を発動した国の被害者のために建立した公墓であり、中国人民の寛容さの証と見ることができるだろう。この公墓は、過去40年以上にわたり、日本政府によって忘れられ見落とされてきた。

10月10日付、日本の「読売新聞」の報道によると、最近、日本政府はその日本人公墓に対して、維持管理費用の一部を支援することを決定した。

この報道によれば、１９４５年の日本の敗戦時、数多くの日本人女性や孤児が日本に帰れず、方正県で寒さや飢え、伝染病などによって、約5,000人以上が死亡した。1963年、当時の周恩来総理は、「日本国民も（日本）軍国主義の被害者である」として、方正県政府に対して、高さ３メートルの「方正地区日本人公墓」の建立を許可した。また、方正県政府は、近くの麻山地区で集団自決した約500人の日本人のために、一基のお墓を建立した。これらは、中国側が日本人のために作った唯一の公設墓地である（訳注：「麻山地区日本人墓地」は、「方正地区日本人墓地」の隣に建立されている）。

読売新聞のこの中国駐在記者が書いた記事によれば、この公墓の隣には、１９７２年の日中国交回復以降、日本に帰国した日本の「残留孤児」が設置した中国の養父母のための墓があり、これら墓地の周囲一帯は、広さ約1，4万平方メートルの「中日友好園林」として整備されており、現在、日本から毎年1,000人以上の遺族が

墓参に訪れ、また方正県からも毎年、2,000 人余りが親戚や友人を訪ねて日本へ行っているなど、方正県は日中友好交流の重要な場所となっている。

報道によれば、方正県政府は次のように説明をしている。この公墓には管理人を常駐させ清掃などに当たらせている。維持管理費用は年間約 20 万人民元（約 260 万円）である。また、方正県政府は 2 年前、約 700 万元（約 9,100 万円）を支出して、公墓につながる道路を建設し、日本人の墓参が更に便利になった。しかし、農業県である方正県の近年の財政には余裕がなく、今年、あるルートを通じて、日本政府が公墓の維持管理費用の一部を支援してもらえるかどうか尋ねたところ、日本政府の関係部門はこれを検討し、次のように判断した。中国側が 40 年以上にわたり、この日本人墓地の維持管理に最大限努力してきたことに対して、日本政府は感謝の意を表明し、9 月末、日本人墓地の維持管理費用として、今年（09 年）の公墓維持管理費の一部として日本円で 50 万円（約 3.5 万元）を支援することにした。

「環球時報」記者は 11 日、電話で方正県政府外事僑務弁公室に取材したところ、現在約 3 万 5,000 人の方正県出身者が日本で生活しており、方正県では「（中国）東北部の在日華僑の故郷」づくりに全力で取り組んでいるということである。

信濃毎日新聞 2009 年 11 月 30 日（月）付掲載

黒竜江省 満州開拓団の墓地

維持管理費 日本が支援

【北京共同】中国黒竜江省方正県が、敗戦時の引き揚げ途中に死亡した旧満州開拓団員の慰霊のために建てた共同墓地「日本人公墓」に、日本政府が維持管理費の支援を始めた。これまでは同県が年間約20万元（約260万円）の管理費を全額負担しており、支援決定に地元からは歓迎の声が上がっている。

旧関東軍の補給基地があった方正県には旧ソ連軍の侵攻後、長野や山形などの開拓団員らが集まったが、飢えや寒さにより約5千人が死亡。県政府は「開拓民も戦争の犠牲者」との考えから、故周恩来首相の承認を得て1963年に遺骨を埋葬、墓石を建立した。公墓は中国側が日本人のためにつくった唯一の公営墓地とされる。

中国黒竜江省方正県にある旧満州開拓団員を弔う共同墓地「日本人公墓」（共同）

県政府はこれまで管理費のほか、墓参りに訪れる日本人遺族らのために道路を舗装。しかし財政は厳しく、今年に入り日本政府に支援を要請、10月から四半期ごとに8750元が支払われることになった。

県政府の王偉新・外事弁公室主任は「日本の支援は助かる」と喜ぶが、支援が決まっているのは来年3月までで新年度の継続は未定だ。王主任は、「日本の支援が途切れても墓は守っていくが、日中友好のためにも継続してくれたら」と話した。

県開拓自興会長「意義深い」

長野県からは、全国都道府県で最多の約3万3千人が満蒙開拓団に参加した。元開拓団員らでつくる県開拓自興会の永原今朝男会長(79)＝上高井郡高山村＝は、日本政府による日本人公墓の維持管理支援について「日本人を慰霊する施設であり、日本政府が一定の助成金を出すのは当然。歓迎したい」と話す。

同会は2007年、会結成60周年記念で訪中し、日本人公墓前で慰霊行事をした。永原さんは、黒竜江省政府や方正県政府の歓迎を受け、親善を深めたと振り返り、「日中友好の観点からも、日本政府が公墓の維持にかかわるのは意義深い。来年度以降も支援を続けてほしい」と求めている。

近現代史を知るきっかけに！

羽田　澄子

（はねだ・すみこ、映画作家）

２００９年５月30日

方正友好交流の会・第５回総会での挨拶

ご紹介いただきました羽田でございます。このようの所でこのようなふうに皆様にご挨拶するとは思っておりませんでした。今回私が創りました『嗚呼、満蒙開拓団』という映画が岩波ホールで一般上映できるようになり、皆様に観ていただけるようになりましたことは本当に良かったと思っております。

創りたい仕事ができなかった時代

私は、非常に長い間ドキュメンタリーを創る仕事をやってきましたが、こういう問題にこういう形で取り組むようになるとは、自分自身で本当に考えておりませんでした。しかし私は、もともと大連生まれでして、一時内地におりましたがその後、旅順と大連で暮し戦後三年経ってやっと日本に引き揚げてきた人間です。しかし日本に帰ってきてからは、しごと仕事で忙しく、しかも映画を創る仕事は、今は女性の監督もだいぶ出てきてはおりますが、私が映画の仕事をした頃は、女で映画を創る人は本当に少なくて、いろんな意味で大変でした。しかも自分の創りたい映画をつくるという状況ではなくて、会社での仕事としての映画創りという状況が続いていたわけです。

私は岩波映画製作所が設立された時から社員になり定年まで働きました。それまでは会社の仕事ばかりを一生懸命にしていたのですが、定年退職してから自分のやりたいことをやるようになってきたのです。しかしなかなか残留孤児の問題まで目が届きませんでした。

『星火方正』で知った日本人公墓の存在

「満州育ち」で、引き揚げもみんなより遅く帰国していますので、どういうことが一体、旧満州で起きていたかということには潜在的な関心がありました。それを自分が映画の仕事にするということにはなかなか思いませんでした。しかし残留孤児の国家賠償請求訴訟の問題が起きてからは、中国残留孤児の問題が具体的にどうだったか、だんだん関心が強くなり、裁判には出来る限り傍聴に行くようになりましたが、それを映画に撮るというようなことはなかなか思いませんでした。ただやっぱり、この問題がこのようにあるということは、自分には避けられない問題だというふうには思っていましたが、映画にするには私の持っている力では無理じゃないかという思いがあり、なかなかできませんでした。そんな時に、映画にも描きました『星火方正』という冊子が、私のところに届いたのです。

これがどうして届いたのか、改めて訊いてみないとわからないのですが、まあパラパラ見ておりました。『星火方正』なんて何のことやら全然わからないものですから、いったい何の雑誌だろうと思って、しばしそのまま置いたままになっていました。しかしちょっと時間が出来て、何の冊子だろうとよく見ているうちに驚いたのです、本当に。

中国の方正というところに日本人公墓が中国人によって建てられたということが雑誌に書かれている。とてもショックを受けました。そして、「これはなんとかしなければいけない」と、その時にすぐに思っちゃったわけです。どんな映画にするとかいうことじゃなくて、「これは！」と思ったのです。そういうふうに思ったというのは、実は戦後、大連に３年暮らしておりましたが、その間に中国がどのように変わっていったのか、中国の人の恨みがどれほどのものか、ということを、ある意味では私の肌で知っていました。そしてその中で、中国共産党がどういうふうに考えていたのか、そして、その中で周恩来がどういう立場でいたのかということを、ある意味では、非常に生活感覚の中で私は知っていたということなのです。それでこの方正地区に日本人公墓が出来たということは、周恩来の判断によるものだということ、それを見た瞬間に、「これは映画にしたい。」と思ったのです。

運命を背負わされた映画

しかし中国の問題を映画にするのは、なかなか難しいことじゃないかと思ったのですが、方正へ行くツアーがあるということを知って、とにかく行って見てみようと思ったのです。そこで方正友好交流の会の大類さんや奥村さんとお会いしました。映画のロケーションというのもいろいろ大変ですので、一体どうしてやればいいのかと思ったのですが、実に簡単に、大類さんと奥村さんが「いやあ、その面倒は私たちがみます」と言ってくださいました。そんなことがあるとは私は思わなかったもので、すぐに参加するようにしました。それがきっかで出来たのがこの映画です。

私自身が言うのも変ですが、どういう構想でどういう映画が出来るかというのは、これは映画になるのかならないのか、わからないまま走り出してしまって、大類さんからしょっちゅう、「これはどういう映画なんですか？」と訊かれて、私は困っていたのですけど、「映画になるかならないかわかりません。」と何遍言っても、大類さんは「もう映画は創り出しましたか？」というもので、追い詰められたということもありますが（笑）。

しかし創っているうちにいろんな形で道が開けてきて、この映画を創ることができました。これは私にとっては本当に生きている間に、いつか創らなければならなかった運命をもっていた。私が運命を背負わされた映画ではなかったのではないか、と思っています。

若い人たちに知ってほしい歴史

無我夢中で創って、この映画がどのように人々に受け入れられるのかということ、面白いのか、つまらいのか。ほとんどいろんな意味での計算も立てないまんま、夢中で創ってしまった映画です。ですから、最初に去年（０８年）の秋に、映画祭で上映されるという時に、観にくる人がいるのかと思って不安でした。

映画がまだ完成しない前ですが、友人知人に今満州の開拓民の映画を創っていますと言うと、実は「うちの親も」とか「うちの親戚に」「知り合いに」旧満洲にいた人がいるという言葉が返ってきまして、実に日本人の中に満州と関係のあった、関係を持っていた人がとっても多いということを知って驚いたわけです。

実際、去年の秋に、「東京国際女性映画祭」のオープニング作品としてこの映画が公開された時に、会場に入れきれないほどのお客様が見えたわけです。それで私は初めて、この映画の持っている問題の大きさというものが、まあ、創った人間がそんなことをいうのも

変ですけど、とっても大きな問題にぶつかったことに気がつきました。で今回、６月から７月末にかけて、岩波ホールで公開されるわけですが、今の若い人たちは日本の近現代史を知らない人が非常に多いわけです。一体、日本がどんな歴史を経てきたのか、しかも中国なり韓国にどういうことをしてきたかを知らない暢気な顔をしている若い人たちが大勢いるわけですね。そういう人たちが中国や韓国に行って受けたショックというのを、いろんな形で日常聞くことがあるのですけど、なんとかこの映画が日本の近現代史をいろんな人に知ってもらう一つのきっかけになってほしい、と私はとっても思っております。どうぞよろしくお願いたします。　　**（文責：大類）**

講演する羽田さん（写真・師岡武男）

７月 31 日、岩波ホールでの最終上映を終え、ホールのロビーで関係者の記念撮影。真ん中の中央が羽田澄子、向かってその右後方が制作の工藤充、前列座っているのが岩波ホールの原田健秀、その右中腰が岩波ホール支配人・岩波律子、向かって左端が自由工房の佐藤斗久枝諸氏など岩波、自由工房の人々。会からは奥村、大類もどういうわけかいる！

毎日新聞2009年9月1日及び8日付夕刊に掲載

想創

映画「嗚呼　満蒙開拓団」への道

記録映画作家
羽田澄子

いま私は最新作「嗚呼　満蒙開拓団」の岩波ホールでの上映が無事に終わり、予想していなかった多くの方が見てくださる結果となって、ほっとしたところだが、改めて満州や満蒙開拓団について、関心を持っている人が非常に多いことを知って驚いたのである。私も満州には縁がある。

生まれたのは大連市。日本内地にも何年かいたが、小学校・女学校は旅順。戦後3年たって日本に引き揚げてきた。音信の途絶えていた戦後日調査が始まってからだった。2002年に中国残留孤児国家賠償請求訴訟がはじまって、私はこの問題の大きさ、深さにショックを受けることになった。私はできる限り裁判の傍聴にでかけた。そこで私は一層ショックを受けることになった。

公判廷での陳述を中国語か、たどたどしい日本語でしか話せない孤児たちの姿。さらに傍聴席を埋めて裁判を傍聴している大勢の孤児たちに、裁判が終わってから中国語で裁判の内容の説明をしなければならない様子に、胸を突かれる思いがしたのである。

映画「嗚呼　満蒙開拓団」への道

そんなある日、届いた郵便物の中に「星火方正」という不思議な冊子があった。その冊子によると、中国・ハルビンに近い方正に敗戦後、多くの開拓団民が避難してきたが、零下30度を超す冬に耐えられず、数千人の人が亡くなっている。戦後十数年たって、山間に散乱しているその人たちの遺骨を見た残留婦人の願いを受け、方正県人民政府によってつくられた「『方正地区』日本人公墓」があるというのである。

日本が中国で行った暴行に対する中国人の深い恨みを思うと、これは驚くべきことだった。「これはどういうことか」と思ったのが、映画を作る原動力になったのだ。

＝月末を除き毎週火曜日に掲載します

想創

映画「嗚呼　満蒙開拓団」への道（2）

記録映画作家
羽田澄子

この映画は中国の方正県にある日本人公墓のことを知りたいという「想い」と、開拓団で敗戦を体験した多くの人たちが語る「想い」によって支えられている。

日本人の遺骨を埋葬したいと県政府に願い出たのは、残留婦人の松田ちゑさんだった。現在は息子、孫、曽孫さんと東京で暮らしながら、残留邦人の帰国を助ける活動や体験を本にもしておられる。ぜひ当時のことを詳しくお話ししてほしいと思っていたが、すでに高齢で脳梗塞も患われている彼女は、いろんなことを「もうあまり覚えていない」「忘れたわ」と繰り返された。しかし、その合間合間にふっと話される言葉に、私は強烈な印象を受けた。

方正で亡くなった4500人もの開拓民の遺体は敗戦の翌年の春、ガソリンをかけられて3日3晩かけて焼かれたという。しかし、散乱している遺骨を彼女が見つけたのは、戦後十数年もたってからだった。狼や犬に食べられ、散乱していた骨の話。彼女の願いが周恩来総理の判断で実現したことへの尊敬と感謝など。幾つもの貴重な言葉をくことができた。

映画の中のインタビューは見る人に強い印象を与えるのだろう。上映後「実は私の父が……」とか、「私は子供だったけれど……」といったお手紙や、自費出版の本がたくさん届くようになった。

そのおかげで、長野県の飯田日中友好協会が「満蒙開拓平和記念館」を作る構想を持っていることを知った。これは素晴らしい、今までなかった構想だと思った。長野は日本で最も多くの開拓民を送り出した県。ぜひ実現してほしいプランである。人目に触れにくかった本や資料がここの資料室に集められ、満蒙開拓の資料がすべて見られるとなれば、素晴らしいことではないだろうか。

私の映画もそうだが、戦争を知らない世代に過去の過ちを教え、国の方向を誤らせないことに役立てば、こんなうれしいことはない。

＝月末を除き毎週火曜日に掲載します

あの戦争、あの時代

谷野　作太郎

今年も、八月十五日をまたぐ形で、あの戦争、あの時代をめぐって、いろいろな企画が組まれた。

そのひとつは、岩波ホールにおける「嗚呼、満蒙開拓団」の上映である。方正友好交流の会の活動、方正所在の日本人公墓のことは、交流の会・事務局長の大類さんから直接うかがったり、その後、資料をいただいたりして承知していたが、映像を通してとはいえ、その日本人公墓を目のあたりにするのはこれがはじめてであり、何とも感無量だった。映画を見終わって、あらためて「何と馬鹿な戦争をしたものよ」という、やり場のない無念さと――これが当日ホールを埋めつくした多くの人たちの共通した思いであったことは、この人たちがホールをあとにする様子から見てとれた――あの戦争、無謀な国策の犠牲になられた人たちに対し、その後、私たちの日本（官民）がなして来たことの少なきことへの悔恨の念がこみ上げてくるのを抑えられなかった。

その後、ＮＨＫがあの当時、日本海軍の中枢にあった方々が、戦後、綿々と語る反省、悔恨の弁、（録画の時期は、かなり以前らしいが）を放映したが、これを見ると、あの戦争をめぐってその後巷間伝えられた「陸軍悪玉、海軍善玉」説は、そんな単純な話ではないことが、良く分かった。それにしても、この座談会が最後、参加された方々の高笑で終わったことが気になった。

過日はまた、防衛省防衛研究所が主催した「戦争史研究国際フォーラム」を終日傍聴する機会があった。同研究会の幹部の人たちを中心に、日本の戦史の研究家と欧米の学者たちを集めての、なかなか良質のフォーラムであったが、ここでも、出席したパネリストたちが、くり返し口にしたことは、「日本は何故（勝てもしないと分かっていた）あの戦争につっ込んでいったのか」ということであった。かつて、当時、陸軍参謀の中枢にあった人が、「わしらは、対米戦争については、清水の舞台から飛び降りるような気分でやった！」と語るのを耳にしたことがある。

ところで、ここにあれは、「自存自衛のための戦争」だったという主張がある。アメリカに負けると分かってはいたものの、そのアメリカに石油を絶たれ、その結果、日本は立ち上がらざるを得なかったのだ、と。しかし、ここですっぽり抜けているのは、日本がそこまで追いつめられた、そこに至るまでの経緯、すなわち、日本の中国大陸への軍事侵略の歴史である。この正義なき無謀な戦争が、日本を国際的孤立に追い込み、どこかに突破口を見出さんとして、「仏印進駐」の挙に出た結果、遂には、米国などによる資産凍結、対日石油輸出の禁止、日米通商条約破棄へと追い込まれるのである。

あの「村山談話」に、「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争の道を歩ん

で・・・」とあるのは、ひとつには、あの頃、すなわち、真珠湾攻撃に至る対中国関係という前段の歴史をこそ念頭においてのことであろう。故橋本龍太郎氏（村山内閣で副総理、当時は日本遺族会の会長でもあった）は、生前私に、あの時代の話をされながら、「日本は中国との関係では、あの対華２１ヶ条要求（１９１５年）あたりから誤った道に入り込み、きわめつきは満州事変（１９３１年）だった。」と述べておられたことを思い出す。「村山談話」についても、原案では「敗戦」、「終戦」と書き分けてあったのを、村山総理からの相談を受けて、すべて「敗戦」という表現にそろえては如何、とサジェストされ、「遺族会の方はそれで、何ら問題ありません」とおっしゃっていたという話は、今では、多くの人々が知るところである。ちなみに、この「村山談話」は、日本を「侵略国」と決めつけたものであり、怪しからぬとの論があるが、これも同談話を落ち着いて読めば、これまた一方的なものの言い方であるということが分かるであろう。「談話」は「過去の一時期、日本は国を誤ったことがある」と述べているに過ぎないのだから。

また、あの戦争は、「アジア解放のための聖戦だった」という主張もある。たしかに、前線では、そのように信じ、勇敢に戦い、命を落としていった兵士たちも少なくなかったであろう。紙面の制約で、ここで詳述する余裕はないが、これも手前勝手な見方であるということは、当時の軍の中枢の人たちが公式文書として書き残したもの（本音）に目を通せば明らかである。（“アジア解放のため”というのであれば、豊富な石油資源を手放したくないという理由で、インドネシアには最後まで独立を認めなかった――これに抗して独立を勝ち取ったのはあのスカルノだった――という事実をどう説明するのだろう）

あの時代の不幸な歴史について、「謝罪」はもうよい。これについては、これまで日本政府は総理大臣以下折りに触れてこれを表明して来た。それにこれは、今では中国をはじめアジアの国々（政府）が日本に求めるところでもないし、日本としても、これを続けることは民族の誇りをそぎ取ることにもなりかねない。問題は、そのことではなく、「歴史」の歪曲、「歴史」への開き直りである。そうすることが、如何にアジアをはじめ世界の国々が、私たち日本（人）を見る目線を下げることになるが、そうして、とくに、日本の要路にある人たちがそうすることは実は、私たち日本人の誇りを最も深いところで傷つける結果となるということを分かって欲しいと思う。要は、そのような「過去」を勇気をもって見つめ、しっかりこれと対峙しつつ、そこからより確かな未来構築に向けての教訓をくみとってゆくということこそ私たちのとるべき道だと思う。

この度、方正県の日本人公墓に対する日本政府（外務省）の支援も決まったという。うれしいニュースとして受けとめた。

――方正友好交流の会の一層のご発展をお祈りして。

（たにの・さくたろう：インド大使、中国大使を歴任。中国大使時代は、率直に中国政府に対しても問題を提起する一方、台頭するインド、中国に対して日本がどう向き合うべきか、と常に友好推進の立場から発言。現在、（財）日中友好会会館　会長代行）

「国家が国民を捨てる」国家イメージを脱却したい

―『嗚呼　満蒙開拓団』を観て―

江田　五月

参議院議長に就任して、時々、東京国立博物館の特別企画とか各美術館の特別展とか、面白い企画のご案内をいただく。これまでそういう時間の使い方が出来なかったが、ご案内をいただいて顔を出すと、もっともっとということになり、「花の生涯―梅蘭芳」とかハンセン病の「新・あつい壁」とか、映画を観ることも若干増えた。そんなことで目に止まり、「嗚呼満蒙開拓団」を観た。どうせ空いているだろうと高をくくっていたら、切符売り場は何と長蛇の列。満席で、あわや見逃すところだった。

満蒙に新天地を求め、希望に胸を膨らませ、一家を挙げて海を渡った人々を、悲劇が襲った。これを、一つずつ訪ねていくのだが、最初に登場する家族が渡ったのが、1945 年 5 月 26 日というので、びっくりした。その頃には確かに、国の指導部には、戦争の先行きも開拓団を待ち受ける困難も、分かっていたに違いない。これはひどい。

私は、この人々の運命と無縁ではない。運命のいたずらがちょっと違うと、私自身の体験となったかも知れない。私も引揚者なのだ。

私の父は、江田三郎といって、往時の日本社会党の政治家だ。しかしそれは、戦後のこと。父は戦前、戦争に反対し農民運動に身を投じ、治安維持法違反のかどで 2 年 8 ヶ月服役。出獄後、生きた人間と付き合うと特高がうるさいので、死んだ人間なら文句はなかろうと、葬儀屋を始めた。ちなみにそのころ、私が生まれた。ところが親切過ぎて大赤字。そこへ、知人が父に手を差し伸べた。実父の葬儀を父に託した知人が、心のこもった葬儀に打たれ、この男を殺すわけに行かないと動いたのだ。私たち一家は中国に渡り、河北省石家荘に住み着いて、父は水路工事に携わった。1943 年ころのことだ。八路軍との緊迫した折衝もあったのだろう、帰宅した父の背中にいっぱいミミズ腫れがあったのを覚えている。鞭打ちの跡だ。日本の軍部との関係を疑われたのだろうが、後に嫌疑が晴れ、奪われた私物がそっくり返ってきたそうだ。

戦争が終わった。中国人から一定の信頼を得ていた父は、現地の日本人からも頼りにされ、引き揚げの事務折衝を託されたことは、想像に難くない。父が柳行李一つを担ぎ、母は生まれたばかりの私の弟を背負い、私は小さなリュックを背負って、上陸用舟艇母艦で天津から佐世保に上陸。1946 年に、無事に焼け野が原の岡山に戻ってきた。運が良かったと言うほかない。

国家が国民を捨てるのは、別に珍しいことではない。満州以外にもいっぱいあるし、日本以外にもいっぱいある。だからといって、良い訳では断じてない。20 世紀の国家イメージを、そろそろ脱却したい。21 世紀まで役割を担った政治家として、つくづくそう思う。これが私の「嗚呼満蒙開拓団」鑑賞の感想だ。

（えだ・さつき：1941 年生れ。旧社会党の重鎮だった江田三郎の長男として生まれる。判事補だったが、父急逝の後を継ぎ、社会市民連合から参議院議員当選。衆議院議員、細川内閣の科学技術庁長官を経て、参議院議員。2007 年より参議院議長）

映画『嗚呼、満蒙開拓団』――そして、その先

千本　健一郎

かつて日本の国策で満州（現中国東北部）や内蒙古に入植した「満蒙開拓団」。二十七万にのぼる開拓民のうち七万人余が日本の敗戦前後、北満の地で命を落としたとされる。生きのびた人々は残留孤児、残留婦人としてそれぞれ中国人の養父母に引きとられ、あるいは現地中国人の妻となって歳月を重ねた。この記録映画のなかでそうした生存者が語る戦中戦後の体験は、一つひとつが身を切るように響く。

一九四五年八月八日、ソ連の参戦とソ満国境侵攻を機に、それまで国境の最前線で農業に励んでいた開拓民は、たちまち家と土地を捨てて逃げまどう難民と化した。

戦争末期、開拓村の働きざかりの壮年男子はすでに軍に召集されていた。逃避行を強いられたのは女、子供、老人を母体とする開拓団員の群れだ。彼らはソ連軍の攻撃と現地中国人の報復のなかで襲撃や殺戮（さつりく）にあい、集団自決を選ぶ。毛布と水とビスケットだけを残して、幼児を草原に置き去りにする。あげく自らも飢えと寒さと発疹チフスに倒れる……。

画面からは、こうした「血だらけの逃避行」を今に語る人々の声が次つぎ現れる。なかでも私の耳を打ったのは終戦時にチチハルの満鉄検車区で働いていたという男性の証言だ。

チチハルの駅頭には、ほとんどリュックひとつで国境付近の開拓地からたどりついた難民たちがひしめいていた。そこで雨露をしのぎ、避難列車を待っていたのだ。「僕は、てっきりその人たちを乗せるために列車を編成したと思っていた。ところがそこに兵隊が銃剣をつけて、それに守られて、家族の人たちが乗るわけです。将校とか高級軍官の家族だと思うんですよ。それが、荷物がすごいんですね。革のトランクを二つ持ったり、布団袋を積みこんだりして、その連中が乗って、その次の列車もたしかそういう連中が乗ったんですね。……それで後から考えてみたら、まず軍の人たちが先に行って、その後に満鉄の人たち、それから満州国政府の人たちが乗って、ハイラルや満州里（マンチュリ）の方から逃げてきた人たちは結局、一部しか乗れなかったと思うんです」

ここには、あからさまな流血の惨事はない。だが、軍や官吏、満鉄を頂点とする日本の傀儡国家をつくり上げ、危急のときにはその防人（さきもり）役に任じた開拓民をあっさり捨て去る国家意思が、無残なほど現れている。人間の生き死にに、歴然と等級がもうけられているのだ。当時、関東軍（旧満州に駐屯した日本軍）の主力は沖縄に送り出されており、同軍の防衛線は南下が進んで縮小されていたが、「軍機密」として開拓民はじめ一般の人には知らされていない。背後にはそうしたこともある。

この映画（監督・羽田澄子）はハルビン市郊外の方正（ほうまさ）地区で生き残った日本人の体験談が軸になっている。方正県に行けば関東軍がいる。軍の補給基地がある。そこまで行けばハルビンにいける。ハルビンに出れば日本に帰れる。そう思って人々はひたすら方正を目ざした。だが関東軍は人々を無視して、とっくに立ち去っていた。そこで人々は飢えと寒さと伝染病で死骸の山を築くことになる。

一九六三年春、食糧危機に見舞われた中国政府は国民に荒地を開墾し自力で食糧を求めるよう命令を発する。中国人と結婚した残留婦人・松田ちゑさんはその土地を耕すうちに続々現れる白骨の群れと出会った。四五年秋から翌年にかけて亡くなった日本人たちの遺骨だ。松田さんはその骨を埋葬したい旨、県政府に願い出た。この願いはそこから省政府、中央政府へとわたり、当時の陳毅外相の手を経て周恩来首相のもとに届いた。周は「祖国を見ることなく逝った開拓民たちも日本軍国主義の犠牲者である」として約四千五百人の死者たちを葬る「方正地區日本人公墓」の建立を認めた。高さ三・三メートルの墓石用の花崗岩探しも、碑銘の文字を記す書家も、そのほか墓の建立にかかわる費用一切も、すべて中国側が引き受けた。これが中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが消えていない一九六三年、日中国交回復の十年ほど前の出来事と知らされて、思わずうなった。周恩来という政治家の度量について、だ。

周の存在感はそれだけではない。六六年から中国全土をおおった文化大革命のとき、紅衛兵たちがこの日本人公墓を破壊しようとした。だが黒龍江省政府は「これは日本軍の墓ではない。日本の庶民の墓である。彼らに罪はない」と紅衛兵の要求を退けた。

そしていま墓参の途次、ハルビン市方正県人民政府に表敬訪問したかつての難民たち――今は日本に帰国している――に向かって、劉軍常務副県長はこう言うのだ。

「日本が中国を侵略したとき、とても許し難い残虐なことを中国にしました。……これは歴史の事実です。しかし、開拓団は日本兵ではありません。当時の日本の政策がなければ、彼らは中国に来なかったと思います。中国に災難をもたらしたのは、開拓団の人の考えではありませんでした」

周恩来の政治的寛容がここまで連綿と生き続けていることに、改めて舌を巻く。だが私たち日本人は、中国側のこうした発言にすんなり同意していいものだろうか。また国策にだまされた側は、ただ過去の悲劇を嘆き、大陸の大地に死体をさらした物語を語りつくせば事足れり、ということか。戦いすんで日が暮れて、日中間にも平和が回復し、といった時点で旧地を訪れ、かつての苦難をしのび、慰霊塔に向けて手を合わせればすむものなのだろうか。

私はここで数多の犠牲者やかつての難民たちを非難したりおとしめたりする気はさらさ

らない。彼らは力尽きて死んだ。あるいは生き残って痛切な被害の歴史を精いっぱい語り続けている。ただしかし、平和を祈念するところで話を打ち切ったら彼らも私たちも浮かばれないような気がする。そこから先を一歩でも掘り下げて考えるのは、彼らが命がけで残した平和をいま享受しつつある私たちの当然の役目というものだろう。

さしあたって二つのことに思いをはせておきたい。その一。私たち日本人は入植活動を通じて、結果的にはまるごと中国人に対して加害者になったこと。その事実を自覚的に受け入れること。

一九三六年、広田弘毅内閣は満州移民計画を立案。背景の一つに、二九年の世界恐慌のあおりで生糸の価格が暴落、養蚕によって生活を維持していた農家が困窮に陥った、という事情がある。加えて、増え続ける農村人口を調整しなければらないという要因もあった。以上の農村対策として、満州へ二十年かけて百万戸・五百万人を送り込むという国家プロジェクトが描かれたのだ。

その入植地を確保するために、政府は現地中国人農民が開墾した土地を二束三文で買いたたき、開拓民に割り当てていった。これにより入植者たちは日本では考えられなかった広大な土地を手に入れ、「王道楽土」「五族協和」の国策スローガンのもと自らの「弥栄（いやさか）」のためにクワをふるい、牛馬を動かし、満蒙の地を支配した。一方、自分の土地を追われた現地農民は開拓団員の小作人になってしまった。この事実を無視するか忘れるかして、昨日までの土地の主たちが四五年八月九日以後、突然「犬にも劣るどん底に落ち（注）」たという実感ばかりつのらせるとしたら、これは危うい。目の前の難儀が何故もたらされたのか。自らの加害性に対する省察がないところ、いきおい被害者意識ばかりがはびこり、あっという間に肥大化する。

こうなるともはや、他者の境涯への想像力がはたらく余地はなくなる。行きつくところお人よしの無告の民は、またしても無自覚、無反省な民として「お上」の意のままに操られるだろう。そして同じ悲惨を味わい、嘆き節を奏で……という底なし沼をはい回ることにもなりかねない。

その二。したがって貧しい者、弱い者ほど「お上」からはだまされやすいものだ、と肝に銘じること。だまされる、とは、上からの美辞麗句におどらされ、力ある者の都合が悪くなれば放り出される、というのと同義だ。自国の貧しい者、弱い者を、他国の同列にある者を虐げる先兵として使う。これはお上の常套手段だ、くらいの用心深さはもちたい。そうして、簡単には上意にまるめこまれない民がふえていったとき、「よるべのない、きのどくな者」を意味する「無告の民」という言葉は、はじめて影がうすくなるのではないか。

そういえば、手もとにある『中学生の満州敗戦日記』（今井和也著、二〇〇八年、岩波ジュニア新書）という本の最後にこう書いてある。

「『満州国』はそこに住む人たちの存在、意思、感情を無視した、ひとりよがりの妄想から生まれた国家だった。血と涙をたっぷり吸いこんだ砂の上に組み立てられた幻想国家がわずか一三年五カ月の寿命に終わったのは、歴史の必然というほかはない。

そして『満州国』の経営に無惨な失敗をした指導者たちの名を、ふたたび、私たちは戦後の日本国経営の指導者の中に見出すことになる」

これと関連して、次のような記述も目をひく。東京からも送り出された満蒙開拓団の一枚の歓送写真を見て、その筆者は仰天した。

「……戦時下企業整理などで店を閉じた商店街の人々を、万歳で送り出しているのは、岸信介商工大臣と、後に岸内閣の外務大臣となる藤山愛一郎東京商工会議所会頭の姿だったからだ」

こう記したのは井出孫六。『終わりなき旅　「中国残留孤児」の歴史と現在』（岩波現代文庫）の著者でもある。

権力者は過去の汚点については口をぬぐったまま。それについて証言するのは、いつも汚点に振り回された「民草（たみくさ）」ばかり。これが続くかぎり、民の歴史のその先に光がさしてくるとは考えにくい。

この走り書きにも似た「感想文」は、十歳のときやはり「引揚難民」として旧満州・奉天（現瀋陽）から帰国した私の心情が下敷きになっている。日頃は雑事にかまけて「満州」から遠く離れて生きる身の、苦い反省もこめて書き進めた。

（２００９年夏）

参考資料『嗚呼　満蒙開拓団』（EQUIPE de CINEMA No.171）

井出孫六・前掲書

方正友好交流の会　会報８号『星火方正（せいかほうまさ）一燎原の火は方正（ほうまさ）から一』

注　井出孫六・前掲書所収、坂本龍彦「『終わりなき旅』に寄せて」

（せんぼん・けんいちろう：ジャーナリスト。元『週刊朝日』記者、『朝日ジャーナル』編集委員。文化、差別問題などを担当。著書に『「いい文章」の書き方』、編著に『世界のことば』、訳書に『イスラエル全史』（上下）ほか。

『嗚呼　満蒙開拓団』に寄せて

滝永　登

この映画を見たのは、まったくの偶然といってよい。たまっていた仕事が一段落し、少しずる休みをしたい気分になって、職場のパソコンで映画館情報を検索し、この映画の存在を初めて知ったのだ。題名から判断してこれならよしと決め、早速休暇届を出し、神保町へ向かった。平日の昼間だったので楽に座れると予想し、上映開始直前にたどりついたのだが、館内はほぼ満席。こうした映画にもしっかりと客が入るということを知って、心強く感じた。しかし、時間帯からして当然で、客席はほとんどが高齢者。自分自身そろそろ老境にさしかかる年代なのだが、ここでは十分に若手で通用する。しかし、考えてみるとこれは時間帯のせいではないのかもしれない。夜間や休日ならなおさら、若い人たちはこの映画館には来ないにちがいない。若い世代には、残念ながら、この映画は人気がない。

私は、今の社会風潮の中では決して評判がよいとは言えない「戦後民主教育」を最も純粋な形で受け入れた世代だ。「自由」、「平等」、「平和」といった理念が、手あかが付かず、きまじめすぎるくらいに語られていた。そうした中で、今なら「偏向教育」として袋だたきにあいかねない「平和教育」を受けることができたことを、私は素直に感謝している。「平和教育」の主眼は、当然「あの」戦争だ（名称がいまだに定まらないのも奇妙な話だ）。「８月１５日は何の日か」という教師の問いかけに、多くの子どもたち（もちろん私もそのひとり）は「戦争が終わった日」と答えた。それに対して、その教師が「それだけでは正しくない」と応じた。そのときの彼の必死の語りかけは、今でも強く印象に残っている。今の子どもたちは、「戦争が終わった日」とさえ答えることができないのでは。

カッパブックスの『三光』で中国戦線での日本軍の実態を知り、一方でスノーやスメドレーを通して中国共産党の英雄的なたたかいを知ったのは、高校から大学へ進む頃だった。『人間の条件』一挙上映を有楽町の映画館で見たのもそのころのはずだ。後付けの知恵で、これらの書物に描かれた「歴史的事実」には一部修正が必要なこと、また歴史の複雑な過程を単純な「善悪」だけで解釈してはならないことを学んだが、この戦争の基本的な構造（侵略と被侵略、加害と被害）に対する理解は今も変わらない。近年の中国の過剰なナショナリズムの昂揚に比例するがごとくの「反中」、「嫌中」意識の高まりと「自虐史観」なる気味の悪い造語の広がりが、日中戦争の存在そのものまでをも消し去ろうとするならば、「戦後民主教育世代」の意地に賭けても抵抗せざるを得ない。

しかし、問題はこれだけにとどまらない。日本の軍隊は、日本の民衆（それも最も弱い立場の）に対しても加害者であったということだ。沖縄における「集団自決」と旧「満州」

における「残留孤児」の問題こそ、日本軍は決して民衆を守らなかったという悲しい事実を教えてくれた。ソ連参戦を知るや真っ先に逃げ出したのが、関東軍と満鉄の幹部連中とその家族たちであった。多くの人々には、参戦の事実さえ知らされていないうちにだ。「残留孤児」の報道に接して涙を流さない人はいない。悲劇のあまりの大きさに心痛めるだけでなく、「孤児」本人や養父母らのその後の人生のドラマに、大いに心揺さぶられるからだろう。だが、「残留孤児」として生き延びた人たちは、まだ幸せであった。当然のこととして、取り残された多くの人たちは、飢えと寒さに苦しみながら彼の地で死に果てたのだから。

ここまでは、以前から私が知識としては持っていたことである。話はさらにその次があることを、この映画を見て初めて知った。すなわち、「方正日本人公墓」である。公墓を建ててほしいと願いでた日本人、それを支えた中国人、さらにその後４０年以上にわたってこの公墓を守り続けてきた両国の人々の努力と熱意を私は無条件に支持する。こうした努力の積み重ねこそが、つきなみかもしれないが、二度と悲劇を繰り返させない力になると信じるからだ。

ほんの暇つぶしのつもりで何か映画をと思ってこの作品を選んだのは、題名にひかれたからだけではない。それ以上に羽田澄子さんの作品であるということが、大きな理由である。羽田さんの作品に共通する、被写体に対する暖かいまなざしは、いつも私を励ましてくれる。この映画を通じて、羽田さん自身の少女体験を知り、こうした映画を作る「必然性」のようなものをあらためて感じた。

この映画の収穫がもうひとつある。本誌の編集責任者でもある大類善啓さんの名を映画のエンドロールに発見したことである。大類さんとは、実は４０年近くも前に何度かお会いしているのである。その一つは、私が参加していた学生エスペラントサークルの合宿に、なぜか学生ではない大類さんが（その時は、週刊誌の記者をやっていると聞いたような気がする）一緒に参加していたのだ。そういう時代だったのだろう、エスペラントの学習よりは政治的な議論に熱くなっていたのが、今では懐かしい。

（たきなが・のぼる：1950 年東京生まれ。学生時代に世界共通語エスペラントに親しみ、東京学生エスペラント連盟に参加。1974 年東京都庁に就職、現在に至る）

日本にとっての「満州」とは

寺本　康俊

戦後世代の若い人たち、特に昭和後半期や平成生まれの人々にとっては、「満州」や日中戦争、太平洋戦争は、現実感がなく、歴史的な語句になっているのかもしれない。そうした言葉を実際に聞くこともある。しかし、よく考えてみれば、日本国内のみならず海外にも戦争の傷跡は至る所にあり、戦争の被害、影響を受けた人々の例を数えあげると枚挙にいとまがない。その意味では、いまだに「戦争は終わった」とは言えないのではないか。

私はこれまで満州開拓団の方々のさまざまな手記、記録を読ませていただく機会があったが、それはまさに筆舌に尽くしがたいとしか形容できない悲劇が記載されていた。

この夏、私は、ドキュメンタリー映画「嗚呼　満蒙開拓団」を鑑賞することができた。戦前から戦中にかけて満州に開拓団として入植した人々がソ連の宣戦布告後から終戦直後の想像を絶する過酷な状況の中で引き揚げをした当時の様子が想起され、当時の悲惨な状況を彷彿とさせるものがあった。また、このたび、中国東北地方黒竜江省に方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓や中国養父母公墓が建立されていることも初めて知った。

私はこれまでに中国のハルビン、瀋陽、北京、南京などの歴史資料館を訪問し、満州事変以降の日本の軍事や政治外交の在り方を改めて考えさせられる機会を得てきたが、この満州開拓団のことは、別の意味で、私に戦前期日本外交の在り方を考えさせた。つまり、満州への植民政策は、昭和初期、最初は「武装移民」という形をとらざるを得なかったが、このことは既に将来、満州国が崩壊に瀕した時の危険を予見させるものがあり、また他国の主権や国民を顧みない自国本位の政策がもたらした結果が、満州開拓団の無辜の人々の悲劇的結末をもたらしたと思われ、誠に残念である。

歴史の事象を検討する際、時折、「歴史のあと知恵」という批判を耳にするが、私は、そうではなく、後世の指導者や国民が、過去の歴史的事象について種々検討を重ね、「歴史の教訓」を得ることで、人類が繰り返しがちな失策や戦争などを未然に防ぐことができ、より良い現在や未来の世界を構築することができるのではないかと、常々考えている。

私は昭和28年生まれの戦後世代であるが、私たちは日本人公墓が物語る満蒙開拓団の結成と消滅に至る歴史的経緯を知り、日中関係者の熱心な発意と中国省政府等の協力の下でこの公墓が作られたということを認識することが大切だと思う。

現在の日中関係においても、歴史を直視し、未来に向かうことが唱えられているが、日本にとって、これまでの歴史を検証し、お互いの民族を尊敬して、今後の中国、朝鮮半島、アジアの国々との友好的な交流を図っていかねばならないと思う。

（てらもと・やすとし、1953 年生れ、広島大学大学院教授。戦前・戦後の日本の外交史、現代の日本の対中国・朝鮮の外交政策を研究。今夏、広島で『嗚呼　満蒙開拓団』を観る）

遥かなる中国の大地で起きたことを、

今、自ら眺望する創造力を求めて

――『嗚呼　満蒙開拓団』を観て――

佐藤　英之

長年、精神医療問題に関わっている。その日、7月8日（土曜日）は、午前中から神田一ツ橋の日本教育会館で、精神保健従事者懇談会（「精従懇」）が行われるため、私たちは精神保健・医療・福祉に関連する書籍販売の準備に忙殺されていた。

しかし、なんとか岩波ホールの午後2時30分からの上映には間に合った。薄暗い会場には若い人も幾人かは確認できたが、大方は高齢者の人たちで観客の8割を占めていた。

「中国残留孤児」の生活保障と身分保障を求めた国家賠償請求の控訴審で最高裁判決が下された場面から映画は始まる。「不当判決」と書きなぐったステッカーが画面に浮き上がる。中国語と日本語の混在した音声がだんだん涙声になって、会場を埋め尽くした人たちの怒声と喚声のなかで掻き消されていく。

大連で生まれ育った羽田さんは、中国政府と中国人によって建立された日本人公墓の存在に始めて気づかされたのは、「方正友好交流の会」の会報であるという。大連から見れば北満の方正は遥か奥地である。かの地の日本人が戦後どうしたのか気になっていたが、その当時はそれ以上踏み込んで調べることはできなかったという。

日本人公墓の建立にいたるエピソードには、日中友好の絆と、宿命とも言うべき深い因縁を感じさせる話がある。中国人と結婚した残留日本人の松田ちゑさんへのインタビューでそのことが明らかになる。松田さんは、中国政府の荒地開墾奨励策によって土地を開墾中、偶然、日本人の累々たる屍を発見する。松田さんは何とかして骨を拾って埋葬したいと県政府に願い出る。県から省政府へ、そして中央政府の周恩来首相の決断によって許可され、「方正地区日本人公墓」という立派な公墓が中国人の手によって建立された。

しかし、紅衛兵運動の渦中で松田さんは、「日本人のスパイ」として告発され、「死刑」の判決が下されるが、外国人の死刑には県政府も慎重であったせいか、このときも県政府から省政府へ、そして中央政府へと上申されて周恩来の目にとまり、かろうじて釈放の通達が出された。このエピソードは、偶然というよりも何か宿命的なものを感じるのは、私だけではないような気がする。

「中国残留孤児」はなぜ生まれたのか。この問いに答えるのは容易ではない。その前史、満蒙開拓団の悲劇はどうして生じたのか。九死に一生を得て帰国して、今も健在な人たちへのインタビューをとおして、過去と現在が交錯する現場の情景を映し出しながら、闇に埋もれた歴史の一コマ一コマを丹念に追って幾重にも重なった断層のなかの一つの真相を

冷静にひも解いてゆく。

満蒙開拓団のスタートは、1929 年世界恐慌（昭和恐慌）が日本経済を、特に農村地帯を直撃する頃から始まる。日清･日露戦争以降、植民地支配を目論む日本政府と地方自治体（市町村）が一体となって積極的に推進した政策である。2.26 事件以降、軍部の圧力に屈した広田弘毅内閣の大陸進出政策によって、満蒙開拓団の人たちは満州へ行けばもっと楽に暮らせるという喧伝にのせられて何も知らないまま、中国へ、満州へと駆り出されて行った。

生き残った開拓団の人たちへのインタビューをとおして明らかになったことは、開拓団の人たちは、当時の生活はどん底でも一家が生きるために、あえて満州へ行く必然性はなかったと反省していることである。まして、関東軍と満州国傀儡政府が傍若無人に中国を支配、服従して、中国人の土地を無償にちかい形で収奪し、開拓団民に付与するなどということは知る由もなかった。

この無法な満蒙開拓団の移民が、敗戦直前まで行われていたことは日本政府や軍部や官僚の無責任な体質を象徴して余りある。軍人が国民を護るという幻想は、沖縄戦でも明らかだが、満蒙開拓団の人たちの受難は想像を絶している。集団自決しか選択の余地がなかった開拓団の人たち、幼い我が子を自分の手で絞殺、銃殺するしかなかった父母たち、寒さと飢えと疲労で病いに斃れ、落伍した親や兄弟を見捨てて行くしかなった人たち、阿鼻叫喚の哀しい声が地の底から聞こえてきそうな気がする。

取材をとおして明らかになったことは、１９４５年８月９日のソ連軍の参戦による突然の攻撃や現地の中国人の襲撃を受けた開拓団の人びとの受難とは裏腹に、軍人、軍属、満州国政府要人、満鉄関係者とその家族は、いち早く豊富な物資を持って逃亡したことである。

映像から映し出される人びとは、穏やかな語り口調で冷静に当時を思い出しながら証言しているが、観ている私たちは、この国に絶望してしまうほどの衝撃を受けながら、なぜ、という疑問が頭から離れない。戦争とはそういうものだ、不条理が支配する焦熱地獄なのだと頭で理解しても、そうした日本人の存在を許してはいけないのだ、という断罪に心底賛意を表しながら、超然たる判官のような立場に立って彼らを断罪する己にある種の羞恥を感じてしまう。その一方で、戦争という時代の転換期のなかで、個々人の力ではどうにもならないことも事実であり、その激しい潮流に抗ってその時代を誠実に生き抜くことなど普通の人間にはできやしない、という諦念にも似た想念を抱くもう一人の自分をそこに見てしまうのだ。

新潟県出身の満州開拓民であった長田末作さんは、渡満当時１５、１６歳の少年であったが、「既耕地であったかつて入植したその地が、現地の人の土地だった。……満州人の土地を奪ってそこに自分たちの開拓地を求め、そこで生活した、と戦後気づかされた。……あの時代、あの世の中全体の方向の中で、青少年たちが心身のすべてを賭けて生きた数年間は、犠牲とか無駄とかといったことばだけでは語りつくせない。あの生活があったからこそ今の生活がある。……だから今、万感を込めて日中両庶民の友好交流を大切にしている」（高橋健男著『満州開拓民悲史』批評社、２００８年）。

敗戦とともに、我先に逃亡を企てた軍人たちやその家族と違って、九死に一生を得てかろうじて日本に帰国できた中国残留孤児たちが中国にいる高齢の養父母やその親族たちと交流する姿には、苦難の時代を真摯に誠実に生き抜いて互に日中両国の架け橋になろうとする民衆の熱い眼差しを見た想いがして安堵させられる。だが、養父母に虐められ蔑まれた残留孤児の女性の映像には、何とも言いようのない複雑な想いに駆られてしまう。

これが戦争なのだ、引き裂かれた心身の絆は、癒されることはなどあり得ないのだ、だからこの現実を直視し続けなければならないし、この現実からしか新しい日中関係は作り出せないのだと、文字の世界ではいとも簡単に言葉化できるが、映像の世界は、ストレートに問題の所在を照らし出すことはない。徐々に緩やかに、音声としての語りと映像が重層的に交錯するフィクションの世界へと観客の視線を誘いながら、一コマ一コマをその脳裏に焼き付けていく、ドキュメンタリーの凄さはそんなところにあるように思えた。

日本は、明治近代の時代から今日まで、精神障害者への処遇は社会防衛的視点から精神病院への隔離と収容をその基本的な施策としてきた。さらに日本は、世界に冠たる精神病院大国で現在も３３万人以上の精神障害者が収容されている。医療制度改革が叫ばれ、社会復帰へのさまざま施策が模索されながら遅々として進展しない退院促進施策は、この国の基本的な社会政策のあり方を象徴している。

国策として３０万人近い国民を満蒙開拓民として中国へ入植させながら、その戦後処理としての中国残留孤児の社会復帰策の促進は、一定程度進んだとはいえ、参政権にしても、生活保障、雇用保障、医療保障などの社会保障にしても先進国の名を辱めるほどの貧困でしかなく、同じようにこの国のあり方を象徴している。

（さとう・ひでゆき：１９７８年９月に批評社を設立、「季刊精神医療」他、精神医療関係や「歴史民俗学資料叢書」（全１５巻）、「ブント私史」「１９６０年代論」など、６０年安保闘争～８０年代の学生運動に関わる評論集など、異色の出版活動を続けている）

他人の人生を感じ取るということ

――『嗚呼　満蒙開拓団』を観て――

吉家　京子

中国残留日本人孤児の人達が、また肉親を探しにやってくる。

どんなにか大変な人生を送ってきたことだろうと思いながらも、私は顔を背けたくなる。自分の頭と心の間に、なんとも嫌な距離感があるからだ。「ひとごと」として捕らえている自分が嫌になるのだ。

世界史を勉強しているとしよう。「民族大移動だって？それが何なの？」学生時代の自分は、そんなだったと思う。しかし、一昨年アイルランドに行ってから、ヨーロッパの民族移動は、突然私の中で色、形を得て動き始めた。「ケルト」が好きになったからだ。今、私はアイリッシュの笛を吹きながら、ケルトの人達の歴史を感じ取ろうとしている。

過去の出来事が突然命を得て、自分の中で動き始めたという、こんな体験もある。息子が小学校６年生の７月、学校から帰るなり、「広島の原爆記念館に行ってみたいな。」と言った。どんな授業を受けてきたのか、「こんな先生に受け持っていただいて、息子は幸せ」、と感じていた私は、その先生が投げかけてくださった一粒の種を大切にしたかった。翌日、新幹線の切符とホテルを予約して、その翌日には二人で広島へ。そして原爆記念館に直行。息子はその夜、食事が取れなかった。そして一泊して、私はもう一度資料館に向かった。「お母さんは多分ここにはもう来ないと思うから、もう一度見ておきたいの。外で待っていてくれる？」息子は「ウン」と言ったが、結局一緒について来て、前日よりも時間をかけて見ていた。何か新しいことを学んだのではない。ただ、原爆が本当に落とされて、多くの人が死んだり、苦しんだりした（あるいは、苦しんでいる）ことが、「事実」として認識され、心の中の「原爆」の質がすっかり変化したのだ。

物事を本当にあったこととして、全身で受け止められるかどうかは、何で決まるのだろう。自分で体験したことは、よく分かる。自分にとって大切な人のことは、全力で分かろうとする。しかし、アフリカのことは？　アラブは？　生涯かかっても果たせない宿題をかかえて生きている。

『嗚呼　満蒙開拓団』を見た。ずっしりと重かった。体験談は重い。悲惨な記憶を抱えて生きてこられた方々の、人生の重さを思う。そして、私の心の扉は、この映画によって開かれたと思う。これから中国残留日本人孤児のニュースを見るときは、顔を背けないばかりではなく、食い入るようにテレビに噛り付くと思う。

私はこの映画を観てから、会う人毎に「嗚呼　満蒙開拓団」は、素晴らしい映画で、羽田澄子さんは素晴らしい方だと思う、と伝えた。でも、その後観たという話は聞かない。何人

かが「観たかった」、と言ったけれど。私が岩波ホールで観たときも最終回だったせいもあるかもしれないが、観客は少なかった。そして、年配の方が多かった。体験者らしい方が、深く頷きながら観ていた。でも、本当に観て欲しいのは、若い人たちだ。若い人たちの未来に、過去と同じ悲惨が降りかからないように、学んで欲しいのだ。しかし、それとは逆に、人の痛みに鈍感な空気が蔓延しているのではないだろうか。いつか自分や自分の大切な人の身に降りかかってくることなのだけど。

大原穣子さんという方言指導・女優をしている方がいる。大原さんは、日本国憲法を、お国言葉（大阪、広島、愛知、青森）で、その土地の普通の人が普通に話すように、憲法の難しい用語を「翻訳」して読んでいる。それによって、「えっ、そうだったの！」と気づくことがあるはずだ。「・・・どが一な理由があろうとも、戦争は絶対にこれからあ、やらんということを誓うたんです」と聞かされれば、「そう、そう。」と思うではないか。こんな、大切な「憲法」に命を吹き込むような仕事をする大原さんを、私は素敵だと思う。

羽田澄子さんは、素晴らしい映画をつくられた。私たち、それを観た者は、その素晴らしさを伝える役目があると思う。そして、生きた言葉で、それを伝えられるよう、心を砕いていきたいと思う。

（よしいえ・きょうこ：ホームスパン作家。羊の毛を、染色、手紡ぎ、手織りによって、壁掛け、ストールなどを制作。東京都内や札幌のデパートを中心に、作品を発表している）

山形県の小さな町で映画「嗚呼　満蒙開拓団」を上映して

大場　武男

１．戦争体験と平和を語るつどい――今年は映画上映

８月、私たちは、映画「嗚呼　満蒙開拓団」（羽田澄子監督作品）を最上町で自主上映した。県境の宮城県大崎市や栗原市、県内からは遠く米沢市、山形市、最上地方の市町村からも足を運んでいただき、３００人の方々に観ていただいた。中には満州の地図を持参し、入植した地と苦難の歴史を語ってくれた人もいた。

ＮＰＯ法人やまなみを設立した直後の昨年夏、「戦争体験と平和を語るつどい」を開催し、町内の戦争体験を語り継ぐテーマで、３人の方に戦争体験を語っていただいた。

１５歳で満蒙開拓青少年義勇軍に加わって満州に渡り、終戦後１３年間も大陸に取り残された体験と終戦直前、ソ連軍の侵攻によって８歳で母親と決死の逃避行を経て引き揚げて来た生々しい体験談が強く印象に残った。

これをきっかけに、歴史の事実を正確に知りたいと思い、いろいろな満蒙開拓関係の本を購入して読んでいたところに、６月、東京の岩波ホールを皮切りに映画の上映が始まった。「嗚呼　満蒙開拓団」を最上町で自主上映しようと、６月末、町内に上映実行委員会が立ち上がった。

２．羽田澄子監督のドキュメンタリー映画との出会い

実は私は羽田澄子監督作品の大ファンだった。今まで多くの作品を観てきた。

１９７０年代から８０年代前半頃に、「薄墨の桜」「早地峰の賦」など民俗文化的な作品に感銘していた。８０年代半ば頃から歌舞伎などの文芸作品を発表するかたわら、福祉の分野で、日本の遅れた高齢者福祉政策転換の起爆剤になるような作品を次々に世に送り出して来た。「痴呆性老人の世界」「安心して老いるために」「住民が選択した町の福祉」「続、問題はこれからです」２００６年、終末期医療の現実を描いた「終わりよければすべてよし」で医療の世界に、人間の死生観について問題提起した。

私は２００７年まで横浜市に住んでいたが、２００２年頃、「続、住民が選択した町の福祉―問題はこれからです」を実行委員会をつくり自主上映し、５００人程の入場者で会場をいっぱいにしたことがあった。この上映運動がその後、認知症高齢者ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑの開設につながった。「終わりよければすべてよし」は岩手県一関市まで出かけていって観た。

今、私は６０歳を機に、ふるさとにＵターンして、地域でＮＰＯ法人を立ち上げて、認知症高齢者グループホームづくりを行っているが、認知症介護等の福祉理念確立に羽田作品から学ぶことが多い。羽田さんには、今後も元気に、またすばらしい作品を世に送り出してほしいと願っている。

３．満州引揚者と戦後入植した開拓農民の想いと涙

私たちは、自主上映を成功させるために、いろいろな活動に取り組んだ。

１９５６年に作成されたガリ版刷りの満州引揚者の名簿が見つかった。調べてみたところ、町内に１０人程度の生存者がいることがわかった。満州引揚者、シベリヤ抑留体験者

の座談会、体験を語る会を開いた。引揚者が保有していた貴重なビデオをみる機会があり、満蒙開拓の実相を知るのに非常に役立った。

また、太平洋戦争で海軍の偵察飛行艇のパイロットだった町内在住者の「戦争体験を語る会と音楽のつどい」も開き、多くの人が聞きに来てくれた。引揚者が前売券を積極的に普及して、上映の成功に大きな役割を果たしてくれた。また依頼した前売券を完売する人が続出した。

山形県は長野県についで満州移民が多い。その中でも最上地方の多数の家族が海を渡った。金山町には、開拓移民を訓練した丸い日輪宿舎が今でも現存している。

実行委員会では、最上地方１市４町３村の自治体を訪問し、ポスターや前売券を取り扱ってもらった。多くの自治体で、チラシを全居配布していただいた。県内のテレビ局５社、各新聞社、支局にも足を運んだ。また、県内の日中友好協会との交流のきっかけもできた。

最上町の前森開拓地に戦後入植した人の中に、満州引揚者が多い。私たちは、この開拓地をくまなく訪問し、多くの開拓関係者に映画を観ていただいた。

映画のシーンと、戦後の一家の苦難の歴史をだぶらせて、涙する人もあった。映画上映の主催者としても涙を禁じえなかった。

４．満州移民とは何だったのか。

私たちは映画入場者に「満州開拓史」年表と開拓団の入植地を表わす地図を資料として配布した。地図を見た人から、開拓団がなぜソ満国境に多く集中しているのかという質問があった。

満州移民の本質は、昭和の初期あいつぐ冷害と不況で（山形県最上地方は昭和の初期、やませによる冷害で、少女の身売りが激増した地域とされている）疲弊した農村の過剰人口対策、傀儡国家「満州国」の防衛、対ソ防衛などの国家的軍事的役割を担わされて、軍部が沃野の土地を奪い入植させた国策としての侵略移民だった。

敗戦直前にソ連軍が侵攻した時、すでに根こそぎ現地応召され、男性の少ない開拓団の逃避行がどんな苛酷だったかを、引揚者の座談会、体験を語る会でつぶさに聞いた。

当時の政府が、敗戦直前まで開拓団を送り込み、日本から届いた荷物をほどくひまもなく、逃避行の中、次々と肉親を失っていった悲壮な体験、軍や満州国の要人、家族が特別列車を仕立てて逃げ出し、列車にしがみつく開拓民を銃剣で振り払って出発した事実も語ってくれた。映画でもその事実が証言された。

満州移民とはいったい何だったんだろうか。戦前、窮乏が続く農民に移民熱をあおって進められ、終戦まで２７万人も海を渡った日本人が、終戦直後の混乱で、死亡、行方不明者８万数千人にのぼったこの「満蒙開拓」は、国家による「大量棄民」という戦争犯罪ではなかったのか。そして、この犯罪は一方で中国残留孤児問題を引き起こした。

半世紀以前、満州移民を大量に送り出した山形県の小さな町に住む今、このような戦争体験を風化させることなく、戦後憲法により日本国民が営々として築いて来た平和な社会と、日中友好を大切に守って行かなければならないと思っている。

（おおば・たけお：1947 年生まれ。62 歳。60 歳でふるさと山形県最上町に U ターン。現在、NPO 法人やまなみ理事長。認知症高齢者グループホームづくりや、まちづくり、文化芸術の振興、地域経済の活性化等の活動を行っている）

“満蒙開拓団”我が心の想い

―映画『嗚呼　満蒙開拓団』を観て―

吉川　福太郎

悲しき事の多かりき・・・涙、涙、涙あるのみ

破れし国、その民無惨なり

戦争とはかかるものか　原因は人にあり

一、　政治家の言を信じるなかれ
一、　官僚の言を信じるなかれ
一、　軍人の言を信じるなかれ

第一次、 第二次世界大戦は、実に人類による人間の破壊なり
この教訓をいかにして２１世紀に生かすか――これ人類の英知なり、民族、国民の責任なり

＊ 国民は、政治、行政を注目し、その善悪を判断しなければ再び、くりかえすものと知れ
＊ どのような法律を作ろうとしているのか国会を注目し、自らも過ちを勉強し、支持政党、政治家へ自分の意見を伝達する事が民主主義なりと存ず
＊ 主権在民とは、国民の権利と義務、自由と規律と責任の事なり
＊ この責任を怠れば、害その身に及ぶ事～を学びたり！！
＊ されど極めて、難しき事なり。故に「歴史はくりかえす」～今また第三次世界大戦前夜の如し。各界のリーダーは、諸国民に「戦争の恐れあり」と警告を発せられよ！！
＊ 我ら国民もまた、親子、友知人と共に問題あらずや～と語り合い、天災同様、人災に備える事など～今何を考え、行動すべきか！！
＊ 八月は、原爆忌ヒロシマ、ナガサキ　そして敗戦の日を迎えんとす。祈りのみでは平和を守る事できぬものと知るべし。

全ての犠牲者に捧ぐ

（09年7月記す）

（よしかわ・ふくたろう：昭和８年（1933年）生まれ、現在76歳。昭和19年8月、旧東京都城東区亀戸国民学校５年生の時、山形市の上の山町へ集団疎開する。昭和20年3月10日、10万人に及ぶ米軍の無差別爆撃による東京大空襲で実家は全焼さる）

歴史を知って、忘れないでほしい

――映画『満蒙開拓団』を見て――

畢　楊

この映画を見て、深い感動を覚えた。しかし、開拓民の悲劇に同情したのか、それとも、戦争が世界の人々にもたらした災害に心を痛めたのか、自分でもはっきり分からなかった。開拓団のことをよく知らなかった私はショックを受けた。

それで、大学一年生のことを思い出した。高校時代の友達に日本語を勉強していると話したら、「何で日本人の言葉なんか勉強するの。中国で侵略戦争を起こした国だよ。日本がどんな災難をもたらしてきたものか」と変な顔をして言われた。そんな表情をされたら何を言えばいいかわからなくなってしまった。実は日本語学科に入ることは家族もあまり賛成してくれなかった。特に老齢の親戚は全然理解できないようだった。その一方で、「日本語？かっこいいね。私も勉強したいわ」と言われたこともたまにある。日本のことだったら何でも好きで、とても日本に憧れている人もいる。

しかし、両方とも極端だと言える。中国人が日本人を恨んでいるのは日本軍が中国人にさんざんなことをしたからだ。けれども、この映画を見て、日本国民も日本軍が起こした戦争の被害者だということがわかるようになった。日本政府は満州に行け、開拓に行けと国民に勧めた。国民は国のため、天皇陛下のためだと思って、中国に来たのだ。日本政府と日本軍がそこで何をしていたかいっさい知らなかったそうだ。一般の国民は事実を教えられなかったらしい。だから、日本人は敗戦後、逃避行の最中に中国人に襲撃されてびっくりしたわけだ。豊かな生活が送れると聞いて来たのに、こんなひどい目にあうなんて、開拓民たちは夢にも思わなかったでしょう。騙された思いがしたでしょう。

戦争が終わって、長い月日が経った。残留婦人と孤児たちの多くは帰国することができた。しかし、帰国して国に提訴しても政府はあまり責任を持たないそうだ。私は非常に驚いた。その原因はよくわからないが、日本の国民も軍国主義、あるいは戦争の被害者であったことだけはしみじみ感じられた。だから、何ですべての日本人を恨まないといけないのか、と思うようになった。お互いに戦争のせいで家族が亡くなった不幸な者同士なのだ。

実は西安交通大学には、日本人の留学生が少なからずいる。若い人からお年寄りまでさまざまな人たちだ。皆まじめで、勤勉なようだ。私の知っているあるおじいさんはとても中国語が好きで、毎朝大学の隣にある興慶公園で朗読しているそうだ。相互学習のときも、とてもやさしくていつも親切に日本語を教えてくれた。このような人がまた他にもたくさんいると信じている。

中国人はもっと理性を保ったほうがいいと思う。愛国心は皆が持っているものだが、もっと理性的になったほうがよいのではないか。かつて、日本人開拓民の逃避行を助けた中国人がいた。そのおかげで、今なお生きている日本人もいるのだ。周恩来総理が言った「祖国を見ることなく逝った開拓民たちも日本軍国主義の犠牲者である」という言葉に、私は深く感動を覚えた。そして、周総理は日本人墓地の建立を許可したのだ。これこそ中国人にとって誇るべきことでしょう。中国人に養父母になってもらい、生活を支えてもらい、最後に日本に帰ることができた人たちが映画の中で出てきた。善良さは国籍にかかわらず、人間の本能的な感情、やさしさなのだと感じた。彼らはそこで一生の絆を結んだことでしょう。

実は、同年代の中国人に聞いても、日本人に聞いても、満蒙開拓団のことを知っている人はほとんどいない。今の中国の学生には興味がないのか、歴史についてよく知らない人が少なからずいると思う。自分も詳しいことは知らない。このことは、日本に非常に憧れるという現象を生んだ理由の一つだと言える。その一方で、日中の歴史をよく知っている人の大部分、特に中高年世代はひたすら恨みと悲しみだけを抱いているのではないか。

私は歴史を知ってほしい、忘れないでほしいと思う。ただ、忘れないのは恨みではなく、歴史自体だと思う。ひたすら恨むことになれば、何にもならないだろう。中国と日本はお互いに学びあうことがたくさんあって、グローバル化が進むにつれて、これからの協力はいっそう深くなるのが望ましいことではないかと考えている。両国国民同士は、お互いに被害者だったのだから、もっと理性的で、寛大に接し合い、この貴重な平和を大切にしていくのが一番いいことなのではないだろうか。

（ひつ・よう：湖北省武漢市郊外で生まれ、現在、西安交通大学日本語科４年生。中国全土で行われた日本語スピーチコンテストの西北地区で準優勝。７月 12 日より１週間、日中科学技術文化センターの招待で来日中、岩波ホールで『嗚呼　満蒙開拓団を観る）

≪写真説明≫

右上写真の左側が社団法人日中科学技術文化センター会長の野沢太三会長、右が畢楊さん。その日会長に挨拶に出向く時、野沢会長が元法務大臣だというので彼女はやや緊張したようだった。大類が会長のデジカメで記念写真を撮り終えると、野沢会長から「大類さんもツーショットを！」と言われと並んだ。（下写真）

すると会長曰く「大類さん、くっつき過ぎるよ」と言う。どういうわけか大類は、女性と並んで写真を撮られると自然に女性の方に傾むく癖が出るようだ。

なお、畢楊さんは来年（2010 年）４月、広島県立大学への留学が決まった。

代役が見た映画祭の熱気

第１２回ゆふいん映画祭に酔う

奥村　正雄

■　羽田監督ダウン

司会者の右、中央座っているのが奥村

５月のある朝、突然、羽田さんから電話がかかってきた。「由布院の映画祭に、私の代わりに行ってもらえない？」　５月２９日から３１日まで、大分県湯布院で開催される「第１２回　ゆふいん文化・記録映画祭」に、羽田さんに代わって出てくれというのである。理由は羽田さんが突然、心筋梗塞で入院したためだ。私は監督の立場でものは言えない。しかし２年にまたがった中国ロケや国内の帰国残留婦人と孤児の撮影にずっと立ち合っていたから、その目に映ったものを映画祭で報告することはできる。映画祭の、３日間にわたって繰り広げられる、さまざまなイベントの最後に特別招待作品として「嗚呼　満蒙開拓団」が上映されたあと、私の目に映った制作の裏側などを話せばいい、と思って承知した。

羽田さんに代わって私が行くことになった後の映画祭事務局の対応は実に手際がよかった。飛行機の切符の手配、羽田空港窓口での手続き、大分空港到着から由布院の会場までのバス、バス停から会場まで案内してくれる係りの人の名…そうした周到な実務連絡を、事務局の小林華弥子さんが、実に手際よくメールで連絡してくれた。

■　「開拓団より予科錬がいい」

私が映画祭の会場に入ったのは最終日５月３１日の午後。第１日目の前夜祭、第２日目の著名な監督や評論家のゲストトークと授賞作品の鑑賞に続く最終日で、ちょうど受賞者の表彰式とシンポジュームが行なわれていた。応募作６５点、受賞者はベテランから初応募の若者まで、等しく初々しさが漂って、この種映画祭のメインイベントを初めて見た私にはとても新鮮だった。このあと２時間、スクリーンに「嗚呼　満蒙開拓団」が映し出され、そのあと会場をロビーに換えて私の報告と座談会が行なわれた。

私が話したのは、まだ元気一杯だった頃の松田ちゑさんから聞いた公墓誕生の裏話。仮の墓標がダム建設で移され、今の立派な公墓の墓石がハルピンから運ばれた時の担当者で黒竜江省外事弁公室の趙喜晨さんから聞いたさまざまな秘話などである。

突然、片隅でざわめきが起こった。この企画を聞いて、近郷に住む満蒙開拓団関係者が２，３人、当時の写真を持ってきて参加者に見てもらっていたのだった。司会者がそのひとりをみんなに紹介した。たったいまスクリーンで見た映像と、目の前にいる関係者が自分の頭の中でストレートに結びついた世代と、すぐには結びつかない若い世代とのずれを感じた。私のそばへ開拓団関係者のひとりが近寄ってきて言った。

「当時、開拓団に行く者が足りなくて役場からさかんに勧誘に来た。私は本当は予科錬に行きたかったんだが、親にも言われるし、しょうがなくて満州へ行ったんだよ」

当時１０代の若者にとっては、憧れは予科錬、いくら十町歩の地主になれるとあおられても、開拓団へ行くのは本意ではなかった、という本音は私には新鮮に聞こえた。

■　若者演出の「花のお名残会」

夜７時半、トークが終わると実行委員長の清水聡二さんに声をかけられた。

「…へ行ってみますか」

どこへ行こうと誘っていただいたのか、わからぬまま彼の後に従った。外へ出て別の通りへ出る。なにやら村祭りのメイン会場の趣きで音楽が流れ、人が大勢集まっている。

＜ああ､たまたま今日は湯布院の街の祭りで､そこへ案内してくれたのかな＞と思った。が、それは空港から会場に駆けつけ、いただいた祭りのプログラムもまだよく見ていなかった私の早トチリで、やがてここがまた「ゆふいん文化・記録映画祭」最後のイベント「花のお名残会」の会場だということがわかった。おでんあり焼き鳥あり煮物あり、酒、ビールを各自それぞれ買って、酔い、話が弾んでいる。と、なつかしい神楽の鳴り物。片隅から鬼の面をかぶった白装束の演者が地元の神楽を舞い始める。と思うとタイミングをはからった司会者の声。「はい、××さまからご寄付××円！」会場がどっと沸き、コーナーで寄付者の名と金額を書いた紙が、客の頭の上に張られた糸に手繰られて反対側へと移動する。そして周囲の壁に順に貼られてゆく。

■　邯鄲の夢

１０時、車で送ってもらって宿に入り、驚いた。日ごろあちこち泊りなれた貧乏宿とは別世界の高級旅館。翌朝、早朝に目がさめて散歩に出ると抜けるような青空に由布岳がそびえ、清流沿いに歩くと初老の男がハヤを釣っていた。魚影は濃いが男が振り下ろすうどんエサの針は、むなしく空を切るばかりだった。

朝食のあと迎えの車が来て、同じく東京へ戻るスタッフ２人が宿泊するもう１軒の旅館へ回った。２人は毎年、この映画祭へ招かれ、応募作品の下選びを依頼されている、業界のプロである。快晴。ゆるやかなスロープが続く由布岳の山麓を大分空港へ向かう車に揺られながら、私はふと、この２４時間が邯鄲の夢のような気がしてきた。

土橋に腰かけたトーク

新潟でも超満員だった「嗚呼　満蒙開拓団」

奥村　正雄

スクリーンの手前に狭くて低い小さなステージがある。映画が終わったあと１０分の休憩を挟んで１２時１５分から、このステージに２脚の椅子を並べ、そこに羽田監督と地元の開拓団研究者・高橋健男さんが腰掛けてトークが始まる予定だった。ところが朝早くから映画館の前に並んだ観客が定員をはるかに越え、ステージの足元まで地べたに坐りこんでいた。そのため予定された椅子は運び込まれず、トークの２人はステージの前面に腰掛け、まるで足をぶらつかせながらのようなムードで話し始める、という形に変わった。この苦肉の演出がよかった。二人はまるで田舎の川にかかる一本橋に腰掛け、はだしの足首を川のせせらぎになぶらせているような錯覚を覚えた。

「この映画館の前の通りを右へ少し行ったところに、実は戦争中、満蒙開拓団を送り出した『新潟満蒙開拓館』（昭和１４年竣工）があったんです」

高橋さんの解説は、あらかじめ地元の映画館関係者と打ち合わせするために２０数枚のレジメを用意したほど、念入りで地元のデータをベースにしたものだった。

佐渡から見守った羽田家の先祖

終わって、狭いロビーの奥で羽田さんが地元のマスコミのインタビューを受けたり、記念撮影に応じたり。午後２時過ぎ、ようやく解放されて羽田さんの口から出た第一声が「お腹すいた！」だった。私はまたしても腹立たしくなった。またしても、というのは前日夜にもまったく同じシーンに立ち会っていたからだ。前日の７月２４日夕方、新潟駅に着いた羽田さんと助監督の佐藤斗久枝さんが、そのまま地元の関係者帯同のもとテレビ局でマスコミ各社のインタビューを受け、宿のホテルに戻ったのは夜８時。実はこの時、ホテルのロビー前の店で私たち４人が羽田さんと会う手はずになっていた。４人はいずれも映画の舞台となっている中国・方正の日本人公墓を訪ねたことがある地元の人たちだ。羽田さんが宿に戻られたらお茶を飲みながら、その思い出を語り合おう、という約束になっていたのだ。６人が顔を合わせてすぐ、羽田さんが言ったのである。

「お腹すいた！」

この時間まで羽田さんを引き回しておきながら、「軽くお食事でも…」と言い出す者がひとりもいなかったのか、礼儀知らずめ！　それがまたしても、だったのだ。羽田さんに確かめると和食がいいと言う。私も新潟出身だが地元を離れて長く、おいしい店を知らない。結局映画館のスタッフのアドバイスで加島屋へタクシーを走らせた。私はとっくに昼食を済ませていたので２人を店内に入れ、私は近くの妹の家でお茶を飲んで２人が食べ終わって電話をかけてくるのを待った。店から出てきた羽田さんは、

「去年もおととしも、新潟空港からハルピンへ飛んだのに、新潟を素通りした。新潟の町を少し見たい」

と言う。３人はタクシーで信濃川河口から対岸の新潟港を眺めた。かつて満蒙開拓団を送り続けた新潟港には、北海道通いの大型フェリーが停泊していた。日本海沿いの道へ回る。海はベタ凪だ。６０年前なら「みやこ辺を　逃れ来たればねもころに　汐うち寄するふるさとの浜」（会津八一）なる情景もいまや一変、テトラポッドの無国籍海岸に化してしまっている。気持ちを救ってくれたのが佐渡の島影だ。小佐渡だけ見えていたのが、やがて大佐渡も薄紫色に見え始めた。そのとき羽田さんが独り言のように言った。

「司馬遼太郎さんの『街道をゆく』を読んでいたら、私の曽祖父の、その父の名前が出てたんです」

私は俄然、そのことに関心を抱き、後日、あらためて『街道をゆく』の「佐渡のみち」のページをめくってみた。街道筋の由緒ある旅館の壁に、その昔、この宿に泊った佐渡奉行や巡見使など高位の者の宿札が残っているのだ。中川飛騨守宿の隣に羽田龍助宿とある。

明治維新で時代が変わったとき羽田家は徳川に殉じて静岡に越した。そのお姫さまが１４０年を隔てて、佐渡のその遥か西の地で苦しんだ同胞の苦難を記録していま反響を呼んでいることになる。そんなことを考えながら私は新潟駅で二人と別れた。

トークを交わす羽田さんと高橋さん

対岸の新潟港を眺める羽田澄子さん、
右はコーディネーターを務めた奥村正雄

岩波ホール制作の映画プログラム「エキプ・ド・シネマ171」より転載

語り部としての責務

藤原作弥
FUJIWARA Sakuya

私事で恐縮ながら，私も満洲からの引揚者である．昭和20年8月9日，ソ連戦車軍団がソ満国境を越えて侵攻してきた際，満蒙草原の僻地，興安総省興安街（現・中国内モンゴル自治区ウランホト）に在住していた私たち一家は，辛くも現地を脱出し，南満洲の国境の町・安東に逃れ着いた．

そこで約1年半の難民生活を送り，昭和21年秋に日本に引き揚げてきたのだが，長じてジャーナリストになった私は，その満洲体験を『満洲　少国民の戦記』（新潮社）と題するノンフィクションに綴った．それは，祖国に帰る日を夢見ながら，敗戦国民の日本人同士，愛と希望をもって互いに助け合いながら国境の町で辛酸を乗り越えた記録である．

だが，その本を書き終えたころ，ガーンといきなり頭を殴りつけられたような衝撃を受けた．

私たち一家は無事，日本に帰還し，戦後の復興から高度成長を経て飽食の時代といわれるほどの物質文明を享受したが，同じソ満国境近くの興安街に在住していた日本人には，筆舌に尽し難い苦難を味わった人々が大勢いたことを，取材の過程で知ったのである．

私たち一家は昭和20年8月10日午後，最後の貨物列車に飛び乗り，ソ連戦車軍団の牙（キャタピラ）から逃れることができた．だが興安街東部地域に在住していた日本人約1200名は逃げ遅れ，8月14日，近くのラマ寺・葛根廟の近くでソ連戦車軍団から一斉射撃を受け，約800名が虐殺され約200名が自爆，服毒などで集団自決した．「葛根廟事件」といわれる大惨劇である．

実は同じころ，その近くでもう一つの悲劇が起こっていた．ウランホトの西方に入植していた「第13次興安東京開拓団」（東京荏原開拓団）の避難集団約800名の運命である．羽田澄子さんのドキュメンタリー映画「嗚呼 満蒙開拓団」に登場する飯白栄助さんもその一人である．

この日本人開拓団避難団を襲撃したのは中国人の匪賊集団．広大な麻畑の中で起こったその大惨事も，葛根廟事件と同じ阿鼻叫喚の地獄絵図だった．地名から「双明子事件」と呼ばれる．二日にわたる襲撃で，800名の団員中300名以上が殺戮された．今やこれまで——と青酸カリを仰いだり，互いに短刀で刺し合ったりした集団自殺の結果，生き残った人は約300名だった．

私がなぜ「葛根廟事件」や「双明子事件」を知っているかといえば，二つの事件とも私が住んでいた興安街在住者が遭遇した悲劇だったので，ノンフィクションにまとめるため，開拓団の生存者の話を聞き，3回にわたり同地を訪れ，取材・調査したからである．

私自身，現地脱出が一日遅れれば，どちらかの事件に巻き込まれていた可能性は十分ある．8歳の命を草原に落としていたかもしれない．残留孤児の運命を辿っていたかもしれない．これまで，ひとり生き残ったことに一種の後ろめたさを持って生きてきた．

映画監督・羽田澄子さんも私同様に満洲育ちの引揚者だが開拓団の人たちのような苦労は味わわなかった．しかし，羽田さんも私も共にたまたま運命の明暗の〈明〉の道を歩み，生き残った．ジャーナリストの私はペンで時代の証言をノンフィクションに綴り，羽田さんは映画作家としてドキュメンタリー・フィルム「嗚呼 満蒙開拓団」の形にまとめあげた．それが生き残った私たちの語り部としての責務と考えたからである．

映画の終りの字幕に羽田監督自身のナレーションがオーバーラップする．「…こうした犠牲の歴史の上に現在の平和が築かれました．満蒙開拓団で生き残った人々は言います．日本は，この平和を大切にしなければならない——と」．

（作家・元日銀副総裁）

岩波ホール制作の映画プログラム「エキプ・ド・シネマ171」より転載

中国で唯一存在する日本人公墓は何を語るのか

大類善啓
OHRUI Yoshihiro

1945年8月9日，ソ連軍の怒涛のような侵攻と，それに続く日本の敗戦は，旧満州に国策として入り込んだ開拓民たちを，一挙に奈落の底に突き落とした．すでにその時点，開拓団にいたほとんどの青年・壮年男子は，軍に召集されていた．残っていたのは老人と女，そして子供たちだった．人々は争うように安全な地を求めて逃げ惑い，難民，流浪の民と化していった．ソ連と国境を接する，現在の黒竜江省の奥地に入り込んでいた人々は，ひとまず方正を目指した．旧満州にいた日本人たちは，宝清という県と区別するために方正を「ほうまさ」と呼んでいる地だ．方正には関東軍がいる，軍の補給基地もある．100キロも200キロも歩く逃避行の中，時には暴徒の襲撃に遭い，国に殉じて集団自決した開拓団もあり，子供を捨てざるを得ないような地獄のような体験を経て，ようやく方正にたどり着いた．しかし，関東軍は撤退した後だった．

中国東北部の冬は厳しい．人々は零下40度という酷寒にさらされた．餓えと栄養失調，発疹チフスが人々を襲い，方正の地に息絶えた．1946年の春，夥しい数の婦女子の凍りついた遺体がとけ出した．ハルピンから東へ約180キロの地にある方正にはいち早く，方正県人民政府が成立していた．県政府は直ちに遺体の収容に乗り出し，三日三晩石油をかけて焼いた．その数およそ4500体といわれている．

新中国の大躍進政策失敗による食糧危機は，多くの餓死者を生んだ．1963年の春，荒地を耕して食糧を調達していいという政府の命令に従い，方正の砲台山に入った残留婦人が累々たる白骨の山を見つけた．これこそ，1945年の冬から翌年にかけ無念の思いをいだき死んでいった同胞たちの骨だ．婦人はなんとしても骨を拾い埋葬したいと思った．その願いは，県政府から省政府を経て中央政府へ，最終的には周恩来総理のもとまでいった．

「祖国を見ることなく逝った開拓民たちも日本軍国主義の犠牲者である」．国際主義的な精神に富んでいた周総理ら当時の中国政府指導部は，日本の侵略に対する恨みがまだ衰えていない1963年，日中が国交を回復する9年前に日本人公墓を建立してくれたのだ．

ハルピン市の朽ち果てた外人墓地の中から，一番大きく一番綺麗なイタリア製の花崗岩を探し出し，「方正地区日本人公墓」と碑銘を刻んだ高さ3.3ｍの石碑は，2日がかりでハルピンから方正県まで運ばれた．まだ貧しい中国だったが，大金を投じて建立したのだ．

周知のように中国政府は，日本に対する賠償金を放棄した．「周総理が一番頭を悩ましたのは，その決意をした後も，中国で最後まで残された多くの残留婦人を援助し支援した金額の賠償だけは譲れず，日本に請求するようにとの声が官民一同，とりわけ人民の側から強かった」ことだ．今まで誰にも話さないことであるがと前置きして，この秘話を私たちに話してくれたのは周恩来総理と親しかった故・岡崎嘉平太氏である．

1966年から荒れ狂った“文化大革命”の時，紅衛兵たちは，この日本人公墓を破壊しようとした．その時，黒竜江省政府は「これは日本軍の墓ではない．日本の庶民の墓である．彼らに罪はない」，と紅衛兵の要求を断固として退けた．

隣接する国同士がナショナリズムを高揚させるほど不毛なことはない．日本人公墓は，忘れがちな国際主義的な精神を呼び覚ます存在といえるだろう．肥沃な土地を中国の農民から奪い，五族協和，王道楽土と称した“満洲国”は，日本の敗戦と同時に瞬時にして崩壊した．侵略された国が侵略者の人々の墓を建立し，墓守りを置き，維持管理を長年しているのだ．2008年1月，北京に駐在する宮本雄二大使は公墓に参拝し，県政府に謝辞を述べた．しかし未だ，日本の最高責任者からは公墓に関する言葉はない．

（方正友好交流の会　事務局長）

朝日新聞　09年6月2日（火）　夕刊

満州開拓団の悲劇伝えたい

羽田澄子監督が記録映画

生き証人二十数人 訪ねて歩く

1931年の満州事変以降、国策で中国・東北地方（旧満州）に送り込まれた開拓団の悲劇を真正面からとらえた記録映画「嗚呼（ああ） 満蒙開拓団」が完成した。約27万人が送り込まれた開拓団は、ソ連軍の侵攻と敗戦の混乱で、約8万人が死亡、多くの中国残留日本人孤児らも生み出した。戦後60年余。ていねいに取材して歩いた映像だ。（編集委員・大久保真紀）

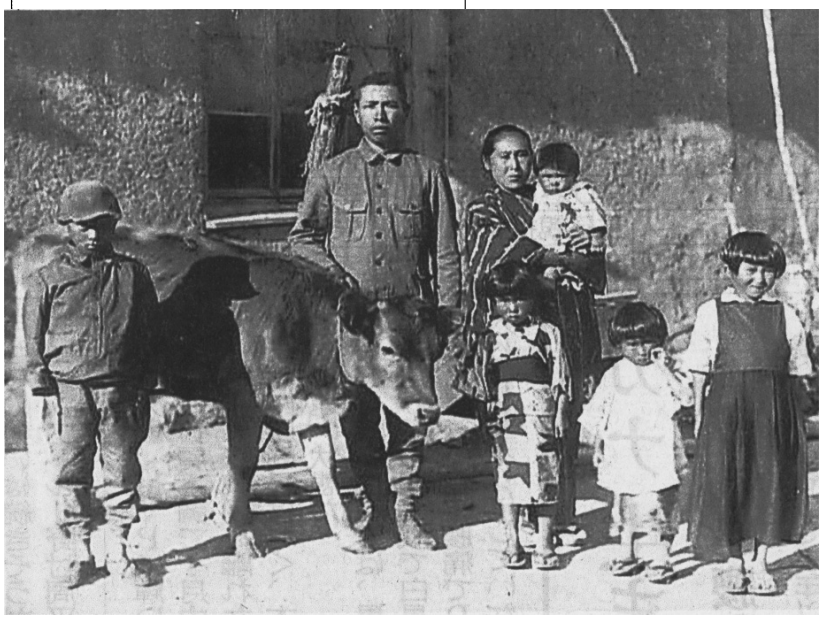
羽田澄子監督

監督は、旧満州・大連生まれの羽田澄子さん(83)。自ら敗戦を大連で迎え、引き揚げ体験がある。

きっかけは、600人を超える中国残留日本人孤児たちが02年に国に賠償を求める集団訴訟を起こしたことだ。同じ旧満州にいたのに開拓団の実情を知らなかった。「撮っておかなくては」と裁判のたびにカメラを回し始めた。

07年、黒竜江省方正県に中国政府が日本人犠牲者のために建立した「日本人公墓」があることを知り、一気に映画制作へと進む。墓参ツアーに同行、参加した元開拓団員らの話を順番に聞いた。日本に戻っても彼らを訪ねては、取材を続け、二十数人にインタビューした。

映画でも紹介された、ある開拓団員の入植当時の家族写真＝自由工房提供



役場で勧誘されて敗戦の年の5月末に家族で旧満州に入植したこと、「乗せて」と頼む開拓団の人たちを振り払って行ってしまった軍のトラックのこと、逃避行の途中で足手まといになるという理由で5歳の妹が手にかけられたこと――。歴史の生き証人たちのインタビューの様子を映像に収め、自身の思いをナレーションで重ねた。

約100本の映画を撮ってきたベテラン監督。だが、「今回は非常に大きな問題で、最初はどう作っていいかわからなかった」と明かす。聞くのは重い話ばかり。「映画作りよりも、それを受け止めるほうがしんどかった」

羽田さんは2時間の映画の最後にこう語りかける。「どうしてこのようなことが起こったのか、その責任はどこにあるのか」

6月13日から、岩波ホール（東京・神保町）で公開される。一般1800円。また、20を超える全国各地の映画館でも7～9月に上映予定という。

読売新聞　09年6月12日（金）　朝刊

中国細見

「鳴呼　満蒙開拓団」

編集委員　藤野 彰

怨念超えた日本人追悼

「『満蒙開拓団』って何だか知っている？」

最近、ある大学で日中関係について講義した折、学生に質問してみた。300人の大教室はしいんとしたまま。ぽかんとした学生たちの顔を眺めつつ、いささか脱力感を覚えた。

そんなことを聞いたのは少し前に試写会でドキュメンタリー映画「鳴呼　満蒙開拓団」を見たからだ。日本は1932年、占領下の中国東北部に「満州国」を建国。その後、国策として大量の農業移民を送り込んだ。映画は彼らの悲惨な運命を、生存者の証言などで綿密に描いた作品だ。

後日、監督の記録映画作家、羽田澄子さん(83)に話を聞いたら、「50代でも満蒙開拓団を知らない人がいるので驚いた」という。平成生まれの学生がぴんとこないのも仕方ないのか。仄聞するに、昨今は日中戦争があったことすら知らない若者もいるそうだから。

とはいえ、満蒙開拓団の歴史は知らないでは済まされない。開拓移民約27万人のうち約8万人がソ連軍の侵攻や敗戦の混乱の中で非業の死を遂げた。中国残留孤児の悲劇はなお現在に尾を引いている。

羽田さんは大連生まれ。戦後の48年、日本に引き揚げた。かねて残留孤児問題に強い関心を寄せていたが、黒竜江省方正県に中国政府建立の日本人公墓（共同墓地）があることを知り、数年前に現地を訪れた。

方正では開拓移民ら約4500人が飢えや病気で死んだという。公墓は63年、周恩来首相が「開拓移民も日本軍国主義の犠牲者」との考えから建立を許した。今も中国側が手厚く管理している。「被害者の中国がなぜ日本人の墓を」。羽田さんは方正を舞台に開拓団の歴史を掘り起こす映画を撮ることを決意した。

「とにかくバタバタと人が死んだ。死体を埋める穴を掘った」

「毎日、死体を運んだ。カラスが飛んでくる。中国人が死人の服をはがす。死体を焼く仕事もした」

作品には生き地獄を体験した開拓団関係者の生々しい証言が続々と登場する。当事者だからこそ語りうる事実の重みが胸に響く。だが、単に悲惨な記憶を手繰りだした作品ではない。怨念を超えた日本人追悼が意味するものは何か。日中関係の本来あるべき姿とは。映像は多くの問題を観客に投げかける。

証人の大半は古希を過ぎた老人だ。関係者の中にはすでに鬼籍に入った人も少なくない。羽田さんは「今がこの映画を撮る最後のチャンスだった」と語る。

「満州国」崩壊の夏からまもなく64年。闇に消える寸前の歴史を刻印した作品は13日から東京・岩波ホールで公開される。若い人こそ見てほしい――大陸を生まれ故郷とする羽田さんの熱い願いだ。

毎日新聞　2009年6月12日（金）付夕刊

嗚呼 満蒙開拓団

日本人の「その後」たどる

羽田澄子監督のドキュメンタリーは、観客の世界を変える。世に知られない事実を掘り出し、あるいは社会的事象に新たな視点を提供することによって。

この新作では、第二次世界大戦中に中国大陸に送り込まれた日本人開拓団のその後をたどる。歴史を振り返るだけでなく、彼らの悲劇は今に通じると訴える。

羽田監督は1926年に旧満州（現中国東北部）で生まれ、48年に日本へ引き揚げた。そんな経歴を持つ監督は、旧満州で命を落とした日本人開拓民のために中国人が建てた「方正地区日本人公墓」の存在を知る。引き揚げの際に抱いた「全員が日本に帰れるのか」という疑問を思い起こし、取材を始める。

綿密な取材と的確な編集で、過不足なく要点を押さえ、当事者の感情を焼き付けていく。元開拓民の「逃避行の途中、子供を置き去りにした」「避難所で死んだ日本人の遺体が凍土に放置された」といった証言からうかがえるのは、〝生き地獄〟だ。

羽田作品の根底を貫くのは、弱者の側に立った視点と、権力の横暴への憤りだ。今回はそれに加えて、「自分もこの人たちのうちの一人だったかもしれない」という強い思いもある。元開拓民の心の傷を明らかにする一方で、国民を切り捨てる国家の非情さは今も変わらないと示す。といって、大上段に振りかぶることなく、語り口はあくまでも落ち着いていて温かい。だからこそ、強い説得力がある。

ここ数年、ドキュメンタリー映画は機材の普及などで製作しやすくなり、公開本数も飛躍的に増えた。しかし、〝私〟を素材にして個人的なものにとどまったり、目の前の事実を丸投げしたような作品が多い。問題の背後を見通す洞察に欠け、社会的な問題を提起する心意気が薄いのではないか。

本作も出発点は〝私〟だが、その視点は普遍にいたる。羽田監督は80歳を超えて、なお探究心と情熱を失わないのだ。若々しくて強靱な精神には脱帽するほかない。2時間。岩波ホール。（勝）

もう一言　開拓団のその後や、方正地区日本人公墓を淡々と映し出す。自分の知らなかった事実に見入った。冷静でありながらも対象に突進する羽田監督の執念が実を結んだ逸品。（鈴）

社団法人日中友好協会機関紙「日本と中国」09年6月15日付掲載

記録映画

『嗚呼 満蒙開拓団』は問いかける

なぜ、この悲劇は起きたのか

「行け満洲へ　拓け満洲を」

「お国のため」という〝美名〟のもと、旧満洲、内蒙古に移民として送り込まれた「満蒙開拓団」は約27万人。そのうちの8万数千人が、ソ連参戦、日本の敗戦による逃避行のなかで、帰国できずに亡くなった。羽田澄子監督が「つくらなければならなかった運命をもった映画」と語る『嗚呼 満蒙開拓団』が全国上映に先駆けて6月13日から東京・神保町の岩波ホールでロードショー公開される。

映画は羽田澄子監督のナレーションですすめられる。

「満蒙開拓団の死者のために、中国人が造ってくれたお墓が方正にあることを知りました。日本軍の中国に対する暴行…（その）暴行を受けた中国の人が日本人のお墓を造ってくれたということは、どういうことなのでしょう」

「方正地区日本人公墓」の墓参をする人々。映画のシーンから

「方正地区日本人公墓」とは

中国・黒竜江省ハルビン市の方正県にある日本人入植者約5千人が眠る共同墓地。1945年8月、関東軍の撤退とソ連軍の侵攻で、旧満洲に入植していた日本人の悲惨な逃避行が始まる。「方正県に軍の食糧庫がある」というわさで、入植者は方正県に集まった。だが、食べ物はなく、冬を迎え寒さと飢えで5千人に近い死者が出たが、遺骨は放置されたままだった。

63年春、開墾していた残留婦人の松田ちゑさん（91年に帰国）が多くの白骨を見つけ、共同墓地建設を願い出て、方正県人民政府の手で建設された。

カメラが黒竜江省ハルビン市の方正県に入り、「方正地区日本人公墓」に花をたむける元開拓団員たちの姿を映し出す。両親に連れられて旧満洲の奥ふかくに入植。ソ連の参戦、日本の敗戦がもたらした悲惨な逃避行のなかで失われていく多くの命。体験者の証言にナレーションが重なり、映画はどのようにして日本人公墓が造られたのかという核心に迫っていく。

逃避行の果てにたどり着いた方正で、飢えと寒さに倒れて逝った開拓民の血と涙が浸み込んだ大地。5千人近い遺体の多くは女性だったのだ。公墓を造り、文革中も護ったのは誰だったのか。

映画は最後、方正を14年ぶりに訪れる丸沢恒好さんの墓参の旅を追う。長野県泰阜村から一家をあげて入植したとき、丸沢さんは10歳だった。父は敗戦の1カ月前に現地召集され、母は3人の子どもを救うために中国人と再婚、帰国したのは27年後のことだった。

泰阜村に建つ満蒙開拓団の慰霊碑。開拓移民1144人のうち郷里に帰れずになくなった638人の名前が刻まれている。

映画はこうして誕生した

『嗚呼 満蒙開拓団』の映画を演出した羽田澄子さんは、「中国残留日本人孤児」の国家賠償請求訴訟の裁判を見守っている間に、方正地区日本人公墓のことを偶然知った。

羽田さんが方正の公墓のことを知るきっかけになったのは「方正友好交流の会」が発行している会報『星火方正～燎原の火は方正から～』である。会報は「日本人に公墓の存在を知らせたい」と大類善啓氏（日中科学技術文化センター）、奥村正雄氏（フリージャーナリスト）らが2005年から発行している。

羽田さんが会報を目にしたのは07年3月ごろ。方正友好交流の会では同年8月に方正への墓参の旅を計画していた。羽田さんは公墓のことを知り、映画撮影のために同行したいと申し出た。墓参団に羽田さんのほか助監督、カメラマンらが同行、8月22日から24日までロケを行った。

現地では墓参や公墓周辺を撮影後、残留孤児を育てた養父母らにインタビュー。その養父母の一人が育てた孤児が愛知県にいることも分かった。日本に戻ってから、羽田さんらは方正県にいて日本に帰国することができた人たちを追い、証言をカメラに収めた。スタッフの2度目の訪中は08年5月。羽田さんを含め6人が墓参団に加わった。長野県泰阜村開拓団で入植した丸沢恒好さんも参加した。

こうして、積み上げられた証言がこの映画をつくり上げた。

この映画の全国での上映予定

『嗚呼 満蒙開拓団』は6月13日から東京・岩波ホールで、その後全国各地で上映される。上映初日が決まっているのは次の各劇場。上映初日、劇場名の順。自主上映会などの問合せは☎03-3463-7543　自由工房へ。

【7月25日】◇新潟・市民映画館シネウインド◇松本 CINEMA SELECT
【8月8日】◇シアターキノ（札幌市）◇仙台フォーラム◇シネモンド（金沢市）◇シネテリエ天神（福岡市）
【8月15日】◇名古屋シネマテーク
【8月22日】◇横川シネマ（広島市）
【8月29日】シネマe_ra（浜松市）

上映は決まっているが初日未定の劇場。

◇シネマアイリス（函館市）◇八戸フォーラム◇盛岡フォーラム◇山形フォーラム◇福島フォーラム◇シネマ・ジャック&ベティ（横浜市）◇川崎市アートセンター◇深谷シネマ◇シネマパークたかさき◇第七藝術劇場（大阪市）◇京都みなみ会館◇滋賀会館シネマホール◇シネマ・クレール丸の内（岡山市）◇桜坂劇場（那覇市）

■120分・カラー・スタンダード／自由工房2008年作品／岩波ホール特別鑑賞券1500円／当日一般1800円　問合せ・岩波ホール☎03-3262-5252

一般公開を前に

羽田 澄子

はねだ・すみこ
『平塚らいてうの生涯』はじめ数々の名作で知られる記録映画監督。大連生まれ。今年83歳

私は大連生まれで、戦後3年たって日本に引き揚げ、ドキュメンタリー映画の製作に関わることになりましたが、当時、女性で映画づくりに携わる者は本当に少なく、仕事に一所懸命で、わき目もふらずやってきました。

それでも、もともと「満洲」生まれですから、「残留孤児」問題には潜在的な関心があったのです。

ハルビン市の方正県に日本人公墓があり、そして公墓建立には周恩来総理の判断があったことを知ってからは、これは何とかして映像化しなければと、構想もないままにカメラを回し始めたのが正直なところです。

つくっていくうちに道が開け、私にとって生きている間にいつかはつくらなければならなかった運命をもった映画になりました。

無我夢中でつくりましたので、見てもらえるだろうか、面白い映画に仕上がっているだろうかといった計算はまったくしていません。ただ、映像のもつ大きな意義は、おのずから見てくださるかたがたに分かっていただけると信じています。

いまの若い人は、自分の国の近現代に何があったのかを知らずにのんきな顔をしてすませていますが、それですむでしょうか。

映画が、いったい日本はどんな近現代史をへて今日があるのか、中国や韓国でどのようなことをしてきたのかを知るきっかけになってほしい。日中友好協会の会員の皆様にぜひ見ていただけたらと願っております。（談）

朝日新聞　09年6月19日（金）夕刊

「嗚呼　満蒙開拓団」

国家の無責任の極み

中国・ハルビンから170キロの町方正は、かつて関東軍の補給基地であった。この地に日本人公墓が建立されたのは63年。開拓民の生き残りで中国人と再婚した松田ちえさんが、多くの日本人遺骨を発見したのが始まりだ。

周恩来は「開拓民は軍国主義者の犠牲者」と彼女の願いを聞き入れ、墓を建立。以後、黒竜江省の行政機関が墓を守る。ここに作品の核がある。

満州に行けば、広大な土地が手に入る。匪賊の襲撃はあるにしても、関東軍が守ってくれる。苦しい小作農に呼び掛けたのは国であった。人口増加、飢饉、戦略的意図と、理由は多々あったが、〈行け満州へ〉の謳い文句の下、日本人は夢を抱いて入植した。だが中国農民の土地を買い叩いたとは、ほとんどの人は知らない。移民数27万人。現地からの出征者4万7千人。

45年8月9日。ソ連軍が一気に国境を突破してくる。いち早く、将校、幹部とその家族たちは逃亡した。男を兵隊に取られ、女、子供、老人たちが、遠い開拓地から方正に辿り着いた時、関東軍は、もぬけの殻だった。年寄りは捨てろと言われ、泣く子を殺し、集団自決していく逃避行は、死者8万人に達した。

記録映画監督、羽田澄子は中国残留孤児の裁判問題に端を発し、公墓の存在を知る。満蒙開拓団の歴史と政治の背景、敗戦後の過酷な運命に晒されたさまざまな人生を取材し、彼女の数多い仕事の中でも重い位置を持つ。引き揚げ者の体験を持つからこその冷静で熱い視線は、平和のありがたさ、その陰の犠牲の酷さについて、問いかける。

弱者を見殺しにし、国は責任を持たない。今もなお続く日本の根源的体質が、はっきりと浮かび出る。

（秦　早穂子・評論家）

東京・神保町の岩波ホールで上映中。各地で順次公開。

東京新聞　09年6月23日（火）夕刊

「嗚呼　満蒙開拓団」

27万人の悲劇

満州生まれ　羽田監督が証言つづる

「嗚呼（ああ）　満蒙（まんもう）開拓団」は、記録映画を手掛けてきた羽田澄子監督＝写真＝のドキュメンタリー。一九三一年の満州事変後、日本政府の国策で中国大陸の旧満州、内モンゴルに約二十七万人の開拓団員が入植させられたといわれるが、その悲劇を浮き彫りにする。

中国東北地区の方正（ほうまさ）県にある日本人公墓。多くの開拓民がソ連軍の満州進駐、日本の敗戦で避難し、この地で亡くなった。残留日本人女性の「遺骨を墓に」との願いを周恩来首相（当時）が聞き入れ建てられた。監督は「『日本人民も開拓民も日本軍国主義の被害者』という周恩来首相の判断は重要」と語る。

監督は一九二六年、旧満州・大連生まれ。中国残留孤児国家賠償訴訟などを機に当時の満州に関心を強め、公墓を訪ねるツアーに参加。映画製作を決意し、体験者に話を聞いていく。

その証言は衝撃的だ。開拓民を見捨てて敗走する関東軍、そしてソ連軍の襲撃と現地人の報復。その中で逃げるのに足手まといとなる子供たちは次々に「処分」される。

当時八歳だった女性は「山の中を逃げる途中、泣くと見つかるからと小さい子供たちが犠牲になった。五歳の妹は『お芋が食べたい』と言っている間に連れていかれた」と証言する。

当時の日本政府が満州を「楽園」であるかのごとく宣伝し、多くの国民を送り込んだが最後にはどうしたかがよく分かる。

敗戦までに送り込まれた開拓民は約二十七万人。そのうち約八万人が帰国できずに亡くなっているという。（小田克也）

※岩波ホールで公開中。

ツアーに参加し、方正県の日本人公墓を訪ねる人たち

しんぶん　赤　旗　2009年6月24日（水）付　掲載記事

国家による「大量棄民」

現代的視点から問う

大日方悦夫

かつて日本が「満洲」と呼んだ中国東北地方。この地に刻まれた日本人開拓団の歴史。それは、戦後60年以上たった現在でも、いや現在だからこそ、もう一度問い直すべき問題である。映画「鳴呼　満蒙開拓団」は、「満洲移民とは何か」を現代的視点から問う意欲作である。

体験者の証言　実相に迫って

映画は、黒龍江省の省都ハルビン郊外、方正県方正鎮の「方正地区日本人公墓」を訪ねる映画監督羽田澄子の旅から始まる。羽田は、戦前「満洲」大連に生まれ、1948年（昭和23年）に引き揚げた経歴を持つ。

「日本人公墓」は、63年（昭和38年）に建立された。中国東北地方唯一の日本人開拓団慰霊碑である。敗戦直前、ソ連の侵攻によって開拓地を追われた開拓団員の女性・子ども・老人たちは、関東軍の駐屯地が置かれていた方正に避難した。零下30度の厳冬下、寒さ・飢え・病気などで死亡した日本人は、4500名を超えたという。野地に遺棄された遺骨を収集し、墓碑建立を請願したのは、中国残留婦人の松田ちゑだった。松田の努力が実って黒龍江省・方正県人民政府によって建てられた公墓は、文化大革命期にも中国人によって護られたという。

羽田は、公墓に墓参する「残留孤児」たちに同行、多くの証言に耳を傾ける。約2時間に及ぶドキュメンタリーは、見るものを片時も離さない。次々に登場する体験者の証言は、「満蒙開拓」の実相に迫っていく。

「砂上の楼閣」崩壊後の惨劇

「満洲」への日本人農業移民が始まったのは32年（昭和7年）からだ。前年の「満洲事変」によって沃野の大地を確保した日本軍は、傀儡国家「満洲国」をつくり、そこに日本人移民を送り込んだ。「満蒙開拓」は、「国策移民」といわれるように、疲弊した農村の過剰人口対策と「満洲国」防衛、対ソ防備など国家の政治・軍事的役割を担わされた移民であった。農村の適正規模を定めて、それを超える過剰農家を大量送出する分村（分郷）移民も強力にすすめられた。国民の移民熱を煽って進められた「満蒙開拓」。終戦までに海を渡った日本人は、27万人余に上る。

しかし、大規模移民の実態は、中国人の土地を奪い、屈服させた上になりたっていた。そのため45年（昭和20年）8月、「満洲国」という「砂上の楼閣」が崩壊したときに起こる惨劇は、ある意味では必然の結果だったといえる。死亡・行方不明者8万数千人。移民の3人に1人の割合だ。

加えて45年春、開拓団員が現地応召される。それは「国体護持」のための「本土決戦」に備えて帰国した関東軍主力部隊の補充だった。男性の少ない開拓団の逃避行が、いかに苛酷だったかは、幾多の証言が指摘している。

平和を大切に　重い問いかけ

このように「満洲開拓」の核心は、国家による「大量棄民」にある。そして中国「残留婦人」、「残留孤児」問題と、「棄民」は現代に続く。

国策に利用され棄てられた事実、被害者は同時に加害者という事実、そして「かわいそうでどうしようもなかった」と孤児を助け育てた中国人養父母の民族を超えた人と人のつながり。映画は、数々の証言を積み重ねながら、今、私たちが考えなければいけないことを語りかける。やはり「鳴呼　満蒙開拓団」は、「見なければならない」映画なのだと思う。

映画は、元開拓団員の「日本は、この平和を大切にしなければ…」という問いかけで終わる。この意味は重い。

（おびなた・えつお　現代史研究者）

「鳴呼　満蒙開拓団」から。東京・岩波ホールで上映中、順次各地で

文化　学問

記録映画「鳴呼　満蒙開拓団」

朝日新聞 09 年 7 月 30 日付朝刊

第3種郵便物認可

ザ・コラム The column

ポリティカにっぽん

早野 透（本社コラムニスト）

変えちゃいけないものもある

政権選択の夏

また、戦争の記憶がよみがえる夏が来た。あわただしく1年をすごしていても、夏がくれば、戦争のことを思い出す。

戦後、旧満州から引き揚げてきた羽田澄子さんがつくった映画「鳴呼 満蒙開拓団」を見た。「満州国」建設の夢に踊らされた農民の悲劇を、「いつかは作らなければならない。いまラストチャンス」と羽田さんが心をこめて撮ったドキュメンタリーである。

戦前、冷害飢饉、繭の暴落で極貧におちた農民に、政府は「行け満州へ 拓け満州を」とあおりたてた。だが、敗戦、ソ連兵の侵攻で、開拓農民はあわただしく逃げなければならなかった。

軍人の家族はいちはやく列車で逃げた。取り残されて歩き疲れて死んでいく老人、殺される赤ちゃん、水とビスケットを持たせて野原に置き去りにされる男の子。中国人に預けられた残留孤児、身を寄せた残留婦人。満州に果てたこれら農民もまた「日本軍国主義の犠牲者」として「日本人公墓」をつくってくれた周恩来。

羽田さんが訪ね歩いて聞いた人々は、いま日本の街や村ですぐ隣に生きている人々である。ああ、国策の誤りによって、こんな苦しみを胸に秘めて戦後を生き抜いたんだなと思うと、私は、「政治」というものの責任の重さを改めて噛みしめるのである。

敗戦から65年目、日本は「政権選択」をかけた天下分け目の夏である。政権政党である自民党に、かくも逆風が吹いている選挙はかつてない。衆院解散か麻生おろしか、自民党のゴタゴタにようやく決着をつけた21日の両院議員懇談会で最後に発言した古賀誠氏の発言が耳に残った。

「国を守るには平和でなければならない。あの愚かな戦争で、250万の命を失い、ヒロシマナガサキの犠牲を生んだ。戦後の平和を守ってきたのは自民党だ。勇気と自信をもってがんばろう」

古賀氏は、東国原英夫宮崎県知事かつぎだしの失敗でミソをつけた。統治能力も落ちた自民党にあって、しかし、誇るべきはともかくも「平和」を維持してきたということかもしれない。

心配なのは、民主党である。あんなに反対したインド洋への給油の自衛隊派遣を、「政権を取った翌日に、帰ってこいなんてできるわけがない」と、つまりは容認とのことである。福田康夫首相は民主党の抵抗でいったん自衛隊を撤収する羽目になって、もうあんな「ねじれ」の苦労はしたくないと辞任した。野党だったら反対、政権を取ったら容認という態度は信用できようか、「現実路線」など言いくるめないでほしい。

非核三原則はやはりいかさまだったらしい、アメリカ艦船の核持ち込みをこっそり認める密約が国民への背信であることはいうまでもない。だが、鳩山由紀夫民主党代表が口走ったように、じゃ、これからは密約でなく、核持ち込みには「現実的対応」で、となれば非核三原則は崩れることになる。

この「現実論」というやつが曲者だ。目の前の現実に対応しているうちに戦争に突っ込んでしまったのが大日本帝国の歴史である。またそれを繰り返すとまでは言わないが、福島瑞穂社民党党首が「自民はだめ、民主は危ない」と心配するのもわかる。

あれは16年前の夏、1993年の総選挙で、宮沢喜一首相率いる自民党政権は過半数割れ、下野して、細川護熙首相の「非自民」連立政権ができた。あのとき外交安保政策はどうだったろう。取材ファイルをひっくり返してみる。連立を組む8党会派の「合意事項」というペーパーがでてくる。全5項目の第2項にこうある。

「憲法の理念及び精神を尊重し、外交防衛等、国の基本施策について、これまでの政策を継承しつつ……」とある。そうだった、自衛隊違憲、日米安保反対の社会党も「政策を継承」の言葉をのんで政権に加わった。政権交代の波に乗って、自らのアイデンティティーをないがしろにしたところから、社会党は壊れたのだった。

取材ファイルから、退陣を前にした宮沢首相がオフレコで番記者に語ったメモがみつかった。宮沢氏も亡くなったいま、もう公表してもいいだろう。

「みなさん、これだけはお願いしたい。いいですか、憲法は変えない方がいい。守ってください。二度と戦争はしちゃいけないんです。僕は憲法ができたいきさつは知っているんです。あれは翻訳だ。日本語じゃない。それでも憲法は変えちゃいかんのです」

「私と後藤田（正晴）さんは、憲法を変えちゃいけないという最後のジェネレーションなんです。占領は屈辱ですよ。ドイツ人は忘れっぽいからまた（国際貢献の名で）戦争をしようとしている。小沢なにがしってのは、僕にとって何でもないんです。でも、憲法を変えるといったら、それだけは断固許さない」

政権交代はあっていい、だが、変えてはいけないものがある、「平和」という原理は壊さないでほしい。宮沢氏がほろ酔いで語った言葉は、戦後保守の知性の究極の思いだったかもしれない。

公明新聞 2009 年 6 月 19 日付

映画

羽田澄子監督

鳴呼 満蒙開拓団

現地撮影による満蒙開拓団のクロニクル

『薄墨の桜』や『痴呆性老人の世界』など代表作を想い浮かべると、記録映画監督の羽田澄子にはなにがしかスタティックなイメージが付きまとう。だがしかしいま、東京・神田神保町の岩波ホールで公開中の『鳴呼 満蒙開拓団』＝写真＝は、かつて「満州国」と呼ばれた中国東北部へ長駆撮影して、いわば知られざる昭和史の深部へ肉薄したダイナミックな記録だ。

――日中戦争下の一九三八年、時の国策に従って「満蒙開拓」の美名のもと、十七歳前後の日本農村の若者たちが「青年義勇隊」として、「満州」各地へと送り出される。この映画の舞台となる方正も当時の「ソ満」国境に近く、現地農民たちを追放したあとの広大な土地に集団入植したのは長野県出身者たちだ。

太平洋戦争末期に参戦したソ連軍の進撃によって、わが入植農民たちは大都市ハルピンを目指して、命がけの逃避行を始める。当時の子供でなお健在の体験者たちがこもごも語る苦難の道程は、なぜ「残留孤児」が発生したかを口ごもりつつ証言して、無惨なクロニクルとなる。無敵のはずの「関東軍」は南方動員で全滅しており、頼るは自分の足のみ！

故・周恩来総理の「憎むべきは軍国主義で日本の人民ではない」との遺訓によって、いまこの地には堂々たる「日本人公墓」が建ち、友好のシンボルとなっている。だがしかし台湾からの引き揚げ者である筆者としては、「日本人民」の戦争責任についても黙考せざるをえなかったと、正直に書き留めておこう。

（映画評論家・松田政男）

東京・岩波ホール（☎03・3262・5252）で上映中。

（第3種郵便物認可）

文化 学問

映画時評

戦争の真実と善意の危うさ

「嗚呼　満蒙開拓団」と「真夏のオリオン」

山田和夫

羽田澄子監督（1926～）は旧満州（中国東北部）に生まれ、48年に引き揚げてきた。戦後女性映画人の先駆者として、多くのすぐれた記録映画を制作したが、彼女は旧満州の内陸部で起きていたことをほとんど知らなかった。2002年、中国残留孤児の国家賠償請求訴訟がはじまり、「満蒙開拓団」の悲劇に大きな関心をもち、長編記録映画「嗚呼　満蒙開拓団」をつくった。

国民の命と財産　軍隊は守らない

日本は31年の「満州事変」で中国東北部全土を占領。32年にはカイライ国家「満州国」をつくって植民地化。38年に冷害と不況に苦しむ農民たちを「満州へ行けば肥沃な大地が待っている」の美辞麗句で「満蒙開拓義勇団」に組織、大陸に送り込む。その土地は中国の農民から取り上げたもの。日本の農民たちは荒地同然の大地で想像を絶する酷寒に耐え、困苦欠乏の開拓生活に悪戦苦闘した。そして45年8月、敗戦直前にソ連軍が侵攻、日本軍はなだれを打って敗走、「開拓義勇団」の民間人は飢えと寒さ、死の脅威のなかに放置された。

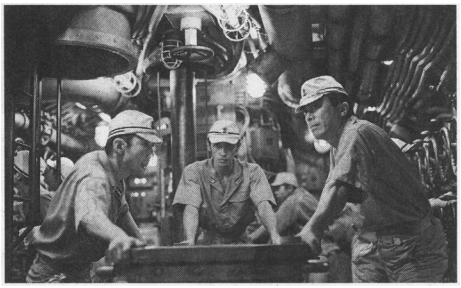
当時の政府が敗戦直前まで「開拓団」を現地に送り込み、戦闘がはじまると国民の生命と財産を守るはずの軍と政府の上層部がいち早く撤退列車に乗り込んで、逃げ出し、生き残った人々の血を吐く証言は、トラックにすがりついて「乗せてくれ」とたのむ民間人を振り切って出発したと羽田監督は語る。それまでに大陸に送り込まれた開拓団員は合計27万人、うち8万人以上が、こうして異郷の地に果てて亡くなっている。私は羽田監督が長時間にわたってあつめた証言、現地まで長距離を旅した取材による映像を見て、何よりも「軍隊は決して国民の生命と財産を守らなかった」という恐ろしい真実に胸をつかれた。

数多くの悲惨な戦争の記憶から、この映画はとくに忘れてはならない、この「真実」を突きつけたのである。

紳士的な戦闘と希薄な緊張感と

しかし同じ09年、同じ時代の「戦争」を取りあげてもそうならない日本映画にも出合う。公開中の戦争映画「真夏のオリオン」（監修・脚色＝福井晴敏、監督＝篠原哲雄）である。かつてのアメリカ映画「眼下の敵」を連想させる駆逐艦VS潜水艦の一騎打ちを中心とする潜水艦戦のスペクタクル、太平洋戦争末期、沖縄水域で対決した米駆逐艦と日本潜水艦の対決を描く。特攻兵器の人間魚雷回天を搭載しながら、「死ぬためでなく生きるために戦う」として、回天を出さない。倉本艦長の指揮ぶりと人間性がドラマの中心に座る。敵護送船団を雷撃しても、脱出する乗組員たちを攻撃しない。

「嗚呼　満蒙開拓団」から＝東京・岩波ホールで上映中



©2009「真夏のオリオン」パートナーズ＝全国東宝系でロードショー

一方、米艦の艦長も日本潜水艦を追い詰めながら、その善戦ぶりに好意を抱き、最後に傷ついた潜水艦が浮上しても、攻撃をしない。「こういう戦争であってほしい」と言わんばかりの、人間的で紳士的な戦闘シーンであの戦争でこういう場面がなかったとは言えないが、そのために視野の外に置かれた「真実」が気になる。この「真夏のオリオン」は発達した特撮技術を駆使した戦争スペクタクルが売り物のエンターテインメントだが、登場人物たちの言動に「こうあってほしい」願望の一端がのぞくことは否定しない。そして倉本艦長を演じるいま人気の若手俳優玉木宏は、雑誌のインタビューで語る。「倉本のような人たちが実際に大勢いたからこそ、今の日本があるんだ」「明るい未来が見える戦争映画だ」と（『日本映画magazine』vol・09）。無心と善意そのままの発言だが、そのような認識につきまとう危うさだけは、一言しないわけにはいかない。

潜水艦戦はいろいろな戦闘のなかで一番極限状態を強いられる苦しい世界である。とくに〝鉄の棺〟と呼ばれた潜水艦の艦内で、駆逐艦の投下する爆雷の水圧に耐える乗員の痛苦はたとえようがない。水上艦艇と違って撃沈されて脱出出来る可能性はない。そのせっぱつまった状況の緊張感が希薄なことも指摘しないわけにいかないが、実際の潜水艦戦ではこの映画のような紳士的なありようはめったにない。潜水艦が輸送船の銃撃で殺りくされた例はめずらしくない。

私は戦争中、カメラマンとして潜水艦に同乗して貴重な映像を撮影した人の話を聞いたことがある。それによると艦内のシーンや敵艦撃沈の瞬間は撮影出来たが、浮上して逃げる船員たちを銃撃した凄惨なシーンは固く撮影を禁じられた。日本軍が見せたくない「真実」はそこにもあった。それは決して例外的なことではなかった。

むしろ玉木が言うような倉本艦長のような人が「実際に大勢いた」なら、あの戦争の悲惨のかなりの部分は存在しなかったかもしれない。そうでなかった「真実」に目をつぶるなら、それは「無心と善意」が「真実」をあやまって伝える「危うさ」につながるのではないか。

描かれなかった毒ガス戦の事実

昨年公開された小泉堯史監督の「明日への遺言」は、米軍の無差別爆撃を告発し、米兵処刑の責任を一身に引き受けた岡田資中将を肯定的に描いた。誠実な作家である小泉監督の善意もまた疑うべくもない。しかし、複数の歴史家の研究によって岡田中将は、中国戦線で国際法違反の毒ガス戦で多くの中国人を殺した事実が明らかになっている。その「真実」もまた岡田中将の人間を描くとき、問題外に置かれていいわけはない。「真夏のオリオン」のようなどちらかと言えば、戦争エンターテインメントと呼べる作品と、「明日への遺言」を同列に扱う不適切を承知しながら、私たちは「嗚呼　満蒙開拓団」の「真実」に対する認識と姿勢を大切にしたいが故の「善意の危うさ」を考えざるを得なかった。

（やまだ・かずお　映画評論家）

常陽新聞２００９年７月１２日（日）付掲載

リレーエッセイ

シネマにくびったけ

▷302◁

当事者が語る悲劇の史実

嗚呼　満蒙開拓団

（２００８年、日本）

昭和初頭、世界恐慌に加えて大飢饉が農民たちを襲った。山間の猫の額のような田畑で貧困にあえいでいた小作農の心をくすぐったのは「大陸に渡って広大な土地持ちになろう」との日本帝国政府の呼びかけだった。

満蒙の地の先住民を追い出し、その土地を割り当てられた農民の幸せは、つかの間であった。米大陸を略奪した白人のようにはいかなかった。

敗戦直前のソ連軍の攻撃はすさまじかった。邦人を守るはずの関東軍は崩壊し、高級将校とその家族たちは真っ先に逃げ出す。男たちはシベリヤに連行された。残された女性や子供の、悲惨な生活の始まりである。

映画では、この悲劇が語り部の言葉で構成される。研究者の解説のほかは引揚者、残留孤児など、すべてその時代を大陸で生き抜いてきた人々だ。

生き証人の中に、文化大革命の際、紅衛兵によって処刑されそうになった女性がいた。敗戦直前に夫は召集され、避難途上に一人娘を失い、助けてくれた中国人と結婚した。国境近くの方正県にあった自分の畑に散らばっていた日本人の遺骨の山にいたたまれず、県政府に墓地建設を陳情した過去が、あだになったのだ。時の首相、周恩来の配慮によって彼女は釈放される。

実は「方正地区日本人公墓」というのは、日本人民びいきの周恩来のお声がかりで建てられたのだった。原点に「開拓民は日本軍国主義の犠牲者である」という確固とした思想があった。

画面に現れる一人一人の語りは、ちぎれちぎれの布の切れ端でしかないが、ひとたび羽田澄子監督の手で綴り合わされると、情感豊かな壮大なドラマになっている。想像するほどに重みを増す心の痛みも、抑制の効いた編集で中和される。

映画を見た老夫婦の会話が耳に残る。「この映画をどうしても孫たちに見せたい。中・高校でなぜ歴史をきちんと教えないのか」

（シネフォーラムつちうら　栗山洋四）

◇

東京・神保町の岩波ホールで上映中

イラスト　井桁豊

岩波ホール制作「友 Iwanami Hall 秋 No.363」より転載

嗚呼　満蒙開拓団

エキプ・ド・シネマ
新聞・雑誌評

女性情報

歴史を生きた人々の「声」

川口　恵子

私たちの生は，日々，歴史という大きな物語の渦に巻き込まれてゆく．渦中の只中にある人間は声を上げる術もなく，目の前の過酷な現実と闘うことに追われ，生を費やさざるを得ない．そうして無数の人々の生の現実が，歳月と共に忘れさられ，国家の歴史の背後に消える．しかし，ひとたび埋もれた民衆史を掘り起こそうとする時，文献以上に力強く「真実」を語るのは，歴史を生きた人々の「声」にほかならない．

満蒙開拓団の悲劇という埋もれた民衆史に焦点をあてた羽田澄子監督のドキュメンタリー映画「嗚呼　満蒙開拓団」を見て，私があらためて考えさせられたのは，国家の歴史という大きな物語の渦に翻弄され，犠牲となった人々の存在を，いかに，映画が，生き残った人々の記憶を語る「声」を通して，蘇らせることができるかということだった．

映画はまず，中国残留日本人孤児に対する国家賠償請求訴訟が退けられた裁判所前の光景から始まる．残留孤児の大半が，日本政府の国策によって移住させられた「満蒙開拓団」の一員だったことをナレーションが伝える．老い始めた残留孤児たちの無念さが伝わる冒頭だ．映画はさらに，満州国が成立した歴史的背景と軍部の動き，「満蒙開拓団」が組織された過程を，専門家の説明や当時のプロパガンダ映画を通して手際よく観客に伝える．

そうして日本政府の残留孤児問題に対する無責任さに関心を促した後に，映画は，いよいよ満蒙開拓団の悲劇を語る象徴的トポスとしての「方正（ほうまさ）」に向かうのである．日本の敗戦と共に，故国への引き揚げを願いながら，苦難の逃避行を経てこの地にたどり着いた開拓民の内，数千人が，飢えと寒さと病で亡くなった土地である．ハルピンから東へ約180キロ離れたその地で，戦後多くの遺骨が発見され，中国側政府によって「日本人公墓」が建てられた．そして今も中国側政府によって維持されている．新潟からハルピン経由で墓に詣でる旅の一行に，自身，満州からの引揚を体験した羽田監督が加わり，取材旅行が始まるのだ．

成年男子を軍に召集され，老人・女性・子どもだけになった開拓団の家族は，敗戦後，この方正地区に日本軍を頼って避難してきたという．しかし，頼みの綱だった日本軍に見捨てられ，棄民同然の暮らしの内に，次々命を落としたのだ．幼いながらに当時の現状を見知っていた生存者の証言が，方正にたどり着くまでに起きた悲劇と，たどり着いてからの悲劇を語る．悲劇はいたるところにある．思わずこちらがたじろぐ程の，すさまじさだ．

末の妹を犠牲にせざるを得なかった母の悲劇を語った一人の女性が，自分たちに起きた出来事と沖縄や薬害の話を重ねあわせて語ることに，関心を抱かされた．結局誰も責任をとってくれず，国も守ってくれない

のは同じだと彼女は語る．幼い頃に体験した家族の悲劇を，大人になって初めて国家と個人の関係として捉えなおす発言と思われた．

そうして溢れる言葉の数々が，歴史に埋もれた個人の無数の悲劇を，戦後60余年の時を経て，スクリーン越しに私たちに伝える．それが本当に起きた現実の出来事であったことを知らしめるのは，それぞれの記憶を語る声の重さにほかならない．

「お父さん，お墓まいりに来ました」――いまだ荒涼たる土地に土を盛り，亡き父の魂に告げる一人の男性の姿に胸をつかれる．再びこの地に戻ってくるまで，どれほどの苦難を，この人は経てきたのか．バスに乗り込んだ人の，ふと口をつぐむ表情に，語られないままの辛苦の日々を思う．日本と中国の狭間で翻弄され，失われた時間を取り戻すことは誰にもできない．

しかしそうであるからこそ，映画の冒頭で示された，日本政府による「補償」の問題は，根深いものに思われる．補償問題は責任の所在を明らかにする上で避けては通れない．そしてそれはとりもなおさず，歴史を誰の視点から，どう捉えなおすかと言う問題につながってゆく．国家の歴史を，ひとくくりに民衆の視点から書き直すことは容易ではないだろう．日中間の政治も複雑に絡む．しかし，複数の民衆史を多くの視点から紡ぐことは可能だ．そのために生存者と向き合い，誠実に「声」を拾う作業を，映画というメディアが可能にしてくれることを，この映画は「希望」として掲げてくれているように私には思えた．そうしてすくいとられた一人一人の「声」に耳を傾けるためにこの映画が広く見られることを願ってやまない．

（映画評論家　2009年5月号）

ふぇみん

引き継ぎ背負うべき大きな重い宿題

向後　友恵

重すぎる記憶を人はいかに背負うべきか．

羽田澄子監督が，「大きな重い宿題を果たした」と語る「嗚呼　満蒙開拓団」は，遠のきつつある時代の記憶を，たぐり寄せ刻みつけるような貴重な記録映画である．

第2次大戦期，旧満州（中国東北部）に暮らした羽田監督は，2002年以来の中国残留孤児国家賠償請求訴訟に関心を持ったことから「方正地区日本人公墓」の存在を知り，同地を訪ねるツアーに参加した．

方正は，日本から満蒙開拓団（公式には満州移民団または満州開拓団）として送られた人々の多くが眠る土地である．

国策として各地から集められた人々は，傀儡国家満州の実質的な人的砦として，ソ連国境近くに送られた．だがいざ敗戦という時，その存在はあっけなく切り捨てられている．敗戦の報を受けた人々は，関東軍の拠点だった方正を目指し数百キロを歩くが，既に軍は撤退，零下30度を超す極寒の地で多くが息絶えた……．

1963年，日中国交回復の9年前に，この地に日本人のための公墓が建てられている．

公墓は「日本人民も開拓民も日本軍国主義の犠牲者だ」とした周恩来首相の判断によって建設されるに至ったという．

羽田監督は，この公墓を訪ねるツアーに参加した人々に，丹念に話を聞き，少しずつ遠い日の記憶を映し出していく．敗戦の直前になって移住し家族を失った人，犠牲になった幼い妹の声が忘れられない人，軍人が逃亡手段を持たない開拓民を置き去りにした光景を思い出す人……．

淡々と語る言葉の底には，絶望さえも超えた，重い歴史の現実がある．

過酷な現実は心に深く傷を残す．その傷の痛みを分かち合い慈しむように，記憶を記録へと変えていく映像は，観る者の心に深く重く刻まれる．

かつて，人民は権力の犠牲者だと断言した周恩来は，弱者の意志による社会変革を目指した．

しかし，時代はまた，人心を操る権力者を求め始めている．映像メディアの発達も，その傾向を加速させるばかりだ．

再び戦争が現実になる時，私たちは単なる犠牲者では終われない．回避する努力を怠れば，弱者もまた，権力に加担する加害者になってしまう．

権力に屈せず，個人が意思を表明できる社会の実現．それこそ，「嗚呼　満蒙開拓団」を目にした私たちが，羽田監督から引き継ぎ背負っていくべき「大きな重い宿題」なのではないだろうか．

（放送作家　2009年5月15日）

現代女性文化研究所ニュース

だれもが避けて通れないテーマ

田島　正夫

“満州移民”については，当研究所でも研究テーマとしてたびたび取り上げている．敗戦から60年以上たってなお，開拓団として中国東北部（満州と内蒙古）へ入植した農民た

女のしんぶん

中国に育てられた残留孤児の想い

1945年8月15日後の旧満州．日本への困難な帰国(引揚げ)途中，中国に残されて養父母たちに育てられた子どもたちは，「中国残留孤児」と呼ばれる．彼らが日本で肉親を捜す来日調査は現在も続いているが，最近は来日人数も少なくなり，「戦争の記憶」が薄れていこうとしている．

そんななか，日本各地の農村から旧満州に渡った開拓団の人たちのなかには，今でも集まって当時を偲び，冊子にして開拓団の歴史を語り継いでいる人たちもいる．

映画は，中国・大連生まれの羽田澄子監督の元に届けられた「方正友好交流の会」発行の冊子から始まる．旧満州・牡丹江近くに位置する方正地区に日本人公墓があり，墓参ツアーがあるという．監督は参加し，旅先で同行の人たちから話を聴く．帰国後も各地の関係者の話から満州開拓団や残留孤児の悲劇をあぶりだしていく．

敗戦直前の8月9日，ソ連軍進攻を知るや，関東軍上層部は，住民たちを置き去りにして帰国の途につく．住民らは自分たちで移動手段を手配し，出身の村ごとに寄り添って逃避行をする．途中，関東軍の兵站基地があった方正地区には奥地の開拓村から大勢の避難民が集まってきた．冬場は零下40度にもなる極寒の地．逃避行で体力をなくした人々は生き延びることができず，数千人が亡くなった．遺体は埋葬もされず山積みにされ，後には遺骨となり放置されていた．

お国のためと送り出された開拓団の農民たちが夢見たのは何だったのちの悲劇の記憶は，中国残留孤児の問題として私たちにその影を濃く落としている．

映画は「方正地区日本人公墓」の墓参ツアーにカメラが同行するところから始まる．バスのなかやホテルでインタビューされて想い出を語る顔ぶれは，幼い頃に彼の地に住んだ人たちである．そのほかにも，養父として日本人の子どもを育てたやさしい老人や，そこで暮らしていたときの友達など，多くの人たちが登場してくる．

この日本人の墓は，日中国交が回復する9年も前の1963年に，中国によってハルピンから180キロほど東の方正県に建てられたものである．ここには関東軍の基地もあったため，多くの開拓団の人たちが最後に目指して集まってきたところであり，そのために犠牲者も多かった．

ではなぜ墓は建てられたのか．

松田ちゑさんという方の尽力だった．夫は召集され，ソ連参戦で逃げまどうなか娘を亡くし，自分も病気となって生死の境をさまよっているところを助けてくれた中国人と再婚してこの土地で暮らしていた．戦後，十数年たったころ，砲台山の麓の畑を開墾しているとき，山と積まれた日本人の遺骨を見つけて，せめて埋葬してあげたいと県政府に日本人墓を作る許可を願いでた．

もちろん，当時の中国の日本に対する見方は厳しいものであり，その願いは県から省そして中央政府へと判断が持ち上げられて，ついには周恩来総理が建立を認めて実現したものだったのである．そのため，文化大革命のときも破壊されずに残ってきた．

公園のように整った林のなかに建つ公墓にぬかずく墓参の人たちの姿から，1932年から終戦までの14年間に日本政府によって送り込まれた農民は27万人余り，そのうち8万人余が亡くなったといわれている満蒙開拓の悲しさや，また，中国の人々への思いに対して，背負いきれないわれわれの責任がそこにあるようにも感じる．

すこし救いなのは，残留孤児によるいくつもの裁判をへて帰国者支援法が改正され，今年から帰国孤児の暮らしが，これまでより安定したものになったことである．

「早池峰の賦」「痴呆性老人の世界」などのドキュメンタリー映画をたくさん作ってきた羽田澄子監督は「満州・大連に生まれ育ったが，移民問題があることも知らずに引き揚げてきていた．この問題はあとで知ったが，この問題に触れるたびに憂鬱になる．この作品は正面から取り組んだものだ」と制作の動機を語る．これは監督だけでなく，だれもが避けて通れないテーマであろう．

（ジャーナリスト　2009年5月20日号）

か.

戦後，この遺骨の山を見た残留婦人・松田ちゑさんは遺骨を埋葬したいと，中国当局に願い出る．その願いは，ときの周恩来総理に届き，「日本人民も開拓民も，日本軍国主義の被害者だ」との判断から，公墓として建設された．しかし，このことを快く思わない中国の人たちも多かった．関東軍に侵略され，土地を奪われたことで，憎悪に満ちていても無理からぬこと．にも拘らず，侵略された国が侵略者の墓を建立し，長年にわたり墓守りを置き，維持管理している．戦争という悲惨な歴史の中にあって，中国側の寛大さに改めて心を打たれた．

墓参ツアーに参加した残留孤児たちは，そろって「日本人と知りながら育ててくれた養父母は何にも替えがたい」と話す．

戦争は敗戦というかたちで終止符が打たれたようにみえる．しかし，本当に戦争は終わったのだろうか．

（シネマとフェミニズム研究会・花

2009年5月25日）

朝日新聞2009年10月2日付掲載

1日の式典に参加した池田澄江さん

中国は私を忘れていなかった

元残留孤児・池田さん60年式典出席

【北京＝西村大輔】中国・北京で1日に開かれた建国60周年の式典に、中国残留孤児国家賠償請求訴訟の原告団を率いた池田澄江さん(65)が招かれた。希望を胸に帰国した祖国日本で冷遇された池田さんは、華やかなパレードを見て涙を落とした。「中国は私を忘れていなかった」

終戦直前、ソ連軍の侵攻を受けた黒竜江省牡丹江で、赤ん坊の池田さんは、子に恵まれなかった中国の養父母に引き取られた。

新中国建国が宣言された49年10月1日。養母に抱かれ、練り歩く人々を見た。爆竹と「毛主席万歳」の声。みな笑っていたのを覚えている。

極貧生活でも、養父母は娘にトウモロコシ粉のまんじゅうを与え、学校でいじめられるとかばってくれた。師範学校を出て教師となった。

北海道の男性が実父の可能性が高いとわかり81年に帰国したが、別人だった。当時は身元が確定しないと戸籍を得られなかった。日本人孤児と認めた中国の証明書を頼りに提訴し、82年に戸籍取得。その後、実姉に再会した。

3人の子を抱え、生活は苦しかった。行政の支援はない。「私たちが中国に置き去りにされたのは誰の責任か」。孤児約2千人を束ねて02年、生活保障を求め国賠訴訟を起こした。国を動かし、給付金制度を盛り込んだ改正中国残留邦人支援法が07年に成立した。

9月7日、東京の自宅に中国大使館から招待状が届いた。帰国から28年、遠くなった古里からの招きに驚き、恋しい気持ちで胸がつまったという。「中国は私に命をくれた国。日本を愛している。でもそれ以上に中国も愛している。そう実感しました」

歴史証言の鮮度と賞味期限

―『嗚呼　満蒙開拓団』の場合―

奥村　正雄

■「きわきわ」の撮影

昨年１０月１９日（日）、東京・青山のウィメンズ・プラザで開かれた第２１回東京国際女性映画祭でこの映画『嗚呼　満蒙開拓団』（羽田澄子監督）が初めて公開された。長蛇の列ができ、入場できない人も大勢出た。当日、その初公開の直前まで、会場では、まもなく観客を迎える暗い客席に陣取って、スタッフはスクリーンに映し出されるシーンを、固唾を呑んで見守っていた。最後のチェックだった。この時、私は最後に映し出された一行の、無言の白抜きの文字を見て驚いた。

「この２ヵ月後に魯万富さんはなくなりました」

この映画の殆どすべての撮影シーンをすぐ傍で見守ってきた私が知らないこの新事実を、この時初めて知ったのだった。魯万富さんとは、中国黒竜江省方正県で残留孤児を引き取って育てた養父として、この映画に登場した高齢の中国人である。その死去の知らせが映画制作の最終段階で、愛知県に住む養女夫婦から羽田監督のもとに届いたのは９月末だったそうだ。

魯万富さん

この映画が初めて公開されたこの東京国際女性映画祭で、映画の各シーンに登場し証言した旧満蒙開拓団の人たちはこの時招かれて客席から初めてスクリーンに登場する自分の姿を見た。ところがこの日、姿を見せない登場人物が一人いた。昨年５月に方正墓参のツアーに参加した男性で、魯万富さんが育てた養女・丸沢栄子さんの夫・恒好さん（７７歳）である。丸沢さんと魯万富さんの５０年ぶりの再会シーンや、かつて彼が両親や弟妹たちと入植した大八浪開拓団の跡を訪ねるシーン、田んぼのはずれにある養父の墓を訪ねて供養するシーンなど、この映画の重要な構成部分でカメラが彼の話と表情をしっかり捉えている、いわば「主演」といっていい人物である。この丸沢さんがこの日、会場に姿を見せなかったのは愛知県での勤務のためだったが、それから２ヵ月後の１２月１４日に突然脳梗塞で倒れて入院するという事態を迎えた。

羽田さんの撮影チームが私たちの墓参ツアー『中国・交流と歴史検証の旅』に参加したのは一昨年（２００７年）８月と昨年（２００８年）５月。そして丸沢さんが参加したの

は方正ロケ２年目の昨年。彼がこの時参加することになった大きなきっかけは、その前年の墓参ツアーである。この時初めてこのツアーに参加された羽田監督とスタッフ、同行のツアー参加者一行が方正のホテルに到着した時、ロビーで老いた現地の養父母とその家族１０人あまりが私たちを待ち構えていた。この場面をまったく予想していなかった私たちは、なぜ彼らがそこにいたのか、どうして私たちの日程と宿泊先を知っていたのか、しばらくの間のみこめなかった。後で聞くと方正政府から情報を得た方正の赤（紅）十字がセッティングしたものだった。

実は訪中に先立って私はあらかじめ早めに黒竜江省外事弁公室日本処の知人・徐広明主任と方正政府僑務弁公室の王偉新主任に手紙を送り、羽田澄子監督がどういう方か、これまでの代表的な作品を伝え、今回撮影したい対象と作品の狙いがどういうものかについて説明し、理解と便宜をお願いしたいと伝えてあった。日本とは国情の違う中国で「その話は聞いていない」、「それはちょっと待ってくれ。上級機関に聞いてみるから」という事態があちこちで起こったら困ると思ったからだ。その懸念とは逆に、私たちの方正訪問の情報が省、県の関係者からハルピン、方正の紅十字関係者に伝わって、彼らが動いてくれたのだった。

６５年前、方正で日本の残留孤児を引き取って育てた現地の養父母も次々と亡くなり、この時方正にはもう４人の養父母しか残っていない、ということがわかった。うち一人は体調がすぐれないため自宅にいる、という話だった。

私たちにとっては予想していなかった、この老いた訪問者たちを、羽田さんは部屋に招いてゆっくり話を聞いた。そのシーンは映画でも紹介されているが、その一人が魯万富さんだった。その魯さんの話から、日本にいる魯さんの養女・丸沢栄子さんが愛知県にいることを知り、それぞれ、ともに避難逃亡のあと、日本人同士で結ばれた恒好さんと栄子さん夫婦を次の年、つまり昨年５月に同道してもらい方正を訪ねる話が進んだ。が、栄子さんの体調がすぐれず、夫の恒好さんだけが翌年参加したのだった。その丸沢恒好さんが映画の完成を確かめたあと倒れたのである。

魯万富さんの死や丸沢さんのダウンでも明らかなように、今後はもう、いくら撮りたいと望んでも、２度と撮ることのできない、さまざまな映像を、危うくギリギリのところで記録できた、という意味の感慨を、監督の羽田さん自身は、後になって「キワキワ（の撮影）だった」と表現した。「キワ」＝「際」、辛うじて間に合った、という意味である。

■証言の迫真度

６０年前に体験した過酷な体験を、まるでリアルタイムさながら克明に語ってくれた証言をたくさん撮ることができた。それが体に刻み込まれた鮮烈な体験である上、言葉や表情がいささかも鮮度を失わないままカメラに向かって語ってくれた人が少なくない。日本の軍隊が群がる避難民を乱暴に退け、高級将校家族や満州国高級官僚家族だけをいくつもの立派なトランクとともに列車に乗せた証言や、同じ逃避行を続けるシーンを詳しく語りながら、同行の近所の母親がわが子を手にかけて殺した場面で絶句した女性…。これまで

同種の証言を活字で記録した印刷物は数え切れないほど残されている。だが証言者の表情や感情をリアルに伝える映像の迫力は、やはり別格である。

しかしいっぽう、この映画には証言者として登場しながら、本来、重要な証言をしてくれるはずの人物が、彼女の口からしか聞けない証言を、もうこの映画では口から発することができなくなっている人もいた。「キワキワ」にその姿がカメラに収まりながら、その表情も口から発する言葉も、すでにもうかつての強烈なリアリティを失っていた。松田ちゑさん（９０歳）がそうだ。いま中国でただひとつ存在する「方正地区日本人公墓」の生みの親である。もしも彼女が１０年前にこのカメラの前に立っていたら、次の証言を余すところなく発していたはずである。

松田ちゑさん。昭和１６年、山形県天童市から黒竜江省北靠山屯開拓団に入植。１９４５年８月９日のソ連軍侵攻で幼い一人娘と逃避行を続けながら方正にたどり着いた。ここで多くの同胞が飢えと寒さと疫痢で死んでいったことは映画でも証言が多い。

息子、孫と松田ちゑさん

「この娘を這ってでも日本に連れて帰る」と心に決めた松田さんも、年明け早々、息を引き取った愛娘をわが手で葬ってやれないほど自分も重態に陥っていた。

それから十数年後、中国人崔永清さんと再婚していた彼女は、夫と共に方正郊外の炮台山麓に住む知人のつてで畑を耕し始めた。ここでおびただしい人骨を発見。これが敗戦時の同胞の骨とわかって方正政府に埋葬方を願い出た。方正政府は当惑した。ことは中国人民に巨きな犠牲を強いた侵略国日本の人骨である。方正政府は判断しかね、黒龍江省政府に伺いを立てた。が、ここでも判断できず書類は中央政府に上げられた。ここで許可のサインをしたのが周恩来だ。しかし周恩来にとっても苦悩の末の判断だったことが最近になって判明した。

こうしてできた方正の日本人公墓の由来について、当の松田さんは、この映画の中では不自由な口元で「シュウエンライ」という言葉を辛うじて発するだけで、あとは柔和な目をしばたたかせるばかりだ。今も毎日、東京・板橋にある都営住宅の自宅から河ひとつ隔てた区の老人施設へ足を引きづりながら通う姿が映画でも捕えられている。中国で２回、日本へ帰ってきて１回，都合３回、脳梗塞を患った体だが、それでも５年前はまだ頭の回

転が以前と同様、早かったし、言葉尻にもメリハリがあった。敗戦時の逃避行や文化大革命時のことを、私の質問の範囲を超えてまでいろいろ話してくれた。

■泣いて歌う

この松田ちゑさんに私が初めて会ったのは、今から１８年前の１９９１年夏。松田さんがいよいよ晩年を日本で暮らしたいと決めた時、まだ母親と一緒に日本へ帰る決心がつかなかった息子・崔鳳義さん(６２歳)は母親の体を気遣い、ちゑさんお気に入りの孫娘・崔麗さんを付き添わせて帰国させたのだった。２人が一時暮らしていた埼玉県久喜市のアパートを私が訪ねた時、松田さんはまだ元気いっぱいで、中国でのさまざまな話を聞かせてくれたし、その後、故郷の山形県天童市へ移ってからも、夜行バスで訪ねて行った私に、聞き書きのノートのページが足りなくなるほど、いろいろな話をしてくれた。

その後、中国から崔麗さんの姉が帰国、さらに１９９４年４月になって息子の崔さん夫婦と、今回の映画の中で父親の話す中国語を通訳した孫の崔岩さん３人が天童に帰国して一家全員が日本で揃った。その後、崔さん夫婦は天童で慣れない建設工事や皿洗いなどをしながら自立し、１９９５年１１月、一家３代６人は東京・板橋に勢ぞろいしたのだった。

一家が東京へ移ってから、私は暇さえあれば松田さんの自宅や、嫁が作ってくれる弁当を持って松田さんが毎日通う板橋ふれあい館へ訪ねて行った。仲間との談笑や昼食のあとカラオケ・タイムになると、松田さんは毎日、欠かさずマイクを持って同じ歌をうたうのが日課だった。歌は彼女が作詞し、館長が作曲してくれた『花の板橋ふれあい館』である。歌は決して上手くはないが、中国で何度も生死の境を生きてきた不屈の気が漂った。

もともと松田ちゑさんは文章を書くことも好きだったが、とりわけ作詞が好きだった。東京・板橋の自宅で私が何度もテープを聞かせてもらったのは『別れの方正』という歌だ。１９７２年田中角栄首相の訪中で日中国交回復が実現の運びになると、日本からさまざまな訪中団が方正へも足を伸ばすようになった。そんな時、方正の残留婦人の世話役だった松田さんはよく仲間や孤児たちと代表団を自宅に招いて、一緒に交歓のひと時を過ごした。やがて訪中団が方正を離れる時間が来る。この頃、まだ孤児たちも残留婦人たちも日本に帰る具体的な展望が見えなかった時期だ。うたいながら最後には主客ともども泣きながら歌ったという歌だ。

別れの方正

明日の別れを　知りながら
命をかけて　あえた人
情けは熱い　訪中団
霧の方正　おぼろ月
ああ嬉し泣く　別れの方正

作詞・松田ちゑ、メロディは牧村三枝子の『樹氷の宿』を借り、歌・那須ますえ。うたっている那須さんは、松田さんと一緒に山形県から同じ黒竜江省北靠山屯開拓団に入植し、長い間松田さんと生死を共にしてきた。松田さんを実の姉以上に慕って方正でも帰国後も松田さんの傍を離れなかった。が、２００３年、癌で亡くなった。

■３５年ぶりの真実

映画『嗚呼　満蒙開拓団』の中で，松田ちゑさんの息子の崔鳳義さんが長男の崔岩さんの通訳で、文化大革命時代、松田ちゑさんが危うく死刑にされるところを、周恩来総理によって逆転無罪になったと証言しているカットがある。方正の街道委員会に告発され、松田さんは３年半も留置場に入れられた。容疑はスパイ。告発したのが、同じ方正にいた日本の残留婦人、という噂を私もほかから聞いたことがある。その婦人の来歴もほぼわかったところで松田さんにそのことを確かめた。しかし彼女は「そのことはお墓へ持ってゆきます」と言うばかりだった。

この３年半の留置は松田さんにとって、敗戦直後の避難逃亡、死んだ一人娘を自分の手で葬ってやれなかった瀕死の状態、と同じくらい辛い試練だった。この時、家に残された中国人２人目の夫(崔鳳義さんの父は死亡)と息子鳳義さんにとっても絶望の日々だった。とりわけ高校卒業後は有名大学医学部に進み医師になることをめざし、担任の教師も太鼓判を押していた矢先の運命逆転だった。

留置されること３年半、方正の革命委員会は松田さんの死刑を決めた。彼女が中国人ならそのまま死刑が執行されただろう。が、松田さんが日本籍であるため、この承認を中央政府に求めた。最終判断をしたのは周恩来総理。答えは「無罪、即時釈放するように」だった。この逆転判決によって松田ちゑさんは即刻釈放され、名誉回復、拘留中の賃金をさかのぼって即刻支給。一家３人の運は「凶」から「大吉」へ大逆転した。周恩来の、この「逆転無罪」について、これまで言われてきたのが周総理の「たぐい稀な記憶力」、方正の日本人公墓の建設を裁可した時の申請者名・松田ちゑ（中国の書類では松田千恵）を覚えていた、ということだが、当の松田ちゑさん、息子の崔鳳義さんにとっても、これまでその経緯と真相は不明のままだった。ところがこの逆転判決の具体的経緯が、今から３年前の夏、崔鳳義さんの、当時法務局に勤めていて、今は退職したある友人から思いもかけず明かされたのである。その経緯を初めて明かした彼の私家版『東京回想録』(山田弘子・是洞三栄子共訳、２００６年１２月）の中で崔さんはこう書いている。

「母が出獄でき冤罪をすすぐことができた。私が最も感謝するのは、他の誰でもなく、どの組織でもない。わが国の国務院総理、周恩来である。周総理の指示で母の命は救われたのだ。母の無実の罪が晴れてから３５年後、私はもう一度、日本から方正へ帰った。その時、かつて方正県公安局に勤め、今は退職した親友からその話を聞くことができたのだ。

母は捕えられて入獄し、１９７１年１０月、中国人民解放軍方正県保衛部審判組（文化大革命の期間、公安局、検察局、裁判所はすべて軍の管理下にあった）は、この案件を省の公安庁へ上げた書類の中で、母を死刑にすると決定していた。この判決は黒龍江省の公安庁から国家公安部に上げられた。これは国際上の刑事判決であり、同時に中日両国をも

考慮したからである。そのためこの書類はまた周恩来総理のもとにまわった。周恩来総理は１９６３年、方正県が『方正地区日本人公墓』を建立したいとする書類の中で、私の母がこの公墓建設の主唱者、組織者であることを知っていた。（中略）

しかし今回、中国人民解放軍方正県保衛部審判組が私の母を死刑にする判決を申請、その主要な罪が「方正地区日本人公墓」の建設を主導したことのほか、まったく根も葉もないことを根拠とした罪名だった。これを見た周恩来総理は、すぐ『無罪、即刻釈放』を指示した」

この時期、１９７１年といえば、周総理は文化大革命という特異な政治状況の中で、きわめて多忙な時期である。重要な政治決断を間断なく迫られていた。一女性の死刑の承認を求める書類を見て、その名がかつて方正の日本人公墓建設の申請で主導的な役割を果たした日本女性の名と結びつく。これは単に周総理の類まれな記憶力もさることながら、８年前、公墓建設の申請に対する承認を、右から左に署名したということではなかったことを物語る。お墓そのものが、開拓民とはいえ侵略者側の公墓であり、その申請「首謀者」が松田ちゑなる女性であることを、逡巡熟慮の経緯の中で周総理の脳裏にインプットされていたのだと思う。だからこそ方正県から上がってきた松田さんの死刑承認の求めに、即座に「無罪、即刻釈放」の指示を発したのだ。

この指示を見た方正県保衛部審判組は、これは何かの手違いだろうと、公安局長がすぐ黒竜江省の公安庁に電話して事実と確認、それを知って全員しばらくは茫然とした、というおまけまでつく騒ぎだったことがわかったのだった。

実はこの話の２年前、私は方正の公墓参拝に一緒に行かないか、と松田さんを誘った。その時松田さんの表情が変わった。もう２度と方正には行けないと思っていたのに私を方正へ連れていってくれるの？　という半信半疑の表情がみるみる満面の笑みに変わった、その表情の変化で私には松田さんの喜びようがわかった。だが家族が反対した。体の不自由な老母の長旅を心配したのである。そこで私は息子の崔さんに付き添ってもらうことにして松田さんの帰国後、最初にして最後の方正訪問が実現した。

出かける前、私はこの母子と一人の女性との再会シーンを頭に描いた。文革中、松田さんが３年半留置された時、同房にいて松田さんを励まし続けた杜少栄さん（７１歳、女性）である。杜さんは松田さんの息子崔さんの高校のロシア語の先生であり、この時、文革時代、権力を握った勢力と対立した造反派の活動家だったために逮捕拘留されていたのだった。スパイ容疑で逮捕され、絶望の毎日を送っていた松田さんを杜さんは「こんな非道は何時までも続くはずがない」と励まし続けた。しかし文革が終わったあと、杜さんは方正から姿を消した。内蒙古へ引っ越したらしいという話もあった。訪中前、私は知り合いの王鳳山さん（元方正県人大副常務委員長）に連絡し、何とか行方を突き止めて連絡してもらえないか、と頼んでおいたが、まず無理だろうと思っていた。私たちが方正に着いた日、王さんから「杜先生と連絡がついた」という思いがけない吉報が届いた。方正に着くと崔さんがすぐ彼女に電話し、今晩夜行列車に乗り明日の早朝、ハルピンに来てもらう、という段取りができた。翌朝、私たちが泊るホテルに現れた杜さんは松田さん親子と抱き合って３人が泣いた。

それから５年、杜少栄さんは松田さんの頭の中で、いまもその時の映像は消えていないものの、さまざまな思いを口にすることはもうできなくなっている。それでもカメラが彼女の姿を追った時点から半年後には、それまで、まがりなりに自分の足で通っていた板橋区の老人施設から、毎朝８時半に自宅まで迎えに来る車に乗って、夕方までデイサービスに身を任せる、という生活に変わっている。

■消えた木片

失われる間際で間に合った証言や映像、松田さんのように姿は撮れたが言葉がもう口から出ない証人…実はもうひとつ私には、今回までは待ってもらえなかった「失われた証拠」への未練が残る。

今から１５年前、１９９４年６月に私が方正の日本人公墓を訪れた時、思いもかけず、しばらくそこに足が釘付けになった場所があった。公墓参拝者のために作られた小さな休憩所の建物だが、その奥の薄暗いスペースに、参拝者がゆかりの故人に自分の思いを伝えるために日本から携えてきた仏具や千羽鶴、卒塔婆などが雑然と放り込まれてあった。軍服とモンペ姿で撮った夫婦の遺影があった。戦争末期に開拓団で撮って送ってもらった肉親が弔いにここを訪れて飾って行ったものか。また、

「為小林家殉難者精霊阿円忌供養塔」

というのもあった。これらひとつひとつをメモに採っていた私が一瞬それを凝視したまま、しばらく動けなくなったのは、ただ訪れた日時と名だけを記した次の一行の木片だった。

「１９９２年２月７日訪中　子供ヒロ子」

開拓団関係者などのにぎやかな墓参などは絶えた厳寒の２月である。高速道路もまだなかった１８５キロの道を方正に向かわせたのは、「子供ヒロ子」のどういう想いからだったのか。あの秋、この母子はどこから、どう、ここへたどり着いたのか。娘ヒロ子を生かすために、母はどう命を削って果てたのか。

今回の作品で私はぜひこれらの品々を記録してもらいたいと思った。墓苑の一隅に小さなコンクリート作りの建物がある。もしかしたらあの品々がこの中に収蔵されているのではないか。もしそうならそれをぜひ映像に加えてもらおうと思った。だが残念ながら、それらはすでに処分されたようで、もうここには残ってはいなかった。

「和平友好」や「中日友好、世界平和」などと彫った優美なモニュメントが次々と作られ、方正の『友好園林』はいよいよ整然と姿を整えてきている。だが時折、開拓団関係者や友好団体からカンパは寄せられてきたものの、公墓が建設されて５０年近く、この日本人公墓と陳列館を含む友好園林は、その建設費も維持管理費も長い間、中国側に依存したままだった。そのためにこうした歴史の、物言わぬ証言者たちが、いつのまにか消えてしまったのは、断腸の想いだった。それがこのほどようやく、毎年、維持管理費の半額を日本政府が負担することが決まった。遅きに失したとはいえ、この決定を最も喜んでいるのは、長年、祖国による公墓の認知を待ち望んできた黄泉の邦人たちだろう。

存分に記録できた証言、きわどく間に合った証言、画面には登場しながらすでに本来の証言ができなくなっている証人、すでに姿を消して再録不能の証拠品……は、刻々移り行く時と、人間の生命の消長の中で記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』は、貴重な歴史の証言を切り取ることができたと同時に、映像による歴史証言の鮮度と賞味期限の問題をあらためてつきつけた、と私は思う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

文化庁映画賞の不可解！

『嗚呼　満蒙開拓団』が第７回文化庁映画賞で記録映画大賞に輝いた。この受賞記念上映会があるというので１０月１８日（日）夕、東京六本木の会場へ出かけた。客席１６０の人数分、入場者に手渡す資料を用意して開場前の入り口に立った。「そこは入場の妨げになりますので、少し下がって」と関係者に言われて、観客が殺到する場面を想像し、一瞬緊張。だが、開場時間になっても人影はパラパラ。入場者６５人。ほとんどの席が無人のまま２時間の大作が空しく映写されたあと、招かれた羽田監督が、ほとんどが空席の客席に向かって話す、という前代未聞の「受賞記念講演」で幕となった。

ちなみにこの前日、同じ六本木の他会場で幕を開けた「第２２回東京国際映画祭」のオープニング作品『オーシャンズ』（入場料１８００円）は入場者１０，０００人。招かれた鳩山総理夫妻は多忙中にもかかわらず最後まで席を立たなかったという。

芸術の秋、ところも同じ東京・六本木で現出したこの珍妙なパラドックス…一体これはどう受けとったらいいのか。ちなみに昨年までこの時期、受賞作の紹介と記念上映会の予告を文化欄で紹介してきた朝日新聞は今回、記念上映の後３週間たって授賞を報じた。文化庁は賞を決めて授賞するだけで、あとは広報ほかすべて下請けに任せるだけなのか！？文化を大衆のものへ、という気概がなさすぎはしないか。（奥　村）

中国東北地方について

――旧「満州国」に暮らして――

金倉　美佐恵

私が方正友好交流の会を知ったのは、当会報誌第７号に紹介されていた「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の事前調査で方正県を訪れたことがきっかけであった。

06年秋～09年春にかけて、私は在瀋陽日本国総領事館において「草の根・人間の安全保障無償資金協力」外部委嘱員として案件監理等に従事しており、総領事館より方正県におけるプロジェクトの事前調査も委託され、方正県へ行く機会をいただいたのである。援助に対する考え方において、当会報誌を手に取られた方々とは異なる部分もあるかと思うが、最後までお読みいただければ幸甚である。

まず、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」について簡単に説明しておきたい。当事業は日本のＯＤＡ（政府開発援助）のうち、返還義務を伴わない無償援助の一つである。援助対象国の地方公共団体や非政府組織（ＮＧＯ、学校、病院等）が提案するプロジェクトに日本政府が資金を支援するもので、原則として1,000万円を上限としている。現在、日本のＯＤＡはほぼＪＩＣＡ（国際協力機構）によって実施されているが、当草の根事業は各地方の実態に即した小規模プロジェクトであり、事業の実施及び監理は一貫して各地の在外公館（大使館、総領事館等）が行っている（各在外公館と該当地域との関係構築も在外公館が直接行う理由であると思われる）。在瀋陽日本国総領事館が管轄する中国東北三省（遼寧省、吉林省、黒龍江省）では、1991年より事業を開始し、2009年３月末までに計217件のプロジェクトが実施されている。プロジェクトの内容は小中学校及び郷鎮衛生院の建設、医療機材の提供、上水道の整備（井戸建設）等が挙げられる。どれも有償資金協力や無償資金協力ではカバーしきれなかった、地方の住民が直接裨益するプロジェクトであり、各地で大きな成果を挙げていると聞いている。

昨年、方正県においては３件のプロジェクトが同時に実施されたが、自然災害等、特別な事情がある場合を除き、同一地域で一度に複数のプロジェクトを実施するのはまれである。方正県人民政府が日本人公墓を長年に渡り管理してきてくださったことや、開拓団の歴史等を考えれば当然という意見もあるかもしれない。しかし、私個人としては草の根事業を戦後賠償の一部のように扱うことには反対であり、過去の事情があるから援助をもらって当然という考え方には特に反発を覚える。

草の根事業は中国全土のみならず、全世界において実施されているプロジェクトであり、現在においてより援助を必要としている人々にこそ届けられてしかるべきものだと考えるからである。在瀋陽日本国総領事館より方正県における草の根事業

の事前調査を委託された際も、その点に注意をし、当初方正県側から提案されたプロジェクトは（立派な中心小学校の増築などであったため）相談の上、全て実施が難しい旨を伝え、新たな案件の発掘に努めるようお願いをした。その結果、会報７号で掲載された３つの案件に対し、資金の提供を行うことが決まった。方正県は黒龍江省内では比較的財政的に恵まれているハルビン市が管轄しており、当初は方正県でのプロジェクト実施には懐疑的であったが、特に八名村の井戸掘削プロジェクトは、実施できたことを心から喜べる案件となった。それは、開拓団や日本人公墓とは全く関係がなく、実際に八名村住民が使用している水（茶色に染まった泥水。各家庭で甕に砂利を入れた濾過器を作り、数回濾過した後に使用している）を見、村の多くの成人が劣悪な水により関節の肥大化を起こしているという現実があったからであり、また、村の代表が言った「せめて子どもたちには安全な水を飲ませてあげたい」という言葉が頭から離れなかったためである。

（しかし、戦争で被害を受けた方々に対する補償を否定する気持ちは全くなく、当然なされるべきものであり、今後も何らかの対策を取っていく必要があると考えている。）

実地調査で方正県を訪れた際の印象は、日本との関係が強く感じられるということであった。県の中心である方正鎮の商店は、看板に日本語を併記するよう法律で定められている。残念なことにおかしな日本語が溢れかえっているのだが（県政府の方に指摘はしておいた）、方正県が日本との関係を重視していることがよくわかる。当法案に対してはネット上での批判なども散見されるが、それでも県政府としては方針を改めるつもりはないとおっしゃっていた。日本との友好交流を進めようという県政府の方々の気概を感じた。

方正県では調査の合間を縫って「嗚呼、満蒙開拓団」製作のきっかけになったという日本人公墓にも連れて行っていただいた。県の中心からは離れた場所にあるが、広い敷地内には日本人公墓、養父母公墓の他にも多くの記念碑や、当地に稲作技術を広めた藤原長作氏の墓、記念館などが整備されており、方正県と日本との交流の歴史を学ぶことができる。今回映画を観て、改めて公墓に関わってきた方々の苦労を知った。平和な時代に生きる今、友好交流を更に進めていくべきではないかと思う。

在瀋陽日本国総領事館で業務の委託を受けていた期間、草の根業務に係る出張なども含め、東北各地を訪れる機会に恵まれ、731 部隊跡地、ソ連との国境地帯に残る旧日本軍要塞、ラストエンペラー溥儀の宮殿、開拓民が旅立った葫蘆島の埠頭など多くの戦争関連施設へ足を運び、満州国の歴史を少しでも知ることができたことは、自分にとって大きな収穫であったと思っている。特に佳木斯にある緑川英子（エスペラント語作家。抗日戦争に参加）の墓は大変印象深かった。数人の方に道を尋ねたのだが、皆その場所を知っており、「素晴らしい女性だ」との声を聞くこともできた。ようやく探し当てた墓は、雪の積もる丘の中腹にあったにもかかわらず、そ

の周囲だけはきれいに掃除され、小さな花が供えられており、今なお彼女がこの地の人々に大切にされていることがうかがえ、非常に感銘を受けた。彼女の勇気と行動力に感嘆すると同時に、日本国内はもとより、中国でも一部の方にしかその存在を知られていないことが大変残念に思われた（私自身、黒龍江省一周の旅を思い立って初めて知った次第である)。日本人公墓や旧日本軍要塞も同様であり、日中双方のより多くの人々にぜひ知ってもらい、できれば実際に訪れ、自分の目で確かめていただけたらと思う。日本人でありながら抗日運動に参加した女性の勇気、困難な時にあっても公墓を守ってきてくれた中国の方々、終戦を知らずに要塞の中で失われた多くの命などに馳せた思いは、言葉ではとても伝えきれるものではないからである。

今回、映画「嗚呼満蒙開拓団」を観に行き、気になったことがある。観客の年齢層である。当時のことを少しでも知る方々やその話を聞いていた方が中心になるのはもちろんのことであると思うが、若年層の少なさにはガッカリした。今の自分というのは、過去の様々な出来事とつながっており、戦争という歴史があって、その上で私たちが存在しているのである。その歴史をきちんと知らないというのは、今を生きる自分をきちんと把握できないということにならないだろうか。まして満蒙開拓団は残留孤児問題など、今も決して終わってはいないのであり、自分たちと完全に切り離して考える問題ではないと思う。岩波ホールでの上映は終了したが、今後映画は各地で上映されることと思う。その際には、ぜひ若い世代の方々にも足を運んでいただきたい。過去に起こったことを知ることで、改めて現在の自分というものを見つめ直すきっかけになると思うからである。

また、今後方正県の日本人公墓を訪れる方々には、前述した草の根プロジェクトの実施先にも足を運んでいただけたらと思う。自分たちの税金がどう使われ、どれだけの役に立っているのかを実際に確かめることができるからである。また、プロジェクトに対して意見や不満があれば直接瀋陽総領事館に伝えてほしいと思う。そうすることで、より良いプロジェクトの実施へとつながると思うからである。

参考）2008 年度方正県草の根無償資金協力実施案件
・黒龍江省ハルビン市方正県方正鎮八名村飲用水改良計画
・黒龍江省ハルビン市方正県伊漢通郷衛生院建設計画
・黒龍江省ハルビン市方正県徳善郷双鳳村飲用水改良計画

（かなくら・みさえ：01 年～03 年に青年海外協力隊日本語教師隊員として中国江蘇省南京市の東南大学日本語科にて活動。04 年～05 年南京師範大学留学。06 年 10 月～09 年 2 月在瀋陽日本国総領事館にて草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委嘱員として活動）

「満蒙開拓平和記念館」の建設実現を目指して

（満蒙開拓に係わるいくつかの想い）

「満蒙開拓平和記念館」事業準備会
事務局長　寺沢 秀文

１．「満蒙開拓平和記念館」建設事業についての経過報告

現在、長野県南部の下伊那郡阿智村にて建設計画が進められている「満蒙開拓平和記念館」構想について、まずもって方正友好交流の会会員の皆様並びに関係各位等始め全国各地からお寄せ頂いているご寄付及び様々なご支援等に対し、この誌上をお借りして厚く御礼を申し上げます。

日中双方始め多くの犠牲者を出した旧満州、そしてそこに全国各地から送り込まれた満蒙開拓団（満州開拓団）の史実は忘れてはならないことですが、これに特化した記念館、資料館等の類は全国どこにも無い（水戸市内原に青少年義勇隊のみに特化した資料館はあるも）ということから、２度とあのような悲惨な体験を繰り返すことの無きよう、戦争の悲惨さ、平和の尊さ等を語り継ぐための拠点となる記念館を建設しようと、事業に取り組んでからもう３年余が過ぎようとしています。

この事業の中心となって提唱、推進しているのは長野県飯田市及びその周辺の下伊那郡を活動エリアとしている飯田日中友好協会（会員約３００名）であり、この地域は全国で最も多くの満蒙開拓団を送出した長野県のうち、さらにそのうちの１／４を送出した、いわば全国で最も多くの満蒙開拓団を送出した地域でもあります。飯田日中友好協会は、かつて戦中、下伊那郡天龍村の平岡ダムの建設現場において、中国国内から強制連行され強制労働を課せられた中での殉難犠牲者の遺骨を収集し慰霊、中国に返還する事業を出発点として約５０年前に創立されています。これは、当地方から送り出した満蒙開拓団の中からまだ日本に帰国できない邦人等の帰国について中国側に協力要請をしたところ、中国側から「まず日本側でもするべきことがあるだろう」として指摘されたのがこの中国人殉難犠牲者の遺骨収集・慰霊作業であったそうです。この時の協会前進の発足時の代表者が元阿智村村長・小笠原正賢氏（長野県開拓自興会会長等を歴任）、事務局長が「残留孤児の父」とも呼ばれた故・山本慈昭翁（長岳寺住職）でした。飯田日中友好協会では、その後も残留邦人の帰国支援活動、満蒙開拓体験の語り継ぎ活動等を積極的に続け、現在も６０名以上の満蒙開拓体験者等による「満蒙開拓語り部の会」活動を続ける等しています。そして、これらの活動の総括として、またこの悲惨な満蒙開拓の史実を風化させないためにも、「満蒙開拓平和記念館」は絶対に建設しなければならないという強い思いの下に取り組まれたのがこの事業でした。たまたま飯田日中友好協会が中心となって進めてはいますが、これはこの地域での残留孤児支援、満蒙開拓の語り継ぎ等の事業の中核をこの協会が主として担ってきたという経過の帰結であり、当協会主導でなくとも、どこかの団体なりが取り組まねばならなかったことであると思っています。

本来であるならば、国策として送り出された満蒙開拓事業であり、当時の県や市町村等、さらには教育界等も後押しして送出し、多くの犠牲者を出した満蒙開拓なのですから、こ

れに特化した記念館等の類の一つぐらいは国立、あるいは県立等で建てられても然るべきかと思います。勿論、それぞれとして満蒙開拓の史実の継承等には取り組んでおられますが、しかしながら、その取り組みのいずれもがあれだけの史実、犠牲に対しては小さなものと思われ、その継承の拠点ともなるべき資料館、記念館等の類が一つも無いこと自体がその顕れであると思っています。広島や長崎に原爆記念館があり、そこから戦争の悲惨さ、平和の尊さを世界に向けて発信しているように、満蒙開拓についてもその史実を語り継ぎ、平和を発信していくための拠点は絶対に必要であると思います。

この信念の下に、当記念館構想に取り組み始めて後、国、長野県、地元市町村等、行政関係にも何回も足を運び、協力等の要請をいたしました。しかしながら、国、県等では、財政的に困難なこと、当記念館構想自体がまだ明確化しておらずそれへの支援は困難であること等から、そして我々の力不足等もあって、国、県等からの積極的な協力体制はまだ得られていない状況にあります。今般の政権交代に伴って、現政権がこの記念館建設計画にどのような対応を示して頂けるかは、まだ政権発足後まもないところでもあり、まだ具体的な要請等も出来ていませんが、今後の対応が注目されるところです。

それでは、地元の市町村等の協力体制はどうなのかと言えば、やはり基本的には国、県等と同様のスタンスにありました。しかしながら、ようやくここに来て協力体制等も固まりつつあり、今春には地元の全市町村長並びに地元選出国会議員、県会議員等の皆さんに事業賛同者として名前を連ねて頂けることが出来ました。

そして、何よりも頭を痛めていた建設用地ですが、当初は地域の中核都市である飯田市のなるべく立地の良いところでの用地確保を目指していたものの、財政難等の根本的問題もあり適当な建設用地がなかなか見つからず時間が経過していました。そのような中で、大変ありがたいことに飯田市の隣接の下伊那郡阿智村において、村役場近くに約４４０坪の村有地を無償貸与してくれることとなりました。同建設予定地は、中央道「飯田山本インター」よりも車約５分程度という好立地にあります。また、同村内にて以前から別途建設構想のあった前出の故・山本慈昭翁の功績を残すための「山本慈昭記念館」建設計画も、今般、当記念館事業に併合し、共に建設を目指すこととなったところです。

記念館建設予定地（阿智村駒場）

また、この建設事業をより多くの方に知ってもらうべく、キャラバンや各種イベントの実施、専用ホームページの立ち上げ、そして今春には全国約２，０００余の全ての市区町村等に事業への協力を要請する文書を発送させて頂く等してきました。その結果、これまでに全国から約５００名の皆様からの尊い建設募金等のご寄付を頂いております。本当にありがとうございます。

２．なぜ、満蒙開拓記念館がこれまで建てられなかったのか

私自身、この記念館事業に、提唱者の一人としての立場上、構想立ち上げ時より事務局長として係わってきました。私事ながら、当方の両親もまた満蒙開拓団員であり、私の長兄も終戦の年の冬を越せず、幼い命を新京(現長春)の避難民収容所で落としています。母は翌年、葫蘆島より帰国、終戦直前の根こそぎ動員で召集された父は３年間のシベリアでの捕虜収容所生活を経て、無事帰国出来ました。戦後の国内生まれである私は、子供の頃から両親より、「あの戦争は誤りであった。中国の人々に悪いことをした」と聞かされてきました。私が本業の傍ら、こういったボランティア活動に時間を割いて参加している原点はやはりこの両親の言葉であったと思います。私事ながら、両親は戦後、りんご作り一筋に生きてきた実直な一介の農民ですが、大正、昭和、平成と激動の時代を生き抜き、そして率直に自分の体験を伝えてくれた両親のことを私は尊敬したいと思っています。

そして、この記念館事業に係わる中で、またもう１０数回になる旧満州現地への調査・慰霊訪中の積み重ね等の中から、この満蒙開拓に係わる複雑な歴史や事実等をも知ることが出来ました。そして、特に痛感しているのは、なぜ、戦後、満蒙開拓等に余り日が当てられなかったのか、記念館の一つすら建てられなかったのかということへの疑問でした。勿論、戦後しばらくの間など、一部の関係者等の皆さんの中ではそれらの積み重ねはありましたが、しかし多くの犠牲者を出したという史実に対して余りにも国民的認識が低いというのが、旧満州、満蒙開拓に関する国民意識レベルの実態ではないかと思います。

それは私なりに考えてみるに、やはり、旧満州、満蒙開拓の史実に、真っ正面からは取り組めなかった、取り組まなかった、取り組みたくなかった、等々ということなのだろうと思います。

まず、その体験自体が余りに悲惨であったということです。昭和２０年８月９日未明、突如としてソ連軍が攻め込んできた時、開拓団に残されていたのは、女性、子供、老人ばかりであり、壮・青年男性は根こそぎ動員により誰も残っていませんでした。きっと守ってくれると信じ世界最強と言われていた日本関東軍は戦略上の理由からと開拓団同胞に知らせることなく密かに南下してしまってもぬけの殻、守る軍隊も無い流浪の民を待ち受けていたのは悲惨な逃避行、そして略奪、集団自決、襲撃等でした。泣く子がいては敵に見つかるからと責められ泣く泣く我が子を川に流した者、もう集団自決しか無いと我が子、仲間達の命を自ら奪うしかなかった者、余りにも残酷で辛いこれらの記憶は、生き延びて帰国した者たちにとっても触れたくないことであったことは言うまでもありません。いろいろな事実を語ろうとしないまま、自分の心の中だけにしまい込んで鬼籍に入られていった元開拓団等の皆さんもまた少なくなかったであろうと思います。語りたくなかった史実、触れられたくなかった記憶、それが満蒙開拓の一面でもあります。積極的にこれらの史実を掘り起こす記念館等の建設に消極的であったことも無理なかろうかと思います。

次に、満蒙開拓自体が実質的には侵略の加担としての側面を持ち、そのことに対する後ろめたさ、あるいは自己否定することへの抵抗感等が多くの人々にあったのだろうと思います。当時、送り出した側も、送り出された側も、満州は五族協和、王道楽土の理想の地であり、満州に行くことがお国のためになると言われ、またそう信じ込み、渡満していきました。また、当時の農村は貧困にあえぎ、分けてもらえる田畑等も無かった次男、三男坊たちにとっても、満州に行けば二十町歩の大地主になれるということへの憧れ、欲求も

あったことでしょう。しかし、残念ながら、満州自体が日本関東軍等主導による日本の傀儡(かいらい)国家、日本の植民地とも言えるものでもあり、開拓団も結果としては日本の中国侵略の加担者であったという事実は拭い去れない事実です。勿論、実際に荒れ地を開墾した開拓団も少なからずありましたが、多くの開拓地は現地中国人の農地や家を半ば強制的に取り上げ、これを日本人開拓団に分け与えたところも多くありました。現地中国人にとっては日本人開拓団はやはり侵略者の片割れであったわけです。国策により送り込まれた開拓団もまた犠牲者ではありますが、中国側にとっては侵略者であり加害者であったという事実はきちんと把握していかなくてはならないことです。しかしながら、今でも、開拓団等の生き残りの方の一部には、「私たちは犠牲者。私たちは何も悪くない」と言い張っていたり、あるいは中には「あの満蒙開拓の思想は正しかった」、「あの日本からの満蒙開拓のおかげで満州は豊かになった」等と考えている人も少ないながらいらっしゃいます。そこまでは思わないながらも、戦後になり冷静になって自分たちのしてきたことを振り返る中で、結局は自分たちも侵略に荷担してしまったという負い目は、都合の悪いことにはなるべく触れたくないという思い等からも、満蒙開拓の史実に正面からは向き合ってこなかった一因であったろうと思います。

また、これも余り知られていないことですが、満蒙開拓からの生還者たちの多くは再び開墾等に就き、戦後も苦労が続き、生きていくこと自体で精一杯で記念館等の形を残すだけの余力を長らく持つことが出来なかったという事実です。満州で、シベリアで、多くの悲しい犠牲を出しましたが、どうにか生き延びて日本の土を踏んだ人たちもまた新たな試練が待ち受けていました。元々が分けてもらえる田畑等も無く、あるいは家・田畑等を全て処分して渡満した人たちがほとんどですから、多くの人たちは日本に帰っても住むべき場所も無く、再び安住の地を求めて、日本の狭い国土の山間地や荒れ地等に開墾に入らざるを得ませんでした。この飯田・下伊那も同様にて、新天地を求めて、遠く岩手県の開拓地や富士山麓の開拓地等、再び全国に散っていき、その地でまた辛苦を重ねることとなりました。私の両親も同じ下伊那郡内の山間地に開拓に入り、皮肉なことに日本に帰ってからが林野を切り拓いての本当の開拓をすることとなり、「改めて、自分たちの耕してきた田畑を日本人に奪われた中国農民の悲しみ、恨みが分かった」と今年８９歳を迎えた老父はいつも述懐しています。そのような戦後の辛苦の積み重ねの中で、開拓体験者たちも生きることに精一杯で、自分たちの満蒙体験を語り継ごうとする、その精神的、経済的余裕を持てるまでには多くの歳月を要し、ようやく経済的に余裕を持てるようになった頃には多くの開拓関係者が高齢化し、あるいは鬼籍へと入ってしまっていました。旧満州等で亡くなった仲間達の慰霊のための慰霊碑等が国内各地で建てられるようになったのも、経済的にどうにか余裕が出来てきた昭和４０年代以降のものが大半であることも多くはこういった事情等によるものです。

そして、もう一つ、どうしても指摘せざるを得ないのは、この日本国内において、戦後、旧満州、満蒙開拓等の史実に日が当てられることを好まなかった、もっと言えば不都合とする立場、勢力があったのではということです。それは、戦前、旧満州へと開拓団を積極的に送出した側の為政者、教育者、そしてその関係者等であり、また旧満州現地の終戦時に、決して望んではないにしても結果として開拓団同胞等を置き去りにして我先にと逃げ帰った人たち、あるいは関東軍関係者、そういった人たちの思いでもあろうかと思います。

良く言われることですが、戦後、現地に残された残留孤児、残留婦人等のほとんどは開拓団の子女であり、残留孤児等の中にこれ以外の旧満州関係者、敢えて言うならば、日本軍（関東軍）関係、満州国政府関係、満鉄関係、満拓関係等、軍、政・財界関係者等の子女等はほとんどいません。勿論、開拓団以外でも悲惨な目に合われた方も少なくないでしょうが、やはり置き去りにされた開拓団の悲惨さは語り尽くせないものがあります。彼らのほとんどは開拓団よりもいち早く前線を逃れ、汽車等で南下し、難を逃れて帰国することが出来ました。比較的裕福であり教育水準も高かったこれら開拓団以外の関係者、子弟等は帰国後も再び成功する者も少なくありませんでしたが、体一つでようやく帰国できた開拓団員たちを待ち受けていたのは前述通りの過酷な貧窮生活でした。戦争という非常時であり、生きていくためには仕方のないこととは言え、開拓団同胞を置き去りにして逃げてきてしまったという負い目からは逃げられず、これら関係者等にとって満州の記憶は余り触れられたくはなかった史実であったろうと思います。

この記念館構想に関しても、旧満州関係者で著名人等はいっぱいいるのだから、そういった人たちに支援等を頼んでみたらというご意見も多く頂きます。勿論、中にはご協力頂ける方もある一方で、比較的冷たい反応を示される方も実は少なくありません。それは前記通りの背景があるからなのだと思います。

そしてそれはやはり結果として開拓団を置き去りにしてきた関東軍等軍関係者にとっても同じ思いであろうと思います。旧満州の２／３を放棄し、南満州等で敵を防ぐという戦略上の理由の下、関東軍は敵に知られることを恐れ、開拓地の日本人同胞にも秘したまま南下してしまいました。結果として開拓団を置き去りにしたどころか、敵の追撃を防ぐために、鉄橋や鉄道も破壊し、逃げる道も橋も断たれ、また守るべき軍隊も無い同胞開拓団たちのたどった悲惨な末路を日本軍関係者たちは戦後どのような思いで受け止めていたのでしょうか。勿論、軍上層部からの命令には従わざるを得ず、同胞たちを置き去りにせざるを得なかった関東軍将兵たちの多くは内心忸怩(じくじ)たる思いもあったことであろうと思います。また、軍関係者の方の中でも、戦後、勇気をもって率直にそのことを語り継ぐ努力をしていらっしゃる方もありますが、多くの方たちは口を閉ざしていらっしゃるのではないでしょうか。しかし、守るべき同胞たちを置き去りにしてまで守ろうとした国体護持とは一体なんであったのか､国民を守らずして一体誰を守るための軍隊であったのか、満州問題を考えることは、国とは何なのか、国と国民とは何なのか、そういったことについて考えさせられる問題でもあります。

３．記念館建設事業への多くのご支援について

こういった多くの背景等もあって、旧満州、満蒙開拓等に対して日が当てられることは少なく、風化しつつあるのが実態です。戦後６０年余を経、満蒙開拓関係者等も少なくなりつつある今、これが満蒙開拓に関する記念館等を建てられる最後のチャンスであろうと思っています。総体的には満蒙開拓等が風化しつつある一方で、ここ数年、言い方は余り良くないかも知れませんが、ちょっとした満州ブームがあるのではと感じてもいます。テレビ等で満州関係のドキュメンタリー、ドラマ等が流されたり、大型書店等に行くと満州関係の新しい書籍等が並んでいたりします。

また、現在、全国各地で好評を得て上映されている羽田澄子監督の「嗚呼、満蒙開拓団」のヒットも大変嬉しく、心強いことでもあります。羽田監督からは私どものところへも激

励のお電話を直接頂き、また毎日新聞（９／８夕刊)、週刊新潮１０／１日号の「掲示板」での羽田監督のコラムにおいても映画のことと共に、この記念館のことについても触れていただき、本当にありがたい限りです。このコラム等を読まれた方の中からお便り、お電話等頂いた方もいらっしゃいます。羽田監督自らがナレーションをお務めになられた同映画の中でも、最後の方で、羽田監督は「なぜ、このようなこと(満蒙開拓)が起きてしまったのか。この今の平和を大切にしなくてはならない」と問いかけられています。あの映画は「忘れてはいけない」という貴重なドキュメンタリー映画であると共に、また「では私たちはこれから何をしなければならないのか」という新たな問題提起、問いかけでもあると思います。羽田監督からの激励にお応えするためにも、私たちは記念館の必ずの完成を果たしたいと心しています。

心強いご支援と言えば、先般、作家の井出孫六先生にも、私どもの記念館準備会の名誉顧問となって頂けることをご了解頂くことが出来ました。ご周知の通り、井出先生は直木賞作家でもあり、また残留孤児問題等にも大変お詳しく、先般の残留孤児訴訟では証人として法廷にも立たれ、残留孤児問題についての詳細な問題指摘等をされておられます。今夏、井出先生の蓼科三井の森の別荘をお訪ねし、当記念館へのご指導ご協力をご要請申し上げたところご快諾頂きました。本当にありがたいことです。

羽田監督、井出先生等始め、ご支援頂ける皆様方の輪も徐々にながら拡がりつつあります。これからもどうか宜しくお願い申し上げます。

週刊新潮２００９年１０月１日号掲載

週刊新潮 掲示板

羽田澄子　私の最新作は『嗚呼　満蒙開拓団』だが、映画を観た人の反響から私は改めて多くの人が旧満州開拓団に深い関心を持っていることに気づかされた。

胸を打つお手紙や自費出版のご本が届く。これを多くの人に伝えたいと思っていたが、長野県下伊那郡阿智村に「満蒙開拓平和記念館」が２０１１年に開館することを知った。満蒙開拓の史実、資料を記録、保存する記念館で、現在資料を収集中である。自費出版や資料をお持ちの方、ご連絡頂けませんか。「満蒙開拓平和記念館」事業準備会〈Tel０２６５・２４・６１８６〉（記録映画作家）

４．なぜ、ここに記念館を建設しようとするのか

事務局長を務める当方も機会ある度に県内外等で当記念館構想についてのお願い等をさせて頂いております。そのような中で、「なぜ、飯田・下伊那のような辺鄙(へんぴ)な所に建てるのか。もっと人が集まる都会とかに建てた方がいいのではないか」というご意見を頂いたことがありました。確かに飯田・下伊那は東京からも高速バスで約４時間強、ＪＲ飯田線はローカル線マニアならば知る人ぞ知る辺鄙な交通不便なところであり、ここに記念館を建てようというのは確かに集客上からは不利なことでしょう。しかし、単に都会のような人が多いところに建てさえすればそれで人が見に来てくれるでしょうか？私はそれは無理だと思います。大切なのは、その記念館に係わる人たちの思いこそ大切であり、そしてそこから発するものが人々の心を打つかどうかであると思います。

ケースは全く違うかと思いますが、鹿児島県の薩摩半島に「知覧特攻平和会館」という記念館があり、沢山の来訪者があります。私も以前に行ったことがありますが、実はその際に、薩摩半島の反対側にある大隅半島の鹿屋市にある「鹿屋航空基地資料館」という所

にも行ってきました。実は、かつて、知覧は陸軍の、そして鹿屋は海軍の航空基地があり、それぞれ特攻基地でもありました。この鹿屋の航空資料館、失礼ですが知覧のものよりも遙かに建物も立派で、敷地も広大で、見事に復元された名機ゼロ戦が展示されていたり、それなのに観覧は無料です。しかし、残念ながら、有料(確か５００円)でも多くの人で賑わう知覧に対して、鹿屋は夏休み中の訪問であったにも拘わらず閑散としていました。実はここにヒントがあると思います。鹿屋の資料館は自衛隊の関連施設として運営されており、それがために施設も立派で無料です。それに対して、知覧のものは、そこには特攻にまつわる多くの人たちの気持ちが込められており、工夫があり、そこに行くと、生きたくとも「お国のために、家族のために」と散っていった若人たちの思い、特攻機を見送った鹿屋の人々の思いなどが伝わってきます。だからこそリピーターを含めての多くの来訪があり、人づてに「あそこは良かったから一度行ってみな」と伝えられていくのだと思います。

いくら人が多い場所でも、それに関わる人々の気持ちがこもっていなかったら、結局は閑散としてしまうのだと思います。そういった意味で、私はこの飯田・下伊那は満蒙開拓に係わる記念館を建てるのに最適の場所であると思っています。全国的には記憶の彼方に消えつつある満蒙開拓ですが、この飯田・下伊那では、全国で最も多くの開拓団を送出してしまったという言わば「負の遺産」を、戦争への反省、平和希求の発信、そして国際交流へと「正の遺産」へと置き換えるための努力が一貫して続けられている地域であると思います。勿論、この地域でも満蒙開拓のことは徐々に風化しつつありますが、それでも満蒙開拓を語り継ごうという姿勢、そういったことに関わろうとする人の数は全国でも最も多い地域であろうと思っています。であるからこそ、この地域でこそ満蒙開拓記念館の可能性があるのであり、ここで建てられなかったら、それはもうどこでも建てられないだろうとまで思うのです。

しかしながら、この活動に関して、残念ながら、この地域でさえあっても若い方々の参加がなかなかありません。私も機会ある度に若い人たちにこの活動への参加を呼び掛けているのですが、力不足なのか、ほとんど参加がありません。特に、この地域は満蒙開拓関係者も多く、その２世、３世の人たちの中から、せめてもう少し私のような変わり者が出てきてくれたらと願っているのですが、残念ながらそれもありません。満蒙開拓自身が現代では極めてマイナーなテーマであることは私も客観的にはわかっているつもりですが、同時にこのことを語り継ぐことの重要性も痛感しています。しかし、現実はなかなかそうではありません。それはやはり、大変厳しく失礼な言い方ですが、体験世代の皆さんたちの伝えようという努力の欠如なのではないかと思うのです。勿論、前記の通り、語ることも辛い悲惨な体験、そして戦後の辛さ等を思えば、そのことを積極的に語り継いでくれと迫ることは過酷なことであり控えなくてはならないことかも知れません。多くの開拓団の皆さんは「息子や孫達に話しても、そんな昔のことなんてと聞いてもくれない」と嘆かれ、語り継ぐことをあきらめてしまっている方がほとんどです。しかし、私事ながら、私自身の体験として、長じてからもこういったことに頭を突っ込んでいる原点が、やはり自らの両親からの満蒙開拓に関する率直な語り継ぎにあったことを思うと、やはり体験者自らの語り継ぎが不可欠であると思います。そして、その語り継ぎの拠点としていくためにも、記念館のような資料を保管し、語り継くための施設は不可欠であると思うのです。

この記念館構想に関しては様々な人々のいろいろな思いがあると思いますが、忘れては

ならないのは、被害者の立場であった中国側の人々の思いです。この点については私たちも構想立ち上げ時から気に掛けているところであり、中国側にこの記念館の趣旨を正しく理解して頂くべく、昨年春に飯田日中友好協会の河原進会長以下により東京の中国大使館を訪問し、記念館の建設趣旨等を説明し、「満蒙開拓という史実を客観的にそのままに語り継ごうというものであり、決して旧満州や満蒙開拓等を正当化したり、賛美したり等するものではない」ということ等もお話申し上げ、事業への理解と協力のお願いを申し上げました。応対してくださった大使館関係者の方々も、趣旨をきちんと理解してくださり、同時に「日本が旧満州体験という大きな歴史体験をしたにも拘わらず、それに関わる記念館、資料館等が日本国内に一つもないということ自体が不思議なこと。歴史を正しく伝え、史実を残すためにも是非頑張っていただきたい」という激励の言葉まで頂きました。このことを国、政府関係者の皆さんもどうか心に刻んで欲しいと思います。全く指摘された通りで、日本があの満州体験を通じて何を学んだのかを、アジアに、世界に向けて発信していかなくてはならないと思います。そして今の日本が平和大国であることを知ってもらわなくてはならないと思います。そのための発信の拠点としてもこの記念館は必要なものとなるはずです。

また、これとは別の立場として、この記念館を「満蒙開拓の正しさを伝えてくれるものでは」という誤った期待をされる方、逆に「南京大虐殺記念館」を引き合いに出され、この記念館が「自虐的歴史観に立った非国民的なものではないか」と警戒される立場の方、いろいろな見方もあります。私たちは、右にも左にも寄らず、史実を正しく伝え、そしてあのような悲惨な体験が二度とあってはならないということを伝えていくことを目的としています。自虐的にもなることはなく、私たちは日本という祖国を愛し、その愛する日本が二度と国民や他国の人たちを不幸に陥れることが無きよう、この国と風土を守っていきたいと願っています。そのことが異国の地に、そして戦火に散った多くの人たちの犠牲を無駄にしないことであり、鎮魂なのであると思います。一部の遺族等の方の中には、「あの戦争が誤りであったとしてしまうと、自分たちの親族たちの死が無駄死になってしまう」という考え方をされる方がいらっしゃいます。勿論、戦火に散った人々のことは忘れてはならず、敬っていかなくてはならないことは当然のことですが、しかし、戦争の誤りを確認し、二度とあのような悲しい犠牲者を出さない国、世界にしていく努力をすることこそ、この尊い犠牲に真に報いることなのではないでしょうか。そういった意味で、私たちは、旧満州の地に散った人々の存在等を否定したり、単に非難したり等するものではなく、国策に翻弄されながらもそこに懸命に生きた人々があったという史実をきちんと語り継ぐと共に、同時に残念ながら、その満蒙開拓自体は歴史的には誤りであったという事実をもきちんと受け止め、二度とあのような不幸な犠牲者を出さないようにと語り継いでいくことが、旧満州の地に散った多くの犠牲者に対する鎮魂になると思うのです。

５．記念館建設事業に係わるお願い

長々と冗長な駄文となってしまいました。最後になりますが、貴重な誌面をお借りして、この記念館構想に対していくつかのお願いをさせて頂きたいと思います。

①．建設資金についての御寄付のお願い

建設資金の募金を受付させて頂いております。建設現地の阿智村においても税制上の特

例を受けられる寄附金受入窓口を設けて頂いております。詳しくは後記の記念館準備会事務局または当方までお問い合わせ頂ければ幸いです。

②. 準備会会員制度の創設について

この度、この記念館建設を支援して頂くための会員組織制度を創設させて頂きました。年会費は２，０００円です。こちらについても詳しくは事務局等までお申し込みまたはお問い合わせ下さい。

③. 記念館に展示等する資料等をご提供下さい。

記念館に展示する資料等を集めています。旧満州に関する物、満蒙開拓に関する物、私的なもの等も含めてどんなものでも結構ですので、情報等お寄せ頂ければ幸いです。

④. 記念館事業に関するご意見等をお寄せください。

当記念館建設を実現させ、より多くの人に見て頂けるような内容あるものにしていくために、皆様からのご助言、ご意見等をお寄せ頂ければ幸いです。

（「満蒙開拓平和記念館」に関するお問い合わせ等）
「満蒙開拓平和記念館」事業準備会　阿智事務所
〒３９５－０３０３　長野県下伊那郡阿智村駒場４４７－２
電話＆ＦＡＸ　０２６５－４３－５５８０
事務局長　寺沢秀文　連絡先　０２６５－２４－６１８６
（ホームページ）　http://www.manmoukaitaku.com/　満蒙開拓平和記念館

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

特集「歴史検証の旅」に寄せて（次頁から）

昨年、「友好の原点を歩く旅」を企画したところ好評だった。北京に３年ほど駐在経験ある経済団体にいた人も、「あまり東北には縁がない。ましてハルピン郊外の方正県には行ったことがない。ぜひ方正訪問の旅を」という要望があって企画した旅だった。

今年も８月 24 日から９月４日まで、同様の「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」を企画したところ、岩波ホールで旅のチラシを見た人も含めて２０人近い人々が集まった。実に多士済々、本当に勉強熱心な人たちが集まった。どちらかといえばひとり旅が好きな私も、関心のあるテーマで集まった人たちとの旅は、刺激もあってツアー旅行も悪くないものだと初めて思った。来年は参加者の要望もあり、チチハル、黒河、ノモンハン（ハルハ河）、そしてもちろん方正も回る予定をしている。

次頁からは、その時参加された方々の旅の手記である。以下、日程を簡単に紹介しておこう。大連からハルピンへ向かい、まず延吉から中朝国境の街・図們、そして龍井市に行き、旧間島省の元日本総領事館を見た。ここは、多くの人々が朝鮮半島から中国東北部に渡ってきた所である。近くの公園で、日本語を話す朝鮮の老人に会った。当時、朝鮮から渡ってきた人のようだった。その後、牡丹江から中露国境の綏芬河に行き、東寧で日本軍の地下要塞を視て牡丹江に戻った。それから大八浪、樺南で、大八浪・開拓団、旧弥栄村など開拓団跡地視察を経て佳木斯へ。そこから方正県に行き公墓参拝などの後、ハルピンへ。７３１部隊罪証陳列館などを視察して大連経由で帰国した。（大類）

感傷旅行の記

師岡　武男

旧満州への旅は、私にとっては「感傷旅行」の色合いを帯びざるを得ないだろうと、はじめから意識していた。それは私の年齢（83歳）と、旧満州との関わりからだ。

昭和19年に、慕っていた姉が、旧奉天で24歳の若さで病死している。満鉄にいた姉の夫は、間もなく関東軍に召集され、敗戦後は図們と延吉の山中を逃げ回った末にシベリアに送られた。父は敗戦後の奉天で、開拓団などの避難民の世話をしながら、発疹チブスで死にかかったという。妹は、ソ連兵の目を避けるため男装して寝ずの看病をした。私自身は18年に旧制高校に入っていたが、肋膜炎で千葉県の郷里で寝込んだまま動けなかった。延吉などに1996年に行ったことがあるが、死ぬ前にもう一度、満州に行って来たいという思いがあった。満蒙開拓団のゆかりの土地などを訪ねるという今度の旅の企画は、渡りに船という感じだった。

「嗚呼　満蒙開拓団」の映画の、岩波ホールでの上映の初日に出かけたのは、方正友好交流の会と大類事務局長とのお付き合いがあったというご縁による。大類さんは、私の参加している日中関係研究所の事務局長でもあって、その研究会に出ているうちに、方正の会にも顔を出すようになったという次第である。満蒙開拓団の悲劇は、中国残留邦人の悲しい物語とともに、私の心のどこかにこびりついているらしい。

さまざまな不運や悲運、さらには軍事行動によって沢山の日本人が亡くなった一方で、日本の侵略政策のために失われた中国人多数の命が眠っているのが旧満州である。それらの人々の霊を慰めることができれば、というのも、余命いくばくもない老いの身の感傷であろう。

歴史に学ぶ

宿泊した中国東北部の４つの都市（延吉、牡丹江、佳木斯、ハルピン）は、どこも新築の高層ビルが林立する大都会だった。そのほか開拓団の多数の避難民が集結して難死した方正県も、７３１部隊が「悪魔」の秘密施設を構築したハルピン郊外の平房地区も、同じように大市街地になっている。改革開放政策後の３０年間の経済発展は、多少の遅れはあるとしても確実に東北部にも及んでいた。旧満州時代の日本のホテルや建物が活用されていた時代は、もう過去のものだ。旧間島省領事館の官舎、牡丹江の旧満鉄社宅などが一部使われているのを見たが、周囲と比べるとがらくた同然のみすぼらしさだった。

旧開拓団の崩れかかったような農家の一部が、牡丹江と佳木斯の間の大八浪郷にはまだ残っていて、活用されていた。これが農村の貧しさを象徴しているのかどうかはわからないが、まさか観光用ではないだろう。高速道路の沿線の沃野のなかに点在する農家の風景は、特に貧しさを感じさせるものではなかった。農民の貧しさや、貧富の格差の途方もない拡大は厳然たる事実とされているが、行きずりの私たちに、簡単に見えるようなものではあるまい。見えたのは、秋の陽に輝く収穫期の広漠たる沃野と、ぴかぴかの大都会と、至る所に張り回らされた携

帯電話のアンテナだ。その昔に繰り広げられた日本軍の侵略も、抗日パルチザンの苦闘も、中国農民の災難も、日本人移民団の悲劇も、歴史への想像力を働かせて思い浮かべるしかない。

旧間島省の領事館のあった龍井市の公園で、トランプ遊びをしていた老人たちの一人が、しっかりした日本語で私たちに話しかけてきた。昔のことなどを、懐かしそうにとめどなく話した。写真を撮ったので、送るための住所を聞いたら、「子供の所にいる」と言うだけだった。日本人に対しては、相当なうらみつらみがあったはずだが、それは言わなかった。私は日本の革命詩人、槙村浩の「間島パルチザンの歌」（１９３２・３・１）を思い出していた。その一節はこんなふうだ。間島とはこういう所だったのだ。

おお、日章旗を翻す強盗ども！　父母と姉と同士の血を地にそそぎ
故国からおれを追い　いま剣をかざして間島に迫る日本の兵匪！
おお、お前らの前におれたちがまた屈従せねばならぬと言うのか
ふてぶてしい強盗どもを待遇する途をおれたちが知らぬというのか

中露国境の綏芬河の南約２２キロ東寧の旧日本軍要塞は、１９４５年８月９日のソ連軍侵攻に見舞われたところだ。牡丹江の第一方面軍司令官から関東軍山田乙三総司令官への発信「第一報。東寧、綏芬河正面の敵は攻撃を開始せり。８月９日午前零時」などを、関東軍報道部へ駆けつけた満州国通信社の山田一郎記者が確認して、「ソ連、全線にわたって侵攻」の第一報記事の原稿を書いたという（新聞通信調査会報、第 562 号）。山田記者は戦後、共同通信記者となり、私の職場の先輩だった。このソ連軍の侵攻が、その後の満州での日本人の受難を一挙に拡大したのだ。小高い山の中腹にある要塞跡への長い階段を登る体力のない私は、見学を取りやめる羽目になった。近くの歴史陳列館は見たが、その庭に聳えていた「蘇聯紅軍烈士記念碑」には、敬意を表する気になれなかった。

最終日に訪れた、ハルピン市街の南２０キロの平房区にある「侵華日軍第７３１部隊遺址」はやはりすさまじいものだった。ネットで検索すると「７３１部隊」は８０万件以上もあり、知識を得ることは易しい。私自身は、ずっと労働運動に付き合ってきたので、この種の事柄は「分かっている」積もりで過ごしてきたのだが、現地で見る「現物」の迫力はまた格別だ。

遺址の前の広々とした大通りには「新疆大街」の標識があった。最近の新疆ウイグル自治区での民族差別反対運動に、つい思いが及ぶ。中国政府は、ウイグル人の抗議行動をいわれなきものと弁明している。しかし旧満州の「五族協和」の標語の偽りを告発して闘ったのが中国共産党ではなかったか。中国もやはり、歴史に学ぶ必要があるのではないか。

「現物」と言えば、旅行団のメンバーには、開拓地から方正への避難行の途中で３人の妹さんを失った末、方正では沢山の難死者を積み上げて火葬にしたという悲痛な思い出を持つ吉泉さん（「嗚呼満蒙開拓団」に出演）など、歴史の生き証人が何人かおられた。この方々のお話に接したことも、私には身の引き締まる体験だった。

詠草　以下、つたない歌に詠んでみた旅行中の感懐である。

延吉にて

民衆の苦難の歩み跡見えず延吉栄えビル林立す

朝鮮の粗鋼を運ぶトラックの列緩やかに図們大橋

豆満江静かに流れ遊覧の小舟もありてなにごともなし

能弁に日本語を話す間島の朱相仁老よ健やかにあれ

間島に総領事館在りし日の遺跡に楡の梢静まる

槙村（浩）が間島パルチザンの歌詩いし昔はるかなるかな

満蒙開拓団

侵略のたくらみ果てし満州の沃野は黙し秋の陽照れり

あかあかと秋の陽照れる満州の野に聞こえずや鬼哭啾々

「嗚呼満蒙開拓団」の跡に祈る非命に逝きし魂よ鎮まれ

松花江悠然として流れたり佳木斯の朝に陽は昇り来ぬ

方正は日本人墓碑のみならず革命烈士記念碑も建つ

７３１部隊跡

侵略の非道の極みここに見る日軍７３１部隊跡

人類の愚行にページ加えたる侵華日軍７３１部隊

核弾を細菌弾を瓦斯弾を人類はいまだ持つにあらずや

人類の愚行を糺す道しるべ非武装九条世界に広まれ

（もろおか・たけお：1926年千葉県生まれ。52年共同通信社入社、社会部、経済部を経て論説委員で定年退社。現在日本記者クラブ、日本労働ペンクラブ会員）

物見遊山でない旅

矢島　敬二

中学3年で敗戦の日をソウルで迎えたわたしは小学校、中学校の修学旅行に無縁であった。そして中学で行われた団体の移動では「お前たちこれは物見遊山ではないぞ」という軍事教官の言葉をかならず耳にした。後期高齢者になってからの地域の友人とのバス旅行はすべて物見遊山で、日程はきついが確かに気楽である。こういう旅と比べると今回の「歴史検証の旅」はまさに「物見遊山でない」旅であった。日程も検証内容も厳しかった。

日程の終わりの9月3日に「731部隊罪証陳列館」で私は『老兵の告白』(黒竜江人民出版社刊、2003年、正式には『731部隊　老兵の告白、中国人による海外取材』、日本語)を購入した。この本には2000年と2001年に中国側が取材した証言が各9件、7件収められているが証言者の帰国事情も記入してある。そのなかで「1945年8月逮捕を免れ帰国」という言葉が気になり数えてみると2000年証言者のうち2人が敗戦時中国にはおらず、2人を除いた7人のうち3人が「逮捕を免れ帰国」となっている。また、2001年証言者7人についてはうち5人が「逮捕を免れ帰国」である。このことにこだわるのはソウルからの引き揚げでも軍人、警察官などが敗戦早々に帰国したという事実があるからである。

この早期の優先的帰国については青木富貴子『731　石井四郎と細菌戦部隊の闇を暴く』、(新潮文庫、2008年)に記録がある。これによると陸軍参謀本部対ソ主任の朝枝繁春参謀が東京から長春(当時は新京)に飛び軍用飛行場で石井四郎と約1時間立ち話をしたと書かれている。8月9日または10日である。朝枝の細かい指示は(同書p.173)　1．731部隊部隊員の早急な日本本土への帰国、証拠物件の地球上からの雲散霧消、2．このための爆薬5トンの手配、3．建物内のマルタの電動機による処理とその灰の松花江への廃棄、4．部隊内の博士号をもつ医官53名の軍用機による日本への送還であり、さらに職員送還のため平房站駅に大連直通の特急が待機を手配済みで2500名輸送可能と述べたという。これが天皇の命令として発効された大本営陸軍部の命令として石井に直接伝達された指示である。この指示が帰還当事者に対して残留を余儀なくされた「満州在住開拓者」への免罪を保証しているのだ。この種の免罪意識は映画「嗚呼　満蒙開拓団」のなかの虎頭方面からであったかの帰国軍人の乗車列車の話にも感じられた。

話を「老兵の告白」にもどすと2001年の証言に関して「日本に行く前、調査団は32名

の元隊員と連絡を取っておいたのだが、結局わずか7名しか当時の状況を明らかにしなかった。」という記述が気になる。元隊員の秘密保持に関する強固な意志になお旧日本軍の体臭を感ずるのだ。

検証の旅の重みとして次に書いておきたいのは満州開拓団として日本政府によって、朝鮮から強制移住させられた朝鮮人開拓民のことである。金賛汀著『パルチザン挽歌』(御茶の水書房、1992) は副題「金日成神話の崩壊」の示すように北朝鮮から発表されている金日成の公式伝記の疑問点を旧ソ連、中国での朝鮮族への取材活動によって明らかにしたものであるが、次のような記述がある。「日本の満蒙開拓政策などの遂行に朝鮮人は日本人の手下のような下請的な存在として、中国侵略に協力していると白眼視する中国人も多かった。日本の降伏後、日本に対する報復は、日本人の開拓村に対する襲撃となって表れたが、襲われたのは、日本の開拓村だけでなく、朝鮮人の開拓村も襲われたところが少なくなかった。」　襲撃を受けた朝鮮族の人たちの感情は、報復された日本人の感情とは異なるものであったに違いない。

今回の検証旅行の第2日8月29日に延吉から図們、龍井へのバスに朝鮮族の2人が同乗してくれた。東京の恵泉女学院大学人間社会学部専任講師の李泳采さんと延吉の大学院女子学生の石梅花さんである。石さんは日本語で何人かのツアー参加者に開拓団関連の体験を車中で聞かせてもらえたことを大変感謝していたが、一方「なぜ満州に来たのですか」という問いに誰も答えてくれなかったと話していた。そのことについて石さんと話はしていないから以下は推測に過ぎないがおそらく満州に移住させられた朝鮮族の人たちにしてみれば「なぜ満州に来たのか」は明らかで日本政府の強制があったからというのが答えであろう。石さんはそういう強制よりは弱いものとしても、なんらかの強制があったのではないかという疑問を明らかにしたいと考えていたのかと思う。

この推測はともかく、インタビューした人たちはすべて満州移住を決断した人たちではなく、決断した人に随行した世代である。すでに開拓者受難のときから64年を経ていて移住を決断した世代は他界しているのだ。

朝鮮族と中国人との衝突はしかしこのときに始まったものではない。『パルチザン挽歌』にも書いてあるが（p. 147）万宝山事件が1931年7月に長春市郊外で発生している。これ

は朝鮮族と中国人農民との水路を巡る事件である。この紛争に日本領事館が介入し日本側の武装警官が多数の中国人農民を負傷させた。朝鮮国内で朝鮮族の迫害として報道されたこともありピョンヤンで中国人が 133 名殺害され、中国人の反朝鮮人感情が当時急速に高まった。この感情はやがては朝鮮と中国との民族連帯による満州侵略反対闘争へと解消を見るが、その道筋はかなりの屈折をたどる。

朝鮮族の活動家の第一義的な目標は満州の日本軍を敗退させ中国朝鮮両民族の解放を実現することであり、朝鮮の解放は朝鮮人活動家の最大の目標ではないと規定されたのである。朝鮮独立のための朝鮮にある組織に従属する団体の中国内での活動は禁止された。朝鮮族の活動家はすべて中国革命のための中国組織への従属を命じられるようになったのである。1935 年の国際共産主義組織の指示に基づく決定であった。

延辺朝鮮族自治州への初めての旅は『パルチザン挽歌』に出てくる多くの地名を身近なものとし、日本が画策した満州侵略の歴史を深く脳裏に刻みつけることになった。

（やじま・けいじ：（社）日中科学技術文化センター理事、元東京理科大学経営学部教授、1941－45 在ソウル（小学 5 年ー中学 3 年）、戦後はじめて 2008 年 3 月ソウル訪問、1973 年広州交易会技術交流会に参加（テーマ：化学プロセス汎用シミュレータ JUSE-GIFS）。

県政府を表敬訪問した後、県政府の玄関で記念撮影

右から５番目が矢島敬二さん（団長）。その左が景麗玲副県長

満州開拓団と居留日本人の悲劇の跡を巡る旅

酒井　旭

１．参加の動機

今回の旅行は、戦前、小学校入学前から中学２年生まで住んでいた佳木斯の街や、昭和20年に３か月ほど勤労奉仕に行っていた弥栄村開拓団の跡地を訪ねるというので参加しましたが、内容の濃い、考えさせられることの多い“学びの旅”でした。

引き揚げ後64年間、満州時代のことは振り返らず、前を向いて歩んできた自分の考えが変わったのは、昨年末、３歳年上の姉が亡くなったことでした。姉は終戦の年の３月、佳木斯高等女学校を卒業し、そのまま佳木斯の関東軍陸軍病院の看護婦に召集され、シベリアの収容所で16歳～18歳の青春期を過ごしましたが、復員後、シベリア時代の話は一切してくれませんでした。思い出したくもない地獄の抑留生活だったことと思います。

今年の５月の佳木斯朝日在満国民学校の同窓会で姉の同級生を探し、シベリア抑留を経験した話を聞かせてほしいと訴えました。今回の旅も『嗚呼　満蒙開拓団』の映画上映会の際、佳木斯と弥栄村を巡るツアーというパンフレットが目にとまり、参加することにしました。

２．弥栄村開拓団の勤労奉仕

青年男子が全員関東軍に徴用され、人手不足になった開拓団で、中学２年生のひとクラスを受け入れ、宿泊、食事の面倒をみてくれた開拓団のおばさんたちにお礼を言いたい・・・という気持ちも、今回“弥栄会”という同窓会がある事を教えてもらい、果たすことが出来そうになりました。

開拓団の人たちを含む在満民間日本人の受けた悲惨な苦しみは、遠い過去の出来事としてひっそりと、この世から消えて行こうとしています。今回の旅でこの人たちが辿った苦難の途を巡礼し、64年前のことに想いを馳せることで改めて、どのように歴史の事実を若い世代に伝えたら良いか？　自分自身の記憶に改めるべき点はないか？　を確認する旅でもありました。

３．真っ先に逃亡して行った関東軍

そのひとつに「侵攻してきたソ連軍に対する関東軍の応戦ぶり」がありました。８月９日ソ連軍の爆撃機が佳木斯に飛来したという知らせに、急ぎ佳木斯へ戻った中学２年生は関東軍の将校から“貴様たちは佳木斯市民の護衛に就け”と命じられ、三八式歩兵銃と弾薬を支給され、避難する市民の最後尾について列車を待ちました。次々に発車する列車は軍服を着た関東軍の兵士たちで満員でした。ようやく乗せてもらった列車も、動いては止まり、降ろされて、次の指令を待つ心細い逃避行でした。最優先の兵士たちの列車の行く先はソ連軍が攻めてくる方向とは反対の方向でした。珍しく一等車の客車が、空席が半分もある状態で入ってきました。避難民の団体のリーダーが乗せてもらえないか？　と交渉

している様子・・・でも入口に立っていた軍人に、アッチへ行けと怒鳴られていました。あれは　高級将校の家族たちじゃないか？　と誰かがつぶやいていました。

関東軍は民間人を見捨てて、真っ先に逃亡して行った――これが長い間　自分の頭の中に焼き付いていました。

しかし、東寧のトーチカなどを見て、最前線に配置された関東軍兵士には真面目に戦って戦死した者もいたのだ・・と。

帰国後、引揚援護局の資料で知った数字は、在満民間人１５５万の中、引き揚げ前に自決、殺害、病気で死亡した者２７万。うち、開拓民２７万中、死亡８万。関東軍７５万の中、ソ連軍と戦って戦死した数は不明ですが、交戦した部隊の人数から推定すると、１万足らず（？）。もし、７５万の軍隊が８月１５日まで国境線でソ連軍を食い止めていたら、彼らを南満州まで運んだ満鉄の列車で開拓民全員を避難させることができたのではないでしょうか？

４．　関東軍の匪賊討伐

昭和１９年、中学生が関東軍の佳木斯師団に体験入営をした時、将校から“匪賊討伐の自慢話”を聞かされました。「日本人が匪賊に襲われたら、出撃し、犯人を捕捉できなかった、というわけにはいかないので、とにかく匪賊襲来現場の近くの部落を焼き打ちにして婦女子全員皆殺しにしたのだ――」とのこと。それが　匪賊を殲滅したということで、「懲らしめないと、奴等はつけあがるからなア、　アッハッハ・・・・」。

この“見せしめ”のおかげで、匪賊の襲来は確かに減っていきました。しかしこの恨みは敗戦時、まとめて報復されました。それも報復の対象は武装した関東軍へ、ではなく、トボトボと避難行を続ける民間の婦女子に向けてでした。

列車で避難した佳木斯中学生は、佳木斯とハルピンを結ぶ鉄道（佳浜線）の途中駅、綏化に停留させられ、ソ連軍の武装解除を受けました。

５．姉のシベリア抑留

ただ“方正”というところは佳木斯高等女学校の卒業生で佳木斯陸軍病院の看護婦として徴集された姉（１６歳）たちが避難行の途中、ソ連軍に襲われ、同級生のひとりが拉致された場所として記憶にありました。その時の情景が、今回の旅行で知り合った打田さんから教えていただいた本『従軍看護婦たちの大東亜戦争』（祥伝社）、佳木斯第１陸軍病院勤務　日赤救護班有志　“帰ってこなかった見習い看護婦”（Ｐ279）に記されていました。「一列に並んで方正の司令部目指して歩いていた時、ソ連軍の兵士の乗ったジープが襲い掛かり、一人の見習い看護婦をジープに引きずり上げ、走り去った。“婦長殿助けて！！軍医殿　助けて！！”と、暗闇に尾を引くような悲鳴を残して・・・・。」　姉の友人のその方（上田房枝さん）の消息は不明のままで、シベリア抑留から復員した姉たちが懸命になって探しても、手がかりになる情報は得られずじまいでした。青酸カリ自殺をされたのか？　残留婦人になられたのか？？？　もし、この上田房枝さんという方が方正地区に残留婦人としておられたか？　消息をご存じの方がおられたらご連絡ください。

６．残虐非道な関東軍細菌部隊

ハルピンで細菌部隊７３１罪証陳列館を訪れ、残虐な生体実験の実態を示されました。ここまで鬼になれる？？？・・・・すべての日本人が狂気になって鬼畜米英打倒、一億玉砕を叫んでいた時代とは言え、ここまで非情に人間を殺せる神経に怒りを覚えました。ガイドの馬天龍氏の説明の中に聞き流せない言葉がありました。ここ（ハルピン郊外：平房）と新京の１００部隊ではペスト菌保菌ノミやチフス菌保菌シラミを大量に飼育していた・・・・とのこと。

帰国後　細菌部隊のことを記述した本
『戦争と疫病－７３１部隊がもたらしたもの』本の友社　および
『生物戦部隊７３１』草の根出版会、
『老兵の告白』黒竜江出版会
を読み、本格的な細菌戦争の準備が完了し、中国西部の数か所で散布を実行していたという事実、ハルピン・新京の住民が巻き添えになることも承知の上、これら７３１部隊が、ソ連軍侵攻前に飼育施設を破壊し大量飼育の蚤、シラミ、ネズミを散布して逃亡していったことも判りました。

ハルピン、方正、新京の避難民収容所で大量に繁殖したシラミ、大流行した発疹チフス。開拓民や民間人の避難民で、直接、ソ連軍や地元農民の襲撃を受けて死亡した人数を上回る（少なく見積もっても１万数千人の）死亡者を出したこの伝染病と、７３１部隊、１００部隊の行った行為との間に関連は無かった、と言えるでしょうか？

昭和２０年冬、自分自身が避難途中、略奪を受け、着のみ着のままで辿りついた新京の避難民収容所で発疹チフスに感染し、４０度以上の高熱に生死の境をさまよい、一緒に伏せっていた父親を亡くしただけに、衝撃的な情報でした。

細菌部隊７３１罪証陳列館に記されていた“生体実験で殺された人　５，０００人、被害者総数　３０万人－”――　この中に、ペストやチフスで１９４５～４６年に死亡した一般住民が含まれていることを知りました。

７．償い

これほどの犯罪を行いながら、日本政府はこの事実を認めようとせず、被害者の遺族・子孫への賠償や、感染症流行対策、医薬品・医療の援助にも全く背を向けてきました。　せめて、７３１部隊罪証陳列館に、日本政府として“謝罪の碑”と“犠牲者の供養塔”を建立しても良いのではないでしょうか？

１９９５年の村山談話を継承すると言っている鳩山首相へ直接訴えることができれば実現するのではないでしょうか？

８．今、幸せそうな中国の人たち

それにしても　訪ねた街の活気溢れる賑わい、人々の穏やかな表情、一人っ子を大事に育てている親の愛情、旅行客が日本人と判ってからも見せてくれた笑顔・・・・この国の人々は今が一番幸せなんだ――と、しみじみ感じました。関東軍が去った後も、文化大革命時代、知識人の吊し上げ、教育の停滞、公安局の監視、互いに陥れる密告制、息の詰ま

るような雰囲気に耐えて解放されたのはこの３０年ほど・・・。ひとびとは心から今の平和の有難さを噛みしめているようでした。

９．再び同じ悲劇を繰り返さないために

現在の幸せは、あの悲惨な十五年戦争と、敗戦時の悲劇を経なければ到達できなかったものでしょうか？　日中両国で１，０００万人以上の犠牲者を出したあの悲劇は避けられなかったのでしょうか？　別の選択肢はなかったのでしょうか？　もし、それらの方策がもっとひどい結末をもたらしたのであれば、当時の判断は間違っていなかった、やむを得ざるものだったと納得出来るでしょう。しかしあの時、こうすればあのような悲劇を生ずることなく、解決できたという方策が見えてきたら、将来同じ過ちを犯さないヒントになるのではないでしょうか？

このテーマに関心を持たれた方たちと　勉強会をスタートできたらと考えながら、帰国しました。

（さかい・あさひ、昭６年大連生まれ。２１年引き揚げ。カナダ McGill 大学院留学後、カナダ国立研究所での勤務を含め研究歴５２年。専門：化学（高圧反応工学、高分子化学、放射性同位元素標識抗原抗体反応、生命化学）現在も国内・国際学会で研究報告継続中。

私には亡き母とこの地で亡くなられた

満洲開拓団員への鎮魂の旅でした

宮下　春男

１．近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅に表題の思いで参加しました

旅行募集のテーマに躊躇しながらも、示されたルートと専用車で各地を巡るとの案内を見て、またどんな方が参加されるのか見当も付きませんでしたが、私自身はこれらの地で亡くなられた多くの満洲開拓団員などの方々への鎮魂の旅と決め応募、参加しました。

しかし戦乱又は建国間もない中国しか知らない私には、改革開放後に年率10%を超える勢いで経済成長していると報じられている中国の地方ではどんな状況だろうか、地図では国道が、例えば佳木斯方面では201号線が建設されていると云う程度の知識はありましたが、それでも想像し難いものがありました。座席のクッションを用意したほうが良いのではないかなど気使いをしました。説明会でもパジャマ、スリッパ、洗面用具等の用意、電圧も220Ｖで、プラグは3穴であり、デジカメなどの充電器等の注意があり、私は昔を思い懐中電灯までも用意しました。が後に述べますように全く杞憂でした。

旧弥栄村も見学ルートにありましたので運が良ければ1949年12月に亡くなった母の骨を埋葬した近くに行けるかも知れないとの期待も持ちました。2002年に佳木斯・長発屯へ旅行した友人の、当時は国道が建設中であり雨中、農村へ入った時は泥濘で車が動けずに途中で引返したとの話を聞いていましたので、どの程度走れるのか見当がつきませんでした。それでも主催者に牡丹江から虎林、虎頭方面を廻って貰えないだろうか、旧弥栄村ではある部落を訪ねたいなど無理を申してご迷惑をお掛けしました。母の骨を埋めた近くには行き着くことができませんでしたが、全体の結果は一言で言えば素晴らしいもので、心中は巡礼、感激の日々でした。

運転手さん、メインガイドさんは延吉からハルピンでバスにさようならをするまで一緒で、連日、朝早くから夜は行き着くのが8時過ぎとか、食事を終えてホテルに着くのは9時半過ぎとかであっても、丁寧に対応、運転してもらいました。バスで各地を巡る旅を企画された主催者への感謝と共に道中の地理や開拓団、731部隊等の歴史を解説し、食事の世話等大連まで親身のガイド申波さん、運転手の黄家春さんにお礼を申し上げたい。

２．旅での第一印象

1973年、私は北京駐在中に大連、鞍山、瀋陽、長春へ旅行しましたが、当時は自動車も少なく、北京でも自転車の大群と2両編成のトレーラバスが主でした。旅行中も都市での道路渋滞はなく、自転車の群れは北京と同じとの印象で、ホテルへは殆どの日用品を持参していました。当時は“開放都市”が設けられ、それ以外の地へは旅行することが出来なかったので、開拓団跡地などは想定外であり、また新中国の経済状況視察という目的もあり工場見学等が主であったので、遠距離の移動は飛行機と列車、車は都市の中だけでした。

なので比較は意味のないことでありますが、今回、36年振りの東北地方は、パジャマも無くトイレットペーパに難渋し、シャワーのみで仕切りがなくトイレの床がぬれた延吉で、やっぱりかと思ったのですが、他都市のホテルでは日本と同じような充実振りで歯ブラシ、櫛、スリッパ等は使い捨て用具、最も感心したのは2極プラグのコンセントが3極のものと並行して設置されており、240V対応の機器であればそのまま使える便利さでした。

生水は下痢や腹痛の原因でしたが、今回はペットボトルの水が無料で（毎朝1本）置いてあり、また自由に購入できるので生水で腹を壊すことはありませんでした。室内スリッパの包装表面にはお持ち帰りくださいと書いてあるホテルもありました。テッシュペーパーも常備されていました。これ等は新しいホテルだからなのかもしれません。

テレビも完備でチャンネルも多くニュース、劇映画、全米テニス、夜には日本からのＢＳ、ＮＨＫ等が日本語で聞けることもあり、あるホテルでは朝入らないので従業員に連絡し来てもらったのですが、電波が弱いので日中は入らないと云っていました。綿製品等には厳しく、ホテルをチエックアウトする時、従業員が室内備品の点検が終わるまでは発車できないとして10分以上も待たされたことがありました。部屋のキー(カード式)を早くフロントに返してとは毎回のガイドさんの要請でした。某市ではタオルやバスローブなどが不足した場合の弁償金まで掲示しているホテルもありました。

かつて敗戦で逃避する開拓団員と家族が道中、身包み剥がされて腰巻一つ、パンツ1枚にされ、麻袋を纏い収容所に辿り着くという記録を思い起こし、改めて今も綿製品等には厳しいことを感じました。もっともガイドさん経由の話ですが過去にはテレビが持ち去られたこともあったとか。又都市では20階を超す高層ビルなど建設ラッシュで朝早くからクレーンが稼動しているのが目に付きました。最も凄まじいと感じたのは車の大群でした。

私どもは45人乗りと比較的大型のバスでしたが、路肩に駐停車中の車や道路工事等で渋滞のときは少しでも前へ出る為に車線変更は意のまま、センターラインを越えて出るのや、ウインカーなしで直前を乗用車が割り込んでくるなど、スピードがないから出来ることなのか、またセンターラインを越えて来る対向車と衝突するのではないかと、加えて人間は赤信号でも信号のないところでも横断し、道路の真中で立っており、その度に運転手は車線を右、左にハンドルを切って進むので、動きを見ているだけで疲れてしまいました。

人の動きも活発で、ハルピンでは駅に行くのに駅前の雑踏を潜るのが大変でした。春節でもないのにといぶかっていると9月は新学期の始まりとのことだった。宿泊は駅近くのホテルが多かったが、鉄道駅で乗車用待合室へ入るにはバッグなどを持っていると金属探知機のような装置をくぐらせられ、国内旅行でも何故か厳しいのが少々気になった点であります。佳木斯市の野外市場では朝早くから多くの人だかりで、物資も豊富でした。

中国の本屋へも寄りたい場所の一つでしたが、日程が一杯に組まれており訪れる機会が殆どなかったが、延吉とハルピンで暫時書店へ寄る時間が取れ、大急ぎで本屋に向かった。それぞれ相応の規模(書店部分が４～６フロア)の店ではあったが、学習参考書、受験書、何と国家公務員受験用などと表題の書籍が所狭ましと並んでいた。一般経済書、経済理論書、品質管理書、小説、海外の翻訳物、ＣＤやＤＶＤなど我国と変わらない趣向であり、

統計関係の書架はありませんでした。全国の経済状況はＨＰなどで「中国統計年鑑」(中国国家統計局編)から探すことができるので、私は地域経済や統計の資料を探していたのですが、遂に捜し求められなかった。ジエトロの資料では東北３省それぞれの統計年鑑や統計公報が出所として掲示されているので、あるのは確かなのです。地図は郷鎮等の詳細のものは見つからず期待はずれでした。実用的な「道路里程表」や「運転手のための地図冊」といった道路案内図は比較的新しいものでした。畑等に立つ鉄塔に中国移動通訊の看板が多く目立ったことも気が付いたことでした。

３．道路、特に国道と高速道路が整備され、御蔭で多くの土地を巡ることができました

殆どを国道と高速道路を走ったのですが、その距離は延吉－図們 52ｋｍ（往復)、延吉－敦化 148ｋｍ、敦化－牡丹江 239ｋｍ、牡丹江－綏芬河 157ｋｍ、綏芬河－東寧 88ｋｍ、東寧－牡丹江 187ｋｍ、牡丹江－佳木斯 336ｋｍ、佳木斯－ハルピン 396ｋｍ、この合計は 1410ｋｍで里程表に示された距離です。加えて延吉－竜井、樺南(旧樺川)県では大八浪、旧弥栄村を巡った距離及び方正県で日本人公墓の墓参、伊漢通への距離、牡丹江市内巡りやハルピンでの 731 部隊跡を見学した距離等を加えると優に 1600ｋｍを超えるバス旅行でありましたが、全てコンクリート舗装されており、敦化－牡丹江－勃利間の郊外区間では２車線以上への拡幅と立体交差の工事が各所で行われていました。

また、高速道路だけでなく、国道にも至るところに料金所が設けられており、料金徴収する所としない場所があり、その理由はその地域での建設費用を賄うためとか、が確認を怠りました。農村の集落も樺南県の大八浪郷と保豊郷、方正県の伊漢通郷に入りましたが、主な道路は狭いところで１車線、大きい集落では２車線がコンクリートで舗装されており、かつての雨が降ると泥濘と化す道路に鉄輪の轍が難渋する状況は想像し難いものでした。

私達は中型のバスに乗り換えたのですが、往来するロバや馬が引く車、トラクター牽引の車、乗用自動車、オートバイ、定期運航されているらしい区間を明示した小型、中型バス、これらに加えて大型のトラックは零れ落ちそうな荷物を満載していて、側溝すれすれに止まりこれをやり過ごすこともありましたが、これではスムーズにすれ違うには最低２車線にしなければ農村集落でも道路事情が問題となることは目に見えているようでした。

高速道路は国道にほぼ並行して建設されているようで、延吉－吉林間には国道(G302 号)と高速道(G010)が並行しており、今回は延吉－敦化まで高速道、敦化－牡丹江は国道 G201 号線を北上しました。201 号線は通化から敦化経由佳木斯まで通じています。佳木斯からハルピン間では国道Ｇ221 号線と高速道Ｇ010 が並行しています。車の往来は牡丹江―佳木斯間が多いように思いましたが、拡幅工事で渋滞があったからか、佳木斯－ハルピン間は車線も多かったのですが、ハルピンに市内に入るまでは順調に走りました。

バスも欲を言えばもっと見通しの良い大きな窓が欲しいと思いました。あの北の大地を存分に眺めたいという願いがありましたので、２日目からは最後部の座席が１段高いことに気が付き、ハルピンまで最後部の座席で前部を眺め、横窓へ首を回し、後ろの窓を振返りながらの旅でした。惜しむらくはカメラを構えてもあっという間に遠ざかるのでシャッ

ターチャンスに苦労しました。しかしバスならではの短期間で 1600ｋｍもの大地を走り、延吉の比較的山らしい様相から林口を過ぎる辺りから広がる平原の様相、山並みが彼方に霞んでいる中に集落が点在する風景に目を凝らしながら、開拓団の元集落がどのあたりだったかに思いを巡らしていました。

この旅で走破したというべきか轍を踏んだ土地は延吉、図們、竜井、安図、寧安、敦化、鏡泊湖、鶏西（旧鶏寧）、牡丹江、穆稜、綏芬河、東寧、林口、勃利、樺南(旧樺川)、佳木斯、依蘭、方正、賓県、ハルピンであり、河向こうが湯原、通河等、延寿・阿城・呼蘭はハルピン市区に編入されており指呼の距離ではありました。列車ではとてもこんな多くの土地を巡ることは出来ないことで、良くなった道路に着目された主催者の御蔭でした。

通り過ぎたこれ等の県に所在した開拓団、義勇隊開拓団、報国農場、実験農場、義勇隊訓練中隊、自警村、開拓女塾等は満洲開拓史によれば約 250 団（隊）あり、これ等の地の開拓団員で 1946 年の引揚までに亡くなられた方は 17 千人を越えています。またこれら県の市街地には邦人も住んでいたのです。もっとも収容所での飢えと寒さと伝染病等病気で亡くなられた方が多いのではありますが、沿道の水田の稲穂が開拓団員に見え、魂は残っているのだと胸中合掌していました。

４．湿地帯はなかった

牡丹江から佳木斯への途次、林口辺りからは平野の様相で、畑には概ね玉蜀黍・大豆畑で煙草の葉も時には見受けられたが高粱を見なかった。畑の境界線を引くように咲いている向日葵の花が彩りを添えていました。延吉－図們は朝鮮との国境なので水田が多いのは当然と思っていましたが、ハルピンに至るまで道路沿いの田畑は、いたるところに水田があり稲が栽培されている。特に佳木斯から依蘭を経て方正にいたる高速道路からは沿道の見渡す限り水田が広がっていました。かつての稲作は朝鮮人が細々と行っていたものを開拓団が本格的に大量に水田開墾したものが基礎でありましょう。開拓団の功罪についても歴史的な評価がなされるべき時かと思いますが、少なくとも旧北満の地に水田を拓き稲作を普遍化したこと、その成果が見事に稔っているのに感慨がありました。

方正の米は味が良いので有名ですとガイドが説明していた。かつて北京では「天津米」が国内産米と同じで美味しいと言われていたが、また、南方系の細長い米は炒飯として美味しいものだったが、高緯度の北の大地で取れる米が白いご飯としてホテルの食卓に出されており、日本で食べるのと味は変わらなかった。これには戦後、藤原長作さんなどが永年米作の指導をされた成果なのでしょうか。旅行の後調べたところでは 2003 年の全中国米生産量の 28%、4,240 万トンがジャポニカ米で、これの 100%生産地は東北３省(遼寧 88%)、天津、河北、甘粛など、南は上海、海南島にまで及んでいるとのことでした。

高速道路は山肌を切り開いて走る場面もあったが、荒野は殆ど見かけなかった。さらに湿地帯、水の流れや低地では湿地帯を形成している筈と目を凝らしていたが、記憶の湿地帯風景は見当てることが出来なかった。1947 年～1953 年当時の記憶からは、開墾が進められており荒地や広漠たる原野も見受けられなかった。開拓団員が避難した時、湿地帯で

馬車を捨て、荷物を捨てて歩いたあの湿地帯が消えていた。水田や畑に変貌していました。車窓からの観察なので見逃した点もありましょうが、かつて湿地帯と思しき水の流れの側には「水文」と書かれた小さい小屋があるなど排水し田畑に転化したものと見られました。

また、家屋も都市の高層ビルラッシュはこれまでも紹介されていたが、私の記憶では農村の家屋は平屋で草葺屋根、壁は泥を草で塗して積み上げるいわゆるドピーズが殆どだったのが、現状は屋根が瓦葺きかスレート、壁もレンガ積のようで色彩も豊、2 階建ての家屋も散見されましたが経済発展の恩恵でしょうか。大八浪では戦前からの家屋という家を拝見したが草葺屋根、煙突は南側にあり昔をイメージさせるものでした。

敗戦 2 年後の 1947 年、逃げ回ることで呆然とし教科書も鉛筆もない時、かつて教師をされていた方が、北満の、彼の永平崗で子供達を連れて丘の上に行き、集落を眺めて何を感じたかを問われ、きれいに揃っている家並みとしか答えられなかった時、先生からどういう方向に建っているか、窓やドアの向きはどうかなど考えるということのきっかけを作ってくださった。あの時、考えるということはこうなんだと今、あの子供の頃を思い、特に農村のあの見事に揃った家並みは全て東西に長く造られ、南側に窓、戸が付けられており、それは冬の寒さ、北風を避ける知恵なのだということへの感慨を思い浮かべながら通り過ぎる集落の家並みを眺めていました。

５．方正地区日本人公墓に詣でて

方正公墓は、主として開拓団員の方が葬られており、方正県が建立しその維持には㈳日中科学技術文化交流センター内に作られた「方正友好交流の会」が活動していただいており、今回の旅では公墓参拝スケジュールが組まれていました。9 月 2 日朝 7 時半頃佳木斯のホテルを出発し、11 時頃方正県に着き庁舎で景麗玲副県長との会見席上、友好交流事業への感謝、毎年 25 団体が訪問している、景副県長自身も 17 次訪日団で日本を訪れているなどと副県長の挨拶があり、矢島団長からお礼の言葉を述べていただいた。大類事務局長から寄付金、「ああ満蒙開拓団」のＤＶＤ等の贈呈があり、外で記念写真を撮り、外事弁公室の方の先導で公墓へ向かった。途中で 3 台の車に乗り換えて(立体交叉道路が低く大型バスは通れない) 中日友好園林に着きました。

園林は松林に囲まれ柵が設けられていて静かな佇まい、墓守が園林の門を開けてくれていました。入口近くには「革命烈士記念碑」、少し歩いた奥には「方正地区日本人公墓」が「麻山地区日本人公墓」と並んであり、さらに「中国養父母公墓」、「藤原長作記念碑」、「日中友好世界平和」、「和平友好」及び「中日友情」の碑があり、また訪問された各団体の記念植樹がありました。園内の中日友好記念館では、種々の展示品が置かれていました。

こんなに多くの碑があるとは知らなかったが、静かな佇まいの中、亡くなった方を思い浮かべ自ずから厳粛な気持ちでありました。私は公墓に頭を垂れながら、中国の人の友情で建立され周恩来総理の指示で破壊されず、維持されたと言われることを反芻しながらも、その他の地で亡くなった多くの開拓団員や在留邦人のことが思い浮かんでくるのでした。

旧東安駅構内で日本軍により爆破された弾薬で犠牲になった避難途中の人々、各地の収容所でなくなった人々、都市の収容所でなくなった人は葬られたであろうが、逃避行の途

中で、湿地帯の中で、山中で、道中襲撃を受けて亡くなった人々は麻山地区だけではない。避難を諦め集落で自決した人達や佐渡開拓団跡事件、葛根廟事件等、大青森開拓団と名付けた五戸・尾上・青森団の人々は北緯48度、東経128度の興安嶺山中に106人もの老人、病人、幼児等を遺棄し、しかも関東軍は8月16日に停戦・武装解除を命令しているのに、9月28日まで山中を逃避・彷徨し、収容されたのは10月に入ってからなのだ。宝清、小古洞、興安仏立、韓家、これ等の事柄や文字が走馬灯のように頭を駆け巡ったのでした。

6．私の中国との関わり－開拓団の子でした－

私的なことを若干。私はこれまで中国とは2度関わっており、1回目は1943年から帰国する1953年5月までの10年間。1943年秋に第12次氷見開拓団（富山県送出、海を干拓した水田耕作が主）の家族として当時の安東省荘河県青堆子（遼寧省庄河県青堆鎮）に入植し、敗戦で安東市に避難、1946年には父が八路軍の軍需工場で働いていたため引揚の機会を逸し、同年秋に国共内戦のため家族とも鴨緑江遡上、北朝鮮領通過等で図們経由佳木斯へ避難しました。

そして1947年早春に樺南県の永平崗に80~100人（世帯家族や元義勇隊員等）の方と一緒に移住し、更に駝腰子に移動しました。その後数年の間に大部分の人は佳木斯やハルピンに移動された。我家は1949年暮に南農場と言われた地で母を亡くし、その後父や兄弟も佳木斯やハルピンに出たのに、どうしてなのか私は一部の方と1953年4月に帰国のため移動するまで樺南県内の各地（駝腰子、梨樹溝子、南農場、北農場、永平崗）で働いていました。結果として敗戦後８年間の大部分を樺南県で生活したのですが、当時は子供であり生きることにのみ専念し働いていたのと自由往来も難しく状況把握などは念頭にもなかったのでした。

2回目は1971年12月から1976年12月まで、当時の通商産業省中国担当室（正常化後室から課に昇格）で日中国交正常化のための中国関係業務に従事し、日中経済交流・貿易の促進、㈶日中経済協会の設立業務などに携わり、1973年5月から1974年２月まで北京に駐在し国交正常化により大使館が設置され、使命を終えた「日中覚書貿易北京駐在事務所」の一員として事務所閉鎖(実質は㈶日中経協の北京事務所に転換)を行い、帰国後は日中貿易協定締結に係る業務など約５年間中国関係業務に従事していました。

今回は3回目で、2007年9月末に退職、完全に自由な身となり、兼ねてから念願の満洲開拓団の悲惨な逃避行の行状を整理、纏めるための資料集めをしております。これも2002年7月に内山書店で偶然に「日本"満洲移民"研究」（高楽才、2000年10月、北京人民出版社）を入手し、また2004年に「満洲開拓史」（昭和41年発行）を入手したからで、同じ開拓団員の方々が北満では凄惨な避難行で多くの犠牲者を出され、また収容施設に入ってからも飢えと寒さと伝染病などで多くの方が亡くなられた文を読み進むにつけ、この貴重な資料にもさらに洩れている部分があること、非道な戦争の犠牲者であることに気付き、何とか整理し昭和の歴史遺書・亡くなられた開拓団員の鎮魂の書として纏めたいと考えていたからで、現地をも尋ねたいとの気持ちがもやもやしていました。

と言うのも樺南県では現地に残留していた母娘やご婦人が複数で救出されてきたのをこの目で見ていたこと、敗戦後6年間も暮らした土地が第1次弥栄村開拓団や千振村等の

跡だったことにも気付き、因縁を感じたことにもあります。2 回目の中国との関わりの間には北京にいながら、現地に遺棄された孤児達の救出、帰国された方々の手助けもしなかった反省もありました。当時は与えられた日々の業務に忙しく余裕がなかった、また“開放都市”以外は旅行出来なかったと内心言訳をしていますが、世間に通じることではないだろう。今回ようやく、旧満洲国の大地をまだ一部ではありますが、巡ることができました。今後は時間的には余裕もあり現代中国にも関心を持っているので、日中友好に役立つ何かの為にずっと関わっていきたいと考えています。当面は満洲開拓団のことが重点です。そのため出来るものならかつての開拓跡地をもっと巡りたい。主催者へのアンケートには次回も北部の黒河、北安、チチハル、西部の満洲里、海拉爾方面等のバス旅行計画を提案しました。国境沿いだけでなく、さらに内陸側の地も巡りたいものです。

7．ありがとうございました

初めて公募ツアーに参加したのですが、同じ事柄に関心を持つ人の集まりは、中国研究者あり、ジャーナリストあり、関心を持ち始めて参加した方、回顧の思いで参加された方々と経歴は異なっていても話題が一致するということはこんなにも気持ちが安らぎ、楽しい(悲しい事柄を念じながらで語弊がありますが)ことなのかを始めて知りました。今回の旅行テーマ旧満洲に新しく関心を持っていただいたことはかつて生活したことのある者、私にとっては本当に有難いことです。終始同室していただいた方とは目を覚まして話し、ベッドに入ってからも話し、尽きることなく饒舌になっていました。又同じように開拓団の子であった方は 6 歳ほど年長者であられたので記憶を確認するうえで有難い存在でした。

中国各地の道路事情が良くなっており、また各地を自由に訪れるようになった中国東北地方へのバスツアーは比較的短期間に色々な地を巡るために有効な手段であると思います。あの広い大地を駆け巡ることは私のような世代だけでなく、若い世代の人達が関心を持つのではないでしょうか。

しかしこんな事もありました。731 部隊跡の罪証陳列館を見学中のこと、小グループ毎に説明員が付いて各部屋を廻ったのですが、流暢な日本語で説明され我々も丁寧に見ていると、後続の中国人グループを説明員が制して後ろで待っているのですが廊下を挟んだ部屋は順序が輻輳していて、まだ当方が見終わっていないのにどやどやと入ってきて一瞬の混雑、青年達と思しき彼らが「なんだ、ショウリーベン(小日本)か」と云っているのが聞こえました。街中では特に感じなかったが、このような場所では感情が出るのかと思い、まだ残っていた仲間に早く出ましょうと声をかけた、やはり心するしかないと感じたものです。なお、竜井領事館等の歴史関係、中朝国境(図們)、中ソ国境(綏芬河)、東寧要塞跡、731 部隊跡等は何方かが書いていただけるでしょう。“走馬看花”ならぬバス旅行での印象を取り止めなく書きました。2009 年 8 月 28 日からの 8 日間、同行の皆さん有難うございました。

(みやした・はるお：1936 年富山県生まれ、1943 年満洲開拓団員の家族として渡満、1953 年帰国、1994 年通商産業省を退職、宝飾業界等を経て現在無職)

ハルビン郊外の深い爪痕

高村　壽一

シベリア鉄道は遠くはるかモスクワに通じている。その路線の中国最北の大都会が黒竜江省の省都である哈爾浜（ハルビン）である。人口九百七十五万人。夏の温度は三十度、冬は逆にマイナス三十度になる。しかし、人々の顔は経済成長のせいか明るい。

帝政ロシア時代の欧州風建築を観て歩くのも一興だが、観光客が集まるのは、冬の一大イベント氷雪祭りだ。中央大街（キタイスカヤ）は一年中遅くまで人々でにぎわう。ビール消費量はミュンヘン、モスクワに次いでハルビンが世界第三位という。クルマのラッシュ緩和のために目下地下鉄を建設中で、活気に溢れている。

この北の大都会を訪れてこちらも元気をもらったが、旅の日程のひとつ、ハルピン郊外（南方２０キロ）の平房（ピンファン）地区に行ってみて頭をガツンとやられた。ここに旧日本軍の細菌戦の拠点、関東軍第七三一部隊（通称石井部隊）の遺址が、証拠品類ともに公開・展示されているのである。現場には「人食い魔窟」の跡と記され、侵略日本軍細菌戦の最大被災地というような説明がなされていた。戦争犯罪の深い爪痕である。

第七三一部隊はこの地区で一九三六年から敗戦まで細菌兵器の研究・開発を行った。中国、朝鮮、ロシア、モンゴルの政治犯、スパイ、浮浪者などの捕虜（「丸太」と称した）を人体実験し、約三千人が犠牲になったとされている（この数字は誇大という説もある）。

開発実験のために中国各地でペスト、コレラなどの細菌を散布した。関東軍は撤退の際、隠蔽のために特設監獄、人体実験の場など中枢部を爆破したが、ボイラー室煙突、総務部室の建物など周辺部分は遺っており、なお発掘・修復作業も続けられている。日本人として観るのは辛いが、動かせない犯罪遺址である。

「アウシュビッツ、ヒロシマのように世界遺産とすべきだ。登録作業が進んでいる」と案内人。その準備の一環か売られている大判写真冊子は中国・英語版である。

第七三一部隊については森村誠一氏の『悪魔の飽食』三部作が知られている。初版（光文社）には写真誤用があって話題になったが、いまは訂正された角川文庫に収録され、取材ノートを含め全容を知ることができる。しかし現場に佇むと、戦時の集団狂気に改めて痛撃される。

「戦争なのだから」「お国のためだった」という声も聞く。しかし、ひとたび戦争が起これば、大きな渦に巻き込まれ、個人の自覚など消滅してしまう恐ろしさは消えない。

第七三一部隊の上級隊員は帰国後も「秘密を漏らすな」を合言葉になぜか生き長らえた。彼らは高度な細菌技術・資料を米国側に提供したために「戦犯免除」になったと憶測されている。戦後は終わりではなかった。その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争などで米軍が用いた細菌兵器には、旧日本軍の技術の応用があったとされている。

さらに「人間の生命を自分（個人）の医術の素材視する思想は、日本の医学界にいまも生き続けている」と指摘する識者もいる。ハルビン郊外の「集団狂気」は６０年前の悪夢だと忘れ去るわけにはいかない。

（たかむら・じゅいち：1938 年生まれ。日本経済新聞・論説委員を経て現在、武蔵野大学名誉教授・大学院客員教授（産業組織論・企業経営論）、新日鉱ホールディング社外取締役。著書『日本の産業・昭和の歩み』ほか。今夏、「近現代の検証の旅」に参加）

旅後雑感

服部　健治

正直言って、今回の旅行団に参加するにあたっては当初躊躇があった。なぜなら仰々しくも「北東アジアの未来を展望する」と銘打っており、そんな大それた気負いは微塵もなかったからだ。ただ、以前から関心があり、調査もしていた中国と周辺諸国との辺境貿易、その一例である北朝鮮国境と接する延吉朝鮮族自治区（18 年前に訪問したことがある）と中露国境の綏芬河の現場に行けることにまず興味がそそられた。

次に同じ東北地方といっても仕事柄、大連、ハルピンなどは何度も訪問したが、牡丹江、佳木斯、方正方面は足を踏み入れたことがなかったので、是非一度行ってみたいと好奇心が湧いた。そして何よりも書籍と映像でしか知らない満蒙開拓団の史跡をこの目で見たいと思った。たとえ研究で中国経済・産業のことは熟知していても、日中両国のあざなえる縄の如き歴史の断章を垣間見ずして、中国・日中問題にかかわる者として深みのある研究はできないと感得し、現地に行くしかないと観念した次第である。

まず何よりも今回の旅で得た満足とは、近現代の史実に強い関心をもつさまざまな経歴の方々や過酷な歴史を生き抜いて来られた人々と、バスに揺られ長い道中を通して友人になれたことである。ソ連軍の満州侵攻にともない逃避行を強いられた我が同胞の生き残りの方、今回訪問した都市に幼き頃に生活された方、満蒙開拓団を正史に留めようと資料収集、奔走されている方、苦汁の歴史の現実から日中のあり方を真摯に学ぼうとされている方、等々これまで私が指導してきた経済・ビジネス分野の訪中団とは一味以上も格別に違ったものだった。

二つ目の成果は、車窓に広がる中国東北地方の壮大な大地を満喫できたことだ。晩夏の日差しに映える深緑と黄金色の耕地が広大な草原として洋々と八方に広がり、青々と茂る稲田、さらに麦、大豆、とうもろこし、ひまわり、はたまた木耳などの畑が延々と地平線のかなたに向かってたなびく、その中を指揮棒のごとく一直線に走る高速道路、こうした光景は北海道富良野、美瑛の比ではない。真っ赤な太陽が遠くの山影に淡い光を放ち沈むとき、「満州」の持つイメージ、“ここは御国の何百里”と始まる軍歌『戦友』（本当は戦死の友を惜別する反戦歌といわれている）からくる連想、“赤い夕日の満州”を実感できた。

経済的に付け加えるなら、豊穣な土地は 2004 年から始動した、西部開発の一翼を担う「東北振興」政策の成果であり、農家に家電製品が多くみられたのは、今年から始まった景気浮揚策のひとつ「家電下郷」政策の一環であろう。

第 3 に「戦争の狂気」というものを体験できた。いわゆる旧ソ満国境の東寧でみた旧日本軍の地下要塞しかり、ハルピン郊外平房の 731 部隊陳列館を見て、正常な人間も戦争という極限の「恐怖」の中では「狂気」に変わってしまうと感じた。だが、石井中将率いる 731 細菌部隊を支えていたのは、敵からの「恐怖」というより、「民族の傲慢」が基本にある。日本軍国主義はユダヤ人に対してホロコーストを実行したナチスと違うという論調があり、旧日本軍は中国人をジェノサイドする思想はなかったと抗弁する人もいるが、中国

大陸における日本軍にとってはナチスと同様の心的状況、情緒に陥っていたとみるべきだ。中国人を人間と思っていなかったからである。

「民族の傲慢」はどこから生まれたか。それは19世紀以降の歴史で日本がアジア諸民族に対して奮起を促した歴史事実のなかに潜んでいる。それは３つある。ひとつは明治維新。近代的国民国家の形成は西欧民主制度の素地がない国ではできないと言われていたのを、非西欧諸国の中で唯一、日本は学制、兵制、税制を軸に近代的法治国家を作り上げた。アジア諸国が啓発され、畏敬する日本近代化の偉功は明治維新にある。

２つ目は日露戦争の勝利。欧亜にまたがる巨大軍事国家、ツァーロシアに対して20世初頭、最初の近代戦、つまり機関銃、トーチカ、魚雷といった近代兵器を使った戦いで、歴史上初めて有色人種が白色人種を旅順 203 高地で、満州の雪原で、そして対馬沖日本海で打ち負かした。どれほど欧米列強に打ちひしがれていたアジア諸国の民族が狂喜したことか。清国、コーチシナ、シャムでは日本留学がブームとなった。

第 3 は戦後の高度経済発展。広島、長崎に原爆を投下され、大中都市のほとんどが焦土と化し、その上主要鉱物資源、食糧資源も欠いた、狭い４つの島から日本は不死鳥のごとく世界第２の経済大国にのし上がった。敗戦からわずか15年、ソニーが初めてニューヨークのマンハッタン五番街でショーウインドウを構えたとき、ともにがんばる多くの日本人ビジネスマンはどれほどの歓喜に酔ったか。日本のあとに４つのドラゴン（韓国、台湾、香港、シンガポール）が続いた。その日本の発展は開発経済学では「雁行形態発展論」として昇華していった。

しかし、日本の欠点は有頂天のあとすぐに傲慢になることだ。日露戦争に勝ったけれども、辛勝が真実なのに、一面を誇張し傲慢となりアジアを睥睨し始める。アジアにはアジアのナショナリズムがあることを理解しなかった。高度経済成長の行き着く先は金融バブルで、不遜にもアメリカ、オーストラリアの土地、建物を買収し始めた。米国にも自尊心があり、そんなに脆弱な経済でないことを観照しようとしなかった。成功のなかに傲慢がはびこっている。

今回の旅行を通じていろいろと根源的なことを考えさせられた。いまだ明確な回答を見出せずにいる。一つは満蒙開拓団には、敗走のなかで「被害者」となったが、入植時はブラジル移民と違い「加害者」の側面もあるという考え。それでは山東半島から満州に渡った漢族は、女真、満州族の土地を奪ったのではないか。その奪われた土地を日本が奪った。それでも満州開拓の日本人が漢族、朝鮮族と同様に土着化することができなかったのはなぜか。畢竟、その土地を愛せない支配民族であったからだ。

２つ目は、そもそも戦争には「正義の戦争」と「不正義の戦争」があるのか。満州事変から太平洋戦争に続く15年戦争は、明確に日本が中華民国の主権を犯した侵略であると認識するがゆえに、「抗日戦争」は中華民族の存亡にかかわる正義の戦いといえる。それでは日本の侵略戦争の過程にあって、ソ連の満州侵攻で繰り広げられた蛮行も米軍の原爆投下、

東京大空襲も正義の行為と言明できるのか。日本は侵略者だからどんな暴虐にも甘んじるべきだといえるのか。満蒙開拓団の悲劇は、正義に見せかけられた不正義の虐待の結果である。

3つ目は「民族の友好」とは何かという問いである。方正の墓地は加害者の遺骨が被害者の手によって祭られた聖地である。個人では殺人鬼の死体を被害家族が葬送することはありえないが、それが「集団」となって対峙したとき、死者全部に鞭打つことはできない。ましてや非戦闘員の死者には被害者も寛容になるべきだろう。その心理状況に「民族の和解」が醸成する芽生えがあり、方正はその原点と思われる。逃避行の最中、助けてくれた中国の農民も多数いる。さらに戦闘員ももとはといえば普通の庶民である。死んだ互いの兵士を悼むことで「民族の友好」の原点が形作られると夢想する。死に直面し怨讐を越えることが人間の摂理かもしれない。中国で浸透する、憎悪を喚起させる狭隘な愛国主義運動は、「民族の友好」を建設できるものでない。

最後に中国大陸における日本軍の横暴を日本の学校でも負の遺産として正視して教えるべきだ。欺瞞、言い訳は許されない。今や関東軍や７３１部隊、憲兵という言葉も知らない、ましてや盧溝橋事件も柳条湖事件も聞いたことがない生徒、学生が増えている。日本が尊敬される国家になるために過去を直視することは必要である。そのことによって日本の尊厳が傷つくことはない。日本の歴史には輝かしい側面もあれば、暗黒もある。それを認めて進歩することが日本の威厳だ。いつもずーと日本が正しかったと豪語することは恥である。勤勉で聡明で勇敢で進取の気概を持った日本民族はもっと自信を持つべきだ。仕事に取り組む真面目さ、清潔さ、高い公共道徳と秩序意識は多くの中国人も敬服している。

（はっとり・けんじ：日中経済協会北京事務所副所長、投資促進機構北京首席代表など北京駐在通算11年。愛知大学教授を経て、08年より中央大学大学院教授。専門は対中経営論、中国産業論。論文『日中経済の現状と対中経営戦略』、著書『現代中国』（共著）など多数）

ソ連軍の満州侵攻は８月７日！？

高橋　健男

１　旧ソ満国境、綏芬河・東寧

「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」の第４日目、旧東満の綏芬河中ロ国境と旧関東軍の東寧地下要塞を訪れた。国境警備の建物、陸路国境を越えるトラックやバスの諸検査、多くの兵士の巡回（監視）、国境ゲート、そしてはるか遠くの頂まで続く国境線を挟む樹木伐採の３、40 メートル幅の緩衝地帯の帯は、そのいずれもが私の日常性を越えるものであった。はるか遠くの頂に小さく、中国側監視塔が見える。

私にとって中ロ国境を訪れてロシア領を望むのはこれが初めてではない。同じ東満の密山口岸、東北端虎頭の烏蘇里河畔、佳木斯北方名山の黒龍江（＝アムール）河畔訪問に次いで今回が４回目である。東満で陸路国境を越えることができるのはたしか密山と綏芬河だけである。今回はその綏芬河中ロ国境の訪問で、しかも特別にその国境線のところまで見学させてもらった。この国境と東寧要塞を訪問することが今回の旅に参加した私の最大の目的であった。私にはこの国境地帯の地理的状況を確認したい理由があった。

２　新潟県送出綏芬河義勇隊

第６次綏芬河義勇隊山崎中隊は新潟県全県からの 300 名の青年で編成され、1943（昭和 18）年２月に内原義勇隊訓練所に入所、同年６月渡満、牡丹江省綏陽県の綏芬河訓練所に入所した。綏芬河訓練所は位置的には綏芬河と東寧の中間地点にあった。戦後の昭和 27 年頃に山崎喜三治中隊長（渡満後は綏芬河義勇隊訓練所長）が新潟県庁に提出した「義勇隊開拓団実態調査表」によれば、その位置と日本敗戦間近の関東軍の配備状況は次のようであった。

当訓練所は牡丹江よりウラジオに通ずる浜綏線綏芬河駅下車、綏芬河・東寧間国道国境線に沿って南下すること 28 キロ、東寧までは 32 キロ、ソ連国境より６キロの山麓に位置し、国境を北へ４キロにして八道橋に至り、橋を渡って東へ４キロの綏南には八四八部隊、一五二部隊、一三〇五部隊があった。昭和 19 年には八四八部隊を残して他は移動し、訓練所の前方国境方面には八四八部隊の陣地八〇八高地があり、一個小隊くらいの警備しかなかった。

ソ連軍が満州に侵攻した昭和 20 年８月、綏芬河山崎中隊はまだ現地訓練中であった。とはいえ、当時の隊員の動静は、すでに軍隊に入隊した者 27 名、奉天の満鉄工場への挺身隊 102 名、各種の訓練所などに派遣された者 10 名、内地に帰還および旅行者 56 名、それまでの物故者５名で、約３分の２の隊員が訓練所を離れていた。訓練所にいたのは大人 104 名と幹部の子供１名の 105 名であった。

その 100 余名が突如のソ連軍の満州侵攻により多大な犠牲者を出した。

3　綏芬河義勇隊慰霊碑碑文

新潟県護国神社の一角、県送出の満州開拓民殉難者を祀る慰霊碑と並んで「綏芬河の碑」がある。生存者は多くの殉難者を出した綏芬河に慰霊碑を建てたいと何回か現地に足を運んだが、現地での慰霊碑建立はあきらめざるを得なかった。そこで1991（平成3）年7月7日、この慰霊碑を新潟県護国神社境内に建立した。慰霊碑右側に立つ石版に現地殉難者ならびに物故者55人の氏名が刻まれ、左側の石版には建碑に携わった生存者の氏名が刻まれている。

この「綏芬河の碑」に深く刻まれている一語が重要な意味を持つ。次に碑文全文を掲げるが、その中の「昭和20年8月7日ソ連軍が侵攻」に注目したい（下線は筆者）。

我等は国策により新潟県郷土中隊として昭和18年6月、山崎喜三治隊長以下299名が綏芬河義勇隊訓練所に入所。昭和20年8月7日、ソ連軍が侵攻し、9日に無防備無抵抗の隊員を銃撃。40数名の若い生命が奪われた。生き残った隊員も、逃避行の中に飢えと寒さで満州の曠野で数多く他界した。

平成元年・2年と亡き拓友の終焉の地、八道橋を訪れて供養祭を行なった。平成2年10月、綏芬河会総会で有志相図り、亡き友の鎮魂と若き日の友情を刻み、この地に綏芬河の碑を建立する。

殉難した仲間の慰霊は奉天の満鉄工場に挺身隊で動員されていた隊員にとっては悲願であった。彼らは昭和20年も暮れ近く、ソ連軍の侵攻から3、4ヵ月後に、綏芬河近辺での惨状を逃れて奉天にたどり着いた生き残り隊員から多くの仲間の殉難を聞かされたのだった。一度に大量の殉難者を出した「八道橋（はちどうきょう）事件」とは次のような無残なものだった。

多分8月10日のことであったと思われるが、ジープ一台に5人ほどのソ連兵が訓練所にやってきた。全員4列に並べられた。その後、ソ連兵の指示で綏芬河の街に向かって歩かされた。道路の両脇にはすでにソ連兵がいっぱいいた。訓練所裏の坂道の頂上に出てみると、進撃態勢にある20両あまりの列をなした戦車と各車両後方に伏せて待機しているソ連軍歩兵部隊が見えた。一行は綏芬河にかかる八道橋を過ぎたところで歩みを止められた。するとソ連兵の口笛（あるいは一発の銃声）の合図で、機関銃が火を噴いた。左は川岸、右は絶壁と逃げ場のないところでの乱射で、隊員47名が犠牲になった。再び山崎所長の報告を見る。

8月10日午後6時頃、一応全員ソ連の捕虜となり、そのまま4列縦隊に整列させられ、ソ連戦車の間を通り、綏芬河方向に移動させられたが、訓練所より約4キロの八道橋付近で他の一隊より急襲を受けたので、一同隊列を離れて山中に避難。

次に三々五々図佳線方向に移動。同沿線にて再び捕えられ、牡丹江収容所に収容された者、またはシベリアに連れて行かれた者とに分けられた。

この他の九死に一生を得た20数名は闇夜を利して仲間がいる奉天目指し、道なき道を野に伏し山に伏し、三々五々4ヵ月もかかり逃げ延びてきた。16、17才の隊員はまだ童顔を残していた者もあったのだが、たどり着いた隊員の顔・姿は見る影もなく痩せ衰えていた。たどり着けなかった者は所長報告のようにソ連兵に捕らえられ、射殺されたりソ連に送られたりしていた。飢えと病のために逃亡途中で死亡した者もいた。その間の苦難は筆舌しがたい惨慄であったと、一息ついたあとにその事実を涙して語ったのだった。

4　ソ連軍の侵攻は８月７日？

殉難者を多く出した八道橋事件前後の記述からはソ連軍の満州侵攻が“8 月 7 日”であったかどうかは分からない。しかし綏芬河義勇隊の団史『平房の丘に立ちて』には次のような記述が多くある（下線は筆者、以下同じ）。また、私が体験聴取した元訓練所寮母さん（ソ連軍侵攻時に在訓練所、現在 93 歳）や 10 数名の元隊員も同様の話をしていた。

- ソ連軍は条約を一方的に破り、8 月 7 日、堤防を決壊した洪水の如く侵入してきたため、訓練所もその手に落ちて綏芬河の町方向に連行途中、無防備無抵抗のまま前後から発砲された。散り散りに山や河に逃げたが、その地に 40 数名の拓友が尊い生命を失った。
- わが綏芬河義勇隊は 8 月 7 日にソ連軍の侵入を受けている。激戦の 8 月 7 日早朝、綏芬河訓練所の上空に標識不明の偵察機二機襲来。爆音の響きとともに綏芬河訓練所の夜は明けた。
- 朝礼の後、根津先生から隊員全員に話がある。「今朝（＝8 月 7 日）の標識不明の偵察機の件は早速綏芬河出張所の方と連絡をとり、どこの国の飛行機か確かめる」「全隊員作業中でも飛行機には十分注意するように」と。また「飛行機が飛んできて作業もできない場合は各小隊に連絡すること」とあった。
- 8 月 7 日早朝より警戒とみに物々しい。何かただならぬ空気である。何が起きるのかと不安が湧く。（中略）午後 4 時頃、平房地内にソ連軍侵入の情報が入る。明けて 8 月 8 日、また時々偵察機も訓練所の上空に来ては低空飛行して、訓練所に発砲しては姿を消していた。

ソ連軍の満州侵攻は公式には 8 月 9 日午前零時である。戦史叢書『関東軍＜2＞』にわずか「琿春正面五家子陣地、8 月 8 日夜半、敵銃砲の集中射撃を受け」の記述があるが、『満洲開拓史』や他の関係書で「8 月 7 日ソ連軍侵入、8 日戦闘」といった記述は見出せない。一方、綏芬河の北、東満国境の興凱湖畔にあった新潟県送出第 3 次勤農義勇隊開拓団の佐藤数衛団長は団史に寄せた手記を、「一般には日ソ開戦は 8 月 9 日と周知されているが、私の記憶にはありありと 8 月 8 日と焼き付けられているので、あえて 8 月 8 日を日ソ開戦の日として記述を進めることにする」と書き始めている。興凱湖畔の各義勇隊開拓団は興凱湖に浮かぶソ連軍艦隊からの艦砲射撃を受けたのであった。

司馬遼太郎は『坂の上の雲』で、軍隊においては「宣戦布告のあとで軍隊を動員するような愚はするな」「宣戦したときにもう敵を叩いている、というふうにやる」という戦時常識に触れる。日本敗戦当時 27 歳で満州国通信社（通称「国通」）の遊軍記者であった山田一郎さんは、90 歳になった 2008（平成 20）年、ソ連機の新京空襲体験を「8 月 9 日午前零時過ぎ、新京（長春）特別市の西郊、順天区西朝陽路雲鵠胡同の第四国通荘で、私は国籍不明の首都空襲を知った。それは満州国崩壊を告知された最初の時刻であった」と書く。「8 月 9 日午前零時」にソ連機が新京を爆撃するためには、最短距離の東満国境からソ連領を飛び立ったとしても、直線 600 キロ前後の距離を考えれば、「8 月 9 日午前零時」以前に爆撃装備を整えたソ連機が旧満州国上空を侵犯していたことになる（注：山田一郎手記は今回同行の師岡武男さんから帰国後にいただいた）。

国境地帯でのソ連軍の不法越境事件は昭和 19 年夏以来頻繁になっていたらしい。しか

し、綏芬河義勇隊員が経験したソ連軍の満州侵攻は国境地帯でのスパイ行動・斥候といったものではなく、まさに攻撃・機銃掃射であった。そしてそれが8月7日には始まっていた。

5　「8月9日以前の戦死などあるはずがない」

ウスリー川に近い虎林地区に入植していた新潟県送出第7次清和開拓団の団員2名が、8月8日夜のソ連機の空襲で死亡した。新潟県開拓民自興会事務局長が昭和26、27年頃、開拓者遺族補償の手続きをした。ところが「8月8日では戦時死亡には当たらない」と、厚生省からは補償対象外といわれた。家族は家庭裁判所で死亡月日の変更宣告を受けて手続きしなおした。厚生省担当官の説明は「ソ連参戦はあくまで9日午前零時です。法律でも満州における戦時死亡は9日以降とされている。それ以前の戦死、あるいは捕虜などあるはずがない」とのことであった。

これは新潟日報（昭和52.8.12付）が「ソ連侵攻は布告の二日前」との見出しで特集した終戦秘史の中の一例である。そして同紙記者は「ソ連参戦の前日どころか、二日前に捕虜になった」という元綏芬河義勇隊員の次の証言も掲載した。

> 私は牡丹江省の国境近い綏芬河の義勇隊にいた。7日朝から国境の方で銃声がするし、飛行機が盛んに飛んでくる。関東軍の演習かなと思いながら、同僚二人と様子を見に行った。鼻歌交じりに山道を登って行くと突然自動小銃をかざしたソ連軍の騎兵に出会った。こちらは銃も持っていないし、手まね足まねでは向こうさんに通じない。とうとう私たちは後ろから銃を突きつけられて捕まってしまった。

証言した元隊員は「国の言うソ連軍の攻撃“9日午前零時”は、モスクワの発表だけによるものだ。7日にすでに国境から4キロあまりも離れた町が占領されている事実を、どう弁明するのか」と声を振るわせたという。捕虜になったとき同僚の一人は目の前で射殺され、その元隊員らはそのまま3年間シベリアに抑留されたのだった。

なお、旧満州における戦闘は8月15日以降も続き、虎頭要塞には「第二次世界大戦終結地記念碑」が建ち、8月27日が要塞玉砕の日と刻む。一方、東寧要塞の説明版には8月30日戦闘終了とあった。ちなみに東寧要塞には勲山、朝日山、勝関山など10ヵ所の要塞があったのだが、今回私たちが入った地下要塞は勝関陣地の前哨線である勲山陣地のそれであったらしい。18日間死闘で持ちこたえた勝関陣地に関しては佐藤和正『最後の関東軍』に詳しい。

（たかはし・たけお、中学校の校長を定年退職後、満蒙開拓という国策と、それに参加した開拓民たちの軌跡を精力的に追及している。本会の会員。著書などは巻末の「本の紹介」のところを参照していただきたい）

今、生かされている者の使命は？

－「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」参加して－

打田　茉莉

昨夏のヨルダン行きは、何年か前からの日本聖公会東京教区と中東聖公会エルサレム教区との交流の結果、アンマンにイスラエルはじめ周辺国からパレスチナ人クリスチャンが集ってイスラエル占領下の彼女たちの現状を知るというもので、以前から予定していたことだった。

ところが今年の私に起きたことは、以前から計画していたことではなく、私の予定が空いているところにちょうどある企画に乗せていただき、重いテーマに次々と出会ったということになった。３月、アウシュヴィッツはじめ中央欧州のホロコーストの跡を巡る旅に参加した。同行者の中には、東京大空襲の罹災者に国が何の補償もしていないことを訴える原告団の方や、戦争と医師の倫理の調査研究をしていらっしゃる大学の先生も。まず到着したウイーンの大通りで出会ったのは、中国の不当な支配を訴えるチベットの人たちのデモ。アウシュヴィッツ等では、ドイツ人の若者もユダヤ人の若者も見学していた。

そして６月初め、ある集まりで映画「おくりびと」の原作者青木新門氏の講演を聴いた。氏は死んだ弟を背負った直立不動の広島の少年の写真を広げ、この写真を見たとき自分と同じだと涙が溢れたという。敗戦時、満州にいた青木少年の父はシベリアに連行され、母親はチフスに罹って隔離され、亡くなった妹を背負って大人たちが死体を焼いているところに行っていっしょに焼いてもらったという。

さらに６月２３日の沖縄慰霊の日の前に日本聖公会の企画で沖縄に行った。大浦湾の自然環境を守ろうと辺野古の海岸で米軍基地建設反対の座りこみを１８８９日も続けている人たちと座った。旧陸軍病院の壕や海軍司令部が入っていたという壕も入ってみたが、これらは観光客が入っても危なくないようにかなり作り変えられていた。次々と飛び立つ米軍機の爆音は現実だった。旅客機とは音が違いますねという友人がいた。

ある日、神保町を歩いていて映画を見る時間があると思い、岩波ホールに行ったところ、「嗚呼、満蒙開拓団」が始まるところだった。会場にあったこの旅行のチラシを見て、早速電話した。今まであまりに知らないままでいたことが有り過ぎるという思いだった。

８月は毎年、野尻高原大学村で過ごしているが、今年は何年ぶりかで岡田裕之先生にお会いした。長年かかわっていらした「わだつみ会」のお仕事から「〈わだつみのこえ〉を聴く　日本戦没学生の思想」という書物を執筆され、法政大学出版局から今年７月に出された。また、そこで、西山勝夫先生から『「１５年戦争」への日本の医学医療の荷担の解明について』という「社会医学研究」誌に掲載予定の論文のゲラ刷りのコピーをいただき、九州大学医学部「生体解剖」事件や７３１部隊がやったことと戦後はGHQとの取引で免責されていることなどのお話を聴き、「戦争と医の倫理」の検証を進める会の設立にお忙しいとうかがった。

今回の旅行では、その「侵華日軍第７３１部隊罪証陳列館」や遺跡を直接見ることができたし、個人ではとても行けない所までいろいろ回っていただいたうえ、皆様からの経験談も貴重だった。龍井の公園で日本語で話かけてきた８０歳過ぎの朱相仁さんから日本名は新安英男と聴き、創氏改名や日本語教育は旧満州の朝鮮族にまで及んでいたことを知った。現在の中国にとっては、朝鮮半島が２つの国に分かれていた方が好都合という。半島の人たちと中国東部にいる朝鮮族が一つになれば、チベット族やウイグル族と中国政府との間に今起きているようなことになるのを恐れているらしい。千何百年もの昔から漢字を共通に使う東アジア文化圏があった。２０世紀はそうした伝統の破壊どころかずいぶんとひどいことをしてどれだけ多くの人々が殺されたかしれない。長距離のバス旅行の車窓から広く続く田畑を眺めたり、どんどん延びている高速道路工事、図們で国境を越えて粗鉄を積んだ北朝鮮のトラックが入ってくるのを偶然見たり、結婚式の飾り立てた車の列に遭ったり、ロシア国境の綏芬河駅では中国にショッピングに来て帰るロシア人たちを見たり、とにかく平和が続いて人々が安心して暮らしている風景だったのはうれしい。これからの中国のことも学ぶ旅だった。

帰京して、早速、調布の市立図書館へ行ったところ、敗戦後を外地で過ごした人たちに関する本を特別に集めたコーナーがあった。シベリア抑留や満蒙開拓団関連のものが多かった。「従軍看護婦たちの大東亜戦争」の最後の章に「ダモイは遠く－シベリア抑留」という佳木斯第一陸軍病院勤務者の記録があったのでコピーをとり、佳木斯で中学時代を過ごされ、同じ旅をした酒井旭さんに送った。そして「姉が行動を共にした部隊に違いありません。この方たちが、シベリアの収容所で医療行為に従事していたとの記述にはホット致しました。最悪の生活ではなかったことが確認され救われた思いです。」というお手紙をいただいた。

（うちだ・まり：法務技官（心理）として少年鑑別所、少年院、刑務所、婦人補導院などに勤務し、戦争で運命が変わってしまった人々、その時代の社会の問題を反映している人々に遭う。1996～2005 家事調停委員。現在は日本聖公会信徒として東京教区人権委員長）

社団法人全国信用協会発行「信用金庫」2009年10月号より転載

はなしの歳時記

水稲王の碑

高村　壽一

実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな

収穫の秋。金色の稲穂が一面に波を立たせている稲田は、日本の秋の景である。

稲の香に滴れたき眼を瞑（つむ）るべし

福永新二

稲の原産地は東インド、東南アジアだ。日本には縄文時代末期に中国から伝播したことには異論がない。ただ、その経路については中国南部→琉球諸島→南九州、中国大陸→朝鮮半島→北九州などの説があり、近年の研究では、長江河口→対馬海流→北九州ルートも有力だという。1世紀初めには近畿地方に稲田があり、その後北上したが、北海道で稲作が本格化するのは明治時代に入ってからである。

ところで30年ほど前、日本の一老人が中国東北部（旧満州）へ渡り、米づくりの指導に乗り出した。これが大地に根づき、黒竜江省を米作中国一に仕立てた話は案外知られていない。老人の名を藤原長作という。

この秋の初め、私は東北アジアの視察チームに加わって、吉林省、黒竜江省を回った。黒竜江省では藤原長作が「水稲王」と呼ばれ敬愛されていることを知った。「美味い白米を食べられるようになったのは、水稲王のおかげだ」という。

長作は1912年（大正元年）岩手県和賀郡沢内村で生まれた。花巻市の西方、奥羽山脈の裾にある高冷山村の貧農の次男で、小学校を出ると農作に従事した。昭和恐慌下の閉塞状況で一時彼はブラジル移民を志すが、世は最悪の戦争時代に突入、夢は叶わなかった。

小作農が解放された戦後、農業の改善、水稲技術の向上にあれやこれやと試す。とりわけ簡易温床苗床（苗代を木枠で囲いレーヨン紙で覆う）に熱中する。のちに油紙を用いて高冷地の早植えに画期的な成果を上げた。1956年（昭和31年）東北地方の増産躍進賞を受賞、「隠れた米づくりの名人」となった。43歳のときである。

さぁこれからというときに、米余り、減反政策がとられた。田植え械械もあっという間に農村に普及した。酒好きの長作は呑んだくれた。

そんなとき彼を揺り動かしたのが「満州で米づくりはできないか」という岩手北端の開拓者のひと言。閃くものがあって中国を視察した。職人の勘が働き、訪中を続け、1981年（昭和56年）、ハルビン東南180キロの方正（ほうまさ）県で寒冷地稲作稀植方式の日本産種籾の藤原氏式試田が設定された。

長作は70歳になっていた。試田は狙いどおりの成果を上げ、「トウモロコシや高粱（コウリャン）ではなく、米が食べられる」と喜んだ県は遠来の長作に招待所（宿泊施設）を用意したが、彼は「農民は農家で」と辞退した。試験田は急速に増え、東北三省に知れ渡った。佳木斯（ちゃむす）、牡丹江でも藤原方式で収穫を上げた。方正県は彼を名誉県民とした。長作は合計9回訪中したが、すべて自費で、指導には報酬なし。最後の指導は車椅子の上からだった。

映画『嗚呼　満蒙古開拓団』で有名になった中日友好庭園（日本人公墓がある）の一角に、「藤原長作記念碑」が建っている。長作没（1998年・平成10年）後、建てられた碑で、高さ2・72メートル。近づいて見ると、碑の冠部にはぐるりと稲の穂が彫られていた。

（武蔵野大学名誉教授）

（たかむらさんは「近現代史検証の旅」にも参加。９２頁にも寄稿がある）

社団法人全国信用協会発行「信用金庫」2009年11月号より転載

はなしの歳時記

高村　壽一

ハルビン郊外の深い爪痕

シベリア鉄道は遠くはるかモスクワに通じている。その路線の中国最北の大都会が、黒竜江省の省都である哈爾浜（ハルビン）である。人口975万人。夏の温度は30度、冬は逆にマイナス30度になる。しかし、人々の顔は経済成長のせいか明るい。

帝政ロシア時代の欧州風建築を観て歩くのも一興だが、観光客が集まるのは、冬の一大イベント氷雪祭りだ。中央大街（キタイスカヤ）は一年中遅くまで人々でにぎわう。ビール消費量はミュンヘン、モスクワに次いでハルビンが世界第3位という。車のラッシュ緩和のために目下地下鉄を建設中で、活気に溢れている。

この北の大都会を訪れてこちらも元気をもらったが、旅の日程の一つ、ハルビン郊外（南方20㎞）の平房（ピンファン）地区に行ってみて頭をガツンとやられた。ここに旧日本軍の細菌戦の拠点、関東軍第七三一部隊（通称石井部隊）の遺址が、証拠品類（ぐ）とともに公開・展示されているのである。

現場には「人食い魔窟」の跡と記され、侵略日本軍細菌戦の最大被災地というような説明がなされていた。戦争犯罪の深い爪痕である。

第七三一部隊はこの地区で1936年から敗戦まで大がかりな細菌兵器の研究・開発を行った。中国、朝鮮、ロシア、モンゴルの政治犯、スパイ、浮浪者などの捕虜（「丸太」と称した）を人体実験し、約3千人が犠牲になったとされている（この数字は誇大という説もある）。

開発実験のために中国各地でペスト、コレラなどの細菌を散布した。関東軍は撤退の際、隠蔽のために特設監獄、人体実験の場など中枢部を爆破したが、ボイラー室煙突、総務部室の建物など周辺部分は遺っており、なお発掘・修復作業も続けられている。日本人として、見るのは辛いが、動かせない犯罪遺址である。

「アウシュビッツ、ヒロシマのように世界遺産とすべきで、登録作業が進んでいる」と案内人。その準備の一環か、売られている大判写真冊子は中国・英語版である。

第七三一部隊については森村誠一氏の『悪魔の飽食』三部作が知られている。初版（光文社）には写真誤用があって話題になったが、今は訂正されて角川文庫に収録され、取材ノートを含め全容を知ることができる。現場に佇むと、戦時の集団狂気にあらためて痛撃される。

「戦争なのだから」「お国のためだった」という声も聞く。しかし、ひとたび戦争が起これば、大きな渦に巻き込まれ、個人の自覚など消滅してしまう恐ろしさは消えない。

第七三一部隊の上級隊員は、帰国後も「秘密を漏らすな」を合言葉になぜか生き長らえた。彼らは高度な細菌技術・資料を米国側に提供したために「戦犯免除」になったと憶測されている。

戦後は終わりではなかった。その後の朝鮮戦争、ベトナム戦争などで米軍が用いた細菌兵器には、旧日本軍の技術の応用があったとされている。

さらに「人間の生命を自分（個人）の医術の素材視する思想は、日本の医学界に今も生き続けている」と指摘する識者もいる。ハルビン郊外の「集団狂気」は、60年以上前の悪夢だと忘れ去るわけにはいかない。

（武蔵野大学名誉教授）

中国と私

武吉　次朗

２００９年5月３０日
方正友好交流の会・第５回総会での記念講演

≪解説≫

武吉次朗（たけよし・じろう）さんは日本の敗戦後、中国に留用され１９５８年に帰国。その後は日中交流の最前線で活躍され、毛沢東や周恩来に謁見された体験を持つ方である。今まで断片的に周恩来に関する体験談をお聞きしたことはあるが、敗戦前後の貴重な体験は聞いていない。そこでそのあたりをじっくりとお聞きしたいと思い総会で講演をお願いした。本稿はその時の講演記録である。

実は最初、留用体験や周恩来の思い出などを語ってほしいとお願いしたところ、予想もしなかったが断られた。快諾してもらえるものとばかりに思っていたので驚いた。断られた理由は「自分の自慢話」になるからだとのこと。「結果的に自慢話になってもいいですよ。武吉さんだからこそのお話が聞きたいのです。今、武吉さんから聞かなかったら誰から聞けるんですか」とお話ししたところ、「少し時間をください」と言われて承諾してもらった。また再録についても渋られたが、これも後の人たちに伝える貴重な記録で「武吉さん個人のレベルで判断しないでいただきたい」とお話し、了解していただいた。

映画『嗚呼　満蒙開拓団』に周恩来の肖像写真が出てくるが、これも武吉さんが、「あの写真がいい」と言われて新華社に許可をもらい、映画に使用されたものである。

当初、羽田澄子さんから「周恩来の肖像写真が手に入りませんか」、という電話が入った。その後しばらくして武吉さんにお会いしたので、「周恩来のいい写真はないですか」とお尋ねしたところ、イタリア人が撮り周夫人の鄧穎超さんも気にいっている写真がある。中国人なら誰もが知っている写真だという。そうして新華社の友人を煩わした。武吉さんには改めて感謝の意を表したい。**（大類）**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私は「そもそも中国とは……」のような大上段に振りかぶった話をするのは苦手なので、「中国と私」と題して、自分が中国で体験し見聞したことを通じて、敗戦から日中国交正常化までの日中関係の一側面を、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

私は 1932 年（昭和７年）生まれで、1945 年 8 月 15 日の敗戦（「日本は戦争に負けた」と異国の地で痛感した私は、「終戦」というアイマイな言葉は大嫌いです）を中国東北のハルビンで迎えました。その年３月には『蛍の光』でも『仰げば尊し』でもなく、『海ゆかば』を歌って花園小学校（日本人の小学校）を卒業し、４月からは「戦闘帽にゲートル」という当時の軍国主義スタイルの制服で、ハルビン中学校（日本人の中学校）に通っていました。

一、　敗戦前後に見た三つの軍隊

1945 年夏以降、旧「満州」を舞台にくり広げられた日本・中国国民党・中国共産党・ソ連さらにはアメリカを加えた４か国・５方面の勢力の角逐について話せば、これだけで１時間はたっぷりかかってしまうので、それはさておき、私がこの目で見た３つの軍隊についてお話しします。

［関東軍］　かつて「精鋭」と謳われた関東軍は、主力が南方と本土に転出し空洞化した後、敗戦の１か月前に在「満州」日本人男性（40 歳以下）を根こそぎ動員したものの、武器不足で戦闘力が失われたので、ソ連と開戦の際は、在留邦人を見捨てて南満に撤退する方針を極秘裏に固めたのですが、そんなことは露知らずの民間人は「いざとなれば関東軍が守ってくれる」と思い込んでいました。

講演する武吉さん（写真・師岡武男）

８月９日、ソ連が日本に宣戦布告し「満州」に攻め込みました。11 日に、親友（父親が関東軍の中佐で、南方に転出した留守家族でした）が飛んで来て、「急に帰国命令が出た、さようなら」と言い残し、行ってしまいました。ずっと後になって聞いたところ、関東軍の高級将校家族と「満州国」の日本人高級官僚家族だけが特別仕立ての列車に乗り、朝鮮経由でさっさと帰国したのでした。これはハルビンだけでなく、各地で一斉に実施されたことが、後日判明しました。

「ハルビンから南へ 20km の平房に、関東軍の秘密施設があるらしい」とは、私たちもうすうす聞いてはいましたが、まさかあの 731 部隊とは想像もできませんでした。その平房の方向から、８月 15 日の夜（森村誠一著『悪魔の飽食』によると、敗戦の数日前から）、爆破音が聞こえ、わが家の窓ガラスがビリビリ震えるほどでした。悪魔の痕跡を消そうとしたのでした。爆破音は数日つづきました。

翌 16 日、街の様子を見ようと商店街に出たところ、中国人の家の軒並みに青天白日旗（当時の中華民国国旗）が掲げられており、仰天しました。誰が、何時、これだけ多くの旗を用意したのだろう？　日本の敗戦を知らなかったのは日本人だけだったとは……強い衝撃を受けたことを記憶しています。

［ソ連軍］　９月２日、つまりミズーリ号で日本が降伏文書に調印した日ですが、その日にスターリンがモスクワでおこなった演説を、私はビラで読みました。「われわれは、日露戦争で失った領土（樺太南部と千島）と権益（中国東北の鉄道と不凍港の大連・軍港の旅順）を取り戻した」と高らかに謳っていましたが、ロシアの国益むき出しでした。

８月 18 日、ソ連軍がハルビンに進駐しました。とたんに、男狩り・女狩り・略奪と暴行の嵐が吹き荒れました。わが家にも、何度もやって来ました。私がいたアパートで飼って

いた２匹の犬が猛然と吠えかかるや、われわれが「マンドリン」というあだ名を付けた自動小銃で、「キャン」と泣く間もなく殺されました。つづいてドアが乱暴に叩かれました。すぐ母と２人の姉、それに避難して来た親戚など数人の女性を、半間の押入れの上下段に潜ませ、私が大きな洋服だんすをエッチラオッチラ動かして押入れを塞ぎ、それから父と２人でソ連兵に対応しました。ソ連兵が来るたび、これを何度もくり返しました。

級友の記録には、こう書いてあります。「わが家に押し入った若いソ連兵は見るからにみすぼらしい軍服を着ており、長靴の先は破れ、汚れたつま先が見えています。「時計をよこせ」と威嚇するので、仕方なく父が腕時計をはずして渡すと、汚れた袖を捲りあげ、どこかで先に奪った５～６個の腕時計に加えて父の時計をはめ、ネジが切れて針が止まっている時計をはずし、わが家に捨てていきました。当時の時計はねじ巻き式でしたが、時計のねじを巻くことすら知らないのです。」「次に台所に行き、砂糖、メリケン粉、味の素など白いものは何でも同じと思ったのか、大きな袋に一緒に入れて持ち帰りました。いったいどんな味がしたのでしょう。」わが家も、そしてハルビン、いや「満州」各地の日本人の家はすべて同じ目に遭いました。被害は中国人にも及びました。

当時、中国共産党の率いる八路軍（東北民主連軍と呼ばれた）の参謀長だった伍修権は、回顧録にこう書いています。「ソ連軍の規律がひどかったのは、正規の軍人に刑事犯人をまじえていたからだ。ドイツとの戦争で兵力の損害が甚大だったため、服役中の囚人たちを最前線部隊に加えた。もともとまともな人間でない連中が勝利者きどりでやりたい放題振舞ったため、中国人民にも悪い印象を与えた。」この嵐は、さすがにソ連軍当局の取り締まり強化により１か月ほどで収束しましたが、日本人に拭いがたい悪感情を植え付けました。

ソ連軍は、「軍票」を発行しました。何の裏づけもない紙切れですから、一種の収奪の手段にほかなりません。総額は、当時の価格で 10 億元ともいわれます。またソ連は、敗戦の時「満州」にあった日本企業を「すべて中ソ合弁企業にしよう」と当時の中国国民党政府に持ちかけましたが、これにはアメリカも強く反対し、中国政府に拒否されると、工場・鉱山・発電所などの設備から 180km におよぶ鉄道レールまでを、「戦利品」と称して撤去し持ち帰りました。関東軍軍人以外の「男狩り」は、この撤去と貨車への積み込み作業のためでした。もともと中国人民に返すべき資産だったのですが。

この時期に、奥地から開拓団員が、着の身着のままどころか、麻袋（ドンゴロス）一枚を頭からかぶっただけでハルビンにたどり着き、市内の小学校などの難民収容所に入りましたが、飢えと寒さと発疹チブスなどの病気で、大勢の人が命をおとしました。

［八路軍］　（後に東北民主連軍→東北人民解放軍→第４野戦軍と改称）　中国共産党はもともと東北をきわめて重視しており、日本の敗戦と同時に 14 万人の八路軍と、党中央委員の３分の１を昼夜兼行で東北に送り込みました。国民党軍も米軍艦艇と輸送機の支援を受け、精鋭部隊を東北南部の大都市に送りました。東北では、ソ連軍が 1946 年５月初めまでに撤退した後、地域により事情が異なりました。大連はソ連が抑えたので国民党軍は入れませんでした。瀋陽は八路軍の進駐をソ連が認めなかったので国民党軍が入りました。

長春は市街戦をへて八路軍から国民党軍に入れ替わりました。私が住んでいたハルビンは八路軍が4月28日に無血入城しました。

粗末な軍服に不ぞろいの武器を持って、聞いたことのない歌を歌いながら、元気いっぱい行進して来ましたが、それが「三大規律・八項注意の歌」だったことを、後になって知りました。これは1927～37年の第2次国内革命戦争期に毛沢東が定めた、民衆と一体になり民衆に奉仕する革命軍隊の規律で、1935年には歌になり、文字の読めない兵士でも毎日歌うなかで理解し、実行できたというものです。8節まであります。悪声ながら、第1節を歌ってみましょう。(歌う)

大通りに面したわが家のはす向かいに大きな木材倉庫があり、八路軍の1部隊が駐屯しました。当時、わが家では小さな食品店を開いていましたが、駐屯した部隊の事務長が毎日、食材と調味料などを買出しに来ました。穏やかな態度で、キチンと代金を払っていくので、ソ連軍とは大違いだなと感心しました。一度「ラジオはないか」と聞かれたので「ソ連の兵隊がとっくに奪って行った」と答えたところ、なんとも理解できない様子。数年後、仕事の中で中国語が上達してから、たまたま職場の食堂で隅に山積みされた唐辛子を見たとたん、「あの時、事務長が買いたかったのは、ラジオではなくてラージオ(辣椒、唐辛子の中国語)だったんだ!」と気づき、申しわけなかったと悔やんだものです。今でも思い出すと恥ずかしくなります。

八路軍の進駐後、治安は急速に回復し、日本人民会に協力して難民救済もそれなりに進展しましたし、日本人の小中学校も「塾」という形式でしたが再開されました。8月から10月にかけて待望の引き揚げが始まりましたが、この期間は国共内戦が双方の合意で一時停戦になり、国共双方が引き揚げ事業に協力してくれました。

二、日本人の「留用」

「留用」とは、一定期間留めて任用する、という意味の中国語です。

中国東北にいる日本人(民間人)の引き揚げが日程にのぼったころ、中国共産党は国民党との内戦が不可避と判断し、対応に追われていました。一つの深刻な問題は、戦争に不可欠の医療関係者が圧倒的に不足していたことでした。中国側の史料によると、東北に進駐した八路軍の医療要員は1600人に過ぎませんでした。また、工業技術者も不足していました。そこで、日本人の中から適任者を残すことが決まりました。

「留用」の方式はさまざまでした。先ず、私は「組織ぐるみ」と呼んでいますが、一部の病院は院長以下全員「留用」になりましたし、私が働いた軍工部の工場は、新潟から「満州」に疎開した「理研機械」という会社の技術者がそっくり「留用」になったので、職場では新潟弁が飛び交っていました。次に、中国側による指名がありました。日本人に履歴書を書かせ、適任と思われる人を残したのです。逆に、日本側責任者による指名もありました。「私も残るから、君もぜひ残ってほしい」と要請したわけです。満鉄中央試験所の丸沢常哉所長が、贖罪意識からそうされました。さらに、寄る辺がなく、「八路軍に参加したら、とにかく食べられる」と加わった若い人たちもいました。要するに、「残留させられた」人がほとんどで、思想信条から進んで残った人は、ごく個別だったわけです。

「留用」の分野と規模について。医師、看護師など医療関係の専門職が 3000 人（このほかに炊事や下働きの補助要員が 2000 人）といいますから、前述の八路軍の人数と比べ、初期に日本人が担った役割の大きさが分かります。次に、戦場で負傷兵を搬送する「担架隊」には、元「満蒙開拓青少年義勇軍」の少年たちが大勢参加しましたし、トラックやジープの運転手もいました。林弥一郎少佐の率いる関東軍第４錬成飛行隊の 300 人は、中国人民空軍の創設に協力しました。

軍工部という軍需産業部門にも大勢いましたが、後に各業種の民需産業へと移っていきました。重要なエネルギーの石炭は、鶴崗炭鉱だけで 1800 人の若者が採炭現場で働きました。紙幣や新聞に必要な製紙工場、鉄道、変わったところでは「満州映画協会」の監督や技術者が 200 人残り、東北電影製片廠（映画製作所）の立ち上げと記録映画・劇映画製作に協力しました。

私は父と姉婿の「留用」にともない残り、14 歳で軍工部の工場に見習い工として入り、火薬で染めた軍服を着て働き、その後黒竜江省の駝腰子というところにある金鉱（砂金）に転じ、坑木に使う木を山で切り出す樵（きこり）、機材修理工場の旋盤工、倉庫管理員などをへて、統計員として事務所で働きました。「留用者」は全部で１万数千人、家族を合わせると２万数千人にのぼりました。

残された当初、日本人には不満をもつ人が多く、「早く日本へ帰りたい」「でも、戦争に負けたのだから仕方がない」が共通の心情でした。しかし、八路軍の厳正な規律と穏やかな態度から、恐怖心はありませんでした。また、たしかに苦しい環境でしたが、中国人の同僚も同じでしたから「敗戦国民として懲罰を受けている」とは感じませんでした。さらに、日本人特有の「職人気質（かたぎ）」から、病院でも工場でも、与えられた仕事は決して怠けず、手抜きせず、細心にやり遂げました。

中国国防大学の徐焔教授が書いた『1945 年・満州進軍』という本が日本語に訳されていますが、次のような記述があります。「解放軍の将兵だった筆者の両親や多くの古参幹部は、日本人医療関係者を口々に絶賛した。日本人看護婦は仕事を割り当てられると『はい』と一声で応じ、いいかげんなところは一つもなく、丁寧に遂行して、中国人同僚に深い印象を与えた。」

これに対応して、中国共産党は次のような政策を定めました。「留用の日本人は捕虜ではなく友人である。政治の面では日本軍国主義者と明確に区別し、一視同仁にあつかう。仕事の面ではその技術を尊重し、努力を信頼する。生活の面では同等に処遇し、可能な範囲で配慮する」というものでした。

この政策を、当時の中国共産党幹部たちは率先して徹底実行しました。上司たちからしばしば「何か困ったことはありませんか」と聞かれなかった日本人は、一人もいないでしょう。あの人間的な魅力は忘れがたいものでした。「人民に奉仕する」という理念はお題目ではなく、毎日接する幹部の言動そのものでした。これに、われわれは「しびれました」し、「まいった」のでした。そして「この人たちが必死で取り組んでいる事業に、われわれも協力しよう」という機運が芽生え、盛り上がったわけです。今にして思えば、中国共産

党がいちばん輝いていた時期だった、と言えましょう。

同じ釜のメシを食べ、同じオンドルで起居を共にするうち、日中双方それぞれにあったわだかまり（日本人には心の隅に「シナ人に対する優越感」があり、中国人には「憎き日本の鬼という反感」がありました）が消え、連帯感が芽生えてきました。

解放戦争の戦局が、毛沢東の予言どおり急展開していったことも、日本人を驚嘆させ、中国共産党の主張への関心を高めました。中国共産党の本拠地だった延安が国民党に占領されたと知って、私たちがお先真っ暗な気分に落ち込んだとき、中国の幹部は「われわれは必ず全国解放の日を迎える」と断言しました。夢物語のようでしたが、果たせるかな、そのとおりの進展になり、われわれを感服させました。

「人生、意気に感ず」と言いますが、仕事にいっそう励むことによって、表彰者が輩出しました。中国側の公式記録によると、第４野戦軍で働いた日本人医療要員の 80%以上が表彰されたとありますが、これはほんの一例にすぎません。

前述の空軍パイロットの養成は、創立された東北航空学校で、林少佐はじめ日本人の熱心な教育と中国人学生の懸命な努力により成功し、これが基礎になって、朝鮮戦争ではソ連から購入したジェット機を操って、ベテランの米軍パイロットと渡り合えたのです。４年前に北京で『新中国に貢献した日本人たち』という本が刊行され、留用日本人の事績がくわしく紹介されましたが、私も訳者として出席した出版記念会には王海・元空軍司令官（東北航空学校の１期生で、朝鮮戦争の戦闘英雄）も出席し、かつての日本人教官を偲びました。淡々と話されるのですが、聞いているうち、胸が熱くなりました。

建国後すぐ、日本との文通が始まりました。さらに、日本にいる家族への送金も可能になりました。建国直後の中国にとり極めて貴重だった外貨を、このような面に使えたのも、中国側の厚い配慮と言うべきでしょう。奥さんを日本に残した私の同僚も毎月送金したので、「ご主人はよほど立派なところにお勤めなのですね」と近所で評判になった由でした。

戦争である以上、犠牲は避けられません。戦場で、あるいは不慮の事故で亡くなった日本人の名前が、各地にある烈士墓地に刻まれています。

先ほど申し上げたとおり、このような事績を取材し、まとめた本が刊行され、日本語訳は私が翻訳を依頼され、担当しました。後藤田正晴先生から、「本書に登場する人々は、戦争で破壊された日中両国の友情を、自ら汗と血で修復して、今日の礎を築かれた」という推薦の言葉をいただきましたが、これが先生の絶筆となりました。

三、日中交流と周恩来

私は青春時代を中国で過ごし、中年期は日本国際貿易促進協会という民間団体に奉職して日中経済交流に微力を尽くし、初老に至ってから大学で教育と研究に専念するという３段階の人生を歩んできました。ここからは中年期の話になります。

国交正常化前の日中経済交流の際立った特徴は“以民促官”、つまり民間の力で政府を動かしたことで、経済界は中国との国交正常化を求める国民運動の一翼を担いました。

中国の対日方針は、毛沢東と周恩来を軸にして、建国初期からしだいに形成され、1960

年代、つまり方正の日本人公墓の建立が認められたのとほぼ同じ時期に完成したと、私は推測しています。その対日方針のポイントを私なりにまとめると、「日本軍国主義者と日本人民を明確に区別し、日本各界と協力して『以民促官』で、国交正常化、さらに世世代代の友好を実現する」というものでした。その根底には、「万国の労働者、団結せよ」というマルクス主義の階級観があり、その背景には、第２次大戦後の連合国による戦後処理・戦後和解の方針があったわけですが、もう一つ、この方針の実行が可能であることを実証した事例が、戦後間もなく、ほかならぬ中国東北で起きていたことがあげられます。それが先ほど述べた「留用日本人」の活躍だったのです。

周恩来総理は 1954 年に日本の訪中団と会見した際、「留用」された日本人の事績を次のように高く評価されました。「日本が降伏した後、中国の東北で中日両国の人々の間に友情が芽生えました。一部の日本軍人と居留民が中国に残り、中国の同僚とともに働きました。昨日まで敵だったのが、今日は友人になったのです。日本の多くの友人がりっぱな仕事でわれわれを援助していただいたことに、たいへん感謝しています。かつて戦火を交えたものが、武器を捨ててともに働き、しかも互いに信頼しあったのです。多くの中国人が負傷したとき、日本の医師に手術してもらい、病気になったとき、日本の看護婦に看護してもらいました。信頼していたからです。工場でも、中国人は日本の技術者を信頼し、いっしょに機械を動かしました。科学研究機関でも、中国の科学者は日本の科学者の研究成果を信頼しました。これが友誼であり、ほんとうの友誼、たしかな友誼といえましょう。これこそが、我々の友好の種子なのです。」

このような実績が高く評価され、「日本人民と手を組んで世世代代の友好を実現することができる」という自信を、中国首脳に持たせる一つの力になったと言えるでしょう。

ただ、このような対日方針を実行するためには、中国人民への教育と説得が不可欠でした。中国人民にとっては、８年にわたり日本軍国主義により侵略され、苦しみを嘗め尽くし、恨み骨髄に徹していたのですから、特に次の２点が難しかったようです。

① 日章旗の掲揚をめぐって。1956 年に北京と上海で、1958 年には武漢と広州で、日本商品展覧会が相次ぎ開催されましたが、國際慣例に沿って会場入り口に「日の丸」を掲揚したとたん、人民の不満と抗議が殺到しました。「あの旗を見ただけで、侵略され暴行されたことが思い出され、血が逆流し体が震える」「なぜ掲揚するのか」これに対し中国側は周総理の指導により、ポールの下に解放軍兵士を立たせて旗を守るとともに、人民に「今来ている日本人はかつての侵略軍隊とは違い、友好増進に努めている人たちだ」と、中日友好に関する説明と説得を進めました。

② 対日賠償請求の放棄。国交正常化の前夜に上海でおこなった調査によると、大半の庶民は「国交正常化は結構なことだが、賠償は当然取るべきだ」「賠償を取れば給料がみんな１ランク上がる」などと考え期待していたようです。中国政府は、「中国人民は、甲午戦争（日清戦争）や義和団事件（北清事変）などで巨額の賠償を取られたことで、賠償の苦しみを体験している。この苦しみを日本の次の世代に味あわせることは、世世代代の友好にとり良くない。われわれは自力更生で国づくりを進める」と、説得に努めました。

日中双方の協力と努力により、民間ベースの交流は経済・文化など各分野で小規模ではじまり、しだいに展開され推進されました。経済分野では、中国経済の発展にともない、中国の存在感が高まり、中国との友好を唱える経済人が急増し、やがて半官半民の覚書貿易も発足して、民間ベースの友好貿易と「車の両輪」を形成しました。経済界が国交正常化を求める国民運動の一翼を担ったことは、政治を力強く後押ししました。文化分野では、松山バレエ団など舞台芸術の相互訪問と公演、日本映画週間の開催、卓球やバレーボールなどスポーツ交流がさかんにくり広げられました。特筆すべきものとして、仏教界の交流があげられます。戦争中に強制連行され日本の鉱山などで働かされ死亡した中国人の遺骨を、仏教界と友好団体で結成された中国人俘虜殉難者遺骨送還実行委員会の努力で収集し、1950年代に2300柱を送還しました。

こうして1972年の初頭になると、日中国交正常化を求める国民運動は空前の盛り上がりを見せ、各党・各界・各紙がこぞって主張するまでになりました。何かにつけ意見が真っ二つに割れるのがあたり前の日本で、国論がこれほど一致したのは、戦後初めてのことといえます。

さて、周恩来の人格の魅力に話を進めましょう。

中国の指導者で、周恩来ほど多くの日本人と会った人は、いないでしょう。私も５回、お会いする幸運に恵まれました。周恩来が会った外国人の中で、日本人は断トツのトップでした。

まず、握手の仕方が違います。中国幹部の中には、あさっての方を見ながら握手する人もいますが、周恩来は丁寧に握手しながら、あの澄んだ目で相手の目をじっと見つめるのです、まるで、相手の心の中を見透かすように。たいていの人は、これでしびれてしまいます。

次に、周恩来が外国人と会見する際は、閣僚や局長など関係部門の責任者が同席するのですが、周恩来は時々、彼らに数字などを質問します。そのとき周恩来がいちばんきらいな回答は、「だいたい」「たぶん」といった表現で、われわれの目の前で叱責します。ですから幹部たちは、何を聞かれてもすぐ正確に答えられるよう、大きなカバンに書類を詰め込んで着席、待機していました。

周恩来が会った日本人は政治家や著名人だけでなく、一介の庶民にいたるまで、広範にわたりました。たとえば、★1970年12月6日、故・浅沼稲次郎社会党委員長の夫人一行と会見した際、同行した女婿がＴＶ記者で、ちょうど日本で注目されはじめた「公害問題」を担当していることが分かると、すぐ「説明会を開いてくわしく理解するように」指示しました。　★同年12月8日には、菅沼正久信州大学教授および３人の農民と会見しましたが、事前に関係者多数を召集して同席させ、日本の農業の実態について６時間にわたり質問し勉強しました。日本側が「稲の収穫は反あたり何俵」というのを、中国の単位である「１ムーあたり何斤」に換算するのですが、その換算がいちばん速かったのは周恩来だったと、菅沼教授から聞きました。この会見のホールに入りきれなかった人たちは、別室でスピーカーを通して聞いたそうですが、その中に、後の外交部長、唐家センさんもいたそ

うです。

次に、実にこまやかな考慮・配慮があげられます。いくつか例を挙げてみると、★1963年4月30日、中国から初めて日本に行く貨物船の「躍進号」が、途中で沈没しました（乗員は全員救助されました)。私はたまたまその 10 日前に日本国際貿易促進協会の事務局で勤務しはじめたばかりだったので、なおさら強い印象を受けた事件でした。協会が最初に受け取った電報には「国籍不明の潜水艦に魚雷を3発受けた可能性もある」と書いてあったので、内外から注目されたわけですが、周恩来は自ら上海に飛び、交通部と海軍の尻をたたき、実情調査のため艦艇と潜水員を派遣した結果、「座礁のため沈没した」との結論を出し、一件落着となりました。この過程で周恩来は「もし鱶が来たとき、潜水員の対策はとってあるのか」とまで細かく質問し、担当者を驚かせたといわれます。　★さきほどの浅沼夫人ですが、会見の際、和服を着て行かれたので、人民大会堂の長い階段を下りるとき寒空にさらされないよう、「帰りは地下の特別通路を使うように」と指示された由です。★外交部の若い職員によると、周恩来が主宰する会議で晩くなったとき、「もう外交部の職員食堂は閉まっただろう、君たちはここで食べて帰りなさい」と、自腹を切って、人民大会堂で夜食をふるまったそうです。

さらに、抜群の記憶力があげられます。方正の松田ちえさんの名前を覚えていたのは、皆さんご存知のとおりですが、地方出張で乗った飛行機や列車の乗務員の名前を、次に会った時ちゃんと呼びかけ、乗務員たちを感激させたのは有名です。これに関連して、いささか.自慢話になって恐縮ですが、私の名前の「次朗」の「朗」は「明朗の朗」で、日本でも中国でも、よく「郎」と間違えて書かれます。中国のある稟議書で、当時貿易団体の北京連絡員だった私の名前にこの「郎」が書いてあったのを、周恩来が決裁したとき、「郎ではなく朗の筈だ」と付記されたと、中国の関係者から聞き、とたんに涙があふれました。あの超多忙な方が、何回かしか会っていない外国人の若造の名前を覚えておられたとは・・・・

文化大革命でいちばん混乱していた 1967 年8月 22 日、外交部の「極左・造反派」が北京の英国代理大使館を焼き討ちし、大きな国際問題になったことがありました。これを知った周恩来は激怒し、首謀者を逮捕するとともに、英国側に公式に謝罪するよう外交部に指示したのですが、当時の社会の雰囲気に呑まれ、「英帝国主義に頭を下げる」などとんでもないと、誰もキチンとお詫びできない。そこで周恩来は、みずから英国代理大使に謝罪しました。ですから、あの混乱の時期に、公式の場で周恩来が姿を見せると、各国外交団は、「彼が健在なかぎり、この国は大丈夫だ」と判断したといわれます。

「革命第一、工作（仕事）第一、他人第一」という言葉がありますが、私は、周恩来こそ、この言葉を生涯かけて実践した人だと思えてなりません。文化大革命が熾烈を極め幹部たちが相次ぎ「打倒」されたとき、周恩来は「私が地獄に入らなければ、誰が入るというのか」と、悲壮な決意で複雑な諸問題と格闘したのでした。

たとえば、ある大学で２派に分かれて対立している紅衛兵を説得するとき、若者を座らせながら、自分は立ったままなので、見かねた紅衛兵が「総理、お掛けください」と言うと、「いや、自分はもう３日間、一睡もしていないから、座ったらとたんに眠りこけてしまう」と断ったそうです。このことを話してくれた中国の女性幹部は、「ああ、私たちのすばらしい総理！」と言って絶句し、涙を拭いました。

だからこそ、周恩来は中国人民に敬愛されましたし、1976 年 1 月 8 日に亡くなったときは全中国が慟哭したのです。外交部で対日関係の仕事をした丁民さんという畏友が、周恩来の死後 20 年以上たってから、総理（彼は、われわれの世代が「総理」というのは周総理のことだ、と言います）の訃報を聞いた時の思い出を、日本の大学生に語った速記録があります。「入院中の私は、明け方寝つけないのでイヤホンでラジオを聴いていて、訃報を知り、そのトランジスタ・ラジオを.持ってナースセンターに駆け込み、皆で大声をあげ泣いたのを覚えています。……（筆記者注：丁民氏は講演しながら泣いていたので、次の言葉が出た）……失礼しました。」

1 月 15 日の追悼会当日、「四人組」の巣窟だった上海では、政府職員に追悼行事をさせないため、わざわざ冬空に郊外へ行かせ農作業をさせたのですが、追悼会が始まる時刻に、黄浦江に停泊中の船も通行中の車も、一斉に汽笛とクラクションを鳴らして、敬愛する周総理を偲んだそうです。

私はその 1 か月後の 2 月に訪中しました。どの訪問先でも、まずお悔やみを述べたのですが、「周総理の死去に……」と話しはじめると、男性の幹部は顔をゆがめ、女性の幹部はすすり泣きはじめ、日本語で話しても通訳も声にならず、実に辛い旅を経験しました。

私にとり忘れられないことがあります。日中貿易関係業界では、年初に「賀詞交歓会」を開くのが慣例になっており、1976 年は 1 月 9 日に開くべく、準備万端整えていました。ところが当日早朝、訃報が飛び込んできました。私どもはすぐ中国大使館の了解をとり、交歓会を中止することにして、事務局総動員で 1000 人近い出席予定者への連絡に追われました。それでも漏れた人がいるかも知れないので、私ら数人が予定されていた会場に行き、事情を知らぬまま来られた方に説明し、お引取り願いました。それから数人で中国大使館に行ったところ、翌朝から弔問を受け付ける準備ができていたので、私たちはホールに掲げられた周恩来総理の遺影の前で黙祷を捧げましたが、在りし日の思い出がよみがえり、号泣しました。肉親以外の死亡で泣いたのは初めてのことでした。

ここに 1976 年 1 月 9 日の日本の各紙夕刊を持ってきました。朝日、読売、毎日、日経、産経、東京、夕刊フジ、いずれも 1 面トップに周恩来の訃報を大きく掲載するだけでなく、すべて数ページの特集を組んで、その偉大な生涯と日中関係で果たした貢献を称えています。2 月 10 日には日比谷公会堂で「周恩来総理国民追悼会」が開かれ、私も参列しましたが、三木総理はじめ各界の人々が来場され、広い会場の外まであふれる人の波でした。

慶応大学の添谷芳秀教授は労作『日本外交と中国』の中で、「親中国派の動機」について、次のように指摘しています。彼らの根底には、2000 年にわたる交流を踏まえた絶対的ともいえる親中国的感情があった。親中国派は、第一に「脱亜入欧」への反省として「アジア

主義」的発想を共有していた。第二に日中間の経済的相互補完性も重要だった。さらに、中国との何らかの個人的体験があった。また、中国侵略に対する贖罪意識があった。こう列挙した上で添谷教授は、「これらの人々にとってそれ以上に決定的だったのは、周恩来との出会いであった」「たとえば周恩来が岡崎嘉平太に対して示した真摯な態度には、政治的計算以上のものがあった。それでなければ、岡崎が周恩来を『人生の師』として仰ぐことはなかったであろう」と述べていますが、適切な指摘と思えます。その意味で、「周恩来なくして今日の日中関係なし」とさえ言えるのではないでしょうか。

そろそろ時間になりました。魯迅は、「地上にはもともと道はない。歩く人が多くなれば、おのずと道ができる」と言いました。廖承志さんが戦後はじめて来日したとき、羽田空港でこの言葉を引用しながら、交流拡大への熱い期待を示されたのですが、私も大勢の人たちとともに、日中交流の道を、一歩一歩歩んできました。いま両国の間には、頑丈な鉄橋が架けられていますが、その橋を支えているのは、無数のねじ釘です。私はその一本のねじ釘になりたい、できれば、いつまでも錆びないねじ釘でありつづけたい。これが私の念願です。

ご静聴、ありがとうございました。

［付］三大規律、八項注意

三大規律：一切の行動は指揮に従う。
大衆の物は針一本、糸一筋も取らない。
一切の捕獲品は公に帰する（私物化しない）。

八項注意：話し方は穏やかに。
売買は公平に。
借りた物は返す。
壊した物は弁償する。
人を殴ったり罵ったりしない。
畑の作物を荒らさない。
女性をからかわない。
捕虜を虐待しない。

朝日新聞 2009 年 11 月 25 日付朝刊に掲載

訪中 新支援策が後押し

残留孤児 不信解く旅

日本での苦境に理解進む

全国に暮らす中国残留日本人孤児45人が「中国人民に養育の恩を感謝する中国訪問団」を組織し、11月初めに訪中した。命を救い、育ててもらった感謝の気持ちを伝えるためのこうした旅を、孤児らが自ら企画するのは初めて。誤解に基づく中傷も受けてきた孤児たちは悲願を果たし、「これから本当の日中友好に役立ちたい」と誓い合った。

訪中団は、衆議院議員、弁護士ら、秋田から鹿児島までの孤児の代表計60人。2千人を超える孤児らが02年から老後の生活保障を求めて全国で裁判闘争に立ち上がった末に勝ち取った新支援策が昨春から実施されて実現した。

今回の訪中が悲願だったのは、中国東北3省などで「育ての親を忘れた」「恩知らず」などとする声が聞かれていたからだ。

新支援策実施以前は、約7割の孤児が生活保護で暮らし、海外に出かけると保護費が支給されなくなるため、養父母の見舞いに恩うように行けない状況だった。中国側の親族には日本語が不自由な孤児が日本で悪戦苦闘していることは想像できず、また孤児も厳しい現実を養父母らに語ることはできなかった。そのため、豊かな日本に帰国したのになぜ訪中しないのかと不信感を強くしがちで、4年ほど前には黒竜江省のテレビや新聞で病気の養母と連絡を絶っている孤児を非難する報道が相次いだ。

当時、取材を受けた訪中団団長の池田澄江さん(65)＝東京都＝は「多くの孤児が気持ちはあっても訪中できなかった。区切りがついたらみなと養父母感謝の旅に出ると決めていた」と振り返る。

一行は9日に、最も孤児が多かった黒竜江省の省都ハルビン市で養母や地元政府関係者らを招き、「中国人民に養育の恩を感謝する交流会」を開催。11日には北京で、ふだんは外国の要人しか招かれない中南海で温家宝首相と面会し、感謝の気持ちを伝えた。

「お帰りなさい」と出迎えた温首相は孤児らの話に熱心に耳を傾け、「みなさんは日本で仕事が見つけにくく、収入が少ない中、強い精神力で生活を支えてこられた」などと発言。自ら中南海を案内、1時間半に及ぶ異例の対応に孤児らは感動しきりだった。

訪中団の動きは中国のテレビや新聞で連日大きく取り上げられ、中国社会の孤児らへの誤解を解く一歩となった。孤児問題に30年近くかかわってきたハルビン市紅十字会の胡暁慧(フーシャオホイ)会長補佐も「なぜ日本に帰ったままで連絡も取らない孤児がいるのかという事情が今回初めてわかった」と話した。

訪中団のひとり、石川千代さん(76)＝高知市＝は「『恩知らず』と言われている状況が今回の訪中で変わればうれしい」と話している。

（編集委員・大久保真紀）

自ら案内する温家宝首相(右)と談笑しながら中南海を歩く中国残留日本人孤児たち＝11日、中国・北京、大久保写す

キーワード

中国残留邦人らへの新支援策　老後に尊厳をもって安心して暮らせることを目的に、08年4月から実施されている施策。主な柱は、国民年金の満額給付（月6万6千円）▽納付した国民年金保険料の払い戻し▽生活支援金の給付(月最高8万円、配偶者がいる場合は同12万円)▽住宅費、医療費、介護費などの支給。ただし、厚生年金などの収入は7割が収入認定を受け、その分生活支援金が減らされる。

池田澄江さんと菅原幸助さん

岩波ホールで映画『嗚呼　満蒙開拓団』が上映中の７月、毎週水曜日に羽田澄子さんが聞き手になり、関係者からお話を聞く会があった。その第１回のゲストが右の記事の菅原幸助さんだった。

２回目が上の記事の池田澄江さん。温首相と腕を組んでいる女性だ。残留孤児裁判でも先頭に立ち、映画の冒頭のシーンにも登場している。

３回目が方正で亡くなった約4500人の焼却を手伝い、映画でも登場した吉泉照雄さんは、「歴史検証の旅」にも参加。ちなみに本誌表紙写真の左に本人が映っている。

４回目が葛根廟事件で奇蹟的に生き延びた百数十人の一人、大島満吉さん。

５回目が元残留婦人で、ＮＰＯ法人中国帰国者の会会長鈴木則子さんだった。

東京新聞 8 月 20 日付朝刊

この人

裁判闘争の記録を出版した 中国残留孤児の〝厳父〟 菅原(すがわら) 幸助(こうすけ)さん

■国の謝罪や二世への配慮もないのはおかしい

十四歳のとき満州へ。終戦の夏、ソ連が参戦した日に憲兵に任官。軍人とその家族が乗った避難列車を護送する特命を受けた。列車が襲われ荒野に置き去りにせざるを得なかった母子。「その情景が悪夢のように頭にこびり付いて離れなかった」。それが孤児問題と向き合う原点に。

永住帰国を前に中国から送ってくる手紙の多くは、以前は「住むなら駅に近い所。仕事は事務系を探して」と書いてあった。過剰な期待を抱く孤児を「日本で暮らすのはそんな甘いもんじゃない」と容赦なく一喝した。やさしいが甘やかさない。山形県出身。八十四歳。

（白井慎一）

中国残留孤児には「菅原」姓が少なくない。しかし、血縁関係はない。「日本の戸籍を作ったとき『先生の名字を下さい』と言われ、いいよって言ったら、ドンドン増えちゃって」

支援活動のボランティア歴は二十四年。全国十五地裁で計二千人以上が原告となった国家賠償訴訟の記録をまとめた「『中国残留孤児』裁判」を出版した。

「貧乏なのでカネをくれという運動じゃない。政府から謝罪もなく、孤児を支える二世たちへの配慮もないのはおかしい」

大きな愛情で日本人孤児を育てた中国に残る養父母へ

感謝の義援金募集　趣意書

（財）兵庫県海外同友会では日本人孤児への日本語教室の開催や就職の世話、生活相談コーナーの開設など、長年に渡って支援活動を続けてきましたが、戦後64年がたち、ここ数年は帰国する孤児たちはわずかとなっております。

永住帰国からの年数の少ない日本人孤児たちも高齢化が進んだ昨今では、長年の生活環境の違いや言葉の壁もあり、充分な生活支援も受けられず困窮な毎日を過ごされている方々も多くおられます。一方で中国におられる養父母たちはそれ以上に高齢化し、医療面や生活面で困窮な状況の人も多々おられます。そういった養父母へ生活支援もままならず、又亡くなられた養父母への墓参も叶わぬ日本人孤児たちも多いのが現状です。

養父母にとって正に時間的余裕がないことから、海外同友会の平成21年度の事業の柱として中国の養父母への生活支援募金活動を行なうことと致しました。なお、今回は日本人孤児たちの養父母墓参の為の一時帰国支援も対象と致します。

海外同友会では、中国の養父母及び中国政府に感謝の気持ちを表すため、平成2年から2年間にわたって、市長会、町村会はじめ当時の貝原俊民知事の全面的な協力を受け、県下100ケ所の募金箱を設置、県民から約650万円の浄財を集めました。この義援金を元に北京市内に『養父母接待センター』が開設されました。この施設は養父母や、日本人孤児たちが日本訪問や里帰りの際の宿泊や渡航サービス等に利用されています。

このときの募金活動では県民一人当たり500円カンパを募りましたが、今回も皆様にカンパを御願いし、2年間の活動で1000万円の義援金を集めたいとしています。兵庫県下41市町に募金箱を設置し、同友会の役員はじめ、早急にボランティアの募集により、街頭募金活動なども積極的に展開してゆく決意です。

以上の本趣意書について県民の皆様の深いご理解とご支援の程御願い申し上げます。

平成21年10月吉日

財団法人　**兵庫県海外同友会**

理事長　　霜下隆俊

１１月５日（09年）、財団法人兵庫県海外同友会の理事・遠藤捷爾（えんどうしょうじ）さんが事務所に来られいろいろと意見を交換した。同財団は、上記のように、中国養父母へ感謝の義援金募集活動を行っている。ご支援ご関心ある方は、以下の事務所にご連絡してください。

〒651-0062　神戸市中央区坂口通２丁目１番18号　兵庫県立福祉センター内２Ｆ

財団法人　兵庫県海外同友会　ＴＥＬ＆ＦＡＸ：078－242-4622

もうひとつの“炮台山”

高橋　健男

1　難民救済組織と働きの具体は？

方正であれ新京、奉天、ハルビン、チチハルなどの都市部であれ、そこに避難集結した開拓団避難民を主とした難民は、行き着いたそれぞれの地で自分たちの力で住むところを探し、食糧を確保し、収容所生活を始めることができたわけではない。彼らはおしなべて疲労困憊の上に身一つ、無一物に近かった。

そんな彼らは誰かの采配で居住区画を与えられ、身を置く狭い場所をあてがわれ、少しばかりずつでも食糧給与を受けたはずである。手記には「一家6人に畳4枚に満たない場所を与えられ...」、「給食係がバケツに高粱粥をもらいに行き...」、「ソ連軍の使役に」等の表現で何らかの都市部在住日本人らによる組織的救済の動きをうかがわせる。都市部ではまず現住者の保護の目的でその地の日本人会が発足したり、流入してくる避難民のための救済組織が作られたりしていた。では、方正ではどうだったのか？

采配を取り指示を出し、救援のための諸々を担当した人たちがいたはずである。その事務組織や連絡組織ができたはずである。ところが避難民集結地や難民収容所に関する手記類にこの組織的動きの詳細が記されることはない。避難民の立場からすれば、すべてにすがって過ごす数ヶ月を経なければ、周りの状況を客観的に見ることはなかった。自分たちが受けた各種連絡は臨時に決めた班長からであったり、開拓民の避難集団にいた年配の男性からであったりしたのであろう。その人たちがどこから連絡や指示を受けているかを知ることはほとんどなかった。

流入が続く数週間は混沌・混乱状態であったかもしれない。しかし少なくともひとつの避難集団内ではその集団の人員確認や連絡役が必要である。それがいくつかの避難集団間、方正なら方正に集結した避難集団全体で必要となり、曲がりなりにも組織的な動きが生じるのは自然のことである。

吉林市におけるそんな動きの詳細を記した手記がある。その手記は昭和20年8月9日から翌21年10月までの避難集団の動きと救済本部の動きを克明に伝える。1938（昭和13）年、26歳のときに吉林市第二国民高等学校事務長として渡満した三田善右衛門がその人である。三田は1941（昭和16）年10月には協和会に職を転じ、吉林市協和会青年課の責任者となる。市内在住の青年たち（日本人も中国人も）の組織をつくり、各種指導に当たった。

日本敗戦となったとき、まず市内在住日本人の保護に当たる。新京からの避難者、奥地からの開拓民避難者が次々と吉林に流入してくると、同胞の難民救済に当たった。ソ連軍の吉林入城後、ソ連軍撤退後の中共軍、中共軍に入れ替わった中央軍（国府軍）との折衝の日々を過ごし、1946（昭和21）年9月中旬の最後の帰国組までの指示・統制に携わった。

手記は1年余に及ぶ難民救済組織の一部始終を記録する。開拓団や避難民の手記には書き表されない避難集団の様子や救済組織の動きを私たちは知ることができる。

2　もうひとつの“炮台山”

三田善右衛門の『光陰赤土に流れて』（三田照子、2000。昭和47年出版のものの復刻）は、吉林市における終戦後の暴動、略奪、連行、立ち退き命令、難民続出、飢餓、疫病、そして次から次へと斃れていった同胞の埋葬等の詳細を後世に伝える。

その中に「砲台山」（注：三田著書では“炮”でなく“砲”）のいう章がある。この「砲台山」はもちろん吉林市の「砲台山」であるが、その記述を見るとまさに方正の「炮台山」がその状態にあったのではないかと思わせられる。ちなみに吉林市郊外には方正地区にあった「砲台山」も「尖山」もあった。吉林市でも方正地区同様その容貌などからこのように命名されていたのであろうか？

その記述から昭和21年解氷のころと推定できるが、そのころの「砲台山」は次のようであった（同書、p．290－291）。吉林では、方正をはじめ旧満州のどこの難民収容所でも同様のことであったが、越冬中にコレラ、発疹チブス、栄養失調などで毎日何十人かが斃れていき、その数は救済本部にも報告されないままなので不明である。「千人分として掘られた最初の穴が一月ほどでたちまち埋め尽くされた」状態となり、2000人から3000人分の穴がさらに準備された。その遺体収容所の昭和21年春の様子である。

> ある日市政府から厳重な抗議がきた。衛生上放置できないから早速墓地の整理をするようにとのことである。驚いて砲台山に駆けつけてみると、なるほどひどい。
>
> 麓を中腹までも登らないうちにまず鼻をつく異臭。喰い荒らされた生々しい骨が散乱している。草むらにつまづきそうになって立ち止まると、足下には顔半面を噛み取られた女の首が傷跡にべっとりと黒髪をひっつかせて転がっている。この様子では墓地はさぞと急いで行くと、案の定、この世のものとも思われない無残な光景であった。
>
> 随分と惨たらしいものにも見慣れてきたはずの自分も、思わず背筋を冷たいものが走るのを覚え、目を背ける。掘り返された墓穴の彼方此方から青黒く乾いた手や足が覗いている。周囲には身体のどこともわからない肉と骨とが散乱している。大きな赤黒い塊を恐る恐る覗き込むと、それは喰い荒らされた人間の胴体が僅かに肉片をつけて肋骨だけになっていた。
>
> 子牛ほどもある大きな満州犬が喰う物もなく山から山へ、野から里へと群れをなして彷徨している。時としては生きている人間にさえ噛みつくほどにも飢え、野性に還っているこの野犬たちが浅く掘られた墓穴くらい掘り返すのは雑作もないことであった。

この様子を目の当たりにした三田善右衛門はその犠牲の惨さに嘆息する（p．291）。

> なんということであろう。この世にこんなことがあってよいものであろうか。生きるということにも死ぬということにもたいした意義を感じられないどん底の窮迫にある日本人ではあったが、この地獄の情景、この冒涜にすら無感動に成り果てたのか、己の身体をずたずたに晒されたように覚えて恥と怒りと恐れで身体が慄えた。
>
> 風もない午過ぎの砲台山には人一人見えず、井戸の底にも似た不気味な静寂は惻々として鬼気迫るようである。死に切れない悲しい声が聞こえるように思えた。ここに眠る人々はみなわれわれの同胞なのだ。異郷の地に万懈の怨を呑んで逝った人たちである。失意と絶望のどん底で、祖国への夢も憧れも空しく死ななければならなかった人たち。われわれは力足らずにみすみすそれを救うこともできなかったばかりではなく、葬るに十分の礼さえも尽くせなかった。そのためのこの冒涜である。
>
> 止むを得ない日本人の運命なのだとはこの際思いたくなかった。すべての自分たち、

否、自分の力の足らなさと悔やまれて、せめてものことと一つ一つ立て直していく墓標の木片は無数に無限に思われた。

方正においてはどんな状態であったのだろうか？

方正県人民政府や現地中国人による遺体焼却処理やそこに動員された難民収容所にいた日本人からの聞き取りについては拙著『満州開拓民悲史』（批評社、2008）で知りえるところを記録した。しかしこの処理がなされるまでの何ヶ所かの遺体集積場所での様子などはその全貌をなかなかつかめない。

3　遺骨に別れを告げての引揚げ

昭和21年9月18日、三田善右衛門ら最後まで吉林にとどまって日本人遺送や各種処理に当たった救済本部（＝日本人会）人員や傷病で入院していた人たちは、第13次遺送団として吉林を出発した。三田善右衛門らはその前に「砲台山」を再び訪れ、最後のお別れをした（p．316－317）。

秋風がもう肌に寒い薄曇りのある日、われわれ残留者の全員は砲台山への枯野道を黙々と歩いた。頂上の日本人墓地には数千の同胞が淋しく眠っている。われわれの吉林退去に当たってぜひとも挨拶して行かなければならない人たちだった。

冷たい風が丘のすそから吹き上げて来ては長い枯れ草を分けて去る。広い丘にはわれわれの他には人影も見えず、内地の東北地方を思わせる灰色の空の下に誰もが無言で肩をすくめて歩んだ。寒さの故ばかりではない。

見る限り足の踏み場もないほどに掘り返された盛り土、枯れ草の数ほどに立ち並んだ粗末は墓標、そして時々叢の中に見られる白骨は惻々としてわれわれの心を苛むのだ。倒れかかっている墓標を立て直す者、白骨を拾って丁寧に埋める者、われわれは思い思いに散ってこの気の毒な犠牲者たちに最後の奉仕をした。（中略）

帰国を前に幾千の人が（夫と子供二人をここに埋めた病院の付添婦のKさんと）同じ思いで、同じように砲台山の土を濡らして行ったことか。再び訪れることもない異郷の土に、日本人の去った後はどんなに管理されるかも知らず、肉親、知己を埋めて帰る人の心はどんなものか。あのKさんの悲しい姿こそは、幾千の日本人の姿でもあったのだ。

そして吉林最後の人たちは犠牲者たちを供養する。供養とともにその「非業の犠牲」をもたらしたものへの怒りが次のようにこみ上げる（p．317－318）。

やがてわれわれは墓地の中ほどに立つ「日本人墓地」と書かれた四角な柱の下に集まった。心ばかりの花、線香を捧げ、一行の中の高杉和尚が読経した。高杉和尚の寂びた声が静かな砲台山の秋草に沁みるように流れて、みな頬を濡らして長い祈りを捧げた。ここに眠る万に近い霊こそは天寿を全うしたという人たちではない。手こそ下されなかったが、すべて敗戦の犠牲による「非業の死」なのだ。

悲しみの果て、やがて自分の心の底から突き上げてきたものは、何者へとも知れない激しい怒りであった。無益に死んでいったこの人たちに何の罪があったのだ。つつましく生活し、ささやかな日常の幸福に満足していたこの多くの善良な人たちをこのように惨めに殺したものは一体誰なのだ。

戦争が歴史の必然だというのか、そしてこの人たちはそのための止むを得ない犠牲だったというのか。そんな莫迦なことはない。殺し合い、憎み合うことが逃れられない人間の宿命でなぞあるわけがない。

百万言の勇ましい言葉も、上手に組み立てられた理論も、この幾千の屍を前にしては何の意味があろう。あるのはこの目の前の現実、この悲惨な現実を生み出したものの罪悪だ。それがアメリカやソ連の指導者なのか、日本の軍部なのか、それとも社会全体なのか、自分には今よくわからない。しかし罪人は必ずある。何処かで何者かが大きな誤りを犯したことは、何よりもこの目の前の現実から確かなことだ。

灰色の空の下、幾千の屍の上に立って、そのとき人の心はもはや悲しみではない、激しい怒りで燃えていた。思えばこの惨めに死んだ人たちと、生きて今故郷に帰ろうとしているわれわれとの間には、罪において、権利において、何の差別があろうか。贖わねばならない罪があるというなら、同じくあるだろう。生き残るだけの理由と権利があるのなら、この人たちにも同じくあったはず。それなのに一方は生き、一方は死んだ。運命とのみいっていいものであろうか。

供養しながら犠牲者を悼むとともに生き残った自分たちの使命を心に刻む（p. 318）。

このとき自分は思わずハッとして目の前が開けるような気持ちになった。死んだ人たちを含めて一体としての自分たちの生命、生き残った者に負わされた厳粛な使命感だ。犠牲者に対するわれわれの責任、といってもよい。

そうだ、われわれは理由なく生き残ったのではない。二度と再びこの誤りを繰り返さないために、社会から、国から、民族から、そして自分自身の心の中から、今までの罪人を追い出さなければならない。

その罪人は何であるか今はわからない。しかし必ず見つけ出す。そして再び息を吹き返さぬまでにズタズタにたたきつけねばならない。そのときこそ無益に血を流したり無意味に屍を晒したりすることのない世の中が創られるはずだ。生き残ったわれわれの残る生涯を賭けてその使命はそのことでなければならない。

長い長い供養のあと、立ち去りがたい重い心ではあったが、三田善右衛門らはその場を立ち去った（p. 319）。

高杉和尚の長い読経も終わり、各自一握りずつの線香がさらに捧げられて、やがてわれわれは麓への道を静かに辿った。一人離れて後から歩む自分の目の前には掘り返された赤土がどこまでも続く。吹き上げる野分は粛として頬に寒く、枯れ草ばかりの禿山は荒涼として遥かに尾根を北山の方まで連ねている。ここに眠る幾千の霊も決して安らかではないであろう。仕方がない、この地球上の隅々まで本当の平和が訪れる日までは、あなた方の霊が安まることはないのだから。

長く方正に在った残留婦人たちは犠牲となった同胞に同じ思いを重ねた。方正地区には幸いにも「方正地区日本人公墓」が建つ。吉林のこの数千の犠牲者たちは戦後誰からも省みられることなく、埋もれた地の存在も今となってはわからなくなっているのではないか。新京や奉天の日本人墓地も、戦後慰霊に訪れた人たちがその場所を特定できなかったという慰霊記を見出す。ましてや公園、学校のグランド、倉庫脇の空き地、川原の一角といったところが一時の遺体置き場や埋葬地となったところでは、その地に戦後の都市が建設され、犠牲者を弔うことなど不可能となっている地がほとんどであろう。

方正地区日本人公墓、中日友好園林の存在は、吉林でのことを知り得ると、それゆえに特異な慰霊の地であることを改めて認識させられる。

大阪にもある「満蒙開拓団」碑

中務　武志

この夏公開された映画『嗚呼　満蒙開拓団』は、各地で大きな反響を呼びました。開拓団で辛酸をなめた人たちに取材した、羽田澄子監督による記録映画で、2008年キネマ旬報文化映画ベストテン第1位などを得ています。

満蒙開拓団とは、1931年の満州事変、1932年の「満州国」建国以後、日本の重要国策として中国大陸東北部、内蒙古に送りこまれた農業移民のこと。

1945年の敗戦までに約27万人が移住しました。昭和恐慌によって困窮した農民を救済するとともに、日本人人口を増やし、国境を接するソ連軍に備える狙いもありました。

開拓民たちは各地に日本人村をつくり、小学校も設置、きびしい気候風土と戦いながら少しずつ成果を揚げていきました。ただその土地の多くは、中国人の耕地を安く半強制的に買い上げたもので、中国人の恨みを買うことになりました。

1945年8月9日のソ連参戦で開拓団の運命は暗転、ソ連軍の暴虐と中国人の蜂起にさらされました。悲惨を極めた逃避行のなかで多くの命が失われ、その数約7万人といわれます。またやむなく親に手放され、あるいは親を失って中国人に助けられた子どもたちも多くいました。中国残留孤児といわれるのがこの人たちです。

いま長野県で「満蒙開拓平和記念館」建設計画が進められているように、開拓団の多くが長野や東北地方の出身でしたが、大阪からの開拓団もありました。入植者は1917人。私が親しくしている人もその一人で、一家とともに昇平大阪開拓団に加わりました。彼にもらった記録のコピーによると、昇平に入植した1036人のうち、実に386人が引揚げの途中で命を落としています。その過去帳には連日数人から10数人が亡くなったと記され、幼児の名も多く、見るたびに粛然とした思いがします。

大阪市の四天王寺西門を少し下った、「お骨仏」で知られる一心寺。本堂と向かい合った一角に大きな「満州開拓物故者之碑」が建っています。辛うじて帰国した開拓民たちが生活再建のために結成した「大阪自興会」が1960年に建立したもの。自興会では毎年8月にこの碑の前で追悼の法要を行っているそうです。私も訪れるたびに線香をあげ、手を合わせています。

満州開拓物故者之碑
（大阪・天王寺区、一心寺内）

（なかつかさ・たけし：1936年生まれ。大阪府出身。若い頃から中国に関心を持ち、地元大阪府・阪南市の日中友好協会の設立（1991年）に参画。現在、ＮＰＯ法人大阪府日中友好協会副理事長並びに大阪府阪南市日本中国友好協会副会長兼理事長）

注：この原稿は、阪南市日本中国友好協会の会報「星星」（月刊、09年10月発行）に掲載されたものです。

方正県設立１００周年記念祝賀行事に参加して

大類　善啓

巻頭の「政府の公墓支援」でも触れたが、今年は方正県が設立されてから１００周年という記念すべき年である。昨夏方正を訪れた時、外事僑務弁公室の李宝元さんや張紅麗さんから、来年は方正県が設立してからちょうど１００年経つので記念フォーラムをやる。招聘状を送るからぜひ出席してほしいとのことだった。

ところが今年になっても一向に何も言って来ない。そうこうするうちに、「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」で方正を訪れるので、８月に入って旅行社とは別に私の方からも県政府に、９月２日訪ねる旨知らせておいた。そうしたところ、８月２８日の出発直前、２１日（金）付の招聘状がFAXで送付されてきた。それを見たのは２４日（月）である。

１００年に一度の記念行事である。９月２日に方正を訪ねてハルビンに戻る団は、大連経由で帰国する。ハルピンで団の皆さんと別れても問題はないということで急遽、参加することにした。

９月４日（金）昼、外弁主任の王偉新さんと通訳の張紅麗さんが、車でハルピンまで出迎えてくれた。方正に着くと、新しくできた招待所に案内された。ちょうど県政府の建物の真向かいにある４階建ての建物だ。その３階のフロアーを７月に、招待所に改装を終え、私が初めての客だという。中国の人は客をもてなすのがうまいなぁと思いながら、自分の名前が張り紙してある部屋に入ったとたん驚いた。なんと畳の部屋ではないか。それもあの独特の真新しい畳の匂いがする。その畳にマットレスが敷かれて布団がかかっている。

その畳の香しい匂いに、本当にほっとする気持ちだ。全室ではないが、畳の部屋をいくつか作ったらしい。部屋をサービスする若い女性も少し日本語が話せて繊細な感じだ。聞けば、何か月か日本に行ったことがあるという。

その晩は、２階のフロアーで歓迎の宴だ。旧知の劉軍副県長をはじめ見覚えのある人もいる。張紅麗さんのお話だと、県政府を退職された方や方正県に尽くされた方々が参加され、方正出身で今日本にいる華僑も来ているはずという。

張紅麗さんによれば、当初は外国人も招こうと考えていたそうだが、経費もかかることでもあり、取りやめたらしい。張さんは、だから華僑以外は「外国からのお客さんは大類さんひとりです」とのこと。そうかやはり、ちょうどタイミングよくハルピンあたりに来ているというので招いてくれたようだ。

翌日は祝典の日だ。昨日まで暑かったがこの朝は、この旅では初めての雨である。県

政府前の広場では開会式が始まった。県の書記などに続いて方正出身華僑の孫占軍（萱原占三）さんも挨拶された。私は開会式の大きい舞台の前に設けられた席の一番前の列に座らされていた。テレビ局が取材をしていたが、私の方にやってきてインタビューしたいという。後ろの席にいた張紅麗さんを呼んで通訳してもらった。

インタビューの内容は、方正県の発展ぶりや方正への思いなどだ。私は、「方正に来るたびに方正の発展する姿を見る。これも中国経済の発展の表れだろう。方正は中国に唯一ある日本人公墓の地であり、政治の中心が北京、経済の中心が上海だとするなら、方正は日本と中国との友好の魂を呼び起こす地だと思う」などと答えた。

舞台では、ハルピンから有名な女性歌手の歌や雑技など盛りだくさんだ。

昼前には雨もあがった。昼食の時には武田正志さんや韓若愈さんなど、方正出身で現在日本に住む、いわゆる方正華僑の人たちとも出会い交歓した。

午後からは広場で小学生や中学生のマスゲーム、中高年たちの太極拳など、日頃この日のために練習した成果が披露された。

夕方は前夜と同じ階で宴会があったが失礼して、旧知の陳福堂さんや、１０数年前、当会の前身「方正地区支援交流の会」時代の外弁の主任だった由広恒さん、華僑代表で挨拶した孫占軍夫妻などで町のレストランで食事し歓談した。

夕食も終え、陳福堂さんが、泊まっている招待所まで送ろうと、県政府広場あたりにくると花火が打ち上げられていた。こうやって通りで立ちながら、打ち上げられる大きな花火を見るのは本当に何年ぶりだろう。こういう場面に出会うとなぜか、アンジェイ・ワイダ監督の映画「灰とダイアモンド」の主人公マチェックが共産党幹部を暗殺した直後、“解放”を祝う花火が上がるシーンを思いだす。

招待所の畳の香りのする部屋で、陳福堂さんと少し話をした。彼が帰っていったのは９時少し前だ。シャワーを浴び、「政権交代」が実現した日本の動きをみようかと４チャンネル（大都市のホテルではこのチャンネルが海外ニュースだ）をつけると、今日の式典の模様が映されている。さっそく古いアナログタイプのバカチョンを取り、写し出した。自分がインタビューされている場面も出てくるかと思っていたら、やはり出てきた。仰天したのは、出てきたのは、まっ白い髪の男ではないか。一瞬自分の姿とは信じられず、本当に驚いてしまった。ちゃんと音声も入り字幕も流れている。今度の旅で一番！？驚いた場面だ。

翌朝、劉軍副県長に挨拶し、来たときと同じように王偉新さん、張紅麗さんに送ってもらってハルピンに戻った。

方正県設立１００周年記念祝典スナップ

県政府前広場での開会式とマスゲームなどの演技

（左の写真）左端は王鳳山氏、前号８号で転載した「方正地区日本人公墓の由来」を 1992 年に書いた方。当時県政府の副県長。大類の隣の右が当時外弁の副主任だった陳福堂さん。
（右の写真）方正テレビのニュースに突如現れた、日本語を喋る白髪の“青年”。

忘れ難き歳月

福地　正博

≪**解説**：福地正博（ふくち・まさひろ、中国名：王久徳）さんは、いわゆる「残留孤児」である。１９３９年、青森県生まれ、１９４２年４歳の時、両親と共に開拓団として旧満州へ渡った。１９４５年７月、父が現地召集され、母、２人の弟、妹と暮らすも、８月の日本の敗戦で逃げる途中に弟、妹が病死、母も伝染病で亡くした。１９４６年３月、福地さんは病気で倒れているところを中国人夫婦に引き取られ成長した。

チチハル第一高級中学（高校）在学中に、チチハル市（嫩江地区）で唯一人の学生代表として、黒竜江省青年社会主義建設積極分子大会に出席。１９６４年、ハルピン科学技術大学を卒業後、大学に残り助教授から教授へ。副学長時代に、ハルピン市南崗区人民代表１期３年。ハルピン市民代表２期１０年。その後、黒竜江省政治協商会議委員。黒竜江省政治協商会議科学教育文化体育委員会主任委員１期５年。黒竜江省共産党代表２期１０年。そしてさらにハルピン科学技術大学学長。１９８４年に大学の共産党の責任者となる。「残留孤児」として異例ともいえる昇進である。１９６７年　結婚、１男２女をもうける。その後、２０００年６月日本に帰国。同年１０月、千葉県市川市国府台に定住。現在、肺がんで療養中である。

韓慶愈（当会顧問）さんは１９９１年、ハルビン科学技術大学の客員教授に要請され、そのため１９９２年、同大学に赴き、昼食の宴に臨み、同学長だった王久徳さんに会った。その際、王さんは「私は日本人で孤児だったのですよ」と韓に語った。驚いたのは韓である。まさか「残留孤児」が学長だとは。その後、王さんが日本に里帰りの際、東京で再会した。一時交流が途絶えたが、当会参与の奥村正雄が定住帰国して市川にいる王久徳さんこと、福地正博さんとお付き合いがあることがわかり再び交流が復活した。

今回、韓さんのご紹介で福地さんに１１月１０日、船橋の病院でお会いした。常に点滴中であり、また話すのが容易でないが、気になる一点だけは確認したかった。「中国で周りの人々は福地さんのことを、＜残留日本人孤児＞としては知っていましたか」。

福地さんは、声は出なかったが、少し笑みを浮かべて頷かれた。それは、「当然、もちろん知っていましたよ。知らないわけがないじゃないですか」という答えである。

なお、この原稿は講演の草稿として中国語で書かれたものであり、韓さんの夫人、韓美津さんが翻訳した。パソコン入力はこの間、方正の総会で司会をしていただき、中国語も堪能な森一彦さんを煩わした。記して感謝したい。（大類）≫

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私は、６０年前に終ったあの戦争の中で、中国に置き去りにされた孤児が身をもって体験した、何の血縁関係もないのに日中一体となった、ある家庭のことを述べたいと思う。

私の出生地は津軽海峡に接する青森県、成長したのは中国の松花江沿いのハルビン市。日本生まれの中国育ちだ。父も母も教師。一家は５人で、両親、弟、妹と私。１９４２年、

私が４つのとき、第４次陸奥義勇隊開拓団として一家は中国黒竜江省の訥河（ノーホー）県という町に到着した。団長は山村智求さん、副団長は私の父の福地正造だった。そうして２０００年６月、５８年ぶりに日本に戻ってきて、いまは千葉県の市川市に住んでいる。

日本に戻ってから、町で小学生を見かける度に、かつて訥河県立第一国民学校に通っていた頃を思い出す。そこは日本人学校で、教師も生徒もみな日本人だった。学校では国語、算数、図画、唱歌があり、運動会や遠足もあった。学校以外ではいつも友達と縄跳びや鬼ごっこ、トンボ捕りやチョウチョ捕り。ときには木登りをして誰が高いか誰が早いかなど、一日じゅう楽しいことばかりで、何の悩みもなかった。毎日喜んで学校に通い、暮らしに何の心配もなく、遊びに夢中だった。ところがその頃、一家離散の危機が近づいていた。家族の命を奪い去る悪魔が一歩また一歩、我が家に迫りつつあったのだ。

消息が途絶えた父

１９４５年４月、私は７つで、２年生。その頃、学校の様子が変わってきた。去年、花を植えた場所には蓖麻（とま）（唐胡麻：実からひまし油を取る）を植え、運動場には防空壕を掘り、教室の窓ガラスには白い紙テープを米の字に貼りつけ、昼食の米飯には大豆が混ざった。恒例の春の遠足は、射撃場へ行って弾頭や薬きょうを拾わされ、若い男性教師はつぎつぎに召集され、学校ではいつも防空演習が……。学校のこの変わりようが私には恐ろしく、不安だった。そのうち、６月末に先ず学校が休校になり、またすぐに私の父にも召集令状が来た。困った父は、兵役につく前に家族をまず日本に帰したいと願い出たが、これは訥河県公署の軍事係からひどく咎められ、父の申請書はその場で破られてしまった。

１９４５年７月２１日の午後のことだ。訥河県城の夏は涼しく、このときも秋のようだった。母は私達をつれて駅に行き父を見送った。父は動き出す列車のドアの所に立ち、涙ぐみながら私達に手を振って別れを告げた。遠ざかる父の姿に私達は泣きながら「お父さん」「お父さん」と叫び続けた。父を送ってから母が私に言った。「兵役の年齢がまた高くなってしまった。お父さんは３５、お前は７つ。よく覚えておくのよ」私はいまもはっきり覚えている。母の言葉に、これから、予想もつかないことが起きるのを感じていた。その後、北安という所から一度、父の手紙が来た。母は返事を出したが、その返信はなく、父の消息は途絶えた。

飢えと寒さで死んだ母

１９４５年８月１５日の日本敗戦後のある日、ソ連軍の戦車が訥河の町に入って来て、私の家の前を通った。道の両側は小旗を手にした歓迎の人でいっぱいだった。次の日、銃を構えたソ連兵が「ダヴァイ、ダヴァイ」と言いながら私の家に乱入して来た。家の中は手当り次第荒らされ略奪された。私たち子供は母の後ろに隠れ壁ぎわで息を殺していた。それからも彼らは何度もやってきたが、私たちはもう怖がらなかった。略奪させておけばそれでよかったのだ。

８月下旬、附近の開拓団の家族はみな北学田という所に集まるというので、私達一家と隣家の村山団長一家とで、大八車を一台雇い、越冬用の衣類を持って、９時ごろ出発し、夕方に北学田の村に着いた。ひとまず、ある小学校（いまの豊産小学校）の教室に落ち着

いたものの、そこにはもう大勢の婦人、老人、子供がいた。土地の人が“鬧胡子（ナオフーズ）”（暴徒が暴れる）と呼んでいる暴徒による略奪があることを考え、その後何度も場所を替えた。その都度環境が悪くなり、最後には放置されていた厩舎に住んだ。寒さと食料不足による栄養失調と、衛生条件の悪さから、伝染病が広がり、死が私達を襲い始めた。まず末の弟克夫が去り、次に妹の里子と弟の明も。それに厩舎にも胡子（フーズ）（暴徒）が襲って来た。その都度、開拓団の人々は松明を燃やし金だらいを叩き大声で知らせ合った。その信号に気付くたびに、衣類や日用品をあわただしく全部草むらに隠し、母は私を抱きかかえて草むらに身をひそめた。暴徒は去った。暗夜で、彼らに品物を奪われることはなかったが、私達にも探し出せなくなってしまい、ついに何一つなくなり着のみ着のままとなった。

１２月になると気温は零下４０度以下となり、母は防寒用の衣類を私に与え、少ない食物を先ず私に与えていたので、飢えと寒さで倒れてしまった。最期のとき、高熱の中で私と父の名を呼び、看護師の田村久江さんに「どうか正博を日本に連れて帰って、父親に渡して下さい」と頼んだ。田村さんは、山形県出身で、その著『凍土に生きる――中国残留婦人の手記』に、このことを記している。田村さんの話によれば、その時は薬もなく、水を注射して母を慰めたとか。朝、私が目を覚ますと、私の右側に寝ていた母の顔に、誰がしたのか白い紙がかけてあり、私はそれを外すなり母の胸にすがって「お母さん！お母さん！」と泣き叫んだが、母はもう目を覚まさなかった。その日、外は大雪で、和田与太郎さんが背中合わせに母の遺体を背負い、私はそのあとについて、適当な場所を探して母を埋葬した。とは言っても雪を土まんじゅうの形に盛り上げただけなので、私はその前に木の枝を一本挿して、いつかここに来ることができる時の目印にした。当時の私は幼かった。そんな枝は吹雪に飛ばされるか埋まるかだ。春になっても、どこに見つけられるのだろう。私は肉親の最後の一人を失った。中国で５人の家族のうち残るのは私一人になってしまった。

無蓋貨車でチチハルへ

１９４６年１月、私は人の群れについて、凍傷の両足を引きずりながら訥河の町の方向に歩いていた。飢えと寒さで、体の弱い人や病人は、路上で死んだり、力尽きて倒れたり、目をそむけたいような情景だった。

私は道端の雪の上に座っているおばあさんを見つけた。その前には５つか６つぐらいの女の子の死体があり、「私もここで死ぬよ」と泣き叫んでいた。若い女の人がそばにしゃがんで泣きながら話しかけていたが、おばあさんは疲れと悲しみで、もう歩けなくなっているのだ。人々はもらい泣きをするばかりだった。人の群れから遅れた私たち３０人余りには、日没前に目的地にたどり着く力はもう無かった。

仕方なく一軒の農家に宿を借りた。すると主人は親切にとうもろこし粉のお粥を作って、めいめいにどんぶり一杯ずつ食べさせ、十分かどうかとたずねてくれた。皆は十分ですと言って、とても感謝した。それから、干し草を敷いた上にひとかたまりになって眠った。翌日、朝早く出発の準備をしているとき、オンドルに寝ていた何人かの女の人が、腰が曲がって歩けなくなっていた。新しく作ったオンドルが、乾き切っていなかったために、一晩中水蒸気に当って眠ってしまったからだ。私たちと一緒に行くことができず、この人た

ちは村に残るしかなかった。

訥河の町に入り、もと住んでいた私の家に近い宿に泊まった。お湯を飲むことも、顔を洗うこともできたし、夜にはランプの照明があった。子供を買いたいとか、養子に欲しいとか言って来る者が毎日やって来たが、それ以外はひとまず平安だった。だがある日、揚げ菓子の麻花（マーホア）で私を誘い、抱きかかえて宿から連れ出そうとした者がいた。幸い開拓団の人が追いかけて私を取り戻してくれた。ここに何日かいてから、チチハル行きの無蓋貨車で訥河駅を離れた。何人かの老婦人と一人の妊婦は、体の都合で乗車できず、涙を流しながら私たちに手を振り叫びつづけた。妊婦は伊藤さんと言い、私は１９８８年前に訥河県で会ったが、いまは帰国して京都に住んでおられる。無蓋貨車にはレールがピラミッド形に積んであり、私は一番上に座って風と雪をまともに受けて、全身が凍り、知覚が無くなって、失禁したのも知らなかった。列車は動いたり停まったり、時には１時間以上停まることもあった。何人かは鉄道ぞいの大根畑に下りて、捨ててある虫喰い大根を焼いて飢えを充たした。私は遠くへは行けず、人が食べ残した大根を食べた。こうして、どうにかチチハルに到着した。

養父母と出会う

チチハル収容所つまり難民収容所は、一棟の大倉庫で、中間に通路があり、その両側の板張りに３００人以上の老若男女がごちゃ混ぜで住んでいた。朝食はどんぶり１杯の高粱粥と大粒の海塩。たまに粗挽きとうもろこしの粥が出れば良いほうだった。夜、私は麻袋にもぐり込んで寝たので、朝起きると、顔が当っていた部分の麻袋の外側に白く霜がついていたし、鼻の穴は麻クズだらけだった。ある日、女の人が話しかけて来た。私があなたを日本の母方のおばあさんの家に連れて帰ると言う。当時、私は、父を探し出すか、父が迎えに来るのを待つかと、そればかり考えていたので、その他のことは信じられず、返事をしなかった。この親切な女の人は、いまどこにおられるか分からないが、ほんとうに感謝しなければならない。そのころ、収容所の中で伝染病がはやり、毎日のように死者が出た。遺体は、収容所の壕に投げ捨てられ、凍った死体は２日か３日おきに大きいトラックで運び出された。やがて私も感染してしまった。

永遠に忘れてはならない１９４６年３月、まさに私が生死の境で死神と争っていたとき、中国の養父母が私を引き取ってくれたのだ。ずっとここにいたら死を待つだけだが、あの人たちについて行けば、生きられるだろうと、勧めてくれる人もいた。「私は生きなければならない。生きていればきっと父に会える。もし虐待されたら自殺するまで」と、養父母について行った。

家に着くと、養母はまず、汚れて異臭を放ち虱だらけで伝染病菌のついている私の衣類を脱がせ、私を大きなたらいに入れ、温かいお湯で全身の垢を落としてくれた。私は心地よく眠ってしまった。それは中国の旧暦２月２日、伝統の祝日のことだった。目が覚めると、養母が餃子をゆでて私の前に置き、食べなさいというような、だが、そうではないような手振りをした。このとき、私はその優しい表情や静かな口調とまなざしから、これは「食べなさい。でも食べすぎないように」という意味だと分かった。訥河の厩舎で母が私に言ったことを思い出したのだ。「長い間食べるものが少なくて飢えているときは、食べ物

を見つけても、絶対におなか一杯食べてはいけないよ」。養母の気持を知って、うなずいていると感動の涙が流れた。養母は私がその気持を理解したのを知ると強く抱きしめてくれた。虐待の心配などは消えた。だが、私はまったく知らない他国人の家庭に入ったわけで、環境が変わり、言葉も通じない。生活習慣や飲食の習慣にもなじめない。その上、伝染病の熱もあり気持はいらだっていた。

両親や弟、妹の顔がいつも目に浮かんだ。とりわけ母が私の横で死んでいた様子を思い出すと涙が止まらない。夜、怖い夢を見て、夢の中で母や弟・妹の名を呼び続けることもあった。昼間、寂しい時に日本の童謡を歌うと、隣の家の子供が窓からのぞいて「小日本（シャオリーベン）、小日本」と私を指さした。養父母はこんなことは全部知っていた。手厚い看護を受けて私の病気が治ると、すぐにここを引っ越した。のちに養母から聞いたが私は腸チフスだった。隣近所で私のことを「小日本」とばかにするのを避けて、年に３回も引っ越し、最後に町はずれの借家に住んだ。

右腕の骨に結核が・・・

１年後、私は中国語で会話や交流ができるようになり、友だちもできた。養母はその子らに「久徳は私の実の子で、中国人だ。背が低いから日本の子だという人がいるが、これはあだ名なのだ。みんな、これからは小日本と言わないように。そうでなければみんなの親たちに言いつけるからね」と言った。それからは面と向かって小日本と言う者はいなくなった。４月、九歳の時、私はその子らと共に小学校に上がった。

養父は性格が内向的で、いつも口数が少なかったが、とても私を可愛がった。私が間違ったことをしたり、友だちとけんかをしても、一度も叱ったことがなく、手を上げたこともない。養父には兄弟が多く、妹の家が子沢山で生活が苦しかったので、養父母が一人もらい受けて養子にすることになっていた。ところが私を引き取ったので、その話はそれきりになった。この件で親族の苦情は大きく、それぞれに養父を責めた。「親戚の子は要らないのに一族でもない子はもらう。しかも外国人だ。全く何を考えているのだ！」以後、親戚と私たちは疎遠になり行き来もなくなった。養母は、日本人も人間だ、子供が病気であんなになっているのに見殺しにはできない！と言う。私が学校に入ると、また「もともと豊かでもないのに学校に上げたりして。卒業しました、大きくなりました、さようならだ。なんにも残らない。どうするのだ！」と言う者もいたが、養父母、とくに養母はこういう声を無視した。「どの国の人間も、人間はみな感情を持っている、恩を忘れるのはごく少数だ。この子はそんな人間ではない」。一部の者の水を差すような言葉を聞いて、却って養母は私を育て上げる気持ちを強くした。

私の子供時代は、不幸なことがいつもつきまとった。小学４年のとき、うっかりして学習机の蓋に手を挟まれ、右手の甲に小さいこぶができた。痛みはなく不自由もなかったので、誰にも話さなかった。次の年、赤く腫れ始め、痛んで化膿した。医者に見せると、骨の結核だった。

不幸はこれだけでなく、同じ年、養父のリューマチ性関節炎が悪化し、肺気腫もあって歩けなくなった。これまでは養父の野菜の行商で生活していたので、養父が働けなくなると、生計の維持が問題となり、治療どころではなかった。最低の日常生活の維持と、養父

と私の治療費のため、養母はやむを得ず売り食い生活を始めた。ただ、これは応急手段であり、長引かせてはならないので、養母はよその家の子の世話をする仕事を見つけ、僅かでも収入を得た。私の病状は好転せず、ひどくなっていた。右手の甲から始まり、右腕の骨全体に結核が広がり、右腋窩リンパ腺結核になっていた。

当時、同級生の女の子の父がクリニックを開いていたので、その子に頼んで無料でＸ線検査をしてもらった。私の右手と右腕の骨はすでに黒変しているので、切断しなければならない。右腕全部を体から切り放すという診断結果に、母はその場で気を失って倒れた。「絶対に久徳の腕を切断させてはならない！」「何と言われてもこの子を腕なしにはさせない！」養母は二度とクリニックを訪ねなかった。私の病気を治せる漢方医を探し出しては私を連れて行った。お金がないので養母は医者の前にひざまずき、頭を地につけて三拝九拝し、額を真っ赤にして頼んでいた。災難からこの子を救って！と頼んでいるのだった。医者は同情して、私の治療を無料にしたり、薬代を形式的に少し取るだけにしてくれた。

養父の病気治療のことはまったくあとまわしになっていた。養父自身がもう医者にはかからないと決めていた。それはすべて私のためだった。

「決して養父母の期待に背くまい」

１９５２年、学制が変わって、春の始業が秋の始業になった。４月入学だったのが９月になった。それで私は半年早く、７月に小学校を卒業した。当時、中華人民共和国は成立間もなく、各市や県政府は教育レベルの高い行政幹部職員が至急に必要だったので、初級行政幹部学校を作って、配属制を実施していた。

私は養父母の負担を軽くするために、早く就職して、その恩返しをしようと、こっそり受験したが、骨結核のため身体検査で落とされた。やがて養父母はそれを知り、この子は物事をよくわきまえ両親のためを思っている、これまでの苦労は無駄ではなかった、こんなにしっかりした子には、命をかけてもかまわないと言った。また「何か考えていることがあったら私たちに相談しなさい」とも。それから「この家の心配はしなくてよい、私たちのことも考えなくてよい、勉強したいだけしなさい。家中のものを売り尽くしてでも、病気を治して学校へ行かせるから」と。

養母の言葉に感動した私は決心した。「決して期待に背くまい」と。包帯で腕を吊って毎日学校に行き、激痛をこらえながら仕上げた宿題ノートには、いつも先生の称賛と激励の言葉があった。中学に入った私は奨学金の一等人民助学会を受けることを許された。また、市内に住んでいる私だが学校の寄宿舎に入ることも特別に許可された。私の病気は、家計が困難なので養父母は人から聞いたさまざまな民間療法で治そうとした。たんぽぽ、タバコの葉、各種のサボテン、蛇の皮、出土した銀、なかには人油などというものまで。だが、どれもはっきりとした効果はなかった。

養父母の離婚

１９５４年の秋、養母が５０過ぎの男の人と、私に会いに学校に来て、新しい衣服を一組届けてくれた。養母が、「これはお前の叔父さんだ、これからは劉叔父さんと呼びなさい」と言った。私は考えた。どこから来た金で服を作ってくれたのだろう？　なぜ叔父さんと

いう人が急に現れたのか？　私はなぜ一度も会ったことがないのだろう？　「お客」の前だし、周囲には同級生もいるので聞きづらい。別れ際に養母が、日曜にきっと家に帰るように言い、私は同意した。

家に帰ると、食卓に沢山の料理が並んでいた。家ではいつも一菜一飯で、じゃがいも、もやし、豆腐、ときには漬物だけのこともあるのに、今日はどうしたのだろう？養父母はにっこりしながら私をオンドルの所へ座らせた。家に帰るといつも喜んでくれるのだが、今日は様子が違う。なにかわざとらしい。それにあの「叔父」までがここにいる。私は訳が分からず動揺した。養母が料理をとり分けてくれる時、目が潤んでいる。私が顔を上げて、ふとん置き場を見ると、見たことのないふとんが一組増えていた。私はショックで頭がガンガンした。ああ！　お母さんは離婚するんだ！　今日は私とのお別れなのか？！
私は思わず左手で食卓を土間に払い落とし、怒って学校へ走り帰った。

翌日、養父から私に話があるからと伝言があった。その晩、独りになった家で養父が話し出した。昨夜、あれからお母さんは目が赤く腫れるほど泣いた。昨日のことはお前が悪いのではない。全部私のせいだと溜め息をついて、事の起こりから話し始めた。養父の話はこうだ。

貴重な養母の教え

私の養母は河北省蛟河県の人で、１９２２年の河北省大水害の時、難を逃れて１２歳で父母と共に東北へ来た。転々とするうち父母とはぐれ、それが別れとなった。１６の時、１７歳年上の養父と結婚した。高齢で病身の養父の両親の世話をし、家事をこなした。その年、夫の両親は病死し、借金が残った。それに結婚の時の借金も残っていて、これは高利の金だった。みるみる増えるので、出稼ぎに行ってそれを返した。何度もつらい目に遭い、大変な苦労をした。

一度、割のいい儲けになるというので、養母はどこで仕入れたのか分からないが、精白米か精白小麦粉かを５斤（２,５㎏）売ろうとしていたときに、日本の警察に見つかって、警察へ連れて行かれた。当時、中国人がそんなものを食べるのは違法で、黒い粉か蕎麦粉しか食べられなかった。守らなければ「国事犯」とされた。警察では激しい殴打の上、とうがらし水を飲まされ、気を失えば冷水を浴びせられた。その時、生理中だったので、コンクリートの床の水が真っ赤になった。

養母はそれ以来、癲癇（てんかん）持ちになってしまった。それから２、３年苦労して、生活を切り詰め、やっと完済かという時に、養父は春節の休みで暇をもて余していた。他の人がカルタをやっているのを眺めているうちに、自分も仲間に入り、１年がかりでためた金を全部すってしまった。怒った養母は首を吊ったが、発見が早く一命を取り留めた。現在、一家三人のうち二人は病人。養母の糸紡ぎに頼って暮らしているが、治療費もないし、また新しい借金もある。養父は自分の無能を悟り、養母に申し訳なくて、もう自分のことは放っておいて誰か好い人を探してくれ、そして子供の病気を治してやれ、将来見込みがあるのだから、と言ったが養母は承知しなかった。

その後二人で何度も話し合い、「この子の病気を治し、学校に通わせ、成人するまで育てる」ことが共通の願いとなった。そこで「招夫養子」の方法が考え出された。まず親しく

している友人に頼んで、年齢がふさわしく、安定した収入のある人を探してもらう。条件は、私の病気治療、私の通学、養父の生活費負担。そうして、私の気持ちが動揺しないよう、学習に影響しないよう、事がすっかり決まってから私に説明しようと。日曜に私に家に帰るようにと言ったのは、四人揃ったところで話を切り出すつもりだったのだ。だが私は怒って食卓を払いのけてしまった。

養父母は離婚手続きのために裁判所に行ったが、門の前でためらっていて、どちらも先に入っていく勇気がなかった。やっと心を決めて届けを出したが、判決を待つあいだも二人は抱き合って泣いていて、誰かが麻花をすすめても譲り合うばかりで食べようともしなかった。裁判官も、あなた方のような離婚は見たことがないと感動していた。いつも口数の少ない養父が、この日は深夜１時まで話をした。私は泣きながら聞いていた。養母の深い配慮も知らずに、責め立てて本当に申し訳なかったと後悔した。しっかり勉強して、将来、最後まで二人の世話をするのだと心に決めた。

養母は不運な人だったが、善良で、強くて、てきぱきしていて、苦労を厭わず、頼まれ事には必ず応じる人だった。夫の両親を大切にして仲が良く、近隣との関係も良く、互いに何でも相談し助け合っていた。

以前、養母と養父は、南藤さんという日本人が経営する栄武菓子店で一緒に働いていたことがあり、南藤一家とのつき合いも良かった。南藤家の子供は私の養父母に対しても礼儀正しく、養父母も「あの子らは教養がある」と、彼らが好きだった。私が養父母の家へ行ってから、養母が私を連れて南藤家を訪問したことがある。南藤夫人が私に、養父母はとても良い人だから、あなたがあの家にいれば私達は安心だと言った。南藤家の人は、日本に帰国する前にも私に会いに来てくれた。

私の成長過程では、養母の教えというものが、人生観の形成に重要な作用をしている。人として正直、誠実で、いい加減なことを言わない。引き受けたからには力を尽くしてやり遂げ、約束を破ってはならない。体はどんなに苦しくても顔に出してはならない。やるべきことはやり遂げる。途中で投げ出さず完全に仕上げる。人から一尺尊敬されたら、こちらからは一丈の尊敬をする。最も困難で最も助けが欲しかった時の人の助けは、一生忘れてはならない。一滴の水の恩には、泉を以って報い・・・。何度も聞いて、肝に銘じ、私の行動の拠りどころになっている。

批判された文革時代

１９５５年の春、私の病状はさらに悪化し、腋窩リンパ腺結核は左側にも拡がり、両腕と左足が骨結核になっていた。右足はまだ良かったのだが、勉強を中断し、休学して家に戻った。幸い「叔父」は収入があり、養父の方の従姉妹の一人からも援助を得たので、漢方医学と西洋医学の併用で治療することになり、学校の青年団組織も私のために募金をしてくれた。ある同窓生の父兄は先祖伝来の秘方で軟膏を作り、ただれた傷口に塗るなど・・・。各方面の温かい心づかいと支援のもとで、一年間の集中的な治療を経て、私の病気はついに全快した。復学後、高等学校に推薦入学し、のちに大学に入った。

１９６０年、養母は劉家の後継者のことを考えていた。それは将来私にも互いに行き来し、助け合える親戚ができることだ。養母は、両親に捨てられ生まれて間もない女の子を

引き取って育て、私の妹にした。可愛い子で、私がチチハルに帰ると、いつも私にまといつき、私の行く先、行く先へついて来た。私のお見合いの時も、行きたいと言うので、仕方なく連れて行った。この妹はもう二児の母となっている。

「文化大革命」中は私も批判の対象となり、「戴高帽」「大弯腰」「陪闘」「遊闘」（注）を経験した。１９６０年１１月のある日、紅衛兵が学校食堂に大スローガンを貼り出した。「打倒ファシスト、王久徳を父親の所へやってしまえ！」養父に何か不測の事態が起きたことを察したが、当時は通信も交通も不便で、翌日、誰にも言わずにチチハル行きの列車に乗って家に帰った。養父が亡くなってすでに３日、火葬が終わったところだった。私は遺骨を抱いて大声で泣いた。「お父さん、遅くなりました。お許しください、お見送りができませんでした！」養父は肺膿瘍で亡くなった。７３歳だった。

１９７０年１月、私が学生を連れて、ほかの所で実習をしているとき、学校に戻れという緊急通知を受け取った。学校の革命委員会が、私の家族全員を農村に行かせて労働鍛錬させるとの決定だった。満２歳の子供にまで労働鍛錬？　いや、そうではない。聞こえはいいが実は戦いに備えての疎開だ、私達を守るためなのだと思って、服従するしかない。出発の日は旧暦の１２月３０日。私が訥河から無蓋貨車でチチハルの難民収容所に向かった日だ。運命にもてあそばれる思いで、過ぎ去った辛い出来事を思い出した。１９７２年、周恩来総理が、大学の新入生募集を発表。私は大学に呼び戻され、その後、もう大学から離れることはなかった。

やっとわかった父の消息

養父母は私に与えるばかりで、何の報いも求めなかった。私が仕事についてからの仕送りは、その都度積み立て、その上、よその子の世話をして得た収入も、生活を切り詰めて残した分も、何かの時のためにと言っては、さまざまな形でまた私に送り返して来た。養父母は私にまったく金を使わせなかったのだ。１９８９年２月、養母が危篤になり、臨終のときにつき添ったが、話したいことは山ほどあるのに、何の話もできなかった。ただ一言「お母さん、私は、今と同じように、いやもっとよく妹の世話をします」というと、養母はかすかにうなずき、安心して亡くなった。私が最も敬愛するお母さんは、永遠に私から去ってしまった。７９歳だった。

同年３月、日本消防協会の徳田正明会長が私の大学を訪問され、その時に日本語の教授肇永和先生から私の養母のことを聞かれた会長は、お悔やみの言葉と共に、これまでの情況を訊ねられ、私の実父の行方を捜す手助けをしようと言われた。以前、養母が私を連れて南藤家に行ったときに、南藤夫人が「私たちが日本に帰国したら、あなたの親戚を探しましょう。そうしたら迎えに来てあなたを日本に連れて帰ります」と言われたことがあった。南藤夫人が私の家に別れを告げに来られたとき、養母は口実を設けて私をその場から離れさせたため、夫人とは会えなかった。

この件を通して、養母は私が離れることが心配だったのだと悟った。養育の恩は生育の恩に勝ると言う。何十年来、私の実父を思う気持ちは心中深くに埋めていた。養父母ともすでに亡くなったいま、私の実父探しを手伝おうという申し出は、本当にうれしく、是非ともご協力を得たいと即答した。６月２日、北京の東方賓館で、実父の消息を知ることに

なる。これは、今は我が大学の名誉教授である徳田正明会長からもたらされたものだ。私の父もさまざまなルートを通じて、これまでに二度、黒龍江省に来て私を探したことが告げられた。写真や関係資料も持参された。写真を手にすると、何十年の思いが一時に込み上げ、激動の心情は言葉では言い表せない。別れて４４年、父が健在で体調も良いと知って、ほんとうに嬉しかった。私はその晩この吉報を、ハルピンで待ち受ける妻子に伝えると、一家は極度の興奮と喜びに浸った。

８月、徳田会長のご尽力と多方面の調査により、多くの回り道を経て、父を探し当ててくださった岩佐栄吉さんが、わざわざ青森に行って父に会い、事実を確認してくださった。１１月、徳田正明会長のお計らいで、消防協会の常務理事の方と岩佐さんに付き添っていただき、私は青森に戻って父と対面を果たした。その夜、父は私の話を聞いて「実に偉大な母親だ！」と深く感動し、「情深似海　恩重如山」と筆を揮った。私は、父の気持を尊重し、この書を養母の位牌の前に置いている。

二人の母の愛

切実な経験から私は、母の愛は最も偉大だと感じている。生母の乳は私を育んだ。私の生母は飢えと寒さの毎日のなかで、生存の希望を私に託し、自らは死を選んだ。また、養母は敗戦国の孤児を死神の手から奪い返した。そればかりではなく、私のためにすべてを傾けて惜しむことがなかった。また、生母の母、私の母方の祖母は、いつも海辺に立って、娘が行った遠い中国の方を眺めては、早く戻って来るようにと、涙が涸れるまで泣いたそうだ。父が帰国後に迎えた継母も、高齢にも拘らず、わざわざ中国の私達一家に会いに来てくれた。母の愛は無言で無限だ。母の愛がなければ人類は存在しない。

中国人であれ、日本人であれ、大多数は好い人であり、悪い事をするのはごく少数なのだ。悪い事をしたとしても、誤りを認め、二度と悪い事をしなくなれば、これも好い人になれる。人と人との間は、国籍にかかわらず、互いにいたわり合い仲良くして行くべきで、同じ一つの世界にいて、同じ美しい夢を見ていれば、ますます美しく、ますます幸福な明日を迎えられる。

戦争には反対だ。世界の長く続く平和を願っている。だが見渡せば、世界には戦争が絶えない。みな少数の統治者が引き起こしたもので、被害者は多くの民衆、とりわけ女性と子供だ。なかでも、自分を守る術のない子供達だ。６０年前に終わったあの戦争こそ、日本の少数の権力者と軍国主義者が引き起こしたものだ。中国の人々やその他の国の人々に深刻な苦難をもたらした。それはまた、私を含めて日本の人々にも深い害を与えた。私が養父母に引き取られたチチハル市では、今でも日本軍が残した化学兵器が人々を傷つけている。

私は日中両国の人々が友好関係を発展させ、不幸な歴史を再び繰り返さず、戦争のない世界、永遠に平和で、人類が友好的につき合い、世界に永遠の愛が満ちることを願っている。

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～　　第５回

大類　善啓

≪前回までの粗筋≫　多忙と「遊び心」？　が重なり、第４回（会報６号）で本稿が止まっていたところ、読者から、その後の続きを読みたいという声が入った。ということで、中国が改革開放路線を取って軌道に乗る段階まで書いていきたいと思う。新たな読者のために前回までの粗筋を紹介しておく。

韓慶愈は遼寧省で生まれ、ハルビン第一国民高等学校（旧制中学）２年終了後の 1943 年、「満州国」から茨城県の太田中学に留学した。が戦局は悪化。新潟から船で帰国しようとしたが、ソ連の参戦や日本の敗戦のため出港した船は中国へ行かず、日本に舞い戻ってきた。韓はやっと日本から解放されたと思ったが、蒋介石の国民党代表団からは、「祖国を裏切った漢奸」とみなされ国民党に失望。新聞記者の見習いをしながら東京工業大学に進学。新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促し、韓も１９５３年第１回の帰国船に学生代表として中国に行き、天津で廖承志に面会した。その時、廖は韓に、中国に帰国せず「日本に残り、華僑向けの新聞を出せ」と指示した。韓は一瞬躊躇したが納得して日本に戻り、『大地報』という新聞を創刊した。日中関係は徐々に発展、李徳全を団長とする中国紅十字会代表団や京劇の名優・梅蘭芳などの来日では通訳として活躍。１９７０年には日本政府から初めて帰国申請が許可され初訪中し新しい中国を見る。しかし、韓も中国では「スパイ」として見られていたなど、日本にいる華僑とはいえ文化大革命を挟んで波乱の人生が続く。

３５　“馬賊”も現れた日中国交回復前後

韓慶愈が戦後初めて訪中した１９７０年当時の中国は、今と違い、中国は外に向かっては閉鎖状態だった。韓が中国へ行くということがわかると、“交流”のあった公安関係者から「ぜひ会いたい、中国の実情を見てきてほしい」と言われたことは前述した。

それ以外にも、こういうエピソードがあった。戦前の中国大陸で“活躍”した日本の馬賊に会わせられたのだ。

仕事で付き合いのあったＹ氏が、「馬賊の小白竜に会わせたい」と言う。小白竜こと、小日向白朗（こひなたはくろう）氏は、モーゼル銃を神業のように扱い、義賊として一定の中国地域住民に支持されていたらしい。が一方、日本陸軍の工作員としての顔をもっていた。１９００年（明治３３年）生まれで新潟県三条市出身。１９２６年（大正１５年）１６歳で大陸に渡り、馬賊に捕われ、下働きの後軍功を上げ、やがてその頭目になった。中国名は尚旭東、中国民衆からは小白竜と呼ばれ親しまれていたという。

その小白竜に会わせたいというＹ氏は、戦争中は大手商社にいた。戦後、日中貿易を推進しようと全力を挙げて活動している鈴木一雄の知り合いでもあった。日中貿易促進会の専務理事だった鈴木一雄とは韓はとても親しくしていたので、おのずとＹ氏とも知り合う

ようになっていた。

Ｙ氏は、インドネシアの石油開発にも関わる一方、「揚子江にダムが出来れば、日本に電気を持ってこられる」というような気宇壮大な話をする人だった。そのＹ氏が、「中国へ帰るのだから小白竜に一度紹介しておきたい」というので、韓は大久保付近にあった事務所に連れて行かれ小白竜に会った。小白竜は、一方的に韓に話し出した。もう当時の内容はほとんど記憶の外にあるが、小白竜の話は大陸浪人的で、ほら吹きのような感じがしたという記憶が今でも韓には残っている。

「第４野戦軍の林彪をよく知っている」と、は盛んに韓に言うのだ。林彪に会ったら、「私の名前を言っていい」と言う。韓は内心苦笑しつつ小白竜の話を聞いていた。小白竜は、餞別に当時の金で５万円ほどくれた。今なら３０万円ほどになるだろうか。中国に行ったが、もちろん林彪に会う機会もなく、韓は日本に帰っても小白竜に話すこともないのでそれっきり、一度だけの出会いだった。

実は筆者も、１９７９年にこの小白竜に一度会ったことがある。

１９７８年の夏から１年ほど、筆者は大本（教）の出口王仁三郎に魅せられ、ドロップアウト！　し京都の綾部にいたことがあった。その時、大本の友人である出口三平さんが、今は亡き作家の出口和明氏と共に小白竜を取材したことがあった。小白竜が戦前、王仁三郎に会ったことがあるというのでその話を聞くためである。仲介したのは小白竜と親しくしていた大本信徒の大宮真人氏である。ちなみに小白竜が１９８２年、８２歳で亡くなった時、ある大手新聞は、小日向白朗氏の死亡記事を載せた。どうも本物の小白竜だったようである。葬儀委員長をされた方だ。

小白竜が話すテープを綾部の出口三平さんの自宅で聴かせてもらったが、実に聴き取りにくいテープだった。肝心の王仁三郎との出会いの話もなく、三平さんも改めてテープを聴きながら、「なんだか支離滅裂で・・・」で鼻白んでいる。

かつて周恩来に、ある人が小白竜の写真を見せたところ直ちに、「これは偽者だ」と喝破したという話を聞いたことがある私は、「小白竜と言っても偽者もいるんだよねぇ」と三平さんに語ったことが懐かしく思い出される。

３６　キッシンジャー訪中秘話

その時から半年経ったろうか。１９７９年の秋、私は大宮氏と一緒に東京郊外の小白竜の自宅で彼に会った。小白竜はその頃も、韓が言うように大陸浪人的というか、雲を掴むような話しぶりだった。例えば、首相を務めた佐藤栄作の死についてこんな話をした。佐藤は１９７５年、築地の高級料亭で自民党幹部や財界首脳と会食中に脳溢血で倒れた。４日間料亭で容態を見たのち慈恵医大に移送されたが、一度も覚醒することなく昏睡を続けた後亡くなった。その佐藤を、小白竜は「自分が呪いをかけたから死んだのだ」と言うような話をするのだ。確かに佐藤の死は、一部でミステリーのように語られていたことは確かだったが。

唯一リアリティーを感じさせたのは、彼との話を終えて引き揚げようとした際、どうし

ても聞きたかったことを訊ねた時だった。それは、１９７１年、キッシンジャーによるミステリアスな秘密訪中に関する米中の交渉秘話に関することである。

１９７１年当時、週刊誌の記者をしていた私は、キッシンジャーの極秘訪中には、戦前から中国に存在していた伝統的な秘密結社が絡んでいるという話を聞いていた。ミステリーに満ちた極秘訪中を実現させる前に、アメリカは必死になって中国とのパイプを捜していたようだが、その一人が小白竜だったというのである。

ロスチャイルド一族の男に“可愛いがられている”というＩ・Ｒ女史が、小白竜を見つけ、小白竜をアメリカへ連れて行ったというのだ。当時は、そんな話を半分、眉唾的に聞いていた。小白竜の話を聞いているうちに、この話が本当なのかどうかを聞いてみたい誘惑にかられたのだ。そこで帰る間際に、Ｉ・Ｒ女史の話を切り出した。

すると突然、老人風に見えた小白竜の眼が輝き出した。「君はＩ・Ｒを知っているのか」と問いただしてきた。私は突きつけられるような彼の問いにやや慌てた。「いや、Ｉ・Ｒには会ったことはないが、米中の秘密接触に絡んでいたという話を聞いたことがあるので・・・」と応えた。実際、Ｉ・Ｒには一度も会ったことはなく、彼女のM資金にからむ詐欺話など半分与太話を知っていたに過ぎない。

小白竜は、Ｉ女史のことを話し出した。ある時、Ｉ女史が小白竜の前に現れ、アメリカへ行こうという。実際、小白竜はアメリカに連れて行かれ、アメリカの国務省で、ある役人に会わせられたようだった。そのアメリカ人との話の途中、小白竜がトイレへ行くと、そのアメリカ人もついてきた。「連れション」である。

その時「アメリカ人は、きれいな北京語で俺に声をかけてきたんだ」と、小白竜は語るのだ。このＩ女史との話だけは、実にリアリティーがあった。この「小白竜」は本物か偽者かどうか。大陸で“活躍”していたなら、北京語は喋れるはずだ。そんな判断で、この国務省の役人は北京語で小白竜に声をかけたのかもしれない。

１９７０年頃、中国もアメリカとの接触を望んでいた。周恩来は、ある人が持参した小白竜の顔写真を見せるや即座に、「これは偽者だ」と言い放ったという話はこの時期のことである。革命を闘い抜き、さまざまな情報網を持っていたであろう周恩来には、本物か偽者かを見分ける識眼があったといえるエピソードの一つかもしれないが、これも真偽のほどはわからない。

当時、やや怪しげな話だった米中の秘密交渉に絡むエピソードがその時、実にリアリティーをもって翻ってきた。アメリカはいろんなルートを使って中国との窓口を探していたのだ、という話は本当だったとその時改めて思ったのだった。

３７　中ソ対立、日中両共産党の対立が波及

韓が手がけた仕事の中で重要な『日本工業技術』という話を始める前に、今一度、時代をもう少し前に戻そう。

１９５２年にモスクワで国際経済会議が開かれ、翌年の５３年に同じ国際会議が中国で開催されたことは前に話した。その時、中国で国際貿易促進委員会が成立した。モスクワの会議に参加していた国会議員の高良とみ、帆足計、宮腰喜助ら３人が　モスクワから北

京入りをした時である。そして日本でも、１９５４年に国際貿易促進協会が設立された。この時の立役者が前回にも紹介した鈴木一雄だった。鈴木は、中国と同じように促進「協会」ではなく、促進「委員会」にすべきだという意見で、事務局は日中貿易促進会が担当するという腹づもりだった。日中貿易促進会は、１９５０年の初めごろに成立した文字通り中国との貿易を推進するために作られた日本共産党の親中派組織だった。組織は大連商業出身の首藤実が実質的なリーダーだった。ところが蓋を開けてみると、共産党系以外の村田省蔵など、三菱商事や三井物産などのダミーが入っていて、鈴木の意志は多勢に無勢で結局、「委員会」でなく「協会」になり、事務局を別個に作ることになってしまった　鈴木は意のままにならず無念の境地だった。

中ソの動きが徐々に日本の左翼陣営にも反映されてきた。１９６３年、中国はソ連を修正主義と批判する。

「銃から政権が生まれる」。毛沢東は高らかにそう宣言していた。ところが、日本共産党は議会を通して多数を獲得して共産党政権を実現しようと考えていた。日本共産党は中国と距離をおくようになっていった。そうして日中貿易促進会から鈴木一雄など親中派の人たちが追い出されて行った。日中貿易促進会は最終的には１９６６年１０月解散した。

３８　「日本の工業技術を伝えなければ・・・」

日本の優れた工業技術を中国に伝えることは、中国の発展には欠かせないことだ、と前々から考えていた韓は、なんとかして日本から中国向けの技術総合誌を発行したいと思っていた。

１９６４年の４月、中国国際貿易促進委員会の主席だった南漢震が、日本で開催される経済貿易展覧会のために来日した。中国の対外貿易業務の最高の地位にいた南漢震一行を迎える事務局が作られ、韓は華僑を代表してその事務局に入った。連日、赤坂にあったホテルニュージャパンの大きい部屋の一室に韓も泊まった。展覧会が閉幕になった後、南漢震らは日本を視察した。その折り南漢震から、雑誌や新聞を発行するにしても、「自力更生をしろ」と言われた。

そのような事情もあり、韓は中国語の雑誌を通して日本の工業技術を紹介する構想を考えた。翌年の１９６５年、南漢震が原水爆禁止世界大会・中国代表団団長として日本にやって来た時、そのアイディアをぶつけてみようと考えた。韓はそのアイディアを寥事務所のスタッフに説明し、協力して南漢震を説得してくれるようにと頼んだ。一人だけで南漢震を説得できる自信がなかったのだ。

当時、寥事務所の首席代表だった孫平化は、その日用事があり南漢震の所へは行けない。そこで韓は、呉曙東と陳抗の二人の代表を連れて南漢震の所に行き企画書を見せたところ、南漢震は、「なんだ、このことなら、韓さんが一人来るだけで充分じゃないの」と言った。韓はいや、「心細かったから」と言うと、「君ならよく知っているから大丈夫だよ。わかった」とすぐに了解してくれた。

その言葉を聞くと韓は用意周到に、墨と紙を出してタイトルの字を色紙や軸などを入れ

て３枚ほど書いてもらった。その趣旨は、「日本の工業技術を紹介することは日本と中国との友好関係にも役立つ」という内容である。この南漢震の言葉は、日本の業界を説得するにはいい手段だと思った。日本の商社やメーカーが、中国と貿易するには中国の国貿促抜きには考えられない。中国の国貿促が元締めである。そのボスに書いてもらい、それを日本での営業用に使おうとを考えたのだ。チラシを作り宣伝文句にして、１９６５年のうちに創刊号を出そうと思っていた。

３９　雑誌創刊に横やりが入る

ところが思わぬところから、横やりが入った。韓の企画を知って、鈴木一雄の後を受けて日中貿易促進会の専務理事になっていた隅井正典が動き出したのだ。

韓のアイディアを剽窃するかのように、１９６５年、隅井正典らは密かに北京へ行き、中国の国貿促に自分たちも雑誌を刊行したいと話しに行った。

韓は自分のアイディアをこのような形で盗まれ愉快ではない。すでに準備をして広告もそれなりに取り付けていた。隅井たちは韓の存在を無視できないことは知っていた。そして帰国するや、「雑誌は、韓先生抜きにできませんから」と編集顧問になってくれと言ってきた。隅井たちと争っても良くない。中国の政策にも合わないと思い、韓は中国の国貿促に「わかった」と言い、協力するようにした。また、当時は両方の組織が同じような雑誌を発行できるほど中国市場は大きくはなかったということでもあった。

１９６６年になると、日中の共産両党は激しい論争を繰り広げた。その結果、中国側は「日中貿易促進会を相手にせず」という声明を出した。同時に、彼らが出した雑誌は受け取れないと言い出した。雑誌を発行しても、中国に送付できなかったら広告料は取れない。困り果てた日中貿易促進会の事務局長である押川正夫は、寥事務所の呉曙東の所に泣きついた。押川は日共系に属していたが、彼個人は反中国派ではなかった。

押川は呉曙東から「これについては韓慶愈に相談をしなさい」と言われた。押川はそれで韓のところにきた。すでに翻訳料や印刷代などが２００万ほどかかっていた。押川はなんとかならないものかと韓に言ってきた。すでに雑誌はほぼできつつあった。

そのために新しく表紙を変え、奥付も変えた。中国は、日共系の企業広告などは受け付けなかったので、日共関係の頁を差し替え、新規に装丁し直して発行した。１９６６年のことである。タイトルは「日中貿易」とした。

４０　難産だった『日本工業技術』の創刊

そのような事情もあり、『日本工業技術』を生むまでには紆余曲折、さまざまな苦労があった。しかしやっと１９６７年に創刊号を出すことができた。季刊である。創刊号には、日本電気の社長だった小林宏治に半導体関係について論文を書いてもらった。

発行当初の頃は、中国は文化大革命の真最中である。しかし、中国からお墨付きをもらっていたから強い。中国へ送った雑誌は、中国・国貿促の技術交流部が責任をもって工場や研究所に配布してくれた。印刷した２０００部のうち、１０００部以上を船便で出した。残りは営業用として日本で活用した。だいぶ後になってから、巻末にアンケートはつけた。

筆者が１９７９年に、大地報社の後身の向陽社に入社した当時も「日本工業技術」を発行していたが、返信されてきたアンケート用紙には事細かく、「貴誌に掲載されていた製品や技術に関する資料を送ってくれ」という文面も見られたが、まだ文革中の時は、アンケート用紙もつけていなかった。

韓は、日本の関係者から中国での「日本工業技術」の反響を聞かれると、いつも「大変な反響ですよ（笑）」と答えていたそうだ。

ある時、日本の支援者から、「雑誌に毛語録がないとだめだ」と言われた。掲載する論文は技術的なものであり、イデオロギー色がない技術雑誌に毛語録をつけたって意味はないと韓は思ったが、その日本人は中国一点張りだ。その人が所属する団体は韓の応援団体でもあり、しぶしぶ同意して毛語録を最初の頁につけた。

１９６９年には北京で日本工業展覧会が開催された。その時、韓は「産品総覧」という総合目録を作った。監修は日本の国貿促である。韓は、編集、翻訳などで奔走し１２００万円ほど稼いだが翌年、過労で倒れてしまった。韓にはあまり儲け話は似合わないが、この時は広告料も多く入り潤ったので、大盤振る舞いをして国貿促に１２０万円ほど寄贈したこともあった。国貿促に行った時などは、冗談交じりに「君たち、ちゃんとやっているかい」なんて軽口をたたけるような時期だった。社員は５、６人の小世帯だったが、こんな話をするときの韓には微笑が絶えない。

世界的な半導体の権威者である西澤潤一氏を知ったのもこの頃のことである。

『日本工業技術』は、中国向け担当者で知らない人がいないほどになり、広告は充分とはいえないが、とりあえず満足できるほど集まった。広告の営業は㈱貿易事業社が担当した。社長の北村とは友人でもある。広告を取るために、北村と一緒に貿易会社を歩いた。「中国と商売をしたいなら広告を出しなさい」と、企業の担当者に説得する北村は広告営業のベテランだ。韓はその方面では歯が立たず、話すことはもっぱら中国の政治や経済事情だった。

文革当時の中国が相手だと、商社マンの中には「こんな時代に商売は大丈夫ですかね」という意見も出そうに思えるが、現実にはそんなことはなかった。韓は当時４０代である。まだまだ若い気分で意気込みもあったから、仮に中国には「自由はない」などという論争になると、「じゃあ自由とは何だ」といって論争する。そんな時代だった。

文化大革命の時代の中国は、日本人だけでなく、世界からも不可解な国に映っていた。しかし中国担当者にすれば、やはり中国の展示会に出展して実績を作りたいと考えている。日本人の中国担当者から見れば、やはり中国事情に詳しい華僑の韓から少しでも話を聞きたいという気持ちだ。当時、「中国に恐怖心をもっていた会社など１社もなかった」というのが韓の実感である。

４１　イデオロギーの終焉

１９６９年に上海で「日本工業展」が行われた。文革中といえども、中国人が何万人も見にくるのだ。長崎国旗事件で１９５８年から６０年まで日中貿易は途絶えていたが、そ

れでも１９５７年、５８年には、北京と上海で展示会、大阪でも展示会が開催されていた。南漢震とはずっとそういう時期からも付き合いである。しかし、その南漢震も文革の時、自殺した。たぶん、１９６７年か６８年頃だったろう。韓は、中国へ行った人からそのことを聞いた。言葉は出なかった。

その頃、韓の親しい中国の人たちはほとんど行方がわからなかった。対日関係の中心人物である廖承志は表舞台には出てこず、周恩来が中南海の一角にかくまっていた時期である。

混乱の中、日本での文革をめぐる争いについて、中国側の指示を仰いだところ突然、「大地報社をやめろ」と中国側から通知がきたということは前回に記した。

やむを得ず、韓は大地報社を解散し閉鎖した。そこで「産品総覧」で儲けた１２００万円の収入と、社員がもらった退職金を出し合って、新たに株式会社向陽社を１９７０年２月１６日に立ち上げた。新会社は、翻訳、出版（工業技術、工業辞典、電碼本など）、そして写植を使って国貿促の新聞や「貿易必携」などのハンドブックを出していった。

１９７１年、前出のようにニクソン訪中が電撃的に発表された。それと共に、韓も忙しくなった。仕事が目に見えて増えてきた。日刊工業新聞などの専門紙がメーカーの中国向けの動きを報道する。そういう会社にはすぐ、「協力しますよ」と電話をかけて営業活動をする。大地報社から向陽社に変わっても常に仕事はあった。

日本の企業はイデオロギーでは動かない。要は少しでも貿易量を増やしたいのだ。韓のところに相談に来る人たちは、韓が中国人なのでうまく韓と話せば中国との取引も順調にいくのではないかと思う人もいた。

日本のビジネスマンが本当に知りたいのは何なのかと考えた時、文革時のように毛沢東思想万歳だけでは役に立たないことはわかっている。若い日本の記者たちは、新華社や人民日報の調子に引きずられていく。これではまずいと考えた。本当に知りたいのは中国の工業関係のニュースではないだろうか。幸いに、中国新聞社（新華社と並んで大きい通信社で、海外にいる中国人にニュースを出していた）とも付き合いがある。そこと組んで香港からニュースをもらおうと考えた。昔の「大地報」は毛沢東万歳のニュースで埋まっていた。その大地報を停刊した今、大地報で蓄積したアイディアを活用して中国の工業ニュースを出す時期だと思ったのだ。

そして１９７０年の１月に第１号を新天社という別会社を作って出した。韓は、夫人の美津と数人の翻訳者たちで出発した。中国の工業技術のニュースを出して採算が取れるなら、向陽社が赤字になっても生きていけると考えたのだ。夫人の韓美津は身を粉にするように働いた。若い友人の相原あや子は、骨惜しみせずタイプを打ち続けた。輪転機のオフセットを４０万円で買ったのもその頃である。

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、国際的な友愛精神、国際主義的な精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03－3295－0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/

書籍案内

方正友好交流の会が編集した本と会員及び関係著書をご紹介します。

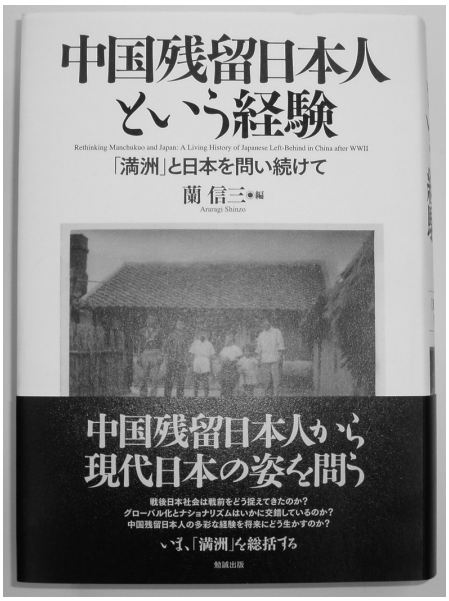
＊　『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

方正友好交流の会　編著

定価 1500 円

本書には、日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されている。（事務局に残部あり）

＊『中国残留日本人という経験　「満洲」と日本を問い続けて』　蘭 信三　編



勉誠出版㈱　TEL：03－5215－9021

FAX.：03-5215-9025　　定価 8000 円（税別）

本書は、中国残留日本人の多彩な経験を通して、現代の日本を問い、「満洲」とは何だったのかを総括する。いわば中国残留日本人研究の総決算ともいえる 600 頁を超える大部の書だ。会員の南誠さんも『想像される「残留日本人」―国民をめぐる包摂と排除』を執筆している。また、会員の猪股祐介さんも『満洲農業移民から中国残留日本人へ』というタイトルで本書に論文を書いている。実は今回の 9 号で猪股さんに本書紹介の原稿を書いていただく予定だったが、多忙のため締め切りに間に合わなかった。猪股さんには次号で詳しく紹介していただく予定である。

＊　『風雪に耐えて咲く寒梅のように　二つの祖国の狭間に生きて』

可児力一郎　著

定価 1700 円

著者は、旧満州へ入植してから 17 年ほどの中国での残留生活を経て帰国するまでの記憶を綴ろうと、慣れない日本語と苦闘しながら、2003 年本書を書き上げた。本書は事務局でも扱っているので、払込取扱票を利用されるか、著者宛てに直接申し込んでいただきたい。

〒399－5303　長野県木曽郡木曽町田立１２２３　可児力一郎（かに　りきいちろう）

電話　0573-75-4755　ＦＡＸ　0573－75－4557

＊　『赤い夕陽の満州にて　「昭和」への旅』　　高橋健男　著

定価 2400 円（税別）

著者は 1946 年生まれ。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識のもと、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著。新風舎版に加除修正を加えて再出版。購読希望者は全国の書店あるいは直接文芸社販売部（03-5369-2299）に。

＊　『満州開拓民悲史―碑が、土塊が、語りかける』　　高橋健男　著

定価 3000 円（税別）

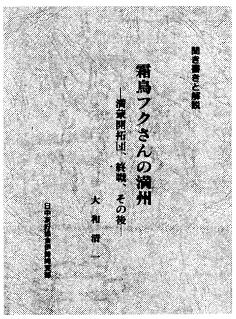
満州開拓民に何が起こったのか？　中国残留孤児はなぜ生まれたのか？　国策に翻弄され、満州開拓の果てに斃れた受難の民への鎮魂を込めて、方正に集結した避難民、佐渡開拓民跡事件の殉難者たちを初めて総体的に検証する。方正を知るためには格好の書。希望者は全国の書店あるいは直接批評社（03-3813-6344）に。

日本中国友好協会（長尾光之会長）
「日本中国友好新聞」09 年 10 月 25 日付

社団法人日中友好協会（加藤紘一会長）
「日本と中国」09 年 9 月 5 日付

本の紹介

『霜鳥フクさんの満州－満蒙開拓団、終戦、その後－』



表題の小さな冊子。大和清一氏が書き、日中友好協会伊勢崎支部が発行している。

語っている霜鳥フクさんは山形県出身で、「佐渡開拓団跡」の惨劇の奇跡的な生存者である。

終戦も知らず、地獄の逃避行を続けていた各地の満蒙開拓団の人たち2000人近く（正確な数は分からない）がたどり着き、ソ連軍の包囲攻撃で「自決」を含め全滅した、あの悲劇の「佐渡開拓団」。

フクさんの話は、「大地の子」とぴったり重なる。父は終戦ひと月前の7月に召集され消息不明、祖父と祖母は逃避行のなかで亡くなり、17歳の兄は警備に立つということで家族と別れ、母はフクさん（14歳）、弟（12歳）、妹（4歳）と生後8カ月の乳飲み子を連れて「佐渡開拓団」跡に入ったが、ソ連軍の銃撃を受け乳飲み子を抱いたまま亡くなり（乳飲み子のその後は不明）、奇跡的に助かったフクさんと弟、妹は中国人に連れられていくところで別れてしまう。

しかしフクさんの運命は、また大きく変わる。虐待する中国人の家から逃げ出したフクさんは、ハルビンの日本人難民収容所で帰国を待つが、そこは飢餓と発疹チブスの地獄。このままでは死んでしまう、と思い切って八路軍の看護婦に応募し、国共内戦時代から解放まで8年間を従軍看護婦として過ごし、1953年に帰国した。

語られている内容もすごいが、この小さな冊子、それとともに、満蒙開拓団とはなんだったのか、残留孤児、残留婦人とはどういうことなのか、「すべてが分かった」と思うほど、周到で踏み込んだ解説がついている。

満蒙開拓団について、残留孤児、残留婦人について「一冊で」知りたい（それはもともと無理なのだが）という人には、躊躇なくこの小冊子を薦めたい。（大村新一郎）

黒龍江への旅

高野悦子　著

岩波現代文庫
☎03-5210-4000
1100円（税別）

旧満洲で生まれ育った人たちは、侵略した地で生きた、という負い目に近い感情をもつ一方、中国東北部を思う気持ちは今でも人一倍強いようだ。

岩波ホールの総支配人として、芸術性の高い世界の映画を世に送り出している著者もまた、その一人である。

本書は、満鉄の技師として生きた父を弔い、追想した旅の記録だが、期せずして著者自身の、アイデンティティーの探究と、確認の旅にもなっている。

著者の父、高野與作（よさく）は、東京帝大土木科を卒業するや満鉄に入社、特急あじあ号や鉄道建設に全身全霊を傾けた。

本書には豪放磊落、型破りな與作が著者や友人知人の回想などを通して描かれている。

弾丸が飛び交う中、ゲリラや洪水で破壊された鉄道の復旧工事を、中国人労働者を使い陣頭指揮をする。

その瀋海鉄路を退職する時、褒美になんでも好きなものを言えといわれた與作は、当時の月給の600倍を要求。その全額を、苦労を共にした中国人労働者に分け与えた。

敗戦直後、彼らは将官になっていた。與作を訪ね、昔のお礼にと米や塩、味噌をくれた。與作は、それを満鉄社員たちに配った。

ソ連参戦の時、関東軍が鉄道関係の重要書類を焼却するよう命令したが、「施設関係図面は焼くな。一部だけは必ず残せ」と顔を真赤にして駈けずり回ったのも與作だった。

「度胸のいい男で馬賊の頭目くらいは悠々と手玉にとってしまう」と、親友・中谷宇吉郎は回想している。

ソ連国境そばの黒河に鉄道が達した時、「まるで砂漠に城を築いたようだ」と喜んだ父と同じ黒河に立ち、父を悼み慕う著者の思いが、ずっしりと胸に響いてくる。

初版から23年、今回新たに文庫になった。戦後、政界の出馬も断り、叙勲も「あなたに似合わない」という妻の進言で断った。「こんな爽やかな男が日本にいたのだ」と驚く。若い人達にぜひ読んでほしい。（大類善啓）

≪報告≫　　ありがとうございました

前号の会報８号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受付けた順に記載しました。０９年１２月１日現在）

遠藤勇　松尾政司　永瀬明子　中島静枝　篠田欽次　石原健一　高橋幸喜　駒ヶ嶺法子　佐藤良夫　鵜沢弘　伊原忠　生田和美　伊藤幸枝　山田陽子　延城寺・網代正孝　小関光二　萩原武太郎　山内良子　師岡武男　石田和久　有馬和子　高橋健男　渡辺一枝　菊地薫　山岸忠夫　阿久津国秀　中島紀子　望月迪洋　奥村勉　鳩貝清太郎　岡崎友美　竹中一雄　岩噌弘三　山田弘子（越谷市）　北原汎　小畑正子　村田春恵　柴田ケイ子　魚崎宏　阿部恵一　白西紳一郎　稲川清一　前川孝一　鳥島せい子　出口三平　高木誠一郎　穂苅甲子男　三森陽子　武吉次朗　伊東行子　神田さち子　田中喜久子　水城可　巻口弘　丸野公平　土川克廣　小早川のぞみ　福井以津子　東山健吾　木村美智子　川口憲　瀧亀久男　古賀勇一　北澤博史　新谷陽子　鈴木幸子　石原政子　豊田芳美　江見迪子　皆川純麿　栗原彬　鈴木俊作　松岡満壽男　寿山会　金丸良平　中島俊江　田中實　芹澤昇雄　泉満　里見繁　前川よしえ　成田晃一　宮田一郎　北澤吉三　羽賀美代子　久保祐雄　飯牟礼一臣　森田恭子　山田弘子（新潟市）　栗原貞子　野田尚道　南誠　柴崎葦津子　伊佐昭紀　長野県開拓自興会　永原今朝男　風間成孔　森田重夫　木村孝　吉岡稔　長谷部照夫　名取敬和　可児力一郎　千島寛　田中信雄　山本勝彦　吉川孝人　川内カチエ　塩見雅正　貞平浩　埼玉県中国帰国者友の会　山本光夫　飯白栄助　丸茂秀直　鈴木革人　矢島真木子　及川康年　大草正一　貞平浩　黒岩満喜　馬場信昭　滝永登　日本中国友好協会新宿支部　三上智恵子　小林彰彦　富士国際旅行社　中島のり子　山田嘉彦　中謙吾　千葉健生病院健康友の会中国語教室　紙谷周三郎　斉藤忠雄、ＮＰＯ法人やまなみ、斉藤真理　高田俊　湯川勲　北澤吉三　獄崎敦子　佐貫幸雄　寺本康俊　後藤邦汎　長塚淑江　合田享子　肥後茂樹　福島国夫　小林勝人　吉岡広幸　藤村光子　匿名（社会福祉法人中日新聞社会事業団扱い）　湯本信幸　竹井成範　團野廣一

＜編集後記＞

映画『嗚呼　満蒙開拓団』は今も全国で上映活動が続いている。この映画によって方正日本人公墓の存在もかなり知れ渡ってきた。これもほんとうに羽田澄子さんのお陰である。羽田さん、そしてプロデューサーの工藤充さんには謹んで御礼を申し上げます。

映画を通じて新たな出会いもあり、旧友との再会もあった。多くの人たちが映画館に足を運んでいただいたが圧倒的に高年齢の方が多かった。若い人たち、とりわけ次代を背負う大学生や高校生に見てもらいたいものである。今後も上映できるよう我々も努力したい。

次号は来年５月に発行する予定である。今回締切りに間に合わなかった方々、ぜひ原稿をお寄せください。締切りは３月末です。

上記＜報告＞のカンパなどを寄せられた名前の中に（下から２行目）匿名とある。これは東京新聞の五味洋治記者が書いた記事（５頁）を読んだ読者からの寄付５万円である。この匿名氏のように、これまで方正友好交流の会や会報『星火方正』をご存じなかった方々の善意が次第に広がってきている。改めて感謝申し上げます。

≪表紙写真撮影・師岡武男≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第９号）　2009 年 12 月 21 日発行

発行：方正友好交流の会　　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101－0052　東京都千代田区神田小川町 3－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ

(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400

郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/